静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第24集

原　川　遺　跡

III

平成元年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第24集

原　川　遺　跡

III

平成元年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

牛形土製品（1区　SX101出土）

序

静岡県掛川市の西方、国道１号線と原野谷川が交差する同心橋一帯に原川遺跡は位置している。今も豊かな水量で流れる原野谷川を始め逆川・垂木川といった中小河川は、氾濫や洪水を繰り返しながらも古代から多くの恵みを人々にもたらしてきた。原川地区一帯も広く遺物が散布する地域として知られていたが、その実態は不明のままであった。近年袋井バイパスの着工に伴う埋蔵文化財の発掘調査が対岸の袋井市側の坂尻遺跡でも行われ、掛川市側についても同心橋の掛け替え工事に伴い埋蔵文化財の事前調査として本調査が計画された。５年間にわたる調査の結果、遺跡は弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の各時代にそれぞれの特色を持った複合遺跡で在ることが明らかになった。すでに弥生時代については『原川遺跡Ⅰ』において掘立柱建物群と土器棺墓群からなる居住域と墓域が区別された集落について報告し、中期初頭の丸子式の良好な遺物を紹介した。また『原川遺跡Ⅱ』では県内では調査例の少ない古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居と掘立柱建物群からなる集落跡と小型古墳を報告し形象埴輪を紹介した。

今回の『原川遺跡Ⅲ』は主として奈良・平安時代を対象としている。西隣の坂尻遺跡は多数の建物群や墨書土器・和同開珎・帯金具・銅印・分銅から遠江国佐野郡衙跡とみられる。また南の梅橋北遺跡から多量の緑釉陶器・墨書土器・灰釉陶器・風字硯などが出土し坂尻遺跡との関連が注目されている。原川遺跡からも建物群とともに円面硯・墨書土器・緑釉陶器を始めとする多量の施釉陶器が出土し、坂尻遺跡や梅橋北遺跡と共通する律令期の地方官衙の広がりが明らかとなった。

また今後の資料整理により中・近世では原川町の成立と東海道に沿った庶民の生活文化の一端を考古学的に明らかにすることが期待できそうである。

調査並びに本書の作成に当たっては建設省・掛川市教育委員会・静岡県教育委員会を始めとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼を申し上げるしだいである。また調査を暖かく見守って頂いた地元の方々、寒暑にめげず発掘にあたった作業員の方々、多くの助言・指導を頂いた方々に深くお礼申し上げたい。

1990年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所　長　斎　藤　　忠

例　　言

1．本書は静岡県掛川市領家字原川に所在する原川遺跡の調査報告書の第３分冊である。

2．調査は昭和57年度～昭和62年度まで袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関　静岡県教育委員会・調査調整機関　掛川市教育委員会とし、調査実施機関は昭和57年度に始め財団法人駿府博物館附属静岡埋蔵文化財調査研究所、昭和59年５月１日からは財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が引き継いで実施した。

3．現地発掘調査は昭和57年９月１日から昭和62年12月30日まで行った。整理作業は昭和62年度は弥生時代、昭和63年度は古墳時代を対象に整理を行い報告書を刊行した。平成元年度は奈良・平安時代を中心に整理を行い報告書（本書）を刊行する。平成２年度は中・近世を対象に報告する計画である。なお、昭和62年度に現地調査を行った領家遺跡については別に報告した。

4．各年次毎に調査概報を提出している（「原川遺跡概報」Ⅰ～Ⅴ）。各概報と本書の記述に差がある場合、本書の記述をもって報告とする。

5．全体を通しての「位置と歴史的環境」「調査の方法」「調査の経過」「層位的観察」「遺跡の概観」等については『原川遺跡Ⅰ』第１章～第５章に述べたので参照されたい。

6．原川遺跡から出土した緑釉陶器の化学分析については、名古屋大学の山崎一雄氏にお願いして特論１「原川および梅橋北遺跡出土の緑釉陶片の化学分析」として掲載した。また灰釉陶器の胎土分析については、奈良教育大学　三辻利一氏にお願いし、その結果については本文中にその都度報告した。なお、まとまった報告としては別に発表される予定である。分銅については山梨文化財研究所　鈴木　稔氏に分析を依頼し、その結果を特論２「原川遺跡出土分銅の材質調査について」として掲載した。

7．本書の遺物写真は池田洋仁氏に撮影を依頼した。

8．本報告書作成にかかわる資料整理・図版作成等については望月節子を中心としながら杉山暁子、佐々木富士子、山本節子、岩辺友子、杉山節子、外岡みつ子、藤川みどり、両角治子、中村由美子、小野間薫子、堀八重子、葉山安子他の協力を得た。

9．本書は調査研究第三課長　佐藤達雄の指導のもとに主任調査研究員　足立順司の助言を得て整理を担当した調査研究員　鈴木基之が執筆した。編集は鈴木の構想を引き継ぎ、佐藤が行った。その際一部加・補筆を行い全体の統一をはかった。

10．本書は多くの方々の協力によっている。多くの助言・指導を頂いた以下の方々にこの場を借りて深くお礼申し上げます。（敬称略）

山崎一雄（名古屋大学）　　三辻利一（奈良教育大学）
鈴木　稔（山梨文化財研究所）　　吉岡伸夫（袋井市教育委員会）
八木勝行（藤枝市郷土博物館）

目　　次

序
例言
第１章　奈良・平安時代の整理の方法について …… 1
第２章　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 2
第１節　奈良・平安時代の遺構の広がり …… 2
第２節　奈良・平安時代の遺構の概観 …… 2
第３節　竪穴住居 …… 9
ＳＢ1404　ＳＢ301（関連土器溜りＳＸ301・ＳＸ302）
第４節　掘立柱建物群 …… 18
西側地区掘立柱建物群
ＳＨ301　ＳＨ302　ＳＨ401　ＳＨ402　ＳＨ403　ＳＨ404
東側地区掘立柱建物群
ＳＨ1402　ＳＨ1404　ＳＨ1405　ＳＨ1406　ＳＨ1407　ＳＨ1408
ＳＨ1501　ＳＨ1502
第５節　井戸 …… 30
ＳＸ101　ＳＥ1401
第６節　土坑 …… 33
ＳＦ1401　ＳＦ1402　ＳＦ302　ＳＦ415　ＳＦ1403
ＳＦ1405　ＳＦ1406　ＳＦ1407　ＳＦ1411　ＳＦ1413
ＳＦ1419　ＳＦ1420
ＳＰ14271　ＳＰ14382　ＳＰ14604　ＳＰ1401　ＳＰ14299
ＳＰ14300　ＳＰ14689　ＳＰ14296
第７節　溝 …… 41
ＳＤ406　ＳＤ1427　ＳＤ701・ＳＤ822
第８節　その他の遺構 …… 45
ＳＸ1502　ＳＸ1503　ＳＰ463付近　ＳＰ409　ＳＸ1409
第９節　その他の遺物 …… 49
１．緑釉陶器　２．墨書土器　３．円面硯
４．馬形土製品　５．瓦塔　６．須恵器・土師器・灰釉陶器
７．青磁・白磁ほか　８．分銅　９．土錘
第３章　まとめ …… 67
第１節　奈良時代の遺構と遺物
第２節　平安時代の遺構と遺物
第３節　緑釉陶器の分布
第４節　墨書土器の分布
第５節　平安時代後期以降の遺構・遺物
主要参考文献

特論　1．梅橋北および原川遺跡の緑釉陶片の化学分析 …… 73
2．原川遺跡出土分銅の材質調査について …… 75

挿図目次

第 1 図　奈良・平安時代遺構全体図（1：600　別添付図）
第 2 図　遺構全体図　その1（3区・4区） …… 3
第 3 図　遺構全体図　その2（8区東側・14区西側） …… 5
第 4 図　遺構全体図　その3（14区東側・15区） …… 7
第 5 図　竪穴住居　SB1404　遺構実測図 …… 10
第 6 図　竪穴住居　SB1404　出土遺物 …… 10
第 7 図　竪穴住居　SB301　遺構実測図 …… 13
第 8 図　竪穴住居　SB301　出土遺物 …… 13
第 9 図　竪穴住居　SB301　上層出土遺物 …… 15
第 10 図　土器溜り　SX301・SX302出土遺物 …… 15
第 11 図　掘立柱建物跡遺構実測図　1　SH301　SH302　SH401 …… 20
第 12 図　掘立柱建物跡遺構実測図　2　SH402　SH403 …… 21
第 13 図　掘立柱建物跡遺構実測図　3　SH404 …… 22
第 14 図　掘立柱建物跡遺構実測図　4　SH1402 …… 25
第 15 図　掘立柱建物跡遺構実測図　5　SH1404　SH1405 …… 26
第 16 図　掘立柱建物跡遺構実測図　6　SH1406　SH1407　SH1408 …… 27
SH1501　SH1502
第 17 図　井戸状土坑SX101遺構実測図・出土遺物 …… 31
第 18 図　井戸　SE1401遺構実測図・出土遺物 …… 32
第 19 図　土坑　SF1401遺構実測図・出土遺物 …… 34
第 20 図　土坑　SF1402遺構実測図・出土遺物 …… 34
第 21 図　土坑　遺構実測図・出土遺物　その1　SF302　SF415　SF1403 …… 36
SF1405　SF1406
第 22 図　土坑　遺構実測図・出土遺物　その2　SF1407　SF1411　SF1413 …… 38
SF1419　SF1420
第 23 図　土坑　遺構実測図・出土遺物　その3　SP1401　SP14271　SP14296 …… 39
SP14299　SP14300　SP14382
SP14604　SP14689
第 24 図　溝　SD406　遺構実測図・出土遺物 …… 42
第 25 図　溝　SD1427　遺構実測図・出土遺物 …… 44
第 26 図　その他の遺構　その1　SX1502　SX1503　上層・下層 …… 46
第 27 図　その他の遺構　その2　SX1502　SX1503　出土遺物 …… 47
第 28 図　その他の遺構　その3　SP463　SP409　SX1409　SX1415　SX1420 …… 48
第 29 図　その他の遺構　その4　SB1403 …… 48
第 30 図　緑釉陶器実測図 …… 51
第 31 図　墨書土器実測図 …… 54

第 32 図　円面硯・馬形土製品・瓦塔実測図 …… 57
第 33 図　その他の遺物　その１　西側地区 …… 59
第 34 図　その他の遺物　その２　西側地区 …… 60
第 35 図　その他の遺物　その３　東側地区 …… 61
第 36 図　その他の遺物　その４ …… 62
第 37 図　分銅実測図 …… 64
第 38 図　緑釉陶器出土グリッド分布図 …… 68
第 39 図　墨書土器出土グリッド分布図 …… 69
第 40 図　螢光Ｘ線スペクトル図　試料１ …… 76
第 41 図　螢光Ｘ線スペクトル図　試料２ …… 76
第 42 図　螢光Ｘ線スペクトル図　試料３ …… 77
第 43 図　螢光Ｘ線スペクトル図　試料４ …… 77
第 44 図　螢光Ｘ線スペクトル図　試料５ …… 77

挿表目次

第 1 表　奈良・平安時代掘立柱建物柱穴一覧表 …… 28・29
第 2 表　緑釉陶器一覧表 …… 51・52
第 3 表　墨書土器一覧表 …… 55
第 4 表　土錘一覧表 …… 64・65
第 5 表　釉の化学分析値 …… 73
第 6 表　分銅分析条件表 …… 75
第 7 表　分銅分析試料表 …… 76
第 8 表　分銅Ｘ線強度の比較表 …… 78

図版目次

カラー口絵　牛形土製品（１区　ＳＸ101出土）
図 版 1　奈良・平安時代面発掘区位置図（航空写真　昭和58年撮影）
図 版 2　３区　奈良・平安時代面全景
図 版 3　４区　奈良・平安時代面全景
図 版 4　14区　奈良・平安時代面全景
図 版 5　15区　奈良・平安時代面全景
図 版 6　竪穴住居　１.ＳＢ1404　２.遺物出土状況
図 版 7　竪穴住居　ＳＢ301
図 版 8　竪穴住居　ＳＢ301遺物出土状況
図 版 9　掘立柱建物　１.ＳＨ301　２.ＳＨ302
図 版 10　４区掘立柱建物群
図 版 11　掘立柱建物　１.ＳＨ401　２.ＳＨ402
図 版 12　掘立柱建物　１.ＳＨ403　２.ＳＨ404
図 版 13　掘立柱建物　ＳＨ1402

図 版 14　掘立柱建物　ＳＨ1404
図 版 15　掘立柱建物　ＳＨ1405
図 版 16　掘立柱建物　1.ＳＨ1406　2.ＳＨ1407
図 版 17　掘立柱建物　1.ＳＨ1408　2.ＳＨ1501
図 版 18　土坑　1.ＳＸ101　2.ＳＦ1401　3.ＳＦ1402
図 版 19　土坑　1.ＳＰ14296　2.ＳＰ1401　3.ＳＰ14299　4.ＳＦ1403　5.ＳＰ14300
図 版 20　溝　ＳＤ406
図 版 21　その他の遺構　ＳＸ1502・ＳＸ1503
図 版 22　竪穴住居ＳＢ1404出土遺物
図 版 23　竪穴住居ＳＢ301出土遺物
図 版 24　ＳＢ301関連遺物　1.ＳＢ301上層遺物　2.ＳＸ301・ＳＸ302
図 版 25　井戸・土坑出土遺物　ＳＸ101　ＳＦ1401　ＳＦ1402　ＳＰ463付近
ＳＰ14604　ＳＸ1409　ＳＸ1415
図 版 26　溝・その他の遺構出土遺物
1．ＳＤ406　2．ＳＸ1502・ＳＸ1503
図 版 27　緑釉陶器
図 版 28　墨書土器
図 版 29　円面硯・馬形土製品・瓦塔
図 版 30　その他の遺物　その１
図 版 31　その他の遺物　その２　その３
図 版 32　その他の遺物　その４　青白磁水注・白磁ほか
図 版 33　その他の遺物　その５　分銅・土錘ほか

第１章　奈良・平安時代の遺構・遺物の整理の方法について

１．遺構の標記

遺構の標記方法

『原川遺跡Ⅲ』は原川遺跡の奈良・平安時代の遺構・遺物を対象としている。検出した遺構は当研究所の整理記号で『原川遺跡Ⅰ』に準じて標記した。各遺構の記号は下記の通りである。

ＳＨ	掘立柱建物跡	ＳＢ	竪穴住居跡	ＳＰ	柱穴・小穴
ＳＤ	溝（旧河道を含む）	ＳＦ	土坑	ＳＸ	その他
ＳＥ	井戸	ＳＫ	畦畔		

『原川遺跡Ⅲ』では原則として縮尺を遺構は1/60、遺物は1/3で表示し、例外は個別にその縮尺を表示した。

２．全体図の作成方法

遺構の検討

奈良・平安時代の遺物は調査区の広い範囲で検出されている。しかし遺構については『原川遺跡Ⅰ』第４章の基本層序にも述べた通り、古墳時代、また区により中・近世の遺構まで同一調査面で重複して検出されている。このため遺構の整理はまず区毎の遺構カードの作成を進める中で、個々の遺構の検討、抽出、時期決定に努めた。特にピットについてはその中に含まれる遺物を下限として調査状況を参考にしながら各時期に当てた。無遺物の柱穴は調査所見等から最も妥当な年代に含めたものもある。

遺構全体図の作成

このような個々の検討に基づいて第１図（別添付図）の奈良・平安時代遺構全体図を作成した。この中で西北側部分に当たる９区・12区については中・近世の遺構ばかりであるが奈良・平安時代の遺物も若干混じるため区域を図示するにとどめた。また６区についても第１・２面はほとんどが中・近世の遺構であったため、特に第３面の柱穴の中の遺物が平安時代のものまたは無遺物のものについてはこれを図示した。１区は明確に奈良時代と考えられる井戸状遺構ＳＸ101のみを図示し、他の遺構は中・近世で扱ったが、遺物出土量も多く遺構が広がっていた可能性が強い。３区・４区は奈良時代以降の遺構から中・近世の土坑・柱穴・攪乱を除いてみると奈良・平安時代の住居跡が明確な部分であることが解ったのでこれを図示した。５区は区域のみを図示してある。10区で検出された旧河道ＳＤ10Ｂ14は古墳時代以降の河道地点が明確ではないため古墳時代で扱うこととした。７区・８区・11区では平行する２本の溝ＳＤ701・ＳＤ822以外は古墳時代であった。また旧河道ＳＤ816については流路の範囲は明確ではないが、遺物の検討からは奈良時代以降は小さな河道となり平安時代末頃までには埋没したものと考えられるため、一応上層の流路の上層部分の範囲をスクリーントーンで図示した。14区・15区は遺構・遺物の検討の結果奈良・平安時代の遺構の集中部分であることが解り14区西側の中世遺構と明確な古墳時代遺構以外は無遺物の柱穴も含めすべてこの時期で扱った。

３．遺物の整理

遺物の整理方法

奈良・平安時代の遺構出土の遺物を中心に接合・復元に努めた。実測図の完成したものから遺物カードを作成し遺構別に整理した。特にまとまりのあるＳＢ1404・ＳＤ406・ＳＸ101・ＳＢ301等については時間をさいた。また包含層中の遺物もできるだけ図化に努めた。遺物写真は６×７版の中型カメラを使用して撮影した。主要な遺構遺物は遺構平面図版中にその出土地点、また断面図中に出土レベルを示すようにした。

第２章　奈良・平安時代の遺構と遺物

第１節　奈良・平安時代の遺構の広がり

中・近世の遺構面を掘り下げた段階で古墳時代と同一遺構面で奈良・平安時代の遺構は検出される。したがって古墳時代遺構面と奈良・平安時代遺構面とは分層できず、まして奈良時代遺構面と平安時代遺構面も分けられない。しかし遺構・遺物の広がる範囲はその他の面に比べると限定される。

奈良時代の遺構

奈良時代の遺構として明確なものには溝・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑がある。溝ＳＤ406は、幅2.4ｍ、深さ25～30㎝を測る。調査できたのは一部分で全長11ｍ程を検出した。大量の礫及び遺物を含み奈良時代前期の時期を与えることができる。１区の土坑ＳＸ101は径1.7ｍ、深さ0.5ｍほどの円形で小礫を含み井戸的なものではないかと考えられる。14区の竪穴住居跡ＳＢ1404からは奈良時代前期から中期の遺物が出土している。また15区のＳＨ1501は２間×２間、桁行3.2ｍ、梁行1.8ｍの掘立柱建物跡であり奈良時代の須恵器の蓋を柱穴より出土している。

平安時代の遺構

平安時代の遺構としては３区西で竪穴住居跡ＳＢ301が検出され灰釉陶器や緑釉陶器が検出されている。また４区の溝ＳＤ403も平安時代と考えられる。その他14区では土坑ＳＦ1401・ＳＦ1402などが検出されている。

このように奈良時代の遺構は１区・４区で溝や土坑・ピットが見つかっているものの明確な性格付けが考えにくく、むしろ14区・15区で居住を考えさせる遺構が見つかっている。平安時代についても奈良時代よりも遺物は多いものの３区で竪穴住居を検出している他は、14区西よりの部分の南北方向にその痕跡が強い。15区には獣足壺が含まれる流れ込みがあるのみである。古墳時代の遺構面が良く検出された５区・７区・10区・11区でこの時代の遺構面が検出されない事と併せて８区・10区に存在する原野谷川の旧流路ＳＤ10Ｂ14・ＳＤ806がこの時期にどのように流れていたかが問題となる。また緑釉陶器や陶硯の破片が溝や流れ込みや包含層の中に混じる原因を考えることも必要である。

第２節　奈良・平安時代の遺構の概観

奈良・平安時代の遺構として、竪穴住居跡２・掘立柱建物跡14・土坑21・溝５を認定した。しかしこれらは、検討の中で遺物などより、明確に認定できるものを取り上げたものであり、これ以外に遺構がなかったということではない。逆に時期を特定できない掘立柱建物など、多くの遺構が存在する。

竪穴住居跡

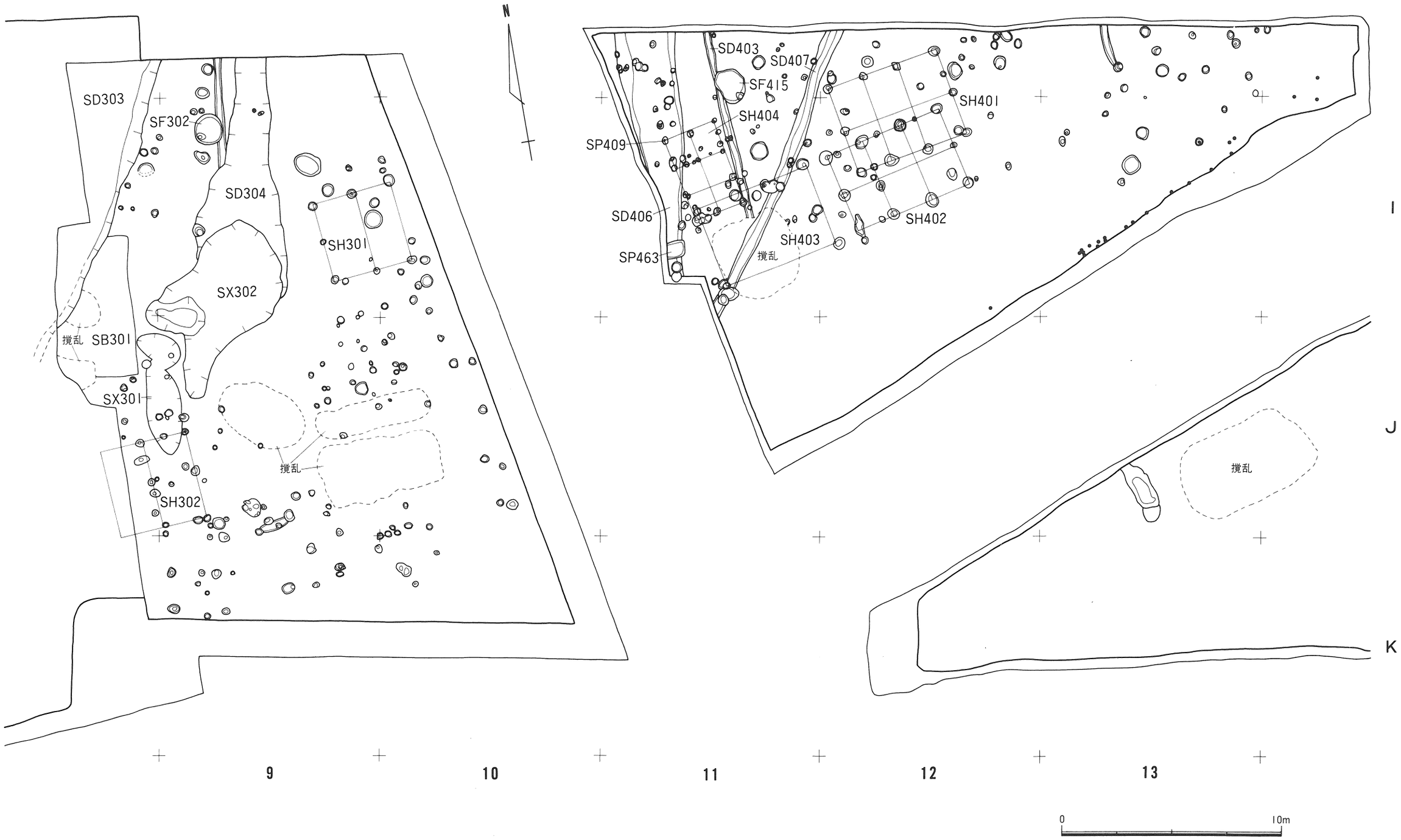
奈良時代の遺構として明確なものとしては、竪穴住居跡ＳＢ1404がある。南北4.4ｍ、東西3.9ｍの方形プランを持つもので、東北部分の床面付近より遺物が集中して出土している。奈良時代前期から中期に位置づけられる。

溝

溝ＳＤ406は幅2.4ｍ程の溝で調査できたのはごく一部であるが、大量の礫に混じり須恵器・土師器などが検出されている。

掘立柱建物

掘立柱建物は14棟を認定している。平行して走る２本の溝をはさんで東西に分けることができる。西側地区掘立柱建物群６棟、東側地区掘立柱建物群８棟が検出されている。各時代の遺構が同一面で錯綜しながら調査されているため、その認定については問題も残る。



第２図　遺構全体図　その１（３区・４区）

第３図　遺構全体図　その２（８区東側・14区西側）

第４図　遺構全体図　その３（14区東側・15区）

また柱穴群は多数にのぼっており、まだ建物は多数存在したと思われる。時期推定の資料として15区のＳＨ1501の柱穴より出土した須恵器の蓋があり、建物群をこの時期においた。平行して走る２本の溝の間は道路と考えることができ、道路をはさんだ両側に建物群が並ぶ状況を想定することができる。

平安時代の遺構としては３区で検出された竪穴住居跡ＳＢ301がある。南北約５ｍの方形プランを持つもので床面に多量の土器が散乱したような状況で検出された。その他溝や土坑などがあるが、全体として遺構の密度は薄いといわざるをえない。

第３節　竪穴住居

最終的にＳＢ1404（奈良時代）・ＳＢ301（平安時代）の２軒を認定した。その他にＳＢ1403のように住居跡番号を付して調査したものもあるが住居跡とは認定せず、その他の遺構として取り扱うこととした。またＳＸ1503・ＳＸ1505も住居跡の可能性がある。

SB1404（第５・６図　図版６）

規　　模

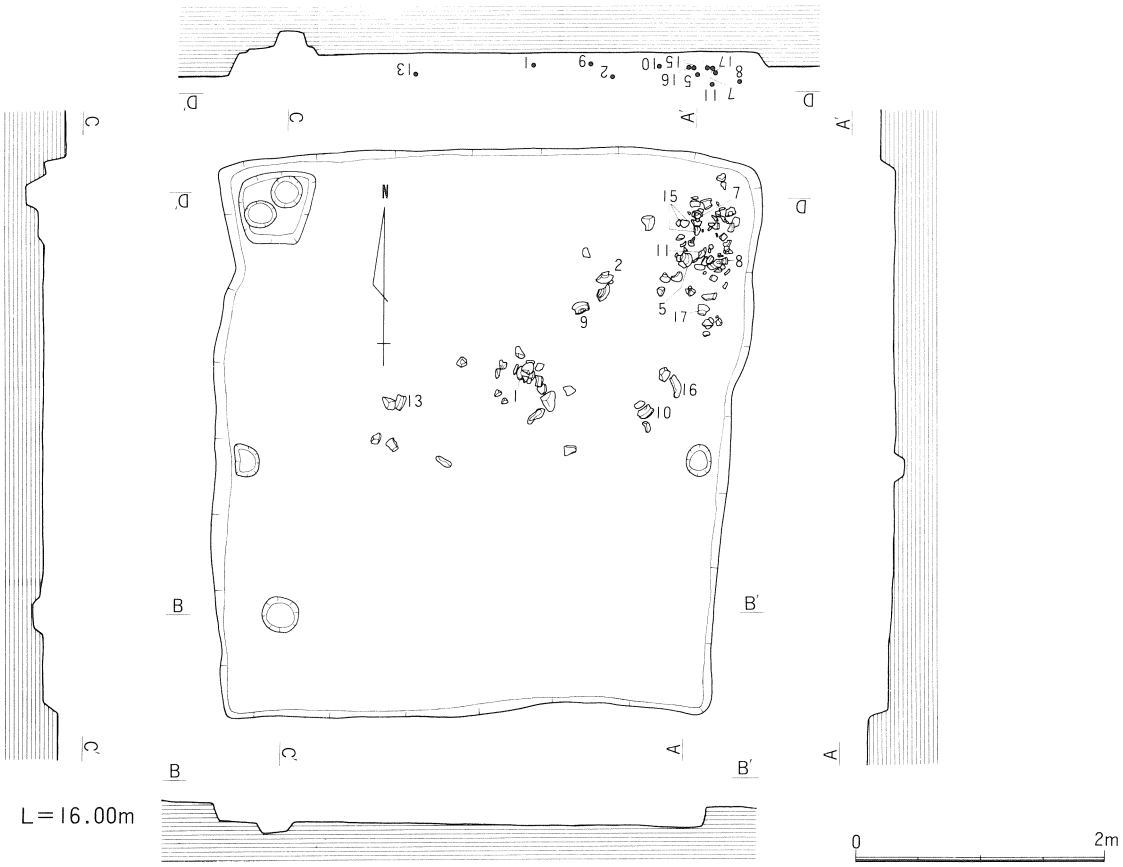
竪穴住居跡ＳＢ1404は調査区の東14区Ｆ－30グリッドに位置する。南北4.4ｍ、東西3.95～4.3ｍと少し北側が開いているがほぼ方形である。検出は炭化物のごく浅い層の部分と土器を中心とした遺物の集中部を手がかりとして行った。掘り込みの深さは約15～20㎝で壁溝や竈の跡は検出できなかった。検出できた柱穴は少ない。北側の柱穴は２個の柱痕を持つもので、掘り方は方形で一辺約50㎝である。南側の柱穴は直径23～30㎝、深さは10㎝ほどとごく浅く、大きさからみると柱痕である可能性が強い。東西の壁側の柱穴は径15㎝程度の小型のもので、支柱と考えられる。面積は18.18㎡である。

遺物の出土状態

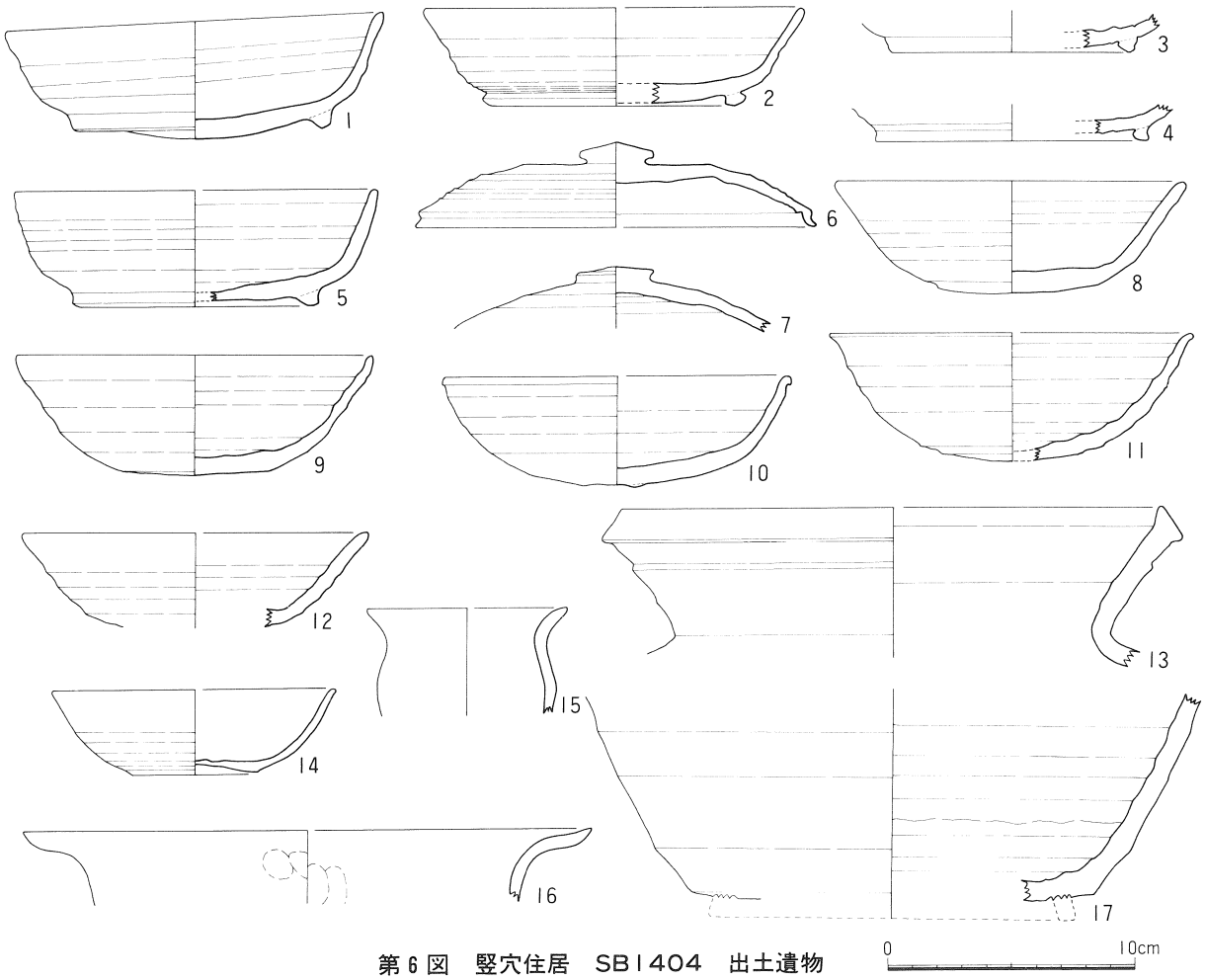
遺物は須恵器・土師器・小礫が中央から北東の端にかけて散らばっており、特に北東の端に須恵器の坏を中心とした集中部分がみられた。須恵器は坏・坏蓋・短頸壺・甕などであるが甕は小破片であった。土師器は坏や甕の小破片であった。第５図のＤ-Ｄ′の断面図の点の分布は図示できた遺物の出土レベルを断面図に落としたものである。これをみるとこれらの遺物は床面直上とはいえないもののほぼ床面に近い一括遺物と考えてよさそうである。

出土遺物

第６図１～５・８～12・14は須恵器の坏であり、また６・７は坏蓋である。１～５は有蓋の坏身である。１は口径15.2㎝、器高4.6㎝である。底部は丸底で回転ヘラ削りを同心円形に２段階施した後２段目に高台を接着させる。高台接着部を丁寧にナデているため鈍い稜がみられる。底部が高台より突出している。口縁部は外傾させ端部を丸くおさめる。２は口径12.4㎝、器高3.9㎝である。底部は弓張状で底部から口縁部にかけてゆるやかに屈曲している。底部は回転ヘラ削りを施している。高台を接着した後軽く高台部分をナデているため高台の断面は楕円形である。体部外面はノタ目を明瞭に残す。端部は外傾させた後丸めている。３・４は遺物集中部より出土した高台部分の破片である。高台の断面でみる限り３は１または５に近く、４は２に近い。５は口径13.6㎝、器高4.6㎝である。底部は平底であり、底部から口縁部に丸みを持たせながら緩やかに移行する。底部は回転ヘラ削り調整であり、高台を接着させた後内外とも丁寧にナデている。口縁は少し外傾させ端部を丸めている。６・７は坏蓋である。６は遺物集中部より出土しており、全体的に弓張状を呈する。径３㎝、高さ0.8㎝のやや偏平な擬宝珠形のつまみがつく。受部は口端部を明瞭に屈曲させた後さらにもう一度屈曲させ下半分にナデ調整を施しているため外反気味である。



第5図　竪穴住居　SB1404　遺構実測図



第6図　竪穴住居　SB1404　出土遺物

7は径3.1cm、高さ0.6cmの6以上に偏平な擬宝珠つまみを持つ。器形は弓張状を呈するとみられる。残存部分については自然釉が一面にみられるためつまみの屈曲があいまいになっている。8～12は無蓋の坏身である。その内12は一括遺物である。8は口径14.1cm、器高4.5cmである。全体に半円形を呈する。口縁部は外傾し端部を丸くおさめている。底部には渦巻き状右回りに2段の回転ヘラ削り調整を施すが、ヘラの切り離しの跡も底部外面に約1/2周ほど残っている。9は口径14.5cm、器高4.8cmで8と同じタイプである可能性が強い。10は口径14.0cm、器高4.4cmである。口端部を丸めるように強くナデているため端部外面に沈線ができている。その他の調整は8と同じである。11は口径14.6cm、器高5.0cmである。口端部を外反させているのが目立つようになる。他の調整は8と同じである。12は口径14.0cmである。口縁部は8～9に近い。8～12までは口縁端部の引出し方にそのまま丸くおさめるものと外反させるものとの差がみられるが、ヘラの切り離しの跡を底部外面に残す点はいずれも共通している。

以上の1～12までの須恵器の坏身・坏蓋は須恵器編年の第Ⅴ期前半に位置付けられ実年代は8世紀前半と考えられる。 **第Ⅴ期前半**

13は広口壺の口縁部で17はその底部の破片である。底部は高台を貼りつけた跡が残るがすべて欠損している。体部下部にはヘラ削りの跡が残る。14は無蓋の坏身である。口径11.4cm、器高3.4cmで底部は平底で糸切りの跡を残す。口縁部は外傾し、端部を外反させる。8世紀後半のものであり一括遺物の中に含まれていたので報告する。

15は土師器の小型壺の口縁部破片である。16は土師器の甕の口縁部である。口縁上部を強く外反させた後、端部を直上の方向に少しつまんでナデている。口径は23cmである。15・16とも磨耗が著しく暗褐色で良く似た胎土である。

SB301（第7・8図　図版7）

規　　模

Ⅰ～J－8グリッドに位置している。3区の西端に位置しているため竪穴住居の西側部分の約1/2程は発掘区の外側にある。また残った部分の北西側は中世の溝SD303により削られている。その他中央部や南側にも攪乱によって乱された部分があるが、検出された部分から推定すれば、竪穴住居SB301は南北方向約4.95mの大型のものである。検出できたSB301の掘り込みは浅く、ほとんど床面に近い部分である。柱穴は東南部分の隅に1ヶ所支柱とみられるものがある。壁溝及び竈は確認されていない。

覆土中の粘土層は良好な遺物を多く含んでいた。しかし第2章第1節でも述べているように、3区でも古墳時代面と奈良・平安時代面が分層できず、さらに中・近世の遺構が重なる部分もある。SB301の周囲にも浅い溝や土坑が多いため、各遺構や包含層の遺物を検討した結果、SB301のすぐ東側にはSX301・SX302という形で取り上げた灰釉陶器を中心とした土器溜りが存在し、そこから北側へ浅い溝SD304が延びている事がわかった。全体図はこのような検討の結果作成したもので、後述する遺物の検討からも竪穴住居SB301を形成した人々によりこれらの土器溜りも形成されたとみられる。ここではSB301の遺物についてまず床及びその直上で検出された土器群について述べ、次にSB301の覆土及びその東側の土器溜りSX301・SX302の順で述べる事とする。

出土遺物

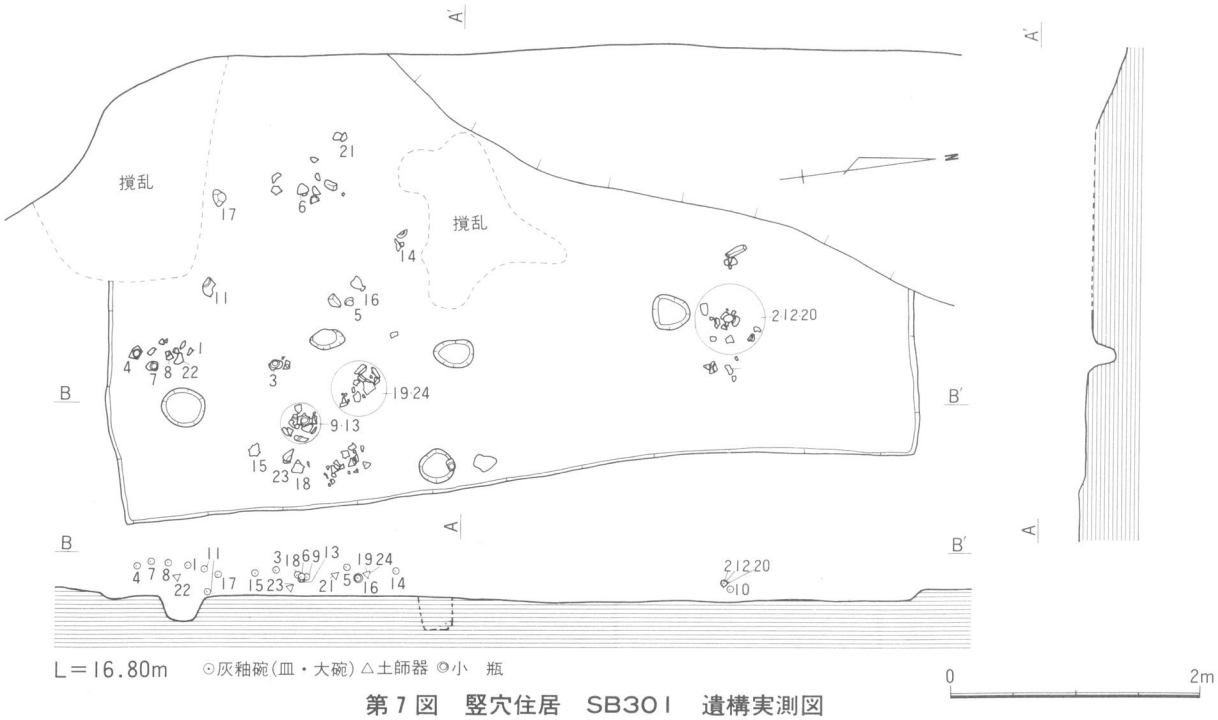
第8図1～24は床面及びその直上で検出された遺物で、出土位置は第7図B-B′断面図上に示してある。遺物は緑釉陶器・灰釉陶器（墨書土器を含む）・土師器に分かれる。緑釉陶器については角高台をもつ稜碗が1点出土しているが第2章第9節1（第30図）に図示している。

灰釉陶器　第８図１～16は灰釉陶器であり、碗・大碗・皿・小瓶に分かれる。１～11は碗である。６・９・11以外はいずれも高台部分しか残存していないため、これを底径により5.5～7.5cmまでを碗とし、8.5cm以上を大碗とすれば、１～８は碗であり、９～11は大碗である。碗は高台の形態により（A）角高台・（B）三日月高台（高台部分の成形にヘラを使用）・（C）三日月高台くずれ（高台部分の成形にナデを使用、三日月高台の甘くなったものや三日月高台と三角高台の中間のものを含む）・（D）三角高台（高台部の成形を２本の指でつまんで回転させたもの）の４つの型に分けることができる。この基準からみると（A）（B）は無く、１～５までが（C）、また６～８は（D）である。１～８はすべて無釉であり、各底径はそれぞれ１は7.3cm、２は8.5cm、３は6.3cm、４は6.2cm、５は6.5cm、７は5.9cmである。またいずれも６以外の底部は回転ヘラ削りが施される。６は1/2残存しており口径13.1cm、器高4.4cm、底径5.7cmで内面に重ね焼きの跡がある。底部中央には糸切り痕が残り、また体部にはノタ目が残る。口縁部は水平に強く引き出している。碗ではこの他に字は不明であるが墨書土器が１点柱穴の底より出土しているが、第２章第９節に図示している（第31図２）。

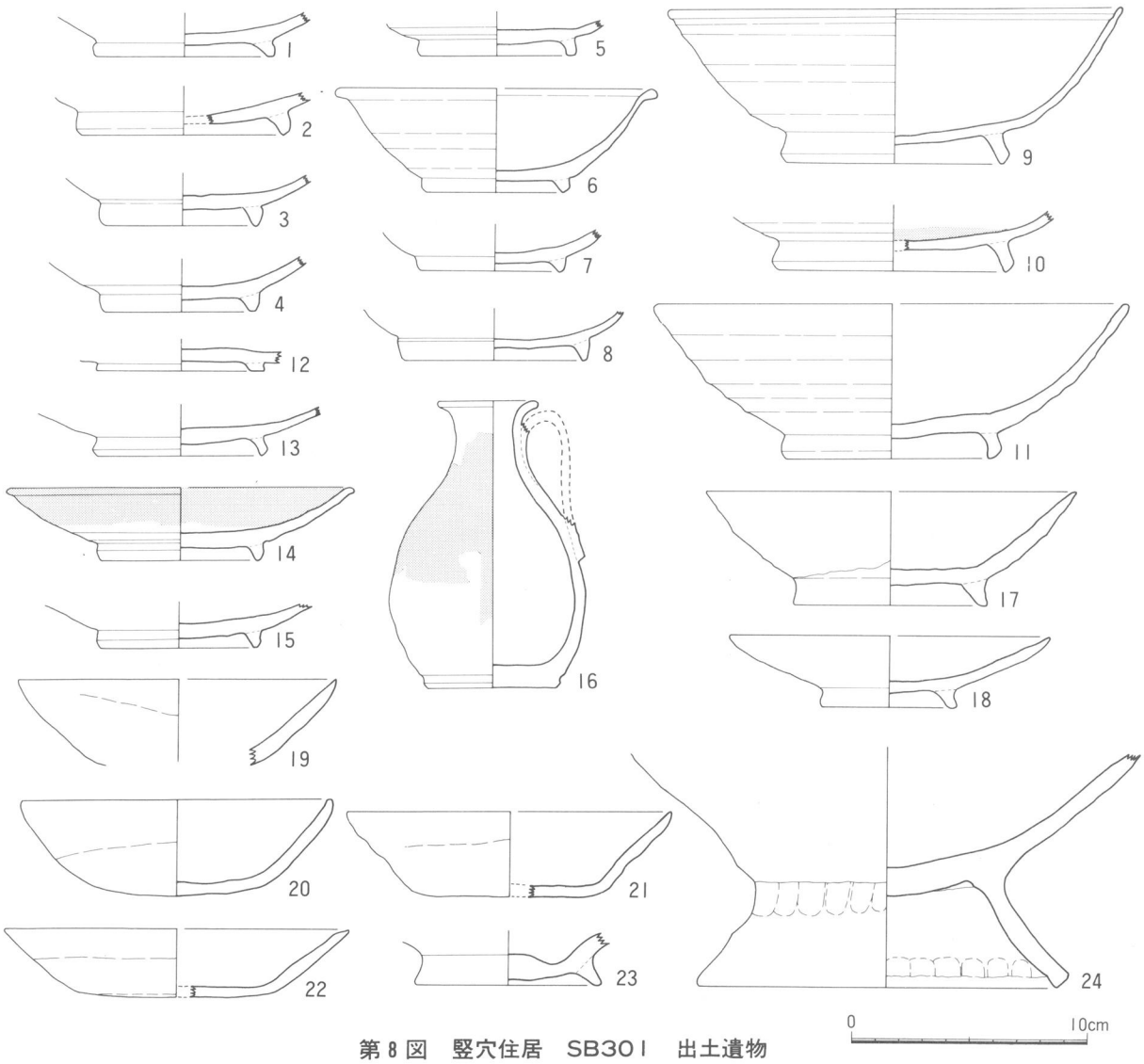
大　碗　９～11は大碗である。９はほぼ完形で口径19.0cm、器高6.5cm、底径9.0cmで内底に重ね焼きの跡があり、また一部に降灰による発色がみられる。底部は回転ヘラ削りが施され、また高台は高く（１cm以上）「ハ」の字型に開きヘラ削りで仕上げられている。体部は緩やかに立ち上がり体部内外面は丁寧にナデられている。口縁端部を外側に引きながら丸く仕上げているため、内外面とも端部直下が沈線状になる。器壁も薄く胎土も密であり高台部の成形や口縁端部内面の沈線をみると清ヶ谷窯産のものではない可能性がある。10は高台部破片で底径9.6cmである。底部には回転ヘラ削りが施され高台は丁寧にヘラ削りで仕上げられている。また内面に施釉してあるらしく重ね焼きの跡が残る。11は約1/3残存している。口径19.8cm、器高6.6cm、底径8.6cmで内底に重ね焼きの跡が残る。底部には糸切りの跡がわずかに残り、高台は丁寧にナデて三日月型につくられている。器面の外側にはノタ目が多く残るが、内面に丁寧にナデている。立ち上がりは緩やかで、端部はそのまま丸めている。９に比べ器壁も厚く胎土も荒くなる。９・10と11の間には時間差または産地の差がある。

胎土分析　12は角高台の須恵器底部破片で混入品の可能性がある。13～15は皿である。13は高台部破片で底径6.9cmある。碗で区分した（B）の三角高台であり、胎土分析で猿投産と判別され、K-90段階のものである。13は1/2が残存しており、口径14.3cm、器高3.1cm、底径6.6cmである。底部はナデられており、高台は丁寧にナデているが（C）の三日月くずれである。釉は内外面に漬けがけで施されている。14は底径6.5cmである。高台は13と同様（C）である。16は小瓶である。口縁部と把手部分を欠損しているが他は完形である。口径4.2cm、器高12.1cm、底径8.3cm、胴部最大径8.2cmである。底部外面には糸切り痕を残す。底部と体部の境に、棒状施文具による沈線がめぐる。体部は器高の約2/3で最大径を持ち、なだらかに内湾しながら頸部に続く。頸部は上方にのびながら外反して口縁となる。把手は頸部から、体部上位にかけて帯状のものが付けられていたようであり、体部上位における貼り付け部分は、ヘラによる面取りがなされ非常に丁寧につくられている。体部は内外面とも横ナデ調整がなされており、灰釉は幅約２cm程でハケ塗りされ、体部上半にかかる。

土師器　17～24は土師器である。17は灰釉陶器模倣の碗、18は模倣の皿である。17は約1/2残存している。口径15.7cm、器高4.8cm、底径8.2cmである。底部はナデており、貼り付けている。



第7図　竪穴住居　SB301　遺構実測図



第8図　竪穴住居　SB301　出土遺物

高台のつくりはやや雑で（C）の三日月高台くずれである。体部は巻き上げ技法により直線的に開いている。端部をそのままつまんでいる。内面は丁寧にナデられている。18は皿で約1/3残存している。口径13.5cm、器高3.0cm、底径5.6cmである。底部はナデており、高台はやや雑ではあるが三日月高台を模倣した部分もある。貼り付け高台のため接合痕が残る。体部は内外面とも丁寧にナデている。立ち上がりは直線的で端部はそのままつまんでいる。

19～22は土師器の坏である。19は1/3残存している。口径13.4cm、器高3.7cmで底部は平底である。立ち上がりは直線的で端部をそのままつまんでいる。体部には巻き上げ痕が残る。20はほぼ完形である。口径13.5cm、器高4.1cmで底部は平底である。立ち上がりは直線的で端部を丸めている。体部に巻き上げ痕が残る。21は約1/2残存している。口径13.7cm、器高4.5cmで底部は平底である。立ち上がりは直線的であるが体部中央からやや外反する。端部はそのままつまんでいる。22は約1/2残存しており、口径14.5cm、器高2.9cmである。平底で立ち上がりは直線的であり、端部は水平につまんでいる。碗というよりは平碗に近い。23は底部破片とみられるが胎土は荒く粗雑である。24は底部破片である。体部がこれ以上のびないとすれば大碗に長脚をつけたものとなる。体部と脚部を接合させた接合痕が残り、全体につくりは雑である。貼り付け高台のつくりに、ぎこちなさが残る点は17・18の模倣碗・皿と共通性をもち、同じ技法でつくられているとみられる。

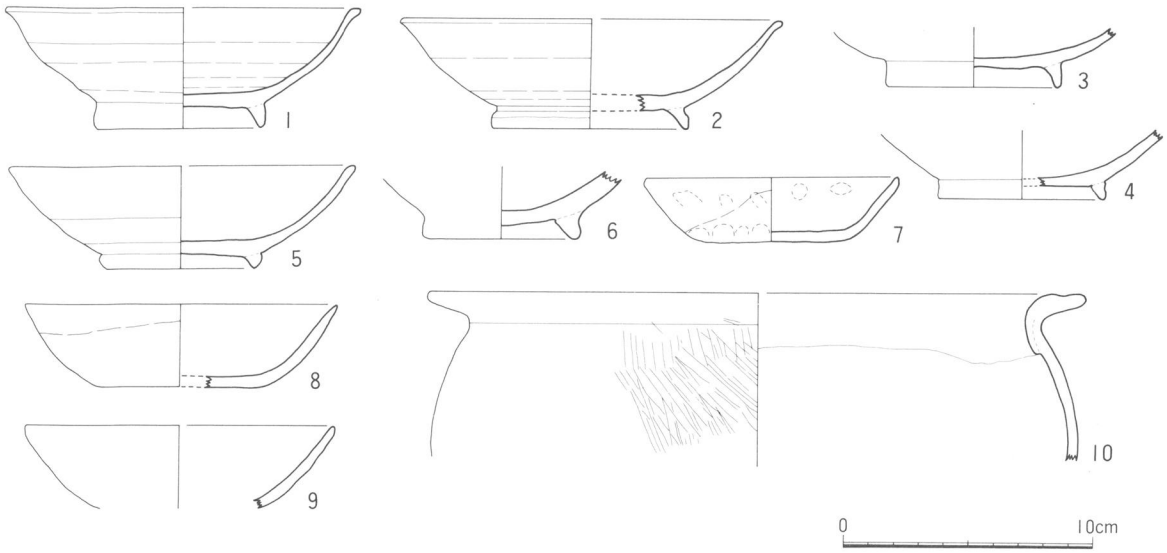
以上のようにＳＢ301の床面及びその直上の遺物の中で、緑釉陶器の稜碗や灰釉陶器の大碗（９・10）・皿（13）・小瓶（16）はＫ-90段階に平行するものとみられる。またそれ以外の灰釉陶器はいずれもＯ-53段階に含まれるものであるが、底部に糸切り痕を明確に残すものはないことから、その中でも前半の部分に属する可能性が強い。この時期の灰釉陶器に伴う土師器については不明な点が多いが、灰釉陶器模倣の碗、皿や平底で巻き上げ痕を伴う坏、器台などがこの遺構では伴っている。下限遺物の年代から判断すればＳＢ301はＯ-53段階の古い段階に形成されていると考えられる。しかしＫ-90段階の遺物も含み次に述べる上部の遺物の中にはＫ-14段階の遺物をも含むことから、Ｋ-90段階またはＫ-14段階にさかのぼりこの付近にそれを使用した人々の存在を強くうかがわせるものである。また検出されている遺物には供膳用の形態が多く、ほとんどが割れた破片が多いことからＳＢ301は厨房または食堂的な性格も考えられる。

住居の年代と性格

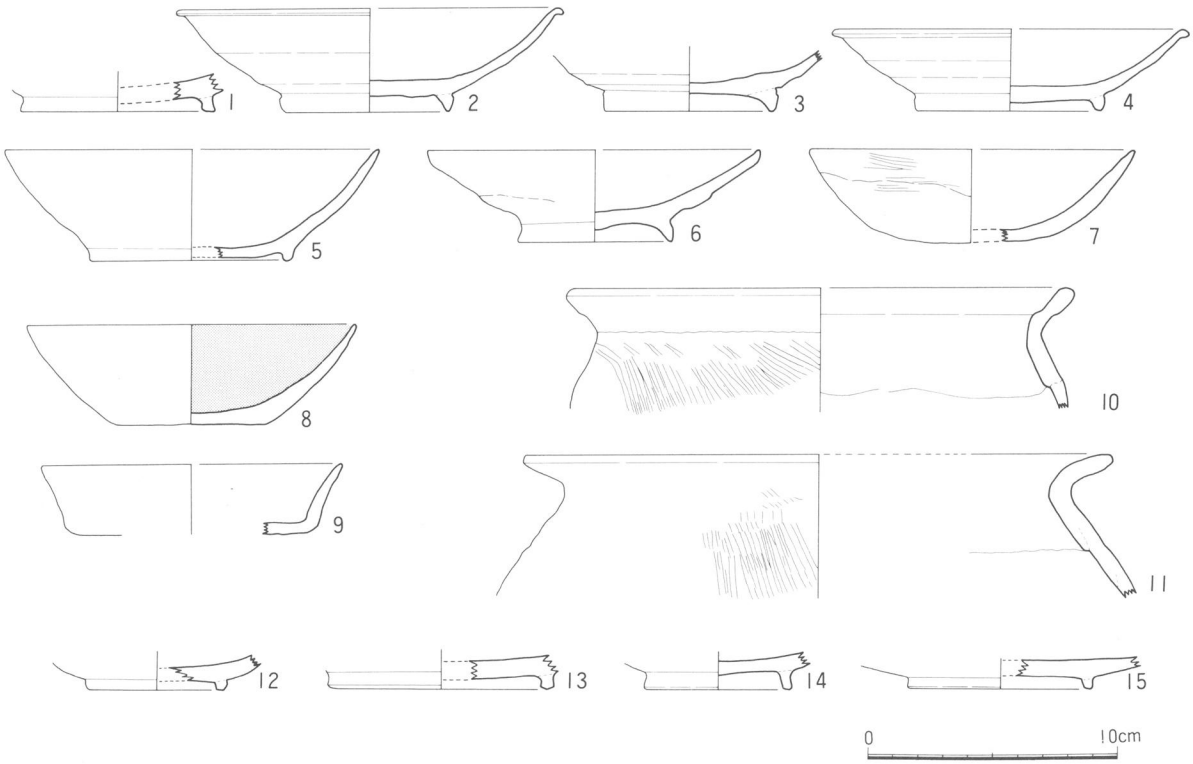
覆土上部

次にＳＢ301の覆土上部の一括遺物について第９図に示した。緑釉陶器・灰釉陶器（墨書土器を含む）・須恵器・土師器が含まれていた。

緑釉陶器はトチンの跡が残る角高台の皿が１点出土しているが、第30図11に図示した。１～５は灰釉陶器である。１は約2/3残存しており、口径14.1cm、器高4.8cm、底径6.5cmである。底部には回転ヘラ削りを施し、高台は（C）である。立ち上がりは緩やかで、口縁端部をやや外反させながら丸めている。２は1/3の破片である。口径15.0cm、器高4.4cm、底径7.7cmである。高台は（C）であるが雑なつくりである。立ち上がりは緩やかで、口縁端部をやや外反させながら丸めている。降灰による自然釉がみられる。１・２はサブトレンチ内からの出土遺物であり、前述の直上遺物に含めてもよい。３・４はいずれも高台部破片である。高台はやはり（C）である。５は約1/2残存している。口径13.7cm、器高4.1cm、底径5.9cmである。底部にはやや糸切りの跡が残る。高台は（D）である。立ち上がりは緩やかで、口縁端部をそのままつまんでいる。内面には重ね焼きの跡が残る。直上遺物６とほぼ同型であるが６は口縁部を強く水平に引き出していることから口縁部の形態が二種類



第９図　竪穴住居　SB301　上層出土遺物



第10図　土器溜り　SX301・SX302出土遺物

あることがわかる。灰釉陶器では3点墨書土器が含まれていたため、第31図に図示してある。第31図4は碗と大碗の中間に位置するもので墨書は「万」と判読できる。3は底部小破片で判読できない。1は須恵質に近い無高台坏で内外面に墨痕がある。底部の文字は「寺」の可能性をもつ。この他の灰釉陶器の破片はいずれも高台は（C）または（D）である。

須恵器は数点含まれていたが、その内図示できるものは『原川遺跡Ⅱ』包含層遺物の中に示した。6～10は土師器である。6は灰釉模倣の碗の底部破片で、他に3点ほど含まれる。7は約1/2残存している。口径10.0cm、器高2.5cmで碗を一回り小さくしており小碗または小皿である。底部は無調整であるが、それ以外はナデている。内面にはススが付着しているため灯明皿として使われた可能性をもつ。中世の溝ＳＤ303からの混入の可能性もある。8・9は碗体部破片である。直上遺物19と同じく体部が直線的に立ち上がるものである。10は甕の口縁部小破片である。口径26cmと推定でき、口縁部が「コ」の字型に屈曲し、端部を水平に引きのばし丸めている。また内面はナデているが、外面は荒い斜め方向のハケ目が強く残っている。このようにＳＢ301の覆土上部の遺物は、いずれも上述の床面及びその直上遺物の年代の範囲に納まるものである。

SX301・SX302（第10図　図版7）

規　　模　ＳＸ301はＪ－8～9グリッド、またＳＸ302はＩ－8～9グリッドにかけてＳＢ301と同一面調査の過程で検出された灰釉陶片を中心とする土器溜りである。ＳＸ301の範囲は南北5.6m、東西1.5m程の不定形で、ＳＢ301のすぐ東南側に当たる。ＳＸ302は南北8.0m、東西5.0m程の不定形でＳＢ301の東側に当たり、ＳＢ301より2～3m程離れ、浅い溝ＳＤ304と重複している。両者とも多量の灰釉陶器を中心とし、その中に須恵器や土師器も含まれている。遺物の内容からもＳＸ301・ＳＸ302とＳＢ301は共通する部分が多く、位置的にみて両者とも竪穴住居ＳＢ301から廃棄された土器の溜りであるとみられる。ＳＸ301とＳＸ302は連続した溜りであるとみなされるが、現地調査では両者を分けているため、ここでは一応分けて説明することとした。両者とも図化に努めたが灰釉陶器は底部小破片が多く、特にＳＸ302についてはＫ-14段階の高台破片を抽出して図示するにとどめた。

土器溜りの性格

出土遺物　第10図1～11はＳＸ301から出土した遺物である。1～4は灰釉陶器である。1は底部小破片である。角高台で内面も丁寧に施釉してあり、胎土分析によれば「猿投産カ」に当たる。2は碗で1/2残存している。口径15.2cm、底径6.5cm、器高4.1cmである。底部は回転ヘラ削りが施されているが糸切りの痕も消しきれていない。高台は（C）の三日月高台くずれで、接合がやや雑である。立ち上がりは緩やかで端部を水平に引き出し丸めている。3は底部破片である。底部には回転ヘラ削りが施され、高台は（D）の三角高台である。4は器高が低く碗または皿である。約1/2残存している。口径14.0cm、器高3.2cm、底径7.4cmである。底部は回転ヘラ削りで、高台は（C）であるが糸跡も残る。立ち上がりは緩やかで端部は水平に引き出し丸めている。

土師器　5～11は土師器である。5は模倣坏で約1/2残存している。底部は丁寧にナデており、高台はほんのわずかしか残っていないがカマボコ型であり、K-14段階の灰釉陶器13とよく似たような高台である。立ち上がりは緩やかだが、体部中頃よりやや上向きとなり、端部はそのままつまんでいる。内外面ともよくナデられており、内面にわずかに丹が残ることから丹が塗られていた可能性がある。6は模倣の皿である。約1/3残存している。底部はナデており、高台は（D）三角高台に近いが雑である。立ち上がりは直線的で端部は垂直に引き出している。体部には巻き上げ痕が残る。7は坏の破片で1/3残存している。体部には巻

き上げ痕が残り、つくりは非常に雑である。8は約2/3残存している。口径13.0㎝、底径4.8㎝、器高4.0㎝である。底部は平底である。口縁端部はそのままつまんで丸めている。内外面はナデられており、特に内面は炭化させた内墨の土器で、搬入品とみられる。9は体部小破片である。体部外面には丹が残る。また内面にもわずかに丹の痕跡が残るため丹塗りであった可能性が強い。10・11は甕の口縁部小破片である。10は口縁部が「く」の字に開くもので、口縁部外面から内面にかけてはナデられているが、外面には荒いハケ目が施される。また内面には口縁部と体部との接合痕が明確に残る。11も10と同様であり、口縁部の開きはより急になる。内面の接合痕は明確である。ＳＸ301には緑釉陶器小破片が2点含まれていた。

内墨土器

丹塗りの可能性

12～14はＳＸ302より出土した灰釉陶器小破片である。12は底部は回転ヘラ削りで高台は角高台である。内面の施釉も丁寧である。胎土も灰白色で密であり胎土分析でも「猿投産的」と判明される。

胎土分析

13は同じく角高台で内面にも施釉している。14は高台は小さくカマボコ型である。内面に施釉しているが釉のムラがある。胎土も黒色粒子が混じり「清ヶ谷窯的」である。ＳＸ302からはこの他、緑釉陶器破片4点、また墨書土器1点が出土している。15はＳＤ304から出土している灰釉陶器皿の底部破片である。高台は小さくカマボコ型であるが内面に接合痕が明確に残る。

第４節　掘立柱建物群

平行する２本の溝

調査区全体（第１図参照）から見ると掘立柱建物群は北東～南西方向の平行する２本の溝をはさんで大きく西側地区を中心とする一群と東側地区を中心とする一群に分けられる。このため「西側地区掘立柱建物群」と「東側地区掘立柱建物群」の２つに分けて以下説明する。ただし、各時代の遺構が同一面で錯綜しながら調査されているため、いずれも第１章の全体図の作成で述べたような遺構の操作に基づいて図上で検討したものであり、建物の規模等についてはいまひとつ確実性に乏しいといわざるを得ない。整理作業の中では、比較的まとまった時代の柱穴が分離できた３区・４区・14区・15区を中心に検討した。西側地区掘立柱建物群は３区・４区を中心とするものである。３区で２棟（ＳＨ301・ＳＨ302）４区で４棟（ＳＨ401・ＳＨ402・ＳＨ403・ＳＨ404）調査されている。また東側地区掘立柱建物群は14区・15区を中心とするものである。14区で６棟（ＳＨ1402・ＳＨ1403・ＳＨ1401・ＳＨ1405・ＳＨ1406・ＳＨ1407）15区で２棟（ＳＨ1501・ＳＨ1502）を認定している。しかし机上操作の部分が多いので、できるだけ強引な認定をさけ確実なものにしぼったため、建物群の存在は確実でも、柱穴がまとまらずあきらめたものもあり、まだ多くの建物の存在は確実である。

東西の建物群

西側地区掘立柱建物群

建物配置

西側地区掘立柱建物群は３区・４区を中心とするものである。３区で２棟、４区で４棟が調査されている。３区・４区には多数の柱穴群があるが、よく検討すると西南から東北方向に帯状に柱穴が分布する事がわかる。この中からさまざまな可能性を検討し、ＳＨ301とＳＨ302以外も建物や杭列が並ぶ可能性は大きいが、無理には抽出しなかった。だがＳＢ301の東側部分が空間となり、そこに土器溜りが形成され、これを囲むようにＳＢ301、ＳＨ301、ＳＨ302が「コ」の字状に配置しているとみなす事ができる。ＳＨ301・ＳＨ302の年代を直接示すものはないがこうしたＳＢ301の周囲の柱穴群とみなす事ができればこれと同年代と考えることができ、また包含層遺物からも平安時代と考えてよい。

また４区は中・近世の攪乱を除くときれいに柱穴群が現れたものである。現地ではＳＨ402がさらに西側に延びた建物を想定していたが、検討の結果ＳＨ401～ＳＨ404の４棟の建物を図上で認定した。これらの建物のうちＳＨ401・ＳＨ402・ＳＨ403はほぼ20㎡前後をもつ同じ棟方向の大型の建物であり、特にＳＨ401とＳＨ402の間には建替え関係が想定される。またＳＨ404は、ＳＨ401またはＳＨ402と相対する棟方向を持ち、小型の建物で納屋的な性格が考えられる。さらに４区の東側でも同じ方向で建物の存在が推定できるが、調査区外に延びているため無理な認定はさけた。

建物の方向性

SH301（第11図　図版９）

規模

掘立柱建物跡ＳＨ301はＩ－９～10グリッドに位置する。東西幅と南北幅がほぼ同じである。南北方向の東側には束柱が検出されていないのに対して、東西の側面の柱間にはいずれも束柱を持つことから一応南北方向を棟方向と考えた。しかし両者ともほぼ3.6m程の正方形に近くＰ2・Ｐ5は他に比して浅く、Ｐ3・Ｐ4間にあった柱穴を検出できなかった可能性も残る。したがって梁行3.58m、桁行3.61mで２間×１間または２間×２間の建物であり、主軸方位はＮ－７°－Ｅである。Ｐ1・Ｐ2・Ｐ5・Ｐ6に柱痕がみられるがいずれも径12～14cm程であり平面積も約13㎡と小型の建物である事がわかる。遺物はＰ1より土師器小破片

が、またP6より須恵器の小破片が検出されている。

SH302（第11図　図版９）

掘立柱建物跡ＳＨ302はＪ－８～９グリッドに位置する。西側は調査区外で不明なため、一応南北方向を梁行とした。この仮定に従えば梁行4.02m、桁行3.05m以上で２間×２間または２間×２間以上の東西棟の建物となる。P2・P3の柱痕の径は12cm前後であることから、ＳＨ301と同規模の建物である可能性が強い。P2・P3の柱穴遺物はいずれも土師器の磨滅した小破片であったが、特にP2には奈良時代か平安時代かは特定できないが薄手の坏の破片が含まれていた。　**規　　模**

SH401（第11図　図版11）

掘立柱建物跡ＳＨ401はＨ～Ｉ－12グリッドに位置する。柱穴の配置からみると２間×３間の東西棟の建物である。梁行3.95m、桁行5.20mで、主軸方向はＮ－80°－Ｅ、平面積は20.54㎡である。四隅の柱穴P1・P4・P6・P9の平面での大きさはいずれも長径41～52cm、短径35～40cm程の幅に収まる。また束柱はP8を除き四隅の柱穴より少し小型である。四隅の柱穴P1・P4・P6はいずれも柱穴の底のレベルは15.9m前後である。残るP9は柱の根元の部分が残っており直径は約12cm前後である。　**規　　模**

柱穴の遺物はP9・P10よりは土師器片が、またP4よりは中・近世の甕の口縁部が出土している。甕は隣接する中・近世の土坑よりの混入品と考え、土師器片より奈良・平安時代としておきたい。　**出土遺物**

SH402（第12図　図版11）

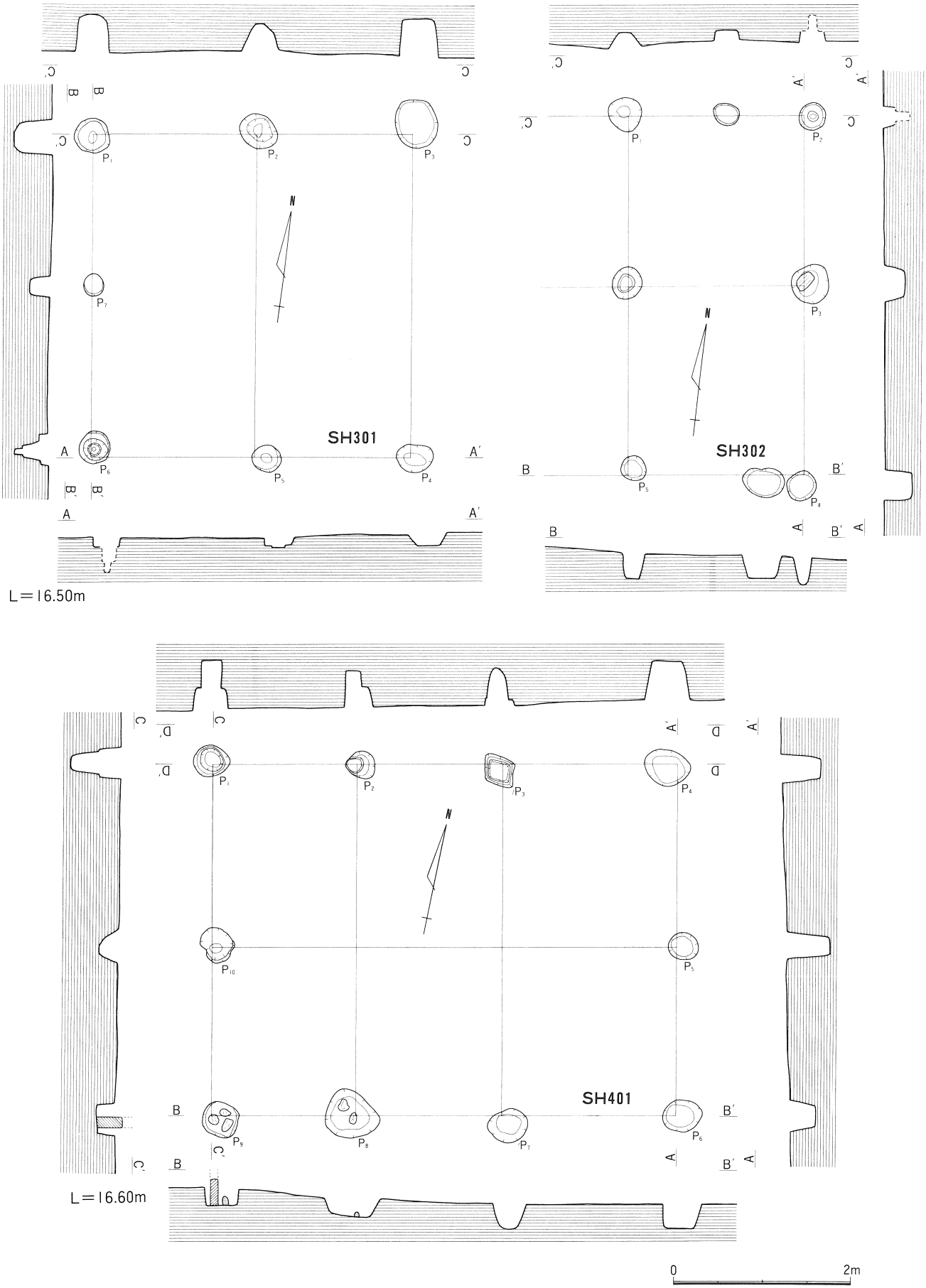
掘立柱建物跡ＳＨ402はＩ－12グリッドに位置する。２間×３間の東西棟の建物で、ＳＨ401と北側の部分で切り合っており、主軸方位もほぼ平行する。梁行3.63m、桁行5.45mで、主軸方位はＮ－76°－Ｅ、平面積は19.78㎡である。当初は西側にさらに半間の張り出しを持つ可能性を検討したが、柱穴の深さ等の点から、これらの柱穴は次のＳＨ403を構成するものとした。柱穴の大きさが小さすぎるP5と不明なP9を除けば柱穴の平面での大きさはほぼ長径44～65cm、短径42～55cmの間に集中している。柱穴の掘り込みからはＳＨ401よりも大きいとみなしてよいがP6には柱の根元の部分が残っており径12cm程でＳＨ401と変わらない。ＳＨ401とほぼ同程度の建物を推定することができる。　**規　　模**

柱穴遺物はP1より近世の陶磁器破片と桃の種が含まれていたが、これは西側に隣接する近世の溝ＳＤ401よりの混入品と考えた。他は無遺物である。ＳＨ401との前後関係は不明である。　**出土遺物**

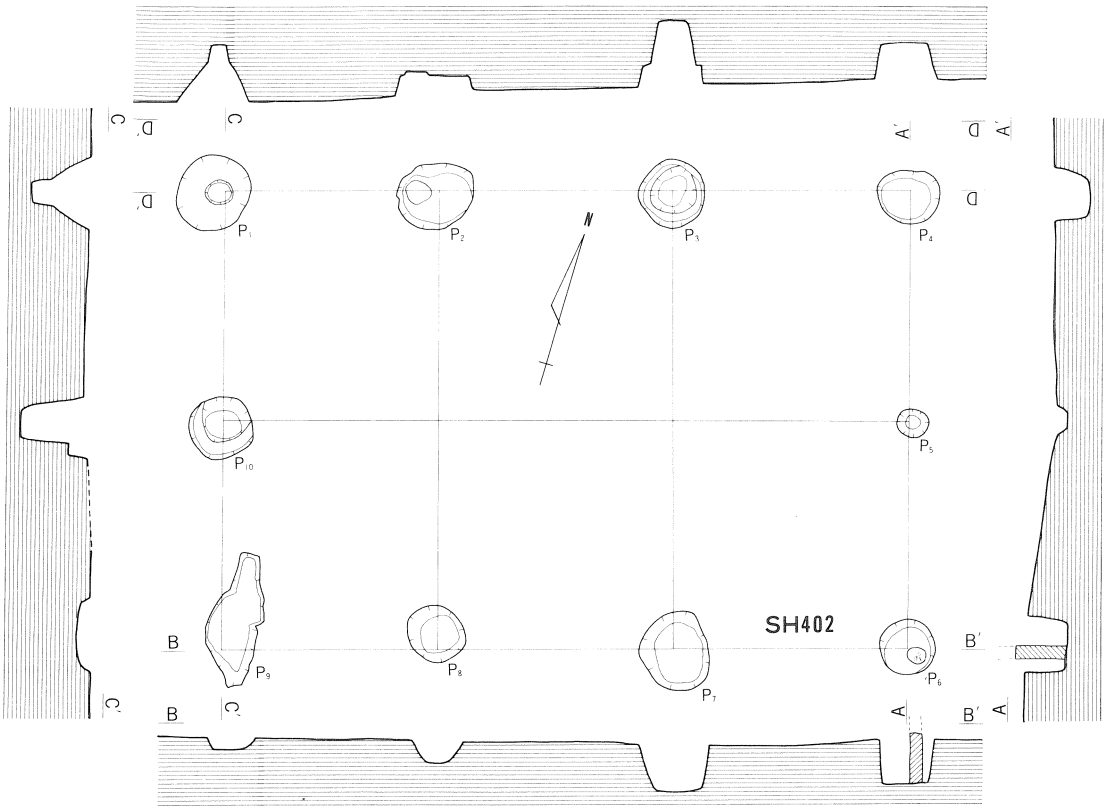
SH403（第12図　図版12）

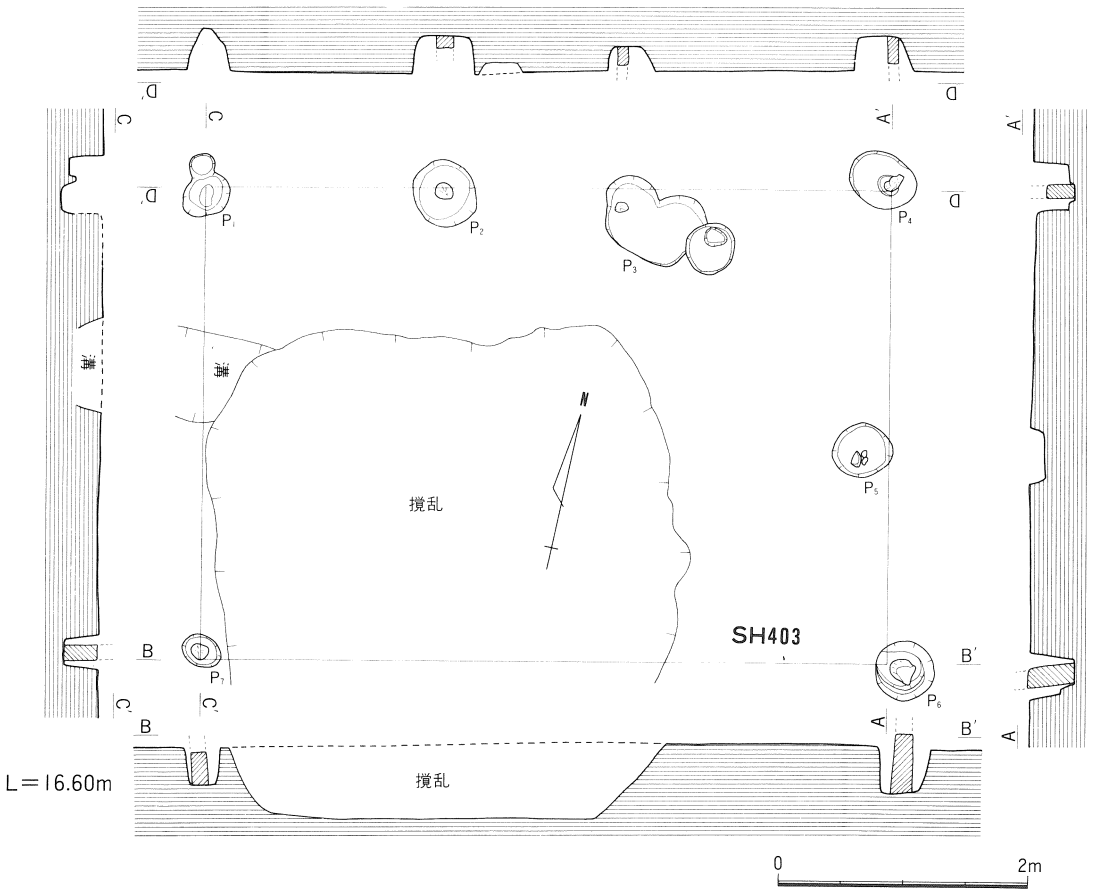
掘立柱建物跡ＳＨ403はＩ－11～12グリッドに位置する。ＳＨ402が西側に延びる可能性を検討するうちに中・近世の攪乱により西側と南側の束柱は不明であるが、図のように柱穴を結ぶとＳＨ402とほぼ同じ方位と平面積を持つ建物ができる事がわかった。さらに四隅の支柱に当たるP1・P4・P6・P7の内、P4・P6・P7については径10～17cm程の根元が残り、またいずれも柱穴の底のレベルが16.2m前後である事から掘立柱建物跡と認定しここに図示する事とした。梁行3.75m、桁行5.43mの東西棟の建物で、平面積20.36㎡、方位Ｎ－77°5′－ＥともＳＨ402とほとんど同じである。　**規　　模**

柱穴の遺物はP1には土師器片が、P2には宝珠つまみを持つ須恵器の坏蓋や、灰釉陶器の底部また土師器のいずれも破片が、P3には灰釉陶器の口縁部破片や土師器片が、P4・P5・P7には土師器片が含まれていた。　**出土遺物**

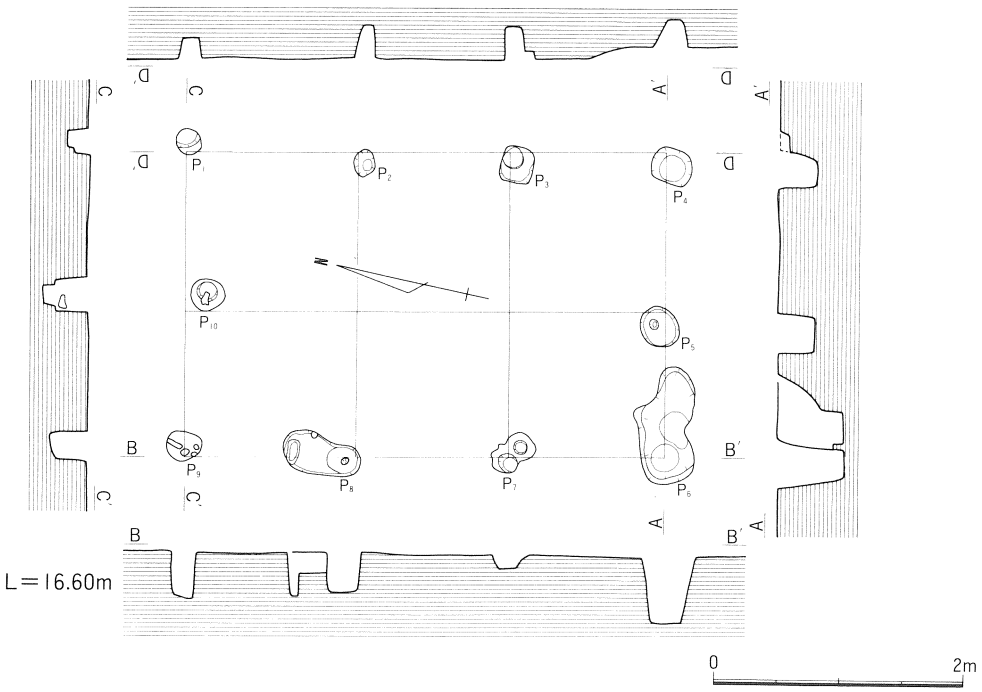


第11図　掘立柱建物跡遺構実測図 1　SH301　SH302　SH401





第12図　掘立柱建物跡遺構実測図　2　SH402　SH403



第13図　掘立柱建物跡遺構実測図　3　SH404

SH404（第13図　図版14）

規　　模

掘立柱建物跡ＳＨ404はＩ－11グリッドに位置する。西北の一部は下層から奈良時代の溝ＳＤ406が検出されている事からそれ以後とみてよい。柱穴の配置からは南北棟の２間×３間の建物である。梁行2.40ｍ、桁行3.82ｍで主軸方位はＮ－12°－Ｗ、平面積は9.17㎡と小型である。柱穴の大きさもいずれも20～30㎝前後で、Ｐ6以外は掘りこみも深くない。またＰ5・Ｐ8・Ｐ9・Ｐ10には柱の根元が残っていたが、いずれも径５～８㎝程でやはり建物の規模の小ささを示しており、納屋または物置き的な性格が考えられる。ＳＨ403に直交する棟方向を持っており、ＳＨ401あるいはＳＨ402に付属する建物と推定できよう。

出土遺物

柱穴の遺物は、Ｐ3には土師器片が、Ｐ4にはＯ-53段階の灰釉陶器の碗の口縁部破片が、Ｐ5にはＫ-90段階とみられる灰釉陶器の小碗の口縁部破片と土師器片が、Ｐ6には須恵器の大甕の体部破片が、Ｐ7には須恵器片が、Ｐ8には須恵器の壺と甕の体部破片と土師器片が含まれていた。

東側地区掘立柱建物群

東側地区掘立柱建物群は14区・15区を中心とするものである。14区・15区は柱穴が非常に多く検出されているが現地では建物の認定をするまでには至らなかった。このため整理作業の中でよく検討するといくつかの柱穴群のまとまりが想定できた。まずＩ～Ｊ－29～30グリッド付近の柱穴からは奈良時代の竪穴住居ＳＢ1404に相対する場所にＳＨ1402を抽出した。柱穴は他にも多数あるため、何回かの建替えや、別の建物の可能性も残っている。包含層からは平安時代の遺物が多い所である。次にＨ～Ｊ－30～31グリッド付近の柱穴群からはＳＨ1404を抽出した。これらの建物の周囲にも大きな柱穴があり、何度かの建替えが想定できる。ＳＨ1404の南側のＩ～Ｊ－31グリッド付近の柱穴群からも建物が想定されたが、断面等の検討の結果、無理に抽出する事はとどめた。

またＨ～Ｋ－32～33グリッドにかけて南北方向に柱穴群が集中する。このうち北側は比

較的小さな柱穴が集中しており、この中からＳＨ1405、ＳＨ1406を認定した。それより南側については柱穴が比較的大きい。いろいろな柱穴の並びを検討し、かなり大型の建物が成立する可能性を持っていたが、まとまりの点に欠けるため、一応ＳＨ1407を抽出するにとどめた。

次に15区のＳＨ1501は現地調査で認定したものである。Ｇ－32～33グリッドを中心とした柱穴は建物の一部であることが確実であるが、狭い調査区のためその全体が不明である。このため柱穴の確実な並びとしてＳＨ1502を図示するにとどめた。

SH1402（第14図　図版13）

掘立柱建物跡ＳＨ1402はＩ～Ｊ－29～30グリッドに位置する。２間×４間の東西棟の建物である。梁行2.50ｍ、桁行4.97ｍ。主軸方位はＮ－90°－Ｅで、正確に東西方向にのっている。平面積は12.43㎡である。間数が多い割に平面積が少ないのは各柱間距離が1.05～1.35ｍと比較的短いためである。四隅の柱穴Ｐ1・Ｐ5・Ｐ7・Ｐ12の平面の大きさは径50㎝前後である。桁行の北側の柱間はほぼ等間隔であるのに対して、南側はＰ9とＰ12の間にさらにＰ10とＰ11の柱穴が並びＰ9とＰ10、Ｐ11とＰ12が約0.6ｍと等間隔になるのに対して、Ｐ10とＰ11の間は約1.4ｍと広がっている。これはＰ10とＰ11の間が出入口である可能性を持つ。また中央のＰ14・Ｐ15の２つの柱穴は梁方向の柱穴とはややずれながら棟方向Ｐ6－Ｐ13と一直線に並ぶ事から棟柱の支柱である可能性を持つ。 **規　　模**

柱穴からの遺物はＰ1～Ｐ13までいずれも土師器の磨滅した小破片を含んでいたが、中でもＰ12には宝珠つまみのとれた跡の可能性がある須恵器の坏蓋の破片が、またＰ13には須恵器高坏の脚部の小破片が含まれている。灰釉陶器の破片は含まない事、奈良時代の竪穴住居ＳＢ1404と相対する位置にある事から、一応ＳＢ1404と同様、奈良時代とみてよいであろう。 **出土遺物**

SH1404（第15図　図版14）

掘立柱建物跡ＳＨ1404はＨ～Ｉ－30～31グリッドに位置する。２間×３間半の南北棟の建物である。梁行3.59ｍ、桁行6.81ｍで、主軸方位はＮ－14°－Ｗ、平面積は24.45㎡である。束柱と認定した柱穴以外に北側の桁行には２個、南側の桁行には３個の束柱に数えてもよい柱穴があるがここでは梁の対称のものを束柱として数えた。この認定にはまた疑問が残ろう。柱間距離はほぼ1.72～2.0ｍの範囲に収まるが、南側は半間分だけ張り出している。柱穴の大きさは四隅のものは比較的大きく50～60㎝前後であるのに対して、束柱はやや小さく40～50㎝前後のものが多い。 **規　　模**

柱穴の出土遺物はＰ1・Ｐ2・Ｐ4・Ｐ7・Ｐ8・Ｐ9・Ｐ10・Ｐ11・Ｐ12からは土師器片が、またＰ2からは須恵器やＯ-53段階の灰釉陶器の碗口縁部小破片、Ｐ4・Ｐ7からは奈良時代以降の須恵器の坏蓋の口縁部小破片が、またＰ10・Ｐ11には須恵器の破片が含まれていた。柱穴の遺物からみるとＳＨ1404は年代的には上限は奈良時代、下限は平安時代Ｏ-53段階までの範囲に収まると見てよい。 **出土遺物**

ＳＨ1404が位置するＨ～Ｊ－30～31グリッドは多くの柱穴群が集中しており、柱穴の大きさの違いからＳＨ1404の西北側、また南東側にも建物が存在した可能性が強い。ＳＨ1403のように番号をつけて検討したものもあるが、不明の点も多く、ＳＨ1404の一棟のみを認定した。

SH1405（第15図　図版15）

掘立柱建物跡ＳＨ1405は、Ｈ～Ｉ－32～33グリッドに位置する。２間×３間の東西棟の **規　　模**

建物である。梁行3.40m、桁行7.18mで主軸方位はN－89°－W、平面積は24.41㎡である。束柱として認定した柱穴以外にも北側の桁行に2個、南側の桁行に4個の束柱の可能性がある柱穴があるが、ここでは梁の対称のものを束柱として数えた。柱穴の大きさはまちまちであるが、四隅のものの柱穴の底の海抜高はほぼ16.1m前後で共通し、束柱はそれより浅くなる。

出土遺物　柱穴からの出土遺物はP2・P5・P6・P7・P8・P9・P10からは土師器の小破片が、またP3からは須恵器の坏身口縁部小破片が、またP8からは大甕の体部破片が、P9・P10にも須恵器片が含まれていた。特にP7には奈良時代の高台を持つ坏身の焼けた底部破片や内側にかえりを持つ坏蓋の口縁部破片、大甕の体部、比較的良質な胎土を持つ灰釉陶器の長頸壺の頸部破片などが含まれていた。灰釉陶器の碗の体部小破片はP6・P7にも含まれていた。柱穴遺物からみるとSH1405は年代的には上限は奈良時代、下限は平安時代K-90段階またはO-53段階までの範囲に収まるとみてよい。

SH1406（第16図　図版16）

規　模　掘立柱建物跡SH1406はH～I－33グリッドに位置する。ほぼ正方形のため、束柱のそろっているP2－P5を結んだ方向を一応棟方向とした。梁行2.7m、桁行2.73mで主軸方位N－3°－Wである。2間×2間または2間×1間の南北棟の建物と一応しておく。SH1405と同方向で並んでおり何らかの関係が推定できる。

出土遺物　出土遺物は、P4は無遺物でその他はいずれも土師器片を含んでいた。特にP1よりはO-53段階とみられる三日月高台の灰釉陶器の碗底部破片や、須恵器の壺底部破片、P2・P5よりもP1と同じ段階の灰釉陶器の碗底部破片、またP6・P7よりは口縁部小破片が含まれていた。柱穴遺物は奈良時代の遺物は少なく、むしろ平安時代O-53段階の遺物が多いためこれを下限とし、それほどさかのぼらない時期とする。

SH1407（第16図　図版16）

規　模　掘立柱建物跡SH1407はI～J－32～33グリッドにかけて位置する。1間×2間の東西棟の建物である。梁行4.8m、桁行2.35mで主軸方位はN－72°－E、平面積は11.28㎡と小型で細長い。

出土遺物　各柱穴は比較的他の建物より大きい。柱穴の遺物はP1・P2・P3・P5・P6よりは土師器片が、またP3・P6よりは須恵器片が含まれていた。年代的には奈良時代あるいは古墳時代にさかのぼる可能性がある。

SH1408（第16図　図版17）

規　模　掘立柱建物跡SH1408はJ－28グリッドに位置する。14区の一群の建物群の中では最も西寄りである。1間×1間の掘立柱建物で長径の方を棟行とすれば梁行2.18m、桁行2.75mの東西棟の建物で、主軸方位はN－82°－Wである。周囲に柱穴は少なく、同じ建物を構成すると思われるものはみあたらなかった。柱穴はいずれも40cm前後の円形である。柱穴の覆土は灰色粘土で遺物はなかった。西側のSX1404は側溝の可能性を持つ。東側の井戸SE1401と同一時期と考えることもでき、平安時代後期もしくは中世に下がる可能性もある。

SH1501（第16図　図版17）

規　模　掘立柱建物跡SH1501はF－33～34グリッドに位置する。2間×2間の東西棟の建物である。梁行2.6m、桁行4.33mで主軸方位はN－75°－E、平面積は11.26㎡である。桁行の柱穴の位置が西側寄りのため、桁行の柱間P1－P2：P2－P3は1：2の割合になるため、P2－P3、P5－P6の間にはもう1本束柱が入る可能性があり、その場合は2間×3間と

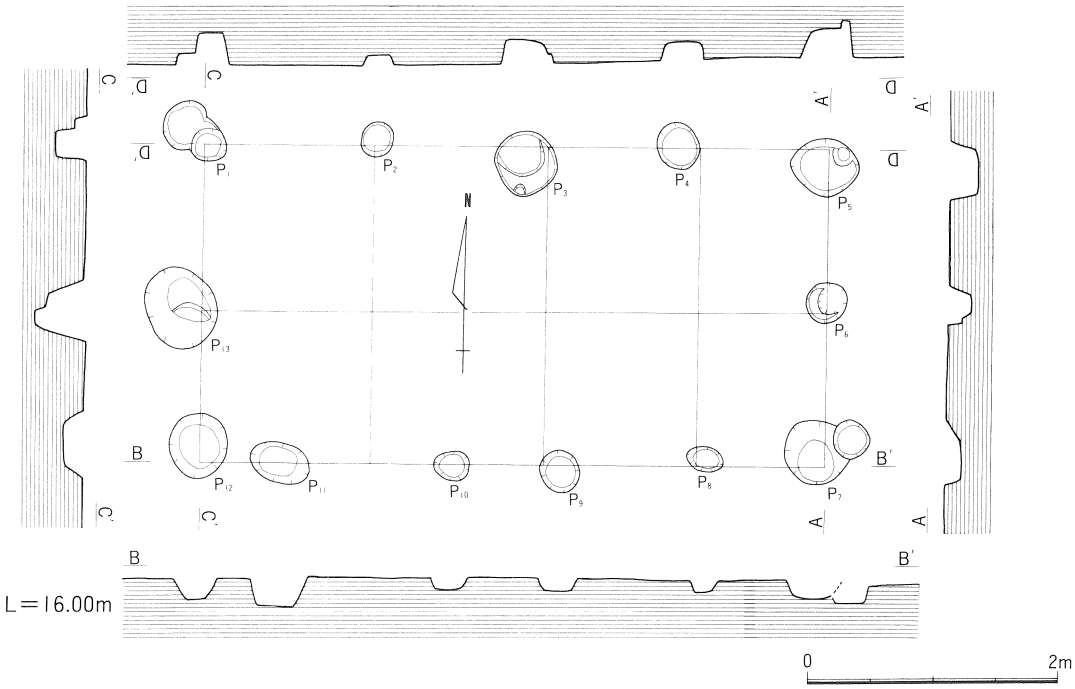
なる。

柱穴遺物はP1～P8ともいずれも土師器片を含んでいた。またP3・P4・P7には須恵器片を含んでいたが、そのうちP3・P4には、須恵器の坏蓋口縁部破片が、またP7には高台のある坏身底部小破片が含まれている。坏蓋は口径10cm前後をはかるもので古墳時代後期のものである。しかしSH1501はその検出状況からみて、奈良時代に位置づけられるとしてよいであろう。 **出土遺物**

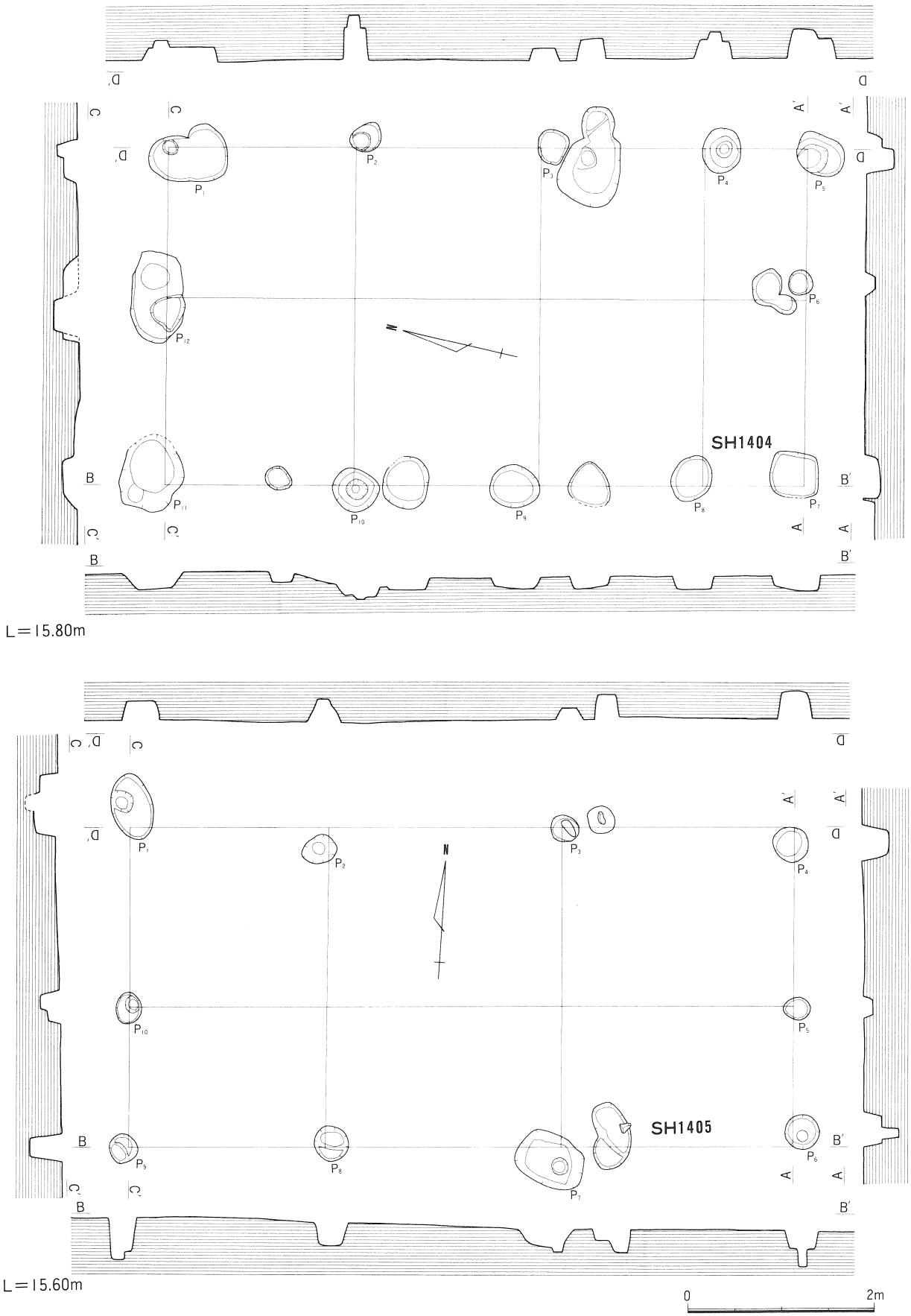
SH1502（第16図）

G－32グリッドの北壁で調査した3つの柱穴である。各柱穴とも大きく深さもしっかりしていた。北側の調査区域外に延びているものとして建物を想定した。全様を知り得たP1は長径65cm、短径58cmの楕円形の掘り方の中に径25cmの柱痕を持つものである。確認面より深さ42cmを測るもので、他の2本も同様の規模を想定しうる。検出した3つの柱間の距離は3.32mである。 **規　　模**

柱穴より検出された遺物はいずれも土師器片である。中に古墳時代後期の坏の破片があり古墳時代に下がる可能性をもつ。



第14図　掘立柱建物跡遺構実測図　4　SH1402



第15図　掘立柱建物跡遺構実測図 5　SH1404　SH1405

第16図　掘立柱建物跡遺構実測図 6　SH1406　SH1407　SH1408
SH1501　SH1502

第１表　奈良・平安時代掘立柱建物跡柱穴一覧表

掘立柱建物跡	桁行柱間(m)	桁　行(m)	梁行柱間(m)	梁　行(m)	面　積(m²)	柱穴(長径×短径－深さ)(cm)	備考(間取、棟向、方位)
SH301	P1～P7 1.69 P7～P6	P1～P6 3.61 P3～P4 3.61	P1～P2 1.83 P2～P3 1.75 P4～P5 1.75 P5～P6 1.83	P1～P3 3.58 P4～P6 3.58	12.92 (P1,P2,P5,P6 6.61) (P2,P3,P4,P5 6.31)	P1(42×39－43.5)柱痕12cm P2(44×37－30.5)柱痕14cm P3(55×47－44) P4(40×30－14) P5(34×30－11)柱痕13cm P6(36×35－38)柱痕13cm P7(22×24－21)	2間×2間 南北棟か N－7 －W
SH302	P1～P2 1.96 P4～P5 1.96	P2～P1～2.87以上 P4～P5～3.05以上 発掘区域外の ため桁行不明	P2～P3 1.92 P3～P4 2.1	P2～P4 4.02	7.88以上 (P1,P2,P4,P5 7.88)	P1(38×35－16.5) P2(30×29－29.5)柱痕12cm P3(45×41－21.5)木片11～14cm P4(35×31－30.5) P5(28×26－28.5)	2間×2間以上 東西棟か N－83 －E
SH401	P1～P2 1.60 P2～P3 1.62 P3～P4 1.98 P6～P7 1.98 P7～P8 1.64 P8～P9 1.59	P1～P4 5.20 P6～P9 5.21	P4～P5 2.05 P5～P6 1.90 P9～P10 1.90 P10～P1 2.05	P4～P6 3.95 P9～P1 3.95	20.54 (P1,P2,P8,P9 6.32) (P2,P3,P7,P8 6.40) (P3,P4,P6,P7 7.82)	P1(41×36－57)柱痕20cm P2(30×33－43)柱痕19cm P3(46×32－42)柱痕21cm P4(52×40－44.5) P5(34×30－49) P6(45×35－27.3) P7(38×46－30) P8(61×52－21) P9(43×37－21)木片12cm P10(40×32－21)	2間×3間 東西棟 N－80 －E
SH402	P1～P2 1.70 P2～P3 1.85 P3～P4 1.90 P6～P7 1.90 P7～P8 1.85 P8～P9 1.70	P1～P4 5.45 P6～P9 5.45	P4～P5 1.83 P5～P6 1.80 P9～P10 1.80 P10～P1 1.83	P4～P6 3.63 P9～P1 3.63	19.78 (P1,P2,P8,P9 6.17) (P2,P3,P7,P8 6.71) (P3,P4,P6,P7 6.90)	P1(62×53－46)柱痕23cm P2(65×51－19.5)柱痕21cm P3(52×55－52) P4(50×42－28) P5(24×22－ 8) P6(44×44－32)木片12cm P7(62×53－38) P9(49×42－18) P9(105×40－10) P10(52×50－53)	2間×3間 東西棟 N－76 －E
SH403	P1～P2 1.90 P2～P3 1.50 P3～P4 2.03	P1～P4 5.43 P6～P7 5.43	P4～P5 2.10 P5～P6 1.65	P4～P6 3.75 P7～P1 3.75	20.36 (P1,P2～P7 7.13) (P2,P3～ 5.62) (P3,P4,P6～ 7.61)	P1(35×40－33)柱痕28cm P2(55×47－30)柱痕15cm P3(113×48－20)木片13cm P4(56×43－29)柱痕18cm、木片10cm P5(50×42－12) P6(47×48－37)木片17cm P7(32×25－28)木片15cm	2間×3間 東西棟 N－77.5°－E
SH404	P1～P2 1.37 P2～P3 1.21 P3～P4 1.24 P6～P7 1.24 P7～P8 1.21 P8～P9 1.37	P1～P4 3.82 P6～P9 3.82	P4～P5 1.22 P5～P6 1.18 P9～P10 1.18 P10～P1 2.22	P4～P6 2.40 P9～P1 2.40	9.17 (P1,P2,P8,P9 3.29) (P2,P3,P7,P8 2.90) (P3,P4,P6,P7 2.98)	P1(20×21－16)柱痕18cm P2(16×22－27) P3(33×25－25)柱痕18cm P4(28×35－22) P5(29×34－30)木片 8cm P6(31×43－52) P7(20×23－11)柱痕18cm P8(25×28－32.6)木片 7cm P9(23×28－41)木片 5cm P10(25×27－17)柱痕16cm、木片 5cm	2間×3間 南北棟 N－12 －W
SH1402	P1～P2 1.35 P2～P3 1.35 P3～P4 1.22 P4～P5 1.05 P7～P8 1.05 P8～P9 1.20 P9～P10 0.72 P10～P11 1.40 P11～P12 0.60	P1～P5 4.97 P7～P12 4.97	P5～P6 1.30 P6～P7 1.20 P12～P13 1.20 P13～P1 1.30	P5～P7 2.50 P12～P1 2.50	12.43 (P1,P2,P11,P12)? (P2,P3,P9,P10)? (P3,P4,P8,P9 3.03) (P4,P5,P7,P8 2.63)	P1(28×25－25) P2(28×24－ 8) P3(47×52－20) P4(37×34－15) P5(55×47－27)柱痕18cm P6(33×31－21)柱痕27cm P7(53×51－15) P8(28×20－10) P9(33×32－10) P10(28×24－10) P11(49×32－25) P12(47×53－16) P13(65×55－40)柱痕32cm	2間×4間 東西棟 N－90 －E

掘立柱建物跡	桁行柱間(m)	桁　行(m)	梁行柱間(m)	梁　行(m)	面　積(㎡)	(柱穴×柱痕　深さ)(cm)	備考(間取、棟向、方位)
SH1404	P1～P2 2.0 P2～P3 2.0 P3～P4 1.72 P4～P5 1.09 P7～P8 1.09 P8～P9 1.72 P9～P10 2.0 P10～P11 2.0	P1～P4 6.81 P7～P8 6.81	P5～P6 1.62 P6～P7 1.97 P11～P12 1.97 P12～P1 1.62	P5～P7 3.59 P11～P1 3.59	24.45 (P1、P2、P10、P11 7.18) (P2、P3、P9、P10 7.18) (P3、P4、P8、P9 6.17) (P4、P5、P7、P8 3.91)	P1(82×44－22)柱痕17cm P2(35×29－50)柱痕15cm P3(37×32－13) P4(47×41－29)柱痕16cm P5(52×43－29)柱痕30cm P6(28×26－12) P7(60×48－18) P8(50×42－12) P9(54×45－13) P10(50×44－15) P11(75×65－19) P12(92×58－27)柱痕37cm	2間×3間半 南北棟 N－14－W
SH1405	P1～P2 2.12 P2～P3 2.5 P3～P4 2.56 P6～P7 2.56 P7～P8 2.5 P8～P9 2.12	P1～P4 7.18 P6～P9 7.18	P4～P5 1.90 P5～P6 1.50 P9～P10 1.50 P10～P1 1.90	P4～P6 3.40 P9～P1 3.40	24.41 (P1、P2、P8、P9 7.20) (P2、P3、P7、P8 8.50) (P3、P4、P6、P7 8.71)	P1(71×45－33)柱痕18cm P2(38×28－25) P3(30×28－12) P4(38×37－30) P5(27×24－10) P6(38×36－37)柱痕12cm P7(80×55－14)柱痕18cm P8(38×37－23) P9(30×28－46)柱痕18cm P10(33×27－22)柱痕18cm	2間×3間 東西棟 N－89－W
SH1406	P6～P7 1.16 P7～P1 1.54	P3～P4 2.70 P6～P1 2.70	P1～P2 1.38 P2～P3 1.35 P4～P5 1.35 P5～P1 1.38	P1～P3 2.73 P4～P1 2.73	4.73 (P1、P2、P5、P6 3.24) (P2、P3、P4、P5 4.19)	P1(40×37－23) P2(58×33－30)柱痕14cm P3(30×27－18) P4(33×27－29) P5(55×42－24)柱痕30cm P6(52×36－23) P7(33×32－20)	2間×2間か 南北棟 N－3－W
SH1407	P2～P3 2.3 P3～P4 2.5 P5～P6 2.5 P6～P1 2.3	P2～P4 4.8 P5～P1 4.8		P1～P2 2.35 P4～P5 2.35	11.28 (P2、P3、P6、P1 5.41) (P3、P4、P5、P6 5.87)	P1(48×44－27)柱痕20cm P2(62×53－23) P3(48×82－37) P4(90×68－35) P5(82×53－41)柱痕17～25cm P6(103×77－42)	1間×2間 東西棟 N－72－E
SH1408		P1～P2 2.75 P3～P4 2.75		P2～P3 2.18 P4～P1 2.18	6.00	P1(48×41－22)柱痕26cm P2(33×33－22)柱痕22cm P3(41×47－37)柱痕17cm P4(36×38－19)柱痕26cm	1間×1間 東西棟 N－82－W
SH1501	P1～P2 1.5 P2～P3 2.83 P5～P6 2.83 P6～P7 1.5	P1～P3 4.33 P5～P7 4.33	P3～P4 1.3 P4～P5 1.3 P7～P8 1.3 P8～P1 1.3	P3～P5 2.6 P7～P1 2.6	11.26 (P1、P2、P6、P7 3.9) (P2、P3、P5、P6 7.36)	P1(50×33－13)柱痕33cm P2(43×35－10) P3(62×40－18) P4(53×46－44)柱痕15cm P5(85×78－43)柱痕16cm P6(60×50－23)柱痕12cm P7(79×60－15)柱痕14cm P8(51×49－24)柱痕22cm	2間×3間か 東西棟 N－75－E
SH1502	P1～P2 1.67 P2～P3 1.62	P1～P3 3.32				P1(62×56－53)柱痕27cm P2(86×52－50)柱痕45と35cm P3(52×35－45)	東西棟 N－70－E

第5節　井　　戸

SX101（第17図　図版18）

規　　模　調査区の東側1区K－7グリッドに位置する。やや楕円に近い土坑状の遺構で長径1.68m、短径1.47mである。掘り口付近の傾斜は緩やかであるが、その下は急になり深さは78cmである。底は平底で長径0.7m、短径0.5m程である。図版18でもわかるように拳大の50個程の小礫が掘り口付近に沿って見られ、また一部は側壁や底にかけてもみられる。形態的には井戸底である可能性が強い。

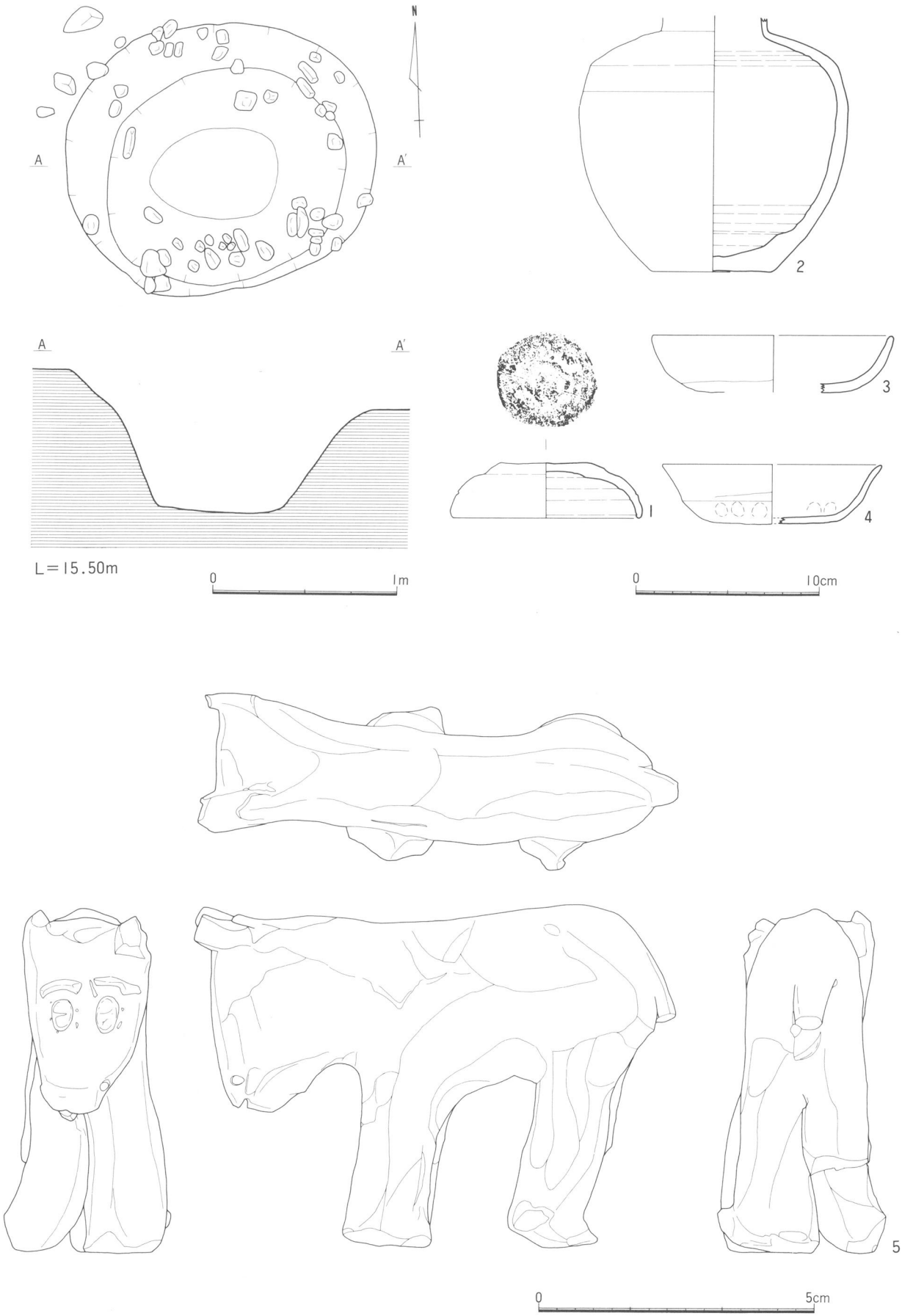
出土遺物　出土遺物は須恵器と土師器があり、他に須恵質の牛形土製品がみられる。

須恵器は坏蓋・高坏頸部・短頸壺・甕などに分かれるが、そのうち実測できたものは坏身と短頸壺である。第17図1は坏蓋である。口径10.4cm、器高3.0cmと、器高が低くやや偏平である。稜はなく天井上は平坦であるがヘラ切りは未調整であり、ヘラで1本底部中央に直線を引いている。胎土は生焼である。型式より7世紀後半とみられる。なお他に図示できなかったがこれと同じつくりの坏蓋で天井部のヘラ削りを行っているものが1点、また小型で受け部と立ち上がりの高さがほぼ同じ偏平な坏身破片が1点含まれていた。

短　頸　壺　2は短頸壺の体部である。口縁部が欠けているが約1/2残存する胴部の最大径は14.6cm胴部の高さは13.1cmである。底部には高台がなく径6.4cmの平底で回転ヘラ削りが胴部の2/3にかけて施される。肩部の張りは頸部のすぐ下で高い。器壁は4mm程で底部にかけて厚くなる。古墳時代の短頸壺とは異なる金属器をまねた形を持ちながら底部には糸切りの跡がわずかに残る事から奈良時代後半と考えられる。

土師器は坏・甕・甑の把手の破片が含まれていたが図示できたのは第17図3・4の土師器の坏である。3は器形の1/4が残存しており、口径13.2cm、器高3.05cmである。底部は平で広く、口縁部は直線的に上に延びている。外面には丹塗りの跡がみられる。また底部と体部の境に明瞭な接合痕がみられるため底部を作った後、体部の粘土を貼り合わせている事がわかる。奈良時代の中頃とみられる。4は残存は1/6程である。口径12.0cm、器高3.2cmで底部は平底である。体部はやや外反し、直立気味にのびた後、口唇部付近が少し外反する。体部には斜めに粘土ひもの巻き上げの跡がみられる。器壁は底部・口縁部とも厚さ2～3mmと極く薄手である。内外面ともに丹塗りの跡がみられる。形は奈良・平安時代のものであるが、平安時代の坏に比べると著しく薄手である事からより古い要素を持つと考えられる。

牛形土製品　第17図5はこれらの遺物に伴って検出された須恵質の牛形土製品（口絵・図版25－1）である。両角の一部と右後脚の約1/2尻尾の付け根より先が欠損しているが、他の部分は完全に残っている。残存している角部分から尻尾の部分までの全長は約8.7cm、また高さは最も高い尻の部分で6.1cmである。顔は平面的である。頭部は三角形で最大幅は約2.5cmであり胴部になると幅2cmとやや狭くなり、尻部分で再び少し大きくなる。二等辺三角形の隅を丸めたような顔をしており、長さは3.7cmである。　径0.5cm程の円形の内側に内湾した2本の角は頭部を切開し、粘土棒を押し込んで作ったと考えられる。また目、鼻、口、眉毛はいずれも幅2mm程の同じ棒状の工具で描かれたとみられる。この素朴な製作技法が非常に愛らしい表情を生み出す要因となっている。眉毛は横の沈線で表現されており左から右へと描いている。両眼は1～1.5mm程度の窪みで内部は特に整形されていない。目の周囲には微小孔が数ヶ所みられる。鼻は左右に2ヶ所あけられているが右から左へ棒状工具で貫



第17図　井戸状土坑SX101遺構実測図・出土遺物

通させている。この事は作者が左利きであることを示している可能性を持つ。口は下向きに沈線で描かれる。顎は両側から指頭で下方に向けてつまんでいるため垂れているようにも見える。４本の足はほぼ幅1.2～1.5cmと同じ大きさで脚部は胴部に別の粘土棒を貼り付けたものとみられる。頭部から胴部にかけての調整はほとんど指によるナデと思われるが、左後脚の外側にはヘラ削りの痕が残る。以上のように角を持つこと、顔が大きいこと、また首が太く短いこと馬形にみられるたてがみや鞍の表現がない事などの形態的な理由から、この土製品は牛であると考えている。また年代的には伴出した須恵器の短頸壺や土師器の坏に伴う奈良時代と考えている。

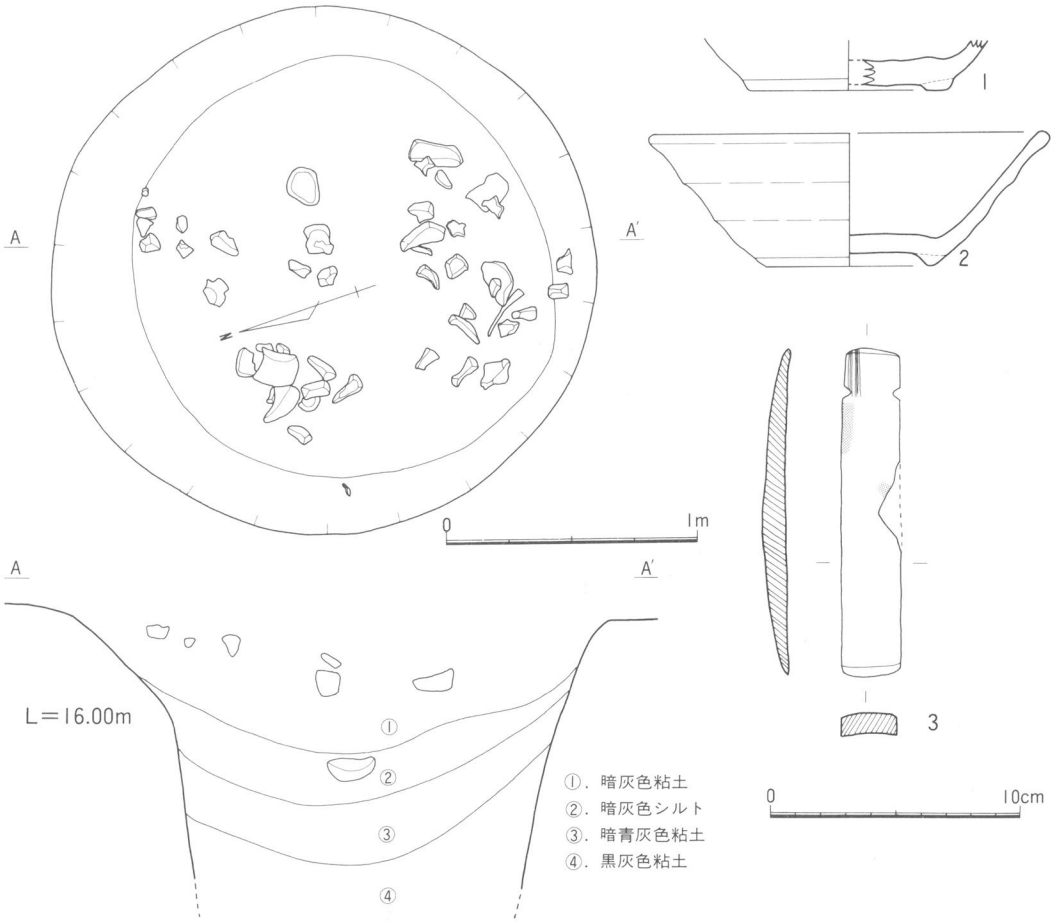
SE1401（第18図）

14区Ｊ－28グリッドに位置する。直径２ｍのほぼ円形の井戸である。

覆土は上層に暗灰色粘土、その下に暗青灰色粘土の堆積がみられた。暗灰色粘土は40cmほどの厚さで堆積し、山茶碗・灰釉陶器・須恵器片・土師器片が検出されている。下層の暗青灰色粘土には遺物は認められないが小礫が多量に混入し腐蝕した植物・葉などが含まれている。約１ｍまで掘り下げたが、礫が著しく、壁の崩壊がはなはだしいため途中で放棄した。下層はまだ続いている。

山茶碗　１・２は上層の暗灰色粘土より出土した山茶碗である。２は約1/4の破片で復元実測ではあるが口径16.0cm、高さ5.3cmを測る。底部は糸切り未調整で三角形の高台を貼り付ける。

胎土は砂粒が多く、白色粒子も認められる。全体に荒いナデで調整され口縁端部は丸く膨らませている。これらの資料は井戸が廃棄され埋没した下限の時期を示すといえる。検出面、覆土の状況等より井戸の年代を平安時代後期～中世として大きな誤りはあるまい。



第18図　井戸　SE1401遺構実測図・出土遺物

第6節　土　　坑

SF1401（第19図　図版18）

14区H～F－35グリッドに位置する。長径1.56m、短径1.16m、深さ0.6m程の四隅が丸みを帯びた方形に近い平面形である。覆土の黒灰色粘土には炭化物や土師器片が多量に含まれている。特に底部隅には長径42cm、短径30cm、厚さ20cm程の焼土塊があった。焼土塊の下部も含め外周部分から底部まで灰白色の粘土を貼り付けている部分もみられた。　**規　　模**

出土遺物は須恵器・灰釉陶器・土師器である。須恵器には奈良時代の坏蓋・坏身を主とし壺・甕等が混じっていたが、いずれも小破片である。灰釉陶器は口縁部小破片が1点含まれている。内面だけを施釉し、口縁端部をつまみ出している。隣接のＳＦ1402出土の碗と類似したものとみられ、K-90段階まで下がる可能性を持つ。ＳＦ1401は須恵器の内容からみれば奈良時代であるが、K-90段階まで下がる可能性を持つ。　**出土遺跡**

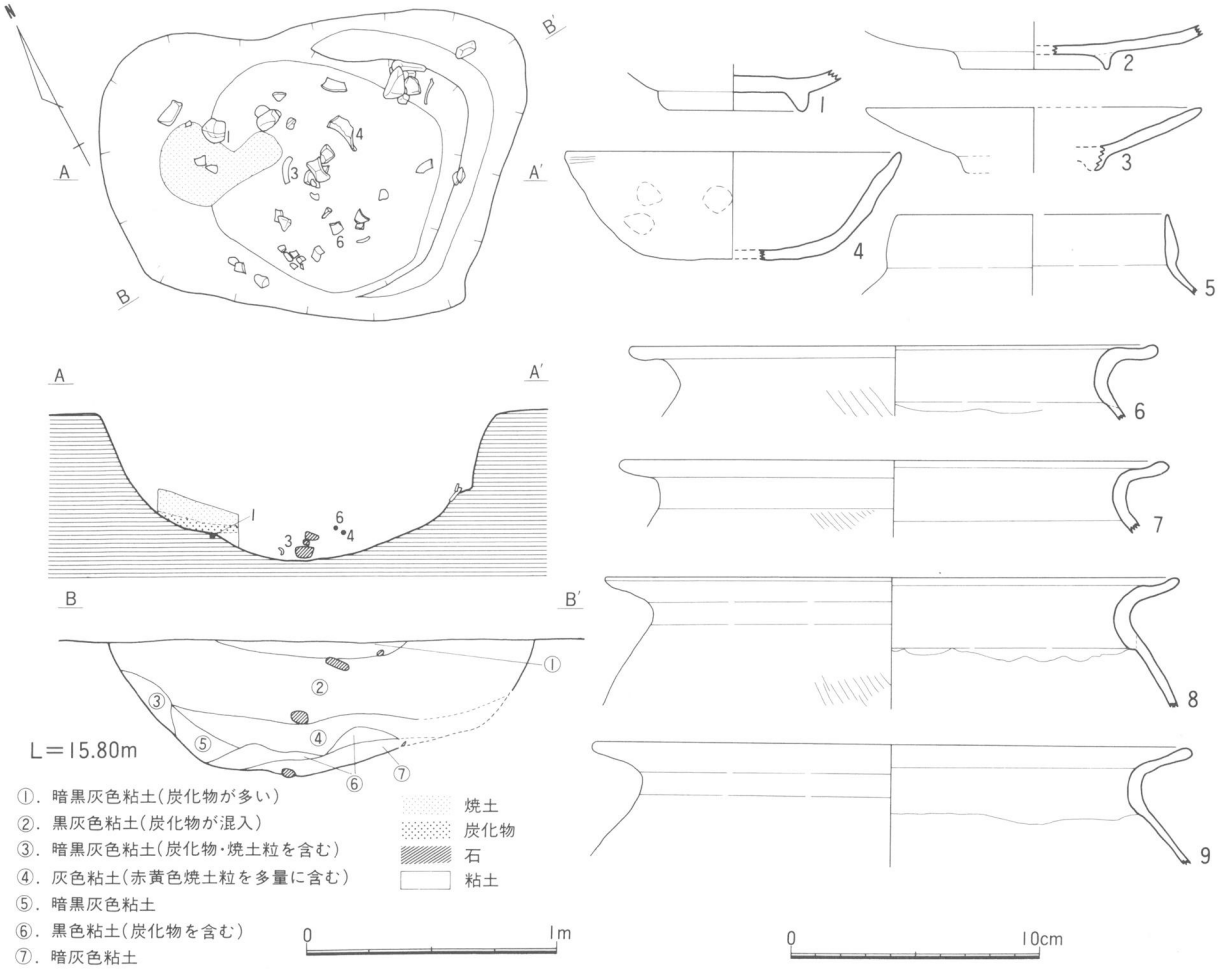
第19図1～9はいずれも土師器である。1は模倣の碗または皿の小破片である。2・3は模倣の皿の小破片である。2は特に器壁が薄手である。4は坏の小破片で口径13.2cm、器高4.3cmである。底部は平底で、立ち上がりは緩やかで端部をそのまま丸めている。5は短頸壺の口縁部である。ごく小破片であるが器壁が薄手である事を示すため無理して図化した。6～9は壺の口縁部小破片である。いずれも口縁部が「コ」の字型を呈し、端部をそのまま丸めている。端部を丸めるときに内側を強くナデているためくぼみができる。また口縁部と体部の器壁には接合痕が残る。ＳＸ302などO-53段階の遺構から出土している甕と比べれば、ＳＦ1401ではいずれも口縁部の引き出しが長く1.5cm以上あり、また口縁部内側のナデが丁寧、体部との接合痕がＳＸ302程ではないことなどがわかる。

SF1402（第20図　図版18）

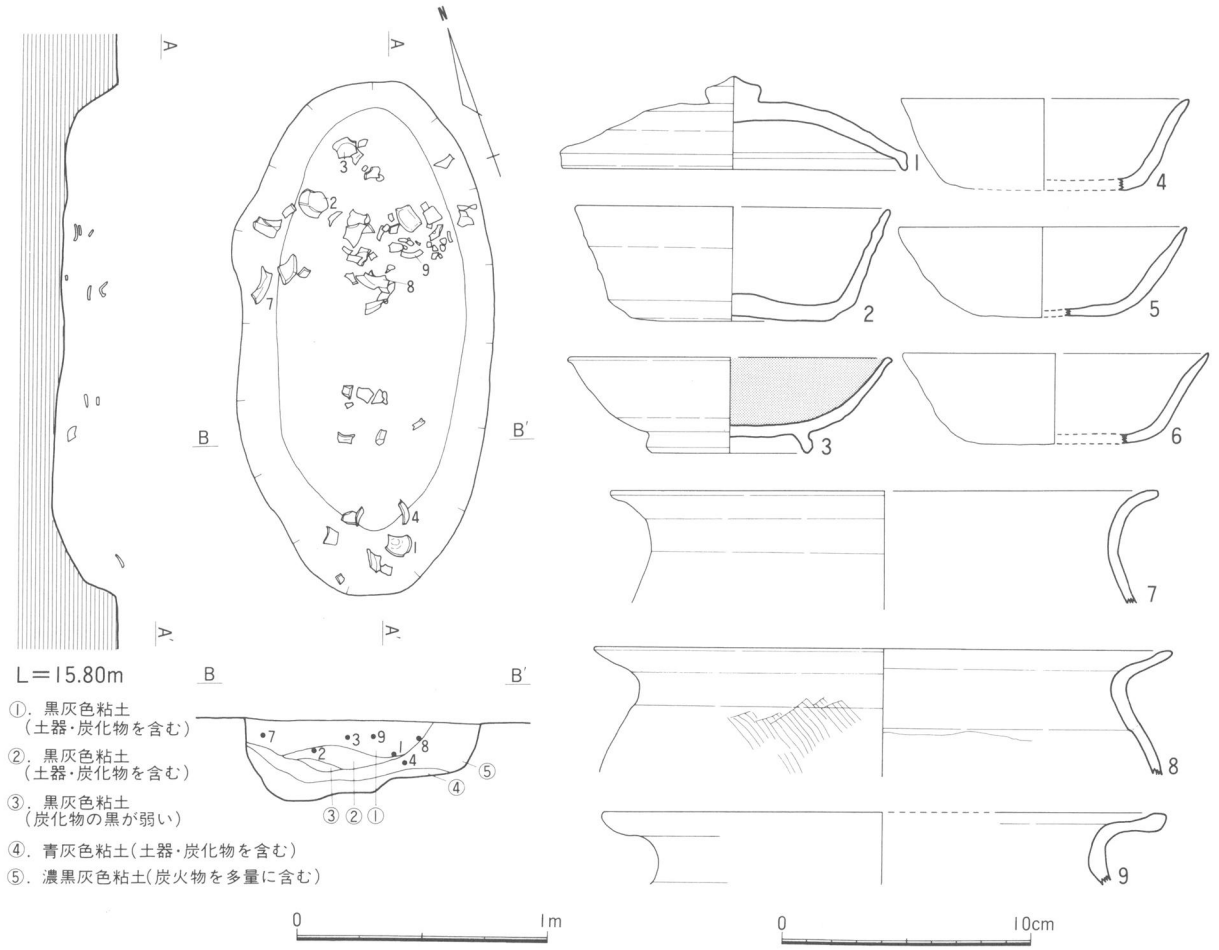
14区H－31グリッドに位置する。ＳＦ1401のすぐ北側にあり、長軸は南北方向である。長径2.05m、短径1.0m、深さ0.25mの楕円形である。覆土は上部から黒灰色粘土・青灰色粘土と炭化物の混入が強まり、特に壁面となる下層の濃黒灰色粘土には炭化物が多量に含まれていた。　**規　　模**

出土遺物は須恵器・灰釉陶器・土師器である。第20図1・2は須恵器である。1は約2/3残存している。口径13.5cm、器高3.8cmで、径2.2cm、高さ1.0cmの擬宝珠形のつまみの付く坏蓋である。回転ヘラ削り調整の外周端から口端部に外反しつつ移行する。口端部は明瞭に屈曲させ横ナデ調整を施した後、さらにもう一度屈曲下半部をナデているため、外面に一巡する浅いくぼみができている。内面は硯に転用されよく研磨されており、口縁部内側付近には墨の付着がある。2は坏身で約2/3残存している。口径12.5cm、底径8.0cm、器高4.5cmである。底部は平底で丁寧にナデてあり底部から体部への変わり目がわずかに段をなす。体部は直線的に開きながら立ち上がり、口縁端部を丸めている。器壁は磨滅しているが内外面とも丁寧にナデられていたとみられる。1・2の出土位置土坑内の両端であるが両者は土層断面図の位置でもほぼ同じレベルでありセットになるものとみられる。また2の坏身の上に1の坏蓋を逆にしてのせ手で押さえれば両者は安定し転用硯としての使用が可能である。いずれも湖西古窯跡群東笠子編年の第Ⅵ期に位置付けられ、8世紀後半第2半紀に位置付けられる。長頸壺の口縁部破片が含まれていた。　**山土遺跡**

3は灰釉陶器の碗で約1/3残存している。色調は灰白色で口径12.9cm、底径6.2cm、器高3.8cmである。底部は回転ヘラ削りである。高台は（B）の三日月高台で、ヘラで成形した



第19図　土坑　SF1401遺構実測図・出土遺物



第20図　土坑　SF1402遺構実測図・出土遺物

後ナデている体部下半にヘラ削りが2回転施される。立ち上がりは緩やかで、口縁部は水平に引き出し軽く丸めている。体部下半から内面にかけて丁寧にナデられた後、内面のみ全面的に施釉している。K-90段階のものである。灰釉陶器にはこの他外面を丁寧に施釉した壺体部小破片も含まれている。出土レベルは土層断面図の①層の3の位置であることから後に混入した可能性もある。

4～9は土師器である。4～6はいずれも坏の口縁部の小破片で形を示すため無理に図化してある。いずれも底部は平底で、口縁端部はそのままつまんでいる。器壁は薄手である。7～9は口縁部小破片である。7は口径21.8cmで口縁部は上下に大きく開いた「コ」の字型である。器壁は薄い。8は「コ」の字型に開いた口縁部である。体部との接合痕をナデているが跡は残る。器壁は薄い。9は「コ」の字型の口縁部であるが器壁は厚く、体部との接合痕はそのままである。 **土師器**

SF302（第21図）

長径1.4m、短径1.2mほどの浅い皿状の土坑で検出面で深さ10cmを測る。覆土中より灰釉陶器などが出土している。いずれも破片で図化できたもの4点を示した。1は小碗または皿の高台部分のみ1/4程度の破片である。三角形の付け高台である。2も碗の高台部分のみの破片である。高台端部外面が押さえられ一見爪形高台の様相を示す。この一群の中では古い要素を持っているといえる。3も高台部分のみの破片で三角高台のはりつけである。 **規模** **出土遺物**

4は耳皿で、土師質灰釉陶器の模倣と考えられる。粗雑なつくりで整形の指頭痕らしきものが残る。

他に遺物も見られないことから、ＳＦ302は平安時代中期～後期の所産と考えられよう。

SF415（第21図）

Ｈ－11グリッドにあり、長径1.49m、短径1.38mの不定形をした楕円形で深さは検出面で約30cm程度である。溝ＳＤ304を壊してつくられており、これより新しいことがわかる。遺物は小破片のみであるが、灰釉陶器の碗らしきものが含まれている。

SF1403（第21図　図版19）

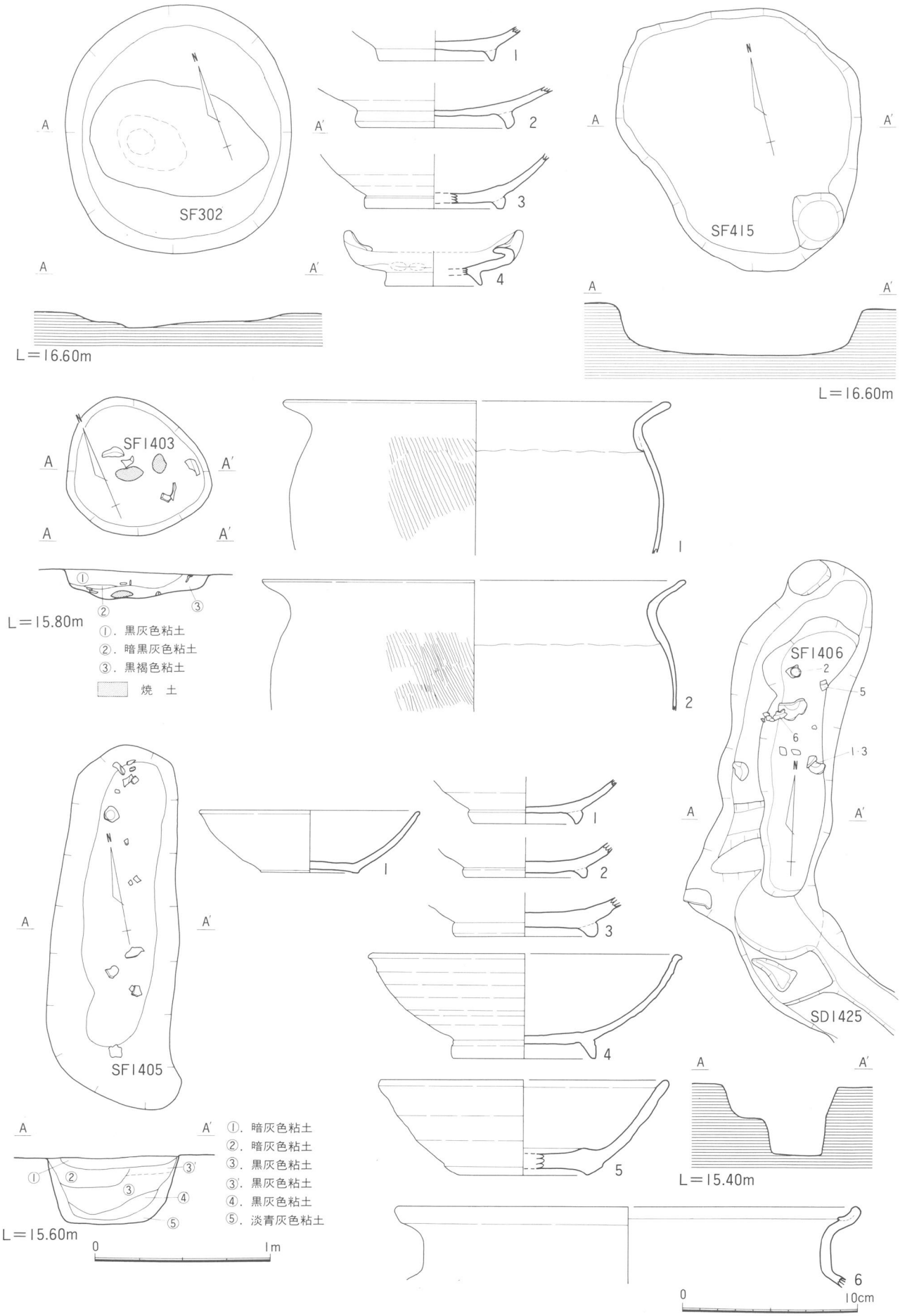
14区Ｉ－31グリッドに位置する。長径0.85m、短径0.75mの楕円形を呈する。深さ20cmを測る。覆土の下部に焼土ブロックが認められる。赤黄色を呈し、強い火を受けたものではないかと推定される。覆土中より土師器・須恵器の破片が出土している。甕の破片が2個体分あり、かろうじて図化することができた。いずれも口縁部のみの破片で径も推定の部分が多いが口径25cm程度とほぼ同様の大きさであろう。薄手で口縁部は大きく外側に開く。 **規模**

胴部外面は斜行のハケ目調整が施されている。

SF1405（第21図）

Ｊ－32グリッドに位置する。長さ2.1m、幅75cmの長楕円形を呈する。深さは検出面で38cmを測る。覆土は黒灰色ないし暗灰色を呈する粘土で中位に位置する③層で、炭化物が多く認められ、部分的に焼土も混入し土器片の出土量も多い。 **規模**

遺物は土師器片が多く、わずかに須恵器・灰釉陶器の破片が混じる。いずれも小破片で実測に耐えず、図示できるのは1点である。土師質の坏で口径12.5cm、高さ3.5cmを測る。磨滅は著しいが内外面ともナデ調整が施され口縁端部は軽く外方につまみ出されている。底部には糸切り痕を残す。口縁端部のつまみ出しや、丁寧なつくりから灰釉陶器の模倣と考えられる。破片の中には須恵器、甕の破片、中世の甕破片まであり、年代幅はかなりあ **出土遺物**



第21図　土坑遺構実測図・出土遺物　その1　SF302　SF415　SF1403
SF1405　SF1406

ると思われる。

SF1406（第21図）

Ⅰ－33グリッドに位置する。長径2.2m、短径0.61mの長楕円形の土坑である。南側が溝ＳＤ1425に続き両者の区分は不明瞭である。覆土は上層の茶灰色粘土と下層の暗黒色粘土に分かれ、炭化物を多量に含んでいた。 規　　模

1は灰釉の碗で底部のみの破片である。三角形の貼り付け高台で糸切り痕を残す。2は土師質の碗で三角形の貼り付け高台で灰釉を模倣したものである。3は灰釉の碗の底部のみの破片である。角高台が崩れた形態の貼り付け高台で、内底に沈線2本が巡らされ灰釉が施されている。4は灰釉陶器の碗で口径17.7cm、高さ5.9cmを測る。三日月形の貼り付け高台で底部は糸切り痕を丁寧にナデ消している。口縁端部内面に浅い沈線が一条巡らされている。内定部には重ね焼きの痕跡が認められる。5は山茶碗で口径15.9cm、器高5.4cmを測る。口縁部をわずかに外反させ、全面ナデ整形している。遺物より遺構の時期としては平安時代後期から中世の幅が与えられる。 出土遺物

SF1407（第22図）

土坑の番号がついてはいるが2つの柱穴の重なりである。前後関係を明確にすることはできない。周囲の柱穴群と同時期と考えられ、掘立柱建物群に年代を与えうる資料としてとりあげる。遺物としては須恵器・土師器の破片が検出されている。唯一図化できるのが1で長頸壺の蓋である。口径7.2cm、最大径9.5cm、高さ3.4cmを測るもので乳頭状のつまみが付せられている。1/4あまりの破片であり、もとよりこれで柱穴群の年代決定とするものではないが、ある一点を付す資料にはなろう。 規　　模　出土遺物

SF1411（第22図）

Ⅰ－32グリッドに位置する。長径1.2m、短径0.56mの楕円形で検出面で深さ25cmあまりを測る。北側の隅が部分的に落ち込んでおり深さ30cmである。遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器の小破片で図示できるものはない。須恵器は坏蓋の破片で奈良時代に位置づけられよう。また灰釉陶器はＯ－53段階に位置付けられるものであろう。 規　　模

SF1413（第22図）

Ⅰ－32グリッドに位置する。長さ1.2m、幅0.48mの長方形である。深さは40cmである。遺物は須恵器・灰釉陶器の破片であるが、図示できるほどのものは認められない。

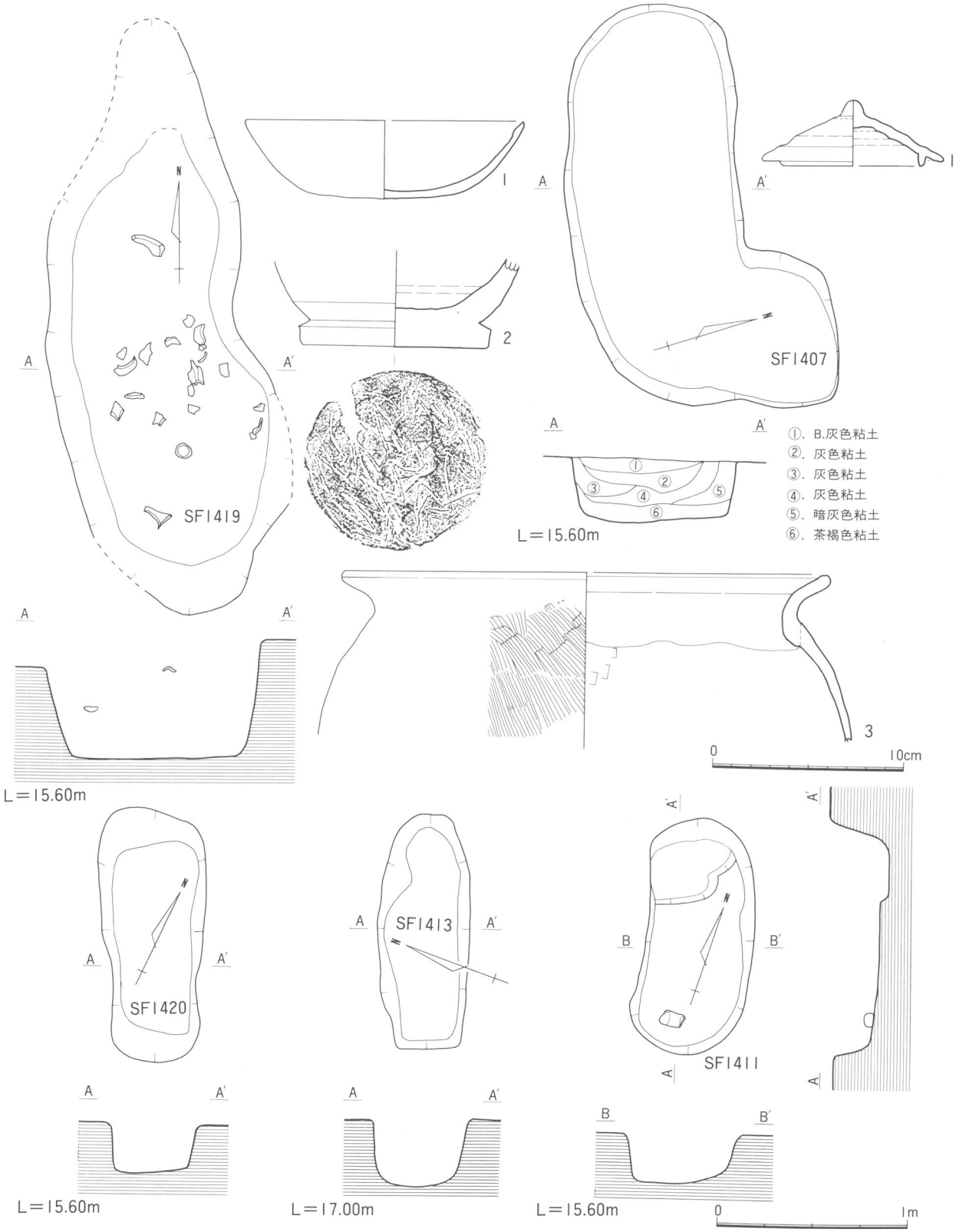
SF1419（第22図）

Ｊ－31グリッドに位置する。溝ＳＤ1426・ＳＤ1430・ＳＤ1434と切り合い関係がありその形状認定はむずかしい。下部の残存状況より長径3.1m、幅1.15mの変形した楕円形を想定する。深さ約60cmを測る。 規　　模　平安時代

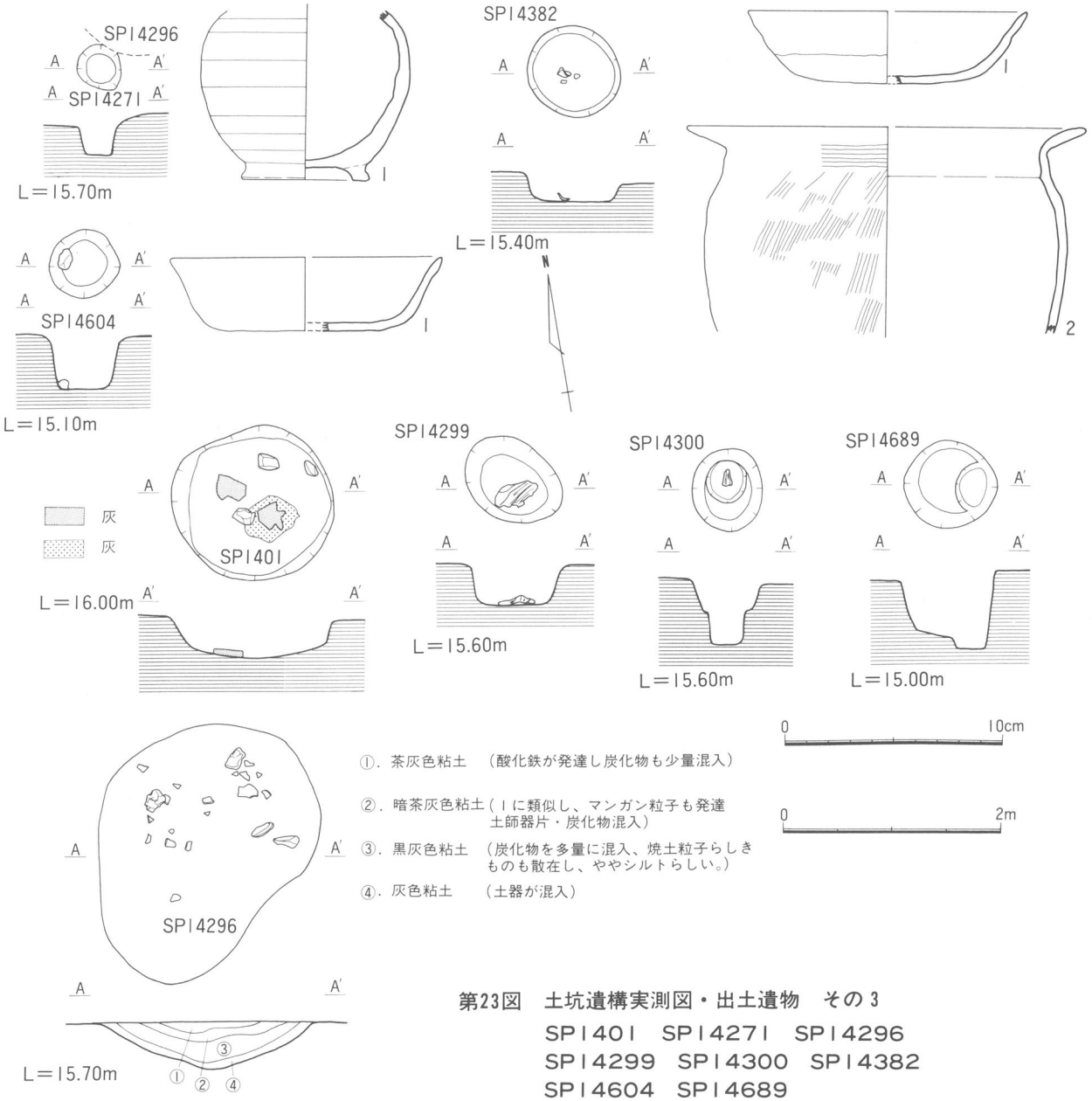
遺物は須恵器・土師器破片・灰釉陶器破片が検出されている。1は土師器破片で口径14.4cm器高4.1cmを測る。火を受けて焼けており内外面とも炭化し黒色に変化しており調整等の観察は不可能である。2は須恵器鉢の底部で、底面にヘラ様の工具による鋸歯状の文様が刻み込まれている。3は甕口縁部破片で推定径25cmであるが小破片であり疑問である。口縁部は大きく外に開き端部をわずかにつまみ上げている。口縁部はヨコナデ、胴部はハケ目調整が施されている。切り合っている溝ＳＤ1426は古墳時代のものであり須恵器・土師器はこれからの混入が考えられＳＦ1419そのものは平安時代と考えたい。 出土遺物　平安時代

SF1420（第22図）

Ｊ－31グリッドに位置する。長さ1.3m、幅0.55m、深さ25cmを測る長方形の土坑である。



第22図　土坑遺構実測図・出土遺物　その2　SF1407　SF1411　SF1413　SF1419　SF1420



第23図　土坑遺構実測図・出土遺物　その3
SP1401　SP14271　SP14296
SP14299　SP14300　SP14382
SP14604　SP14689

SP14271（第23図）

14区Ｉ－31グリッドに位置する。建物の一部を構成する柱穴であろう。径20cm、深さ20cmあまりを測る。埋土中より小型壺の破片が検出されている。胴部最大径9.5cmを測るもので平底に高台が貼り付けられている。全体にナデ調整が施されている。

SP14382（第23図）

Ｉ－33グリッドに位置する。径40～43cm、深さ12cmを測るもので比較的浅いが建物の一部を構成する柱穴であろう。土師器・須恵器の破片が検出されている。1は土師器の坏で口径12.8cm、高さ3.3cmを測る。平底で口縁はまっすぐにのび端部をわずかに引き出している。表面は磨耗が著しく、細部は観察不能である。2は甕で口縁部を大きく外側に開き口径18.3cmを測る。ハケ目調整が施されているが磨耗が著しく観察不能である。

SP14604（第23図）

Ｊ－34グリッドに位置する。これも建物を構成する柱穴の一つであろう。中より土師質の坏が検出されている。

SP1401（第23図　図版19）

Ｉ－28グリッドで検出された直径70cmあまりのほぼ円形を呈する土坑である。検出面での深さ18cmを測る。中より小礫の外にブロック状の灰が検出されている。山茶碗と思われる小破片が検出されている。

SP14299（第23図　図版19）

Ｉ－32グリッドに位置する。長径48cm、短径35cmの楕円形で、現状で深さ17cmを測る。柱の痕跡と思われる木片が底部で検出されている。建物を構成する柱穴であろう。土師器の小破片のみで時期を明確にするような遺物はない。

SP14300（第23図　図版19）

Ｉ－32グリッドで検出されている。径35cmあまり、深さ30cmを測る。柱の痕跡と思われる木片が検出されており、建物を構成する柱穴であろう。土師器・須恵器の小破片が検出されているのみである。

SP14689（第23図）

Ｊ－35グリッドに位置する。建物を構成する柱穴と思われる。土師器片（灰釉模倣の小皿か？）がわずかに検出されている。

SP14296（第23図　図版19）

Ｉ－31グリッドで検出されている。長径125cm、短径90cmの不整形の楕円形で、深さ22cmの皿状を呈する。埋土の下層は灰色粘土で土師器・須恵器の小破片が混入している。中層は黒灰色の粘土で、炭化物が多量に混入している。

第７節　溝

SD406（第24図　図版20）

４区Ｉ－11グリッドに位置する。平安時代の柱穴群が検出された面の下を掘り下げたところ、始め幅0.95ｍ、深さ0.15～0.20ｍ程の黄褐色の砂の堆積する浅い溝が見られ、さらにその下層から検出された溝である。南北方向の溝で、検出した長さは11ｍ程である。西側の南半分は調査区外であるが北側部分は幅2.4ｍ、深さ0.25～0.30ｍ程である。第24図はこの溝の北壁の土層断面である。実線（Ａ）のように当初ＳＤ406は幅3.7ｍ、深さ0.65ｍの溝で両岸部分が浅く中央部分がそれより一段低くなる掘り方をしている。遺物は大量の拳大から人頭大の礫が底部全体に散布する中に須恵器・土師器・土錘が散在していた。埋土中にシルトや砂が混じる事や礫が多いことは、かつてこの溝が清流であった事を示している。またこの溝は実線（Ｂ）のように一度埋められた後、再び浅い溝として掘られている。この流れが当初柱穴群を掘り下げて検出されたものである。砂が堆積している事はきれいな流れであった事を示している。壁面に見える柱穴は暗褐色シルト質粘土層から掘り込まれたものが大部分である。

規　　模

第24図の断面図中の１～７まではこの溝の底部分に検出された遺物の出土レベルを断面図に示したものである。これによれば１～７まではＳＤ406の下層から出土しているとみなされるので、前述のＳＤ406が流されていたか、または埋没する始めの段階の遺物とみてよい。この１～７までをＳＤ406の下層遺物とする。またそれ以上で一括して取り上げた遺物を上層遺物として分けて扱う。

遺物の出土状況

第24図１～７は下層の遺物である。１～５は須恵器でありその中で１～４は坏で５は高坏である。坏１～３は有蓋の坏身である。１は体部の1/5が残存している。口径13.1㎝、器高4.3㎝である。底部は一部しか残存していないが中央への盛り上がりが見られることから、弓張状ではないかと推定している。底部から口縁部にかけては緩やかに屈曲しており端部は丸めている。体部内面はていねいにナデているが、外面はノタ目が荒く残る。２は器形の1/2が残存しており、口径14.2㎝、器高4.5㎝である。底部は平底で底部から口縁部に丸みをもたせながら緩やかに移行する。底部は回転ヘラ削り調整であり、高台を接着させた後、強く水平に引き出しながらナデている部分が見られる。底部内面にはろくろの切り離しの跡が残る。口縁は少し外傾させ端部を丸めている。３は底部のみであるが平底で底径10.1㎝あり１・２よりやや大きい。４は体部1/5の破片である。傾きより無蓋の坏で口径16.2㎝である。口縁端部を水平に引き出し丸めているため灰釉陶器の体部ではないかと検討したが、体部内外面にノタ目が荒く残る事、１区包含層（第33図３）にも同様な端部を引き出した坏身が出ている事から須恵器と見なした。以上の１～４の須恵器は湖西古窯跡群東笠子編年によれば第Ｖ期の範囲に収まり、実年代は８世紀前半と考えられている。５は高坏の脚部である。坏部との接合痕で剥離している。内面には棒状工具によるしぼり痕が見られる。

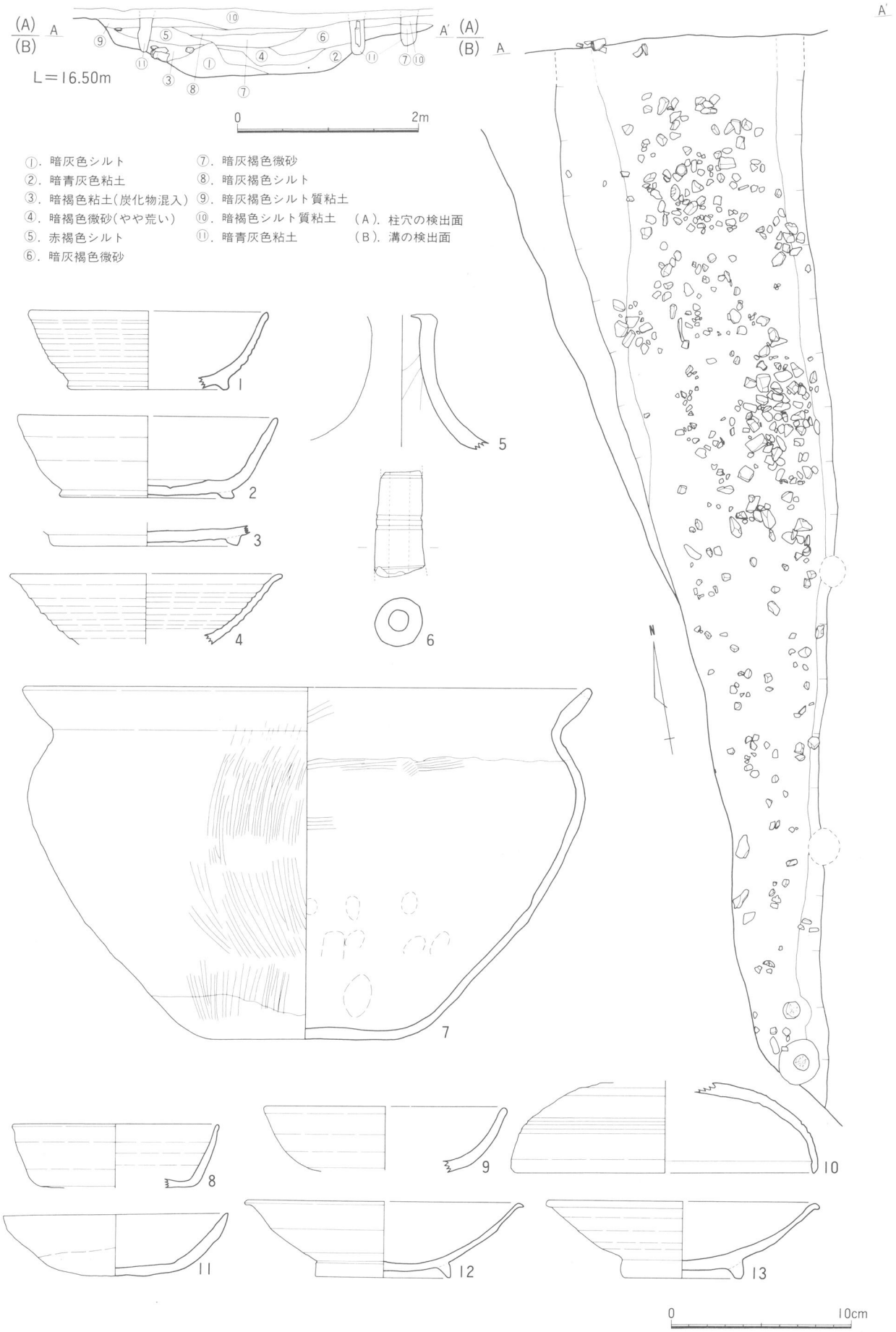
下層の遺物

６は土師質の土錘である。左右とも欠損しているが残存長は5.8㎝である。外径は2.6㎝で、約２㎝幅に二重の沈線がめぐっている。内径0.7㎝の孔が貫通している。

土　　錘

７は甕（鍋？）である。口縁部や胴部の1/2を欠損している。口径31.0㎝、器高19.3㎝で胴部最大径は30.6㎝である。底部は平底であるが、径10.2㎝と狭く、胴部は逆「ハ」の字型に急に開いている。最大径は器高の2/3の高さにあたるため、口縁部のすぐ下に位置するように見える。口縁部は「く」の字状に屈曲し、中頃で肥厚しながらわずかに丸みを帯び

甕（鍋？）



第24図　溝　SD406　遺構実測図・出土遺物

端部を丸めている。胴部最大径よりわずかではあるが口径が大きいものである。器壁は薄く口縁部の肥厚した部分を除けばほぼ均一である。体部内面から外側口縁までナデ調整が施されている。また体部外面は4本/cmの縦方向のハケ目が全面に施されている。以上の遺物からＳＤ406は奈良時代前期に形成されたと考えられる。

上層の遺物

８～13は溝の上層遺物である。８～10は須恵器、11は土師器、12・13は灰釉陶器である。８は有蓋の坏身の小破片である。９は無蓋の坏身の口縁部小破片である。底部は平底で体部はわずかに外傾して立ち上がり端部を強くナデて丸めているため、端部は薄手となる。10は有蓋高坏の蓋である。口径16.5cmと大型でつまみ部分が欠けている。稜に当たる部分は２本の平行沈線が施される。端部は真下方向に丸めている。器形より６世紀代の遺物で混じり込んだものである。11は土師器の坏である。平底で口縁は外反する。内外面とも剝離が激しいため調整は不明であるが体部に巻き上げ痕が残る。

12～13は無釉の灰釉陶器である。12は底部から体部にかけて1/5が残存している。口径15.3cm、器高4.2cmと推定できる。底部は回転ヘラ削りが施されており、高台は強くつまんでナデているため三日月高台である。外傾させた体部は途中でやや内傾させた後、再び端部を強く水平に引き出し丸めているため、体部中段にゆるい稜線ができる。13は2/3が欠損している。底部は回転ヘラ削りを施し、高台は三日月高台で外反させた口縁端部は水平に引き出し丸めている。12～13は灰釉陶器編年折戸53号窯式に平行すると考えられる。以上はＳＤ406の上層の遺物である。８・９は下層の遺物と同時期またはそれより少し新しいものである。図示した以外にも須恵器には坏蓋・坏・大甕等がありその中には古墳時代の遺物も含まれていた。また12・13は灰釉陶器でありこれは上層の柱穴群と同時期の遺物である。従ってＳＤ406の最終的な埋没年代は10～11世紀に置く事ができる。

SD1427（第25図）

規　　模

14区Ｊ～Ｋ－33～34グリッドに位置する。幅1.0m、深さ45cmで、断面の覆土は何段階にも分かれること、さらに遺物を見ると奈良から平安期、最上層の覆土に山茶碗が認められることから長期間溝として機能していた事が考えられる。また蛇行を繰り返している形状から自然流路と判断される。

出 土 遺 物

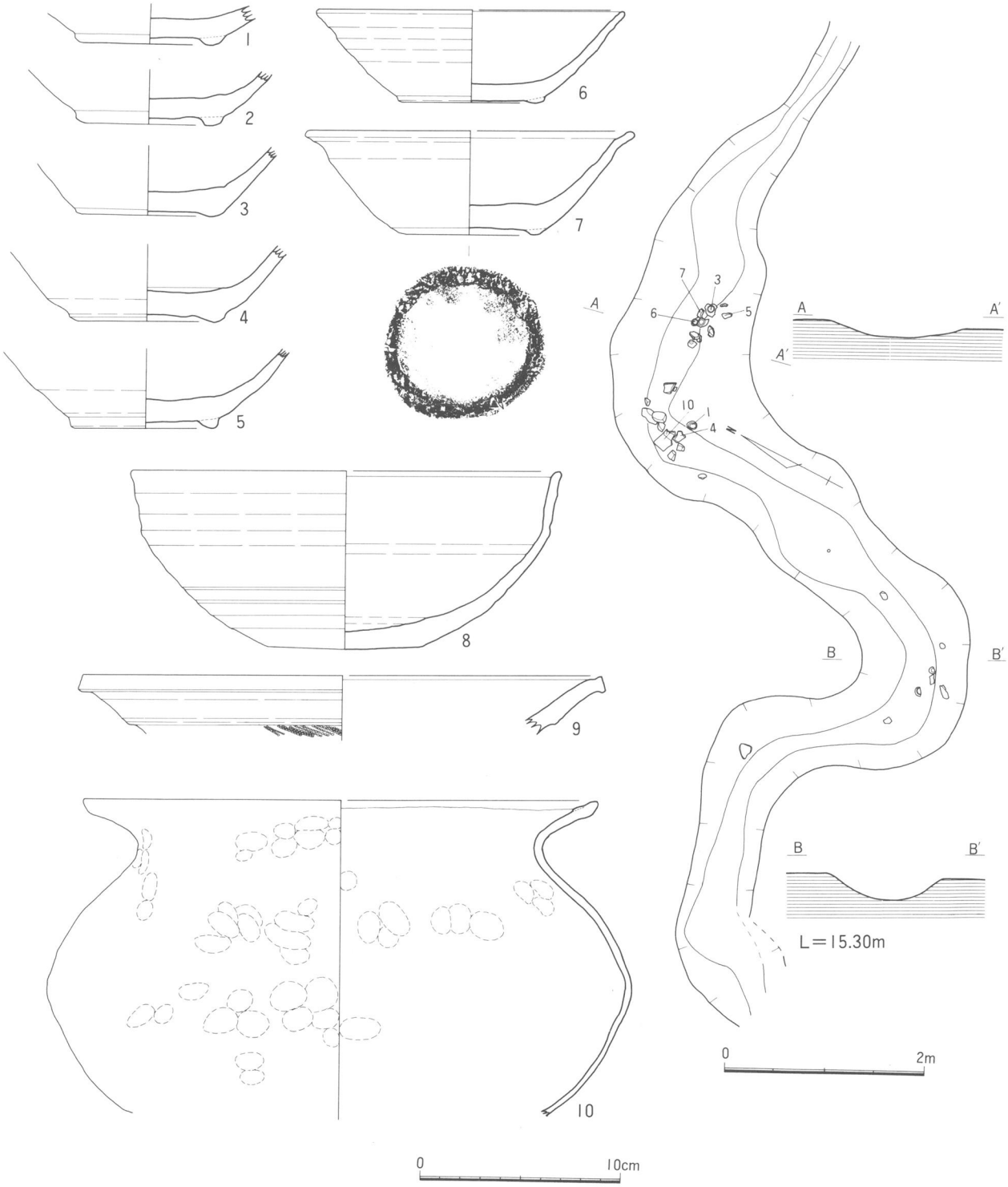
１～７は山茶碗で、うち全形の推定できるものは６・７の２点である。６は口径15.2cm、高さ4.6cm。胎土は荒く高台部分はつぶれている。７は口径16.0cm。荒い横ナデ整形で口縁部を大きく外反させている。高台はつぶれ籾殻痕が残る。胎土も荒い。すべて湖西産と判断される。口縁部のやや下位にくびれ部をもち外反する形態で、13世紀前半から中頃と考えられる。他に伊勢系土鍋が出土しているが、この山茶碗に伴うと考えられる。

SD701・SD822（第１図）

遺跡中央を走る東西方向の２本の平行する溝である。２つの溝は７区・８区・14区の調査で個別に調査されていたため、当初は別々の溝として区別に扱われていたが、全体図の検討の中で平行する２本の溝としての連続性が明らかになった。

北側の溝（ＳＤ701）は幅50～95cm、深さ８～16.3cm程で７区・８区で約79mの長さで検出されている。また南側の溝（ＳＤ822）は幅80cm、深さ11.4cm程で７区・８区で約38.5m、14区で約15m検出されている。双方の溝の幅は約９mである。７区・８区では古墳時代の旧流路ＳＤ816を切る形で検出されており、古墳時代以後のものである。また14区では奈良・平安の遺構面と同一の面で確認されている。後述するように８区ではこの溝の中より円面硯が出土している。奈良・平安時代の遺構との重なりがない事、幅が９mであり規則性を

もつ事、建物跡の棟方向とも一致する事などから、この２つの溝は道路の側溝の可能性が強いと判断した。



第25図　溝　SD1427　遺構実測図・出土遺物

第８節　その他の遺構

その他性格不明の遺構が数多く検出されている。ＳＸ1502・ＳＸ1503は土器集中部分で下部に土坑状のくぼみが認められているが、その関係は不明である。またＳＢ1403は当初住居跡を想定したものであるが、最終的には住居跡と認定するには至らなかった。また多数の不整形の土坑状、柱穴状のものがあるが、その中から遺物の検出できたものを紹介する。

SX1502・SX1503（第26・27図　図版21）

15区北西部分にある遺物集中部分である。平面的には大きく２群に分けることができ調査の過程では西側をＳＸ1502、東側をＳＸ1503としたが、その境界は明確でなく一連のものであるので、報告ではまとめて扱うこととする。東西６ｍ、南北３ｍ程の範囲に、礫および須恵器・土師器・灰釉陶器の破片が散在している。　**規　　模**

ＳＸ1503の下部は3.8ｍ×3.3ｍ程の略方形の浅い土坑となっている。柱穴等が複雑にからんでおり、これらがＳＸ1502・ＳＸ1503と関連するかどうかは疑問である。

遺物はいずれも小破片で図示できるものは少ない。　**出土遺物**

須恵器は８点を示した。１～５は坏の蓋でいずれも宝珠状のつまみを有するものである。１は径15.15cm、高さ3.1cmを測るもので口縁端部を「く」の字状に内側に折り曲げている。６は坏で底部を欠失しているが平底を呈する。ノタ目が顕著である。７は皿、８は短頸壺であるがいずれも破片で全様は知りえない。奈良時代中葉以降に位置付けられるものである。９～13は灰釉陶器である。９は口径13.9cm、高さ4.3cmを測る碗である。内面全面に釉が施されている。10は皿で口径15cm、高さ2.75cmを測る。

13は獣足を持った壺で、脚部分の破片である。ヘラで丁寧に面取りし、ひずめを作り出している。

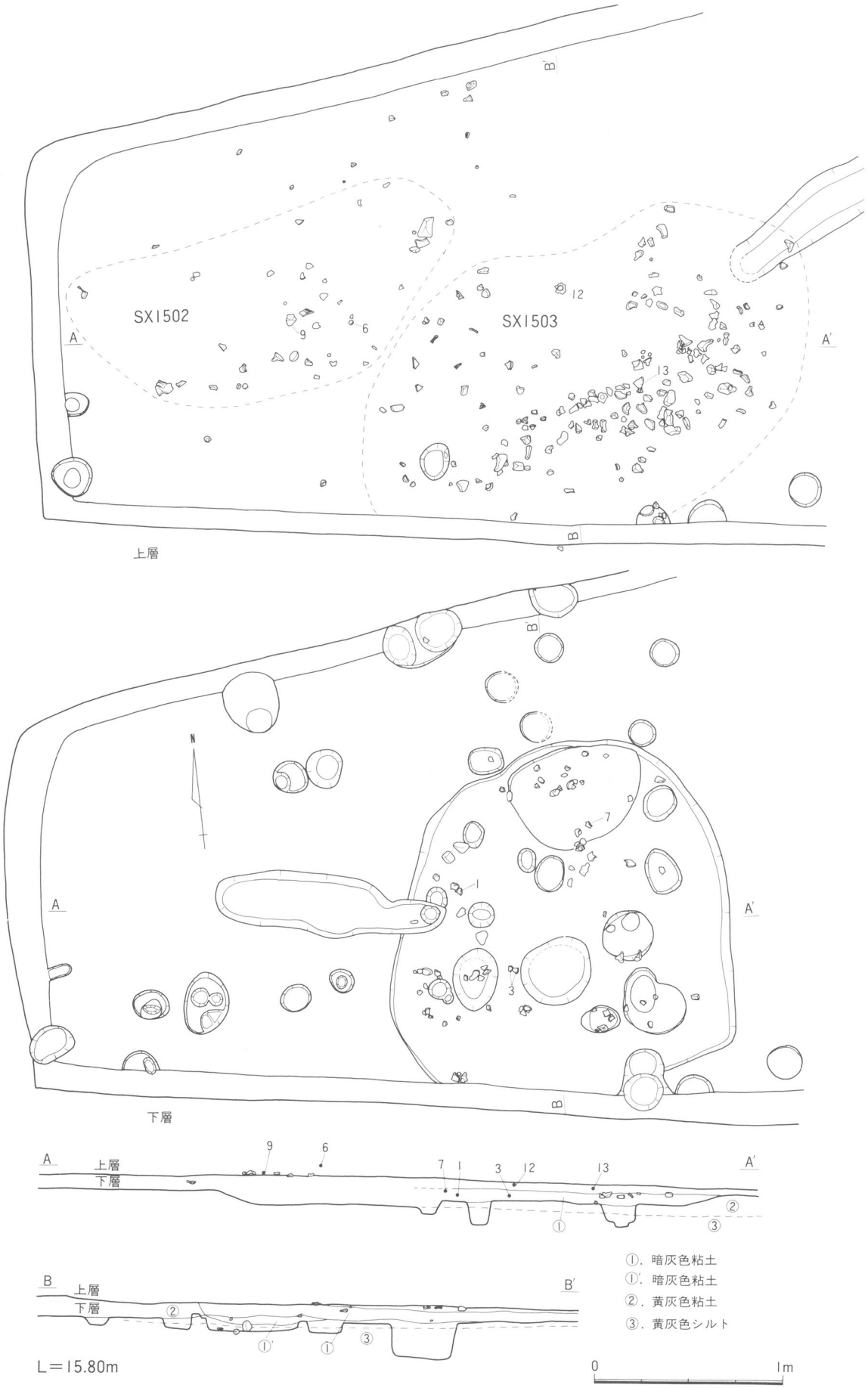
14は土師器甕の口縁部破片である。小破片ではあるが無理して復元すると口径35.4cmとなる。口縁部は大きく外反する。胴部はハケ目調整で、口縁部はナデてある。器壁は薄く、胎土は良好である。

SP463付近（第29図）

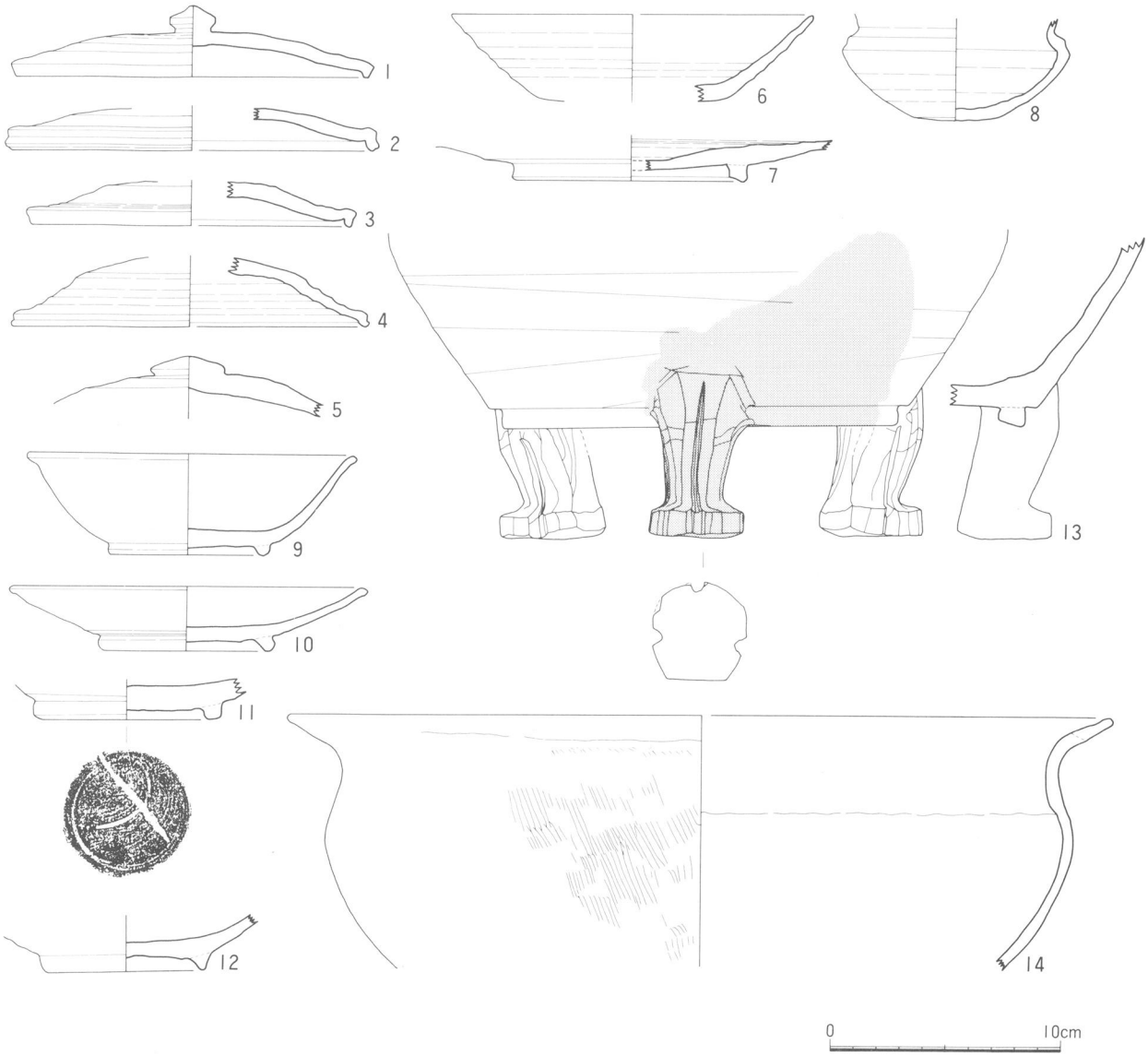
Ｉ－11グリッドに位置する。幅74cm、深さ約10cmの長方形で、現状確認の長さ80cmあまりで、まだ調査区外に延びている。中央部分は円形にくぼんでおり径52cmあまりで1/2を確認している。　**規　　模**

遺物としては灰釉陶器の碗の他土師質の坏の破片及び甕の破片が少量混じる。また上層の調査で土坑ＳＦ404が検出されているところであり、この調査の際、遺物の混乱がみられたので、ＳＦ404出土遺物とされている中で灰釉陶器は本来下層のＳＰ463に伴うものと判断し、あわせて紹介する。　**出土遺物**

４は灰釉陶器の碗で口径13.5cm、高さ4.0cmを測る。ナデ調整でノタ目は顕著で口縁部を大きく外側に引き出している。内面のみハケ塗りで、底部は糸切り痕を残している。５は口径14.4cm、高さ5.5cmと比較的深いタイプである。内面は丁寧にハケ塗りされているが外面は1/3程度で塗りむらも多い。全体的に灰白色のぼてっとした感じであり湖西産と考えられる。その他に第31図９がある。灰釉陶器の碗で「東」の墨書が底部に残されているものである。



第26図　その他の遺構　その1　SX1502　SX1503　上層・下層



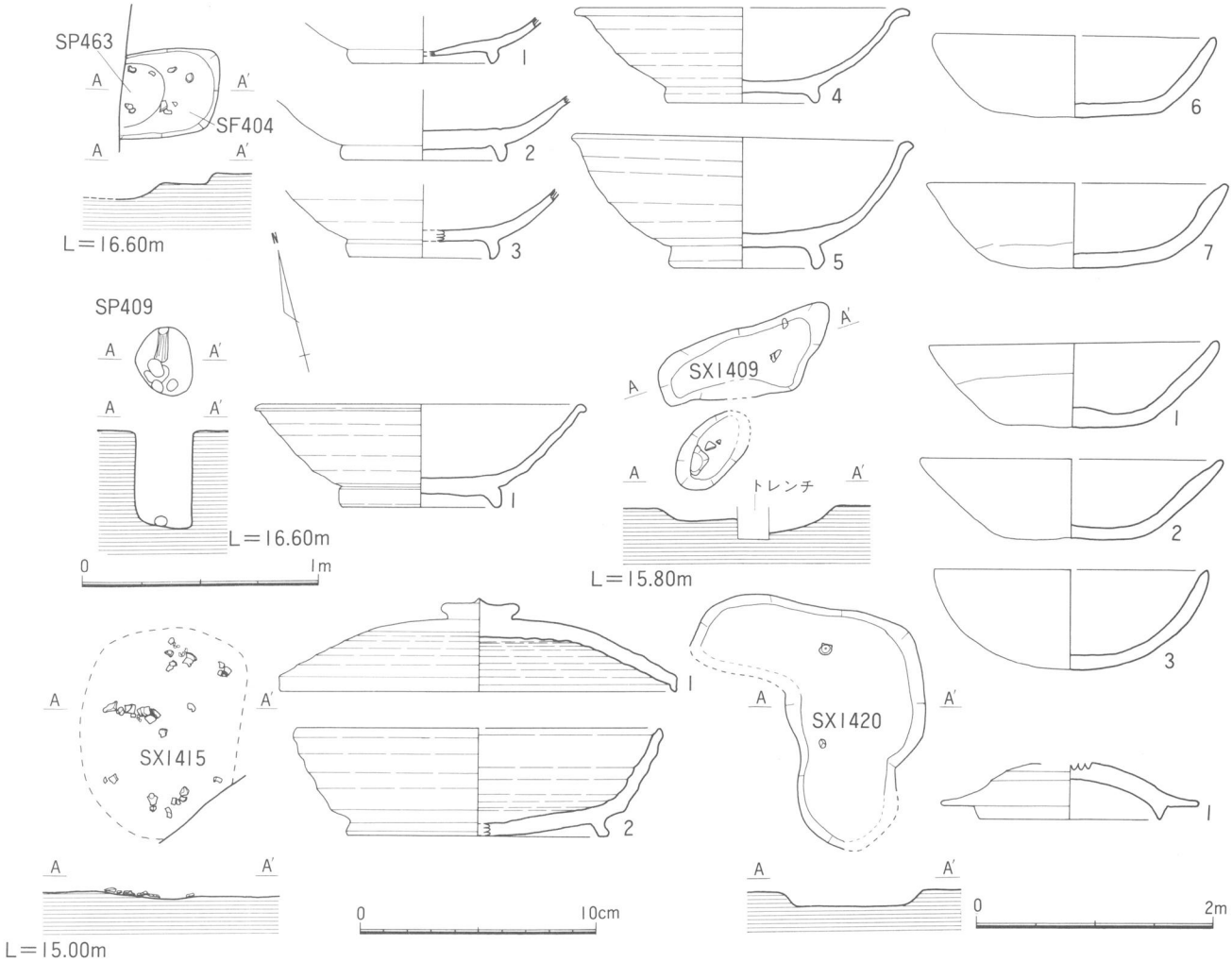
第27図　その他の遺構　その2　SX1502　SX1503　出土遺物

SP409（第28図）

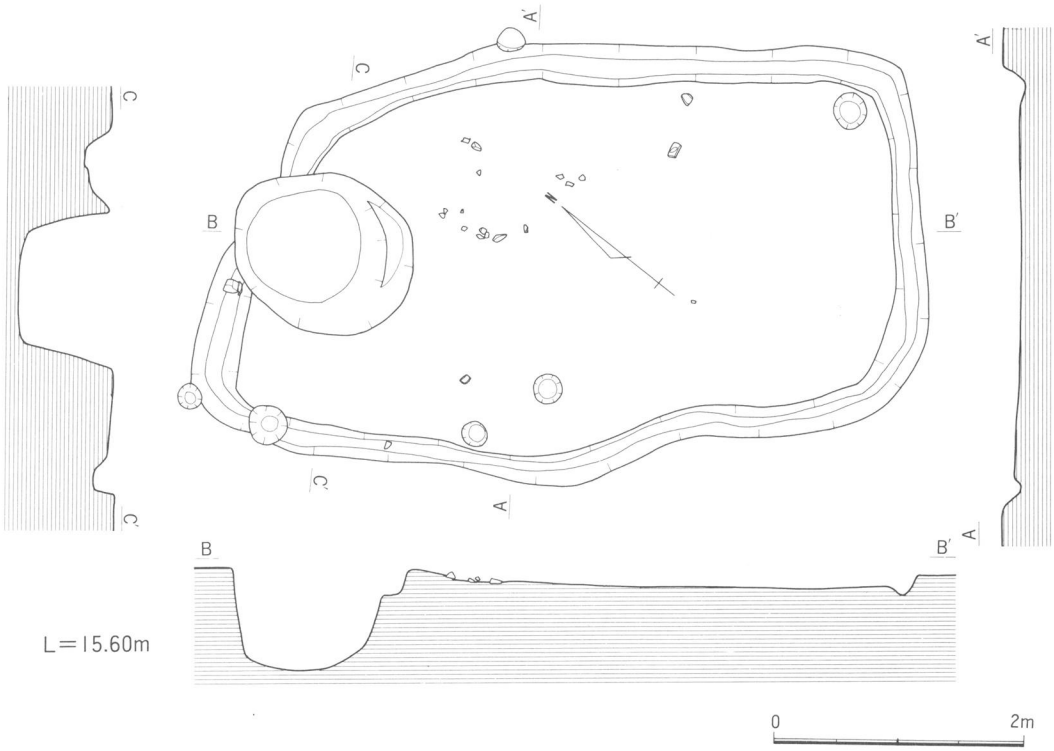
Ⅰ－11グリッドに位置する。掘立柱建物を構成する柱穴と思われるものである。径25cm、現状での深さ40cmを測る。底部に小礫があり根固め石と考えてよいであろう。灰釉陶器が1点検出されているので取り上げた。口径14.7cm、高さ4.4cmを測る。釉は内側を中心にまばらで焼きぶくれも多い。内面に重ね焼きの痕跡が認められる。

SX1409（第28図）

14区H－32グリッドに位置する。長さ1.6m、幅60cmあまりの不定形の土坑である。深さ10cm程度である。1は口径12.7cm、高さ3.4cm。淡茶褐色を呈し全体に厚いつくりである。表面の磨耗著しく詳細の観察は不能である。2も同様である。3は丸底の坏で口径11.5cm高さ4.2cmを測る。



第28図　その他の遺構　その3　SP463　SP409　SX1409　SX1415　SX1420



第29図　その他の遺構　その4　SB1403

第９節　その他の遺物

１．緑釉陶器（第30図　図版30）

原川遺跡から出土した緑釉陶器は接合後の破片数で小破片も含め39片である。これは掛川市教育委員会並びに当研究所が約500ｍ離れた逆川の下流域の梅橋北遺跡の旧流路跡を調査して得た50片以上の緑釉陶器破片数[1]にはおよばない。しかし、原川遺跡から出土した緑釉陶器は居住域から検出されている事が特徴的で、その分布地点はそれを使用した人々の存在を検討する良い手がかりとなる。この分布については第３章第３節で後述する。

出土した緑釉陶器の器種は碗・稜碗・皿とに分かれる。第30図はその中で図示できるものを器種別に分類したものである。個々の出土状態はまちまちであるので、区別、遺構別の出土遺物は第２表の出土地点区別一覧表を参照していただきたい。

碗

１～４は碗である。１は碗の体部破片で1/6程残存する。素地は灰色硬質で釉調は内外面とも暗緑色である。ノタ目は特に外面に残るが内面はわずかである。口縁端部は外側に引き出し丸めている。残存する口縁部の上端がやや内傾する事から輪花碗の可能性を持つ。２は口縁端部のわずかな破片である。素地は灰色硬質で釉調は内外面とも明緑色である。端部を水平に引き出している。３は口縁部の1/8程残存し、素地は灰色硬質である。釉調は内面が明黄緑色で外面は釉が細かく剝離しているため黄緑色である。体部の端に輪花の末端が及んでいる。口縁端部はわずかに残存するが体部の湾曲とやや異なる。これは輪花によるへこみの影響を受けていると判断される。４は底部の1/8程の小破片である。底部から体部にかけての湾曲の度合が皿より急であるため碗とした。素地は黄灰色硬質で釉調は内外面とも明黄緑色である。高台は角型であるが端部は内傾気味である。またこの高台は付高台であるが、接合時に底部内面を深さ0.3㎝、幅0.6㎝程四角くへこませその中に高台を差し込んでいる事が断面の観察よりわかる。

高台の接合痕

稜碗

陰刻花文

５～９は稜碗である。５は緑釉陰刻花文輪花稜碗で体部の1/4程残存している。素地は白灰色で釉調は内外面とも明黄緑色である。復元した口径は15.5㎝で、側周の花文は口縁部を境とした下向きの半截花弁で半円を中心に三葉の花弁が描かれる。花弁は４ヶ所である。口縁端部はややつまみ出しながらそのまま丸めている。また稜は外側は甘く、内側は沈線化して明瞭である。６は底部から体部にかけて1/3程の破片である。素地は灰色または黄灰色で硬質である。釉調は内外面とも暗黄緑色である。高台は径7.3㎝である。角高台であるが強くナデているため、やや台形状になる。底や内面底部には横方向のヘラ磨きの痕跡が残る。また内面と底部にトチンの跡がみられる。稜は内面は明瞭で沈線化しており、外面は５に比べ明瞭である。

７～９はいずれも稜碗の口縁部小破片である。７の素地は灰色硬質で内外面とも釉調は暗黄緑色である。口縁端部はそのまま上方へつまみ出している。８の素地は黄色～灰色硬質で内外面とも釉調は黄褐色～黄緑色である。口縁端部はそのままつまんでいる。８は６と胎土、器形共類似しているが接点もなく出土地点も異なるため別に図示した。９の素地は黄灰色硬質で釉調は黄緑色である。

皿

10～15は皿である。10は底部から口縁部にかけての1/5が残存している。11・12に比べるとやや小型の低い皿で口径16.1㎝、器高2.4㎝である。素地は灰色硬質で内外面とも釉調は明黄緑色である。高台は内側が欠けているが低く角高台が丸味を持った形とみられる。

また４にみられたように底部にへこみをつくりその中に高台を差しこんで付高台にして

いる。口縁端部は水平に強く引き出している。また内面と底部にトチンの跡がみられる。

11～15は皿の底部破片である。11は底部の2/3程残存しており底径8.1㎝で割れ口は新しい。素地は灰色硬質で釉調は内外面とも黄緑色である。高台は角高台でやや内湾する。また底部はヘラ削りにより薄くなり、底と底部内面には横方向のヘラ磨きの跡が残る。また内面と底部にトチンの跡が残る。12の素地、釉調は11とよく似た底部破片で底径8.2㎝で高台は角高台で11より薄くやや内湾している。高台内側端部の稜が鋭い底部は厚く11程ヘラ削りを施してはいない。底部内面に横方向のヘラ磨きの跡が残り、また内面と底部にトチンの跡を残す。13は底部の1/3が残存し底径7.2㎝で11・12より小型である。素地は黄褐色の硬質で色調も橙色である。高台は内湾気味の角高台で12よりはやや厚みを持つ。また底部はヘラ削りで11のように薄手であり、底部内面には横方向のヘラ磨きの跡が残る。内面と底部にトチンの跡を残す。14は1/8程の底部破片である。素地は灰色で色調は緑色である。高台は12に近い。15は底部1/4程の破片であるが磨滅し高台は欠損している。素地は灰色で色調は黄緑色である。16～25はいずれも底部の小破片である。反転実測して底径が推定できるものは参考のために図示した。また断面だけを示したものもある。

16の素地は灰色硬質、色調は淡緑色である。高台は内湾気味の角高台で11に比べると付け根が厚い。17の素地は灰色硬質、色調は淡緑色で16とよく似ている。内面に緑色の濃い線状の部分があり緑彩花文の一部ではないかとみられる。高台は角高台である。18の素地は灰色硬質、色調は黄緑色である。内湾気味の角高台であるが端部が欠けている。19の素地は灰色で色調は緑色である。14と類似する。20の素地は明灰色で色調は黄緑色である。高台を強くナデているため丸みを持ち外反気味である。21も20と同じ素地と色調を持つ。高台を強くナデて外側に引き出している。22・23は高台を欠損している。24の素地は灰色で色調は黄緑である。17よりは薄手である。内面に濃い緑色の線状の部分があり17と同様

二彩(緑彩)　の二彩（緑彩）ではないかとみられる。25の素地は黄褐色で色調は濃緑色である。高台は丸味を帯びた角高台である。内面に花文の跡とみられる線状の盛り上がりがある。26は香炉または合子の頸部と推定される。

27～28は灰色硬質の碗または皿の底部破片である。いずれも陰刻花文を内面に持つもので緑釉の素地とみられる。

素　　地　出土した緑釉陶器の素地はほとんどは灰色で硬質である。色調は緑から黄緑・橙色であるが、これは埋没後の周囲の状態によって変化するようである。

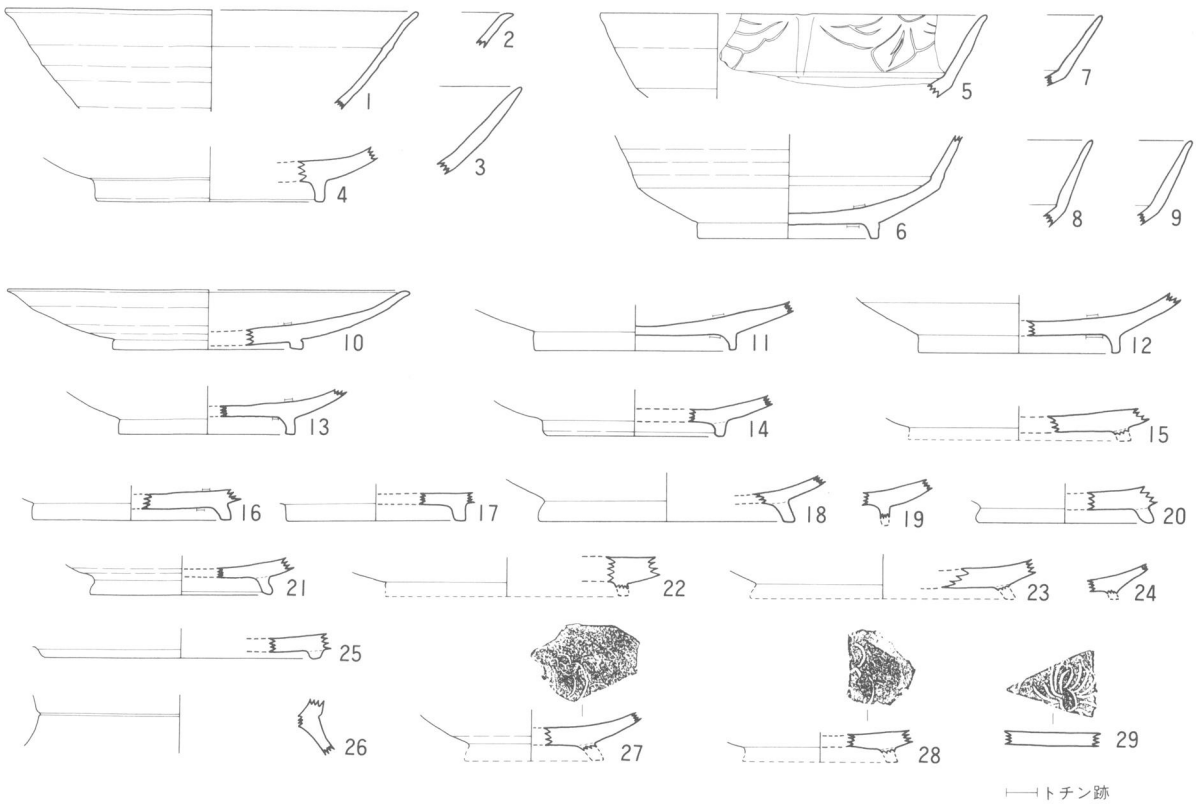
高　　台　高台は大きく（A）（B）（C）の三種類に分かれる。

(**A**)：角高台でていねいに成形している。やや内湾気味で厚みが薄く内側の先端部分が鋭くなるものを含む(図４・６・11～13)。底部内面をヘラ削りで薄くするもの(図６・11(ＳＢ301出土)・13・21)がある。重ね焼きの跡を残し、また内面をヘラ磨きしているものもある。

(**B**)：角高台であるが内側を強くナデて高台が外反気味のものである（図18・20・21)。

(**C**)：短く角高台ではあるが「カマボコ型」に丸みを持ったものである（図10・25)。

口縁端部が解るものは少ないが端部をそのまま引き出すものを(ａ)、水平に引き出すものを(ｂ)とし、碗ではそのまま引き出すもの（図１・３)、水平に引き出すもの（図２)、稜碗ではそのまま引き出すもの(図５・７～９)が多く、皿は水平に引き出していた(図10)。



第30図　緑釉陶器実測図

第２表　緑釉陶器一覧表

No.	区	グリッド	遺構	器種	残存	特徴	トチンの跡	高台の型	底部厚さ	口縁端部	割口	挿図
1	1	I－6	包含層	皿カ	底部1/4				厚		磨	15
2	1	J－4	包含層	碗カ皿	底部小破片				厚		磨	23
3	1	J－7	包含層	碗カ皿	底部小破片				厚		磨	22
4	1	J－7	包含層	碗	体部1/6	輪花				a	新	1
5	1	J－8	包含層	稜碗	口縁小破片					a	磨	9
6	1	L－5	包含層	稜碗	口縁小破片					a	磨	8
7	1	L－5	包含層	稜碗	口縁小破片					a	磨	7
8	1	L－5	包含層	皿	底部1/3		○	A	薄		ヤヤ新	13
9	1	L－5	包含層	稜碗	体部1/4	陰刻花文輪花				a	磨	5
10	1		包含層	皿	底部破片		○	A	厚		新	12
11	1	J－7	包含層	不明	体部破片							
12	1	K－7	包含層	不明	底部破片							
13	1		表採資料	不明	底部破片							

No.	区	グリッド	遺構	器種	残存	特徴	トチンの跡	高台の型	底部厚さ	口縁端部	割口	挿図
14	3	I－8	SB301	稜碗	底～体1/3		○	A	ヤヤ薄		ヤヤ新	6
15	3	I－8	SB301	Ⅲ	底部2/3	SX302と接合	○	A	薄		新	11
16	3	I－9	SD306	Ⅲ	底部1/8		○	A	欠		磨	14
17	3	J－8	SX301	不明	体部破片							
18	3	J－8	SX301	不明	体部破片							
19	3	I－9	SX302	碗カⅢ	底部小破片			B	欠		磨	18
20	3	I－9	SX302	碗カⅢ	底部小破片			B	薄		磨	21
21	3	I－9	SX302	稜碗カ	不明							
22	3	I－9	SX302	不明	体部							
23	3	J－10	包含層	Ⅲカ	底部破片	16と同一カ		Aカ			ヤヤ新	19
24	3	J－10	包含層	不明	体部							
25	3	J－9	包含層	不明	高台破片							
26	4	I－11	SF414	不明	底部破片							
27	6	I－3	SD601	香炉カ合子	底部破片							26
28	6	I－4	SD601	碗カⅢ	底部小破片	2と同一カ		B	厚		磨	20
29	6		包含層	碗カⅢ	底部小破片	花文		C	厚		磨	25
30	14	J－32	SD1427	Ⅲ	底～口1/5		○	Cカ	欠	b	新	10
31	14	J－33	SD1427	碗	口縁破片					b	新	2
32	14	J－32	SD1427	Ⅲカ	口縁破片							
33	14	J－33	SD1427	稜碗	体部破片							
34	14	K－32	SD1433	碗	口縁破片							
35	14	I－31	包含層	碗カⅢ	底部小破片	二彩		Aカ	欠		磨	17
36	14	I－33	包含層	碗カⅢ	底部小破片			Aカ	厚		磨	16
37	14	I－33	包含層	碗カⅢ	底部破片	二彩		欠	欠			24
38	14		包含層	不明	体部破片							
39	15	F－32	包含層	碗	底部1/8			A			ヤヤ新	4
40	15	F－32	包含層	碗	口縁部1/8	輪花				a	磨	3

（緑釉素地）

41	3	I－9	SX302	碗カ	底部1/8	陰刻花文		欠			磨	27
42	3	I－9	SX302	Ⅲカ	底部小破片	陰刻花文		欠			磨	28
43	3	I－9	SX302	Ⅲカ	底部小破片	陰刻花文		欠			ヤヤ新	29

2．墨書土器（第31図　図版28）

原川遺跡から出土している墨書または墨痕のある土器は13点ある。第３表にみるように須恵器は１点であり、他は灰釉陶器である。出土地区は３区が８点、４区が３点、６区が２点と３～４区に集中する。その中でも３区竪穴住居跡ＳＢ301とその周囲の遺構に７点が集中している。

１は須恵器の無高台坏の底部破片である。底径6.8cmで、底部には回転ヘラ切りの跡が残る。内外面に文字があり、底部内面のものは「寺」ではないかと判読できるが、底部外面のものは不明である。平安時代後期前半の竪穴住居跡ＳＢ301の埋土遺物であり、奈良時代後半に位置付けられる事から混入品の可能性を持つが、出土している墨書土器の中では最も古手のものである。底部内面にも墨書が書かれている事から日常雑器として使用されたものよりも儀式的に使用された可能性もある。　「寺」カ

２以下は灰釉陶器である。以下の高台の形については竪穴住居ＳＢ301出土遺物の灰釉陶器の分類にも引用した（Ａ）角高台、（Ｂ）三日月高台、（Ｃ）三日月高台くずれ、（Ｄ）三角高台の分類に準じている。２は底径6.8cmの無釉の碗である。底部には回転ヘラ削りが施され、高台は（Ｃ）三日月高台くずれである。体部に墨痕が残る。ＳＢ301内の柱穴の底部より出土している。

３は底部小破片である。底部には糸切り痕が残るが、高台は（Ｃ）または（Ｄ）に近い。文字は「寿」または「弓」の可能性もあるが判読は難しい。

４はほぼ完形の中型碗である。口径15.8cm、器高5.0cm、底径6.7cmである。底部は回転ヘラ削りで、高台は（Ｃ）である。立ち上がりはなだらかで、口縁端部は水平に引き出しながら丸めている。内外面とも丁寧にナデられている。灰白色で降灰による釉が内面にみられる。また黒色粒子の吹き出しもみられる。文字は墨痕は薄いが「ろ」と判読できる。灰釉陶器編年Ｏ-53段階でもつくりが丁寧なので古手のものであろう。　「ろ」

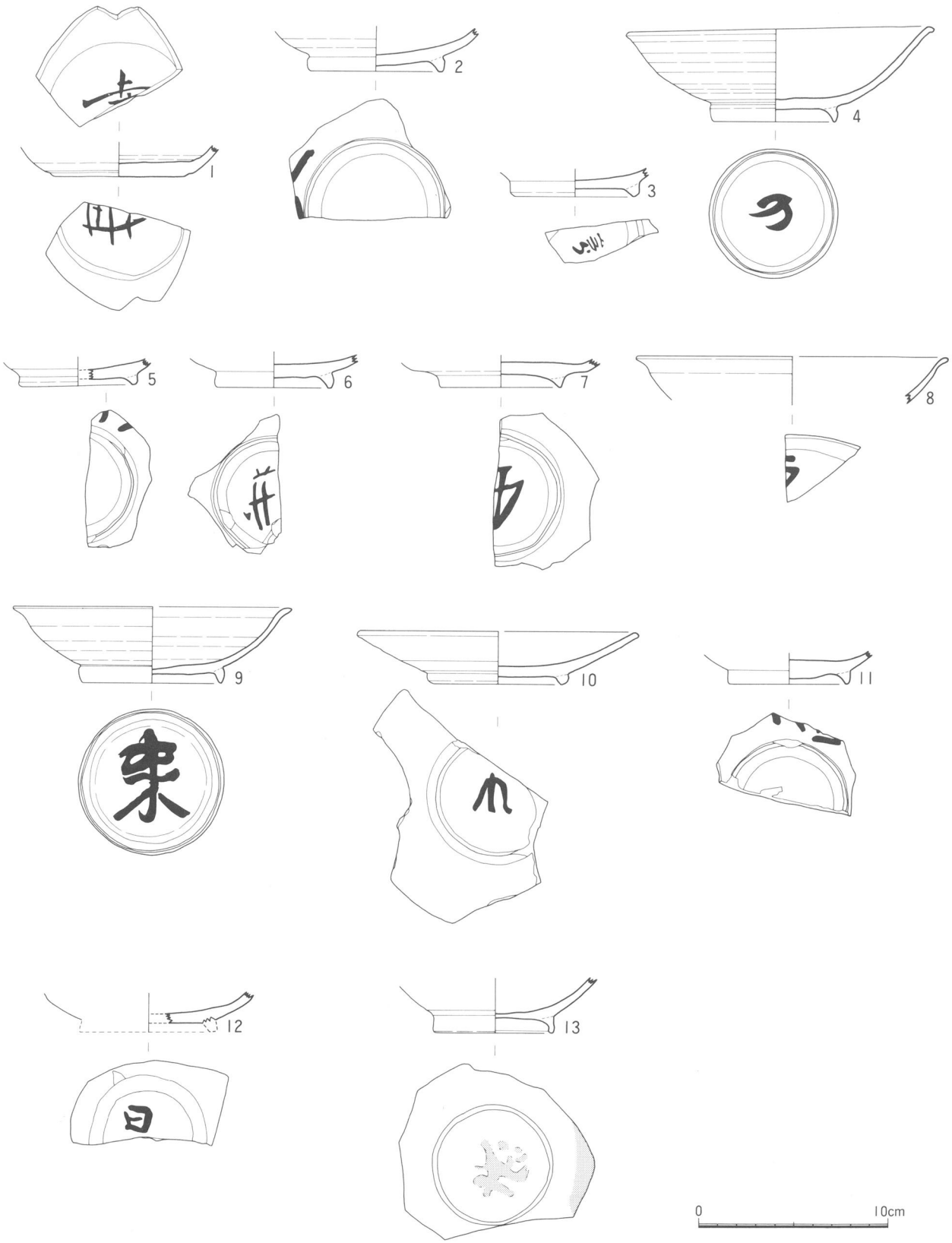
５は底部破片で底径5.9cmである。底部には糸切り痕を残すが、高台は高台外面にヘラ削りを施したようにナデているため（Ｂ）に近い。底部の文字は右半分が欠けているが一文字であろう。７は底部破片である。底径6.3cmで底部には糸切り痕が明確に残る。つくりに雑な点もみられる。高台は（Ｄ）の三角高台である。底部の文字は左半分が欠けているが一文字であろう。内面中央が丸く磨滅している事から転用硯の可能性もある。　転用硯

８は口縁部小破片である。端部を水平に引き出し丸めている。右側部分が欠損しているため「万」の可能性もあるが不明である。

９は碗である。口径14.6cm、器高4.0cm、底径7.3cmである。底部には糸切り痕が残り、高台は（Ｃ）である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は水平に引き出して丸めている。底部の文字は「東」または「束」の可能性もあり、文字の上をさらに墨で塗りつぶした墨痕が残る。Ｏ-53段階のものであり、つくりは４に近い。　「東」カ

10は皿である。口径14.6cm、器高2.8cm、底径6.6cmである。底部は回転ヘラ削りの後ナデられており、高台は角高台に近いが高台外面をナデており地元産のものであろう。立ち上がりは直線的で口縁端部は水平につまんでいる。内外面とも丁寧にナデているが特に内面中央の磨滅が激しいことから転用硯に用いられた可能性を持つ。底部の文字「ん」は判読できないが、梅橋北遺跡で文字「ん」が出土しており[2]、上部につくりがつく可能性もある。Ｏ-53段階でもつくりが丁寧なので古手のものであろう。　「ん」

11は底部破片で底径6.4cmである。底部は回転ヘラ削りで高台は（Ｃ）である。体部下位



第31図　墨書土器実測図

第3表　墨書土器一覧表

（釈文の「□」は一文字を示す）

挿図	図版	区	グリッド	遺構	種類	器種	残存	記載位置	釈　文	備考
1	28-1	3	J-8・J-9	SB301	須恵器	無高台坏	底部1/5	内底 外底	「寺」カ 「□」	
2	2	3	J-8・J-9	SB301	灰釉	碗	底部1/2	体部	墨痕	
3	3	3	J-8・J-9	SB301	灰釉	碗カ	底部1/5	底部	「□」(「寿」カ)	冂・カ
4	13	3	J-8・J-9	SB301	灰釉	中型碗	完形	底部	「ろ」	墨痕薄い
5	4	3	J-8・J-9	SB301	灰釉	碗カ	底部1/3	体部	墨痕	中世の溝
6	5	3	J-8・J-9	SD306	灰釉	碗カ	底部1/2	底部	「□」	
7	6	3	J-8・J-9	SX302	灰釉	碗カ	底部1/2	底部	「□」	
8	7	3	H－9	SB301	灰釉	碗カ	口縁部	体部	「□」(「ろ」カ)	
9	22	4	I－11	SP463	灰釉	碗	約1/2	底部	「東」カ「束」カ	
10	8	4	不明	排水溝	灰釉	皿	約1/2	底部	「ん」	転用硯カ
11	9	4	I－11	南端	灰釉	碗カ	底部1/2	体部	墨痕	
12	10	6	J-3・K-3	包含層	灰釉	碗カ	底部1/2	底部	「日」カ「日□」カ	
13	11	6	J－3	包含層	灰釉	碗	約2/3	底部	「方」カ「□」カ	墨痕薄い

の墨痕は2字になる可能性をもつ。

12は高台部を欠損しているが貼り付け高台である。底部は回転ヘラ削りが施されている。文字は「日」であるが位置的にはさらに下部に文字が続く可能性が強い。　「日」

13は口縁部が欠損しており底部6.2cmである。底部は回転ヘラ削りの後ナデており、高台は（C）である。内外面に漬けがけによる施釉の痕跡がある。文字は墨痕が薄く判読し難いが「方」の可能性もある。これらの墨書土器の分布については第3章第4節で後述する。

3．円面硯（第32図１　図版29）

円面硯

８区Ａの包含層より円面硯の破片が出土している。整理作業の中で出土地点を検討したところ遺跡中央を走っている東西方向の道の側溝の一つと考えられるＳＤ822の中より出土していることがわかった。１点のみでしかも硯面部の1/5程度の破片であり、全形の推定はむずかしいが透かしのある脚台を持つものである。縁も欠損しており、正確には復元できないが、硯面部の径は約16.3cmと推定することができる。池は底部の幅で0.9cmを測る。内提は径12cmと復元できる。磨墨面は中央部に向かって少し内傾する。また研磨の痕が観察される。圏台の上端部には２条の突帯がめぐらされ、透かし穴（窓）は幅0.7～1.3cmと若干ふぞろいではあるが、長方形でほぼ均等に割り付けられている。欠損のため高さ・数などは不明である。胎土は緻密で焼成は堅緻、色調は淡灰青色を呈する。

官衙遺跡

円面硯を出土する遺跡として県内では、浜松市伊場遺跡[3]・可美村城山遺跡[4]・藤枝市御子ヶ谷遺跡[5]等（生産遺跡を除く）が知られており、いずれも地方の官衙あるいはそれに関連すると考えられる遺跡である。円面硯に限らず、硯はそれ自体かなり特殊なものであり、奈良・平安時代においては各地域ではまだ一般的なものではなかったと考えられる。本例は当然のことながら佐野郡衙と推定される坂尻遺跡との関連の中で考えるべきものであろう。下流の梅橋北遺跡からは４点の風字硯と38点の転用硯が当研究所の調査[6]でも明らかになっており、文字の使用者の存在を推定している。しかし坂尻遺跡も含めて現在までに円面硯が出土しているのはここだけであり、郡衙の広がりの中における、東西方向の道の重要性を示している。

4．馬形土製品（第32図２・３　図版29）

馬形土製品

馬形土製品の破片が２点検出されている。いずれも脚部のみの破片である。14区Ｂの包含層より検出されている。２は幅1.25cm、長さ3.8cmの小形のもので、左脚と思われる。３は幅2.3cm、長さ7.1cmを測るもので右後脚と考えられる。いずれも焼成は良好で明灰色を呈する。

5．瓦塔（第32図４～６　図版29）

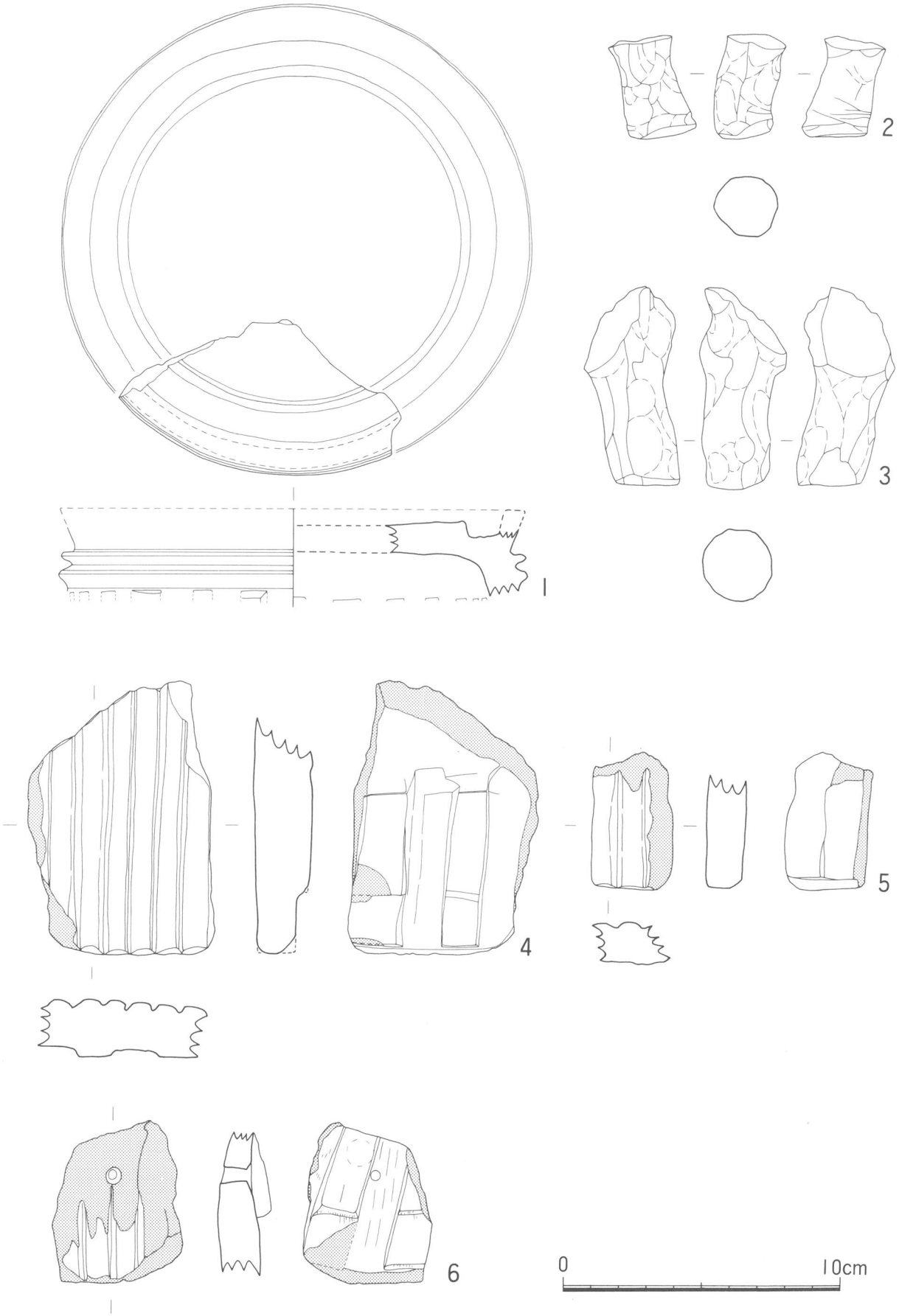
瓦塔屋蓋部

６区より瓦塔の破片が３点検出されている。いずれも屋蓋部の破片であるが小破片のためその部分の特定はできない。胎土は良好で、焼成もしっかりしており淡明灰色を呈する。４は幅6.5cm、長径9.8cmの破片で表面は６条の沈線により瓦が表現されている。下端は磨耗はしているが軒先と考えられる。ほぼ直線的にのび、反りは認められない。瓦は沈線による丸瓦のみの表現で、１枚１枚の区切りもなく、表現様式としては簡略化されている。垂木は幅1.5cmと幅1.9cmの２本を確認することができ、両者の間隔は1.3cmである。

５も４と同様の部分の破片である。６も軒先に近い部分の破片であるが、磨耗も著しく細部の観察はできない。垂木の脇に小孔がうがたれているが、焼成後のものであり、当初からのものではなく転用のためか、破損補修のためのものであろう。

寺院・墳墓関連遺跡

瓦塔の類例は県内では６例あるが、著名な三ヶ日町宇志出土のもの[7]、あるいは島田市竹林寺廃寺のもの[8]など寺院跡あるいは墳墓に関連するものが多い。本遺跡例の場合特異な例として、その性格付けは今後の論議となろう。



第32図　円面硯・馬形土製品・瓦塔実測図

6．須恵器・土師器・灰釉陶器（第33～35図　図版31・32）

包含層出土の遺物の中で、実測可能な奈良・平安時代の遺物を紹介する。須恵器・灰釉陶器・山茶碗などがある。

遺跡中央を走っている東西方向の道の側溝と考えられる溝ＳＤ701・ＳＤ822を境に東側・西側での遺構の様相が異なると考えられるので、便宜的に西側地区（１区・３区・４区・６区）と東側地区（14区）とに分けて記述する。

西側地区

第33図１～12は須恵器である。２は高台付の坏で口径14.2cm、器高3.7cmを測るもので、口径に比して器高が低く浅い器形である。底部は緩やかな丸底を呈し、高台とほぼ同程度のふくらみを持つ。１は明らかに高台よりはみ出しており、共に奈良時代前半に位置付けられるものである。３・４は丸底の坏で、３は口径13.8cm、４は口径14.6cmを測る。いずれもノタ目が顕著である。５は箱形の坏で、口径12.8cm、器高4.3cmを測る。底部はヘラ削り後丁寧にナデており、全体として丁寧な仕上がりである。奈良時代後半に位置付けられよう。

８・９は高坏であるが、ごく一部分の破片のみであるが、二つのタイプのあることには注目しておきたい。11・12は短頸壺である。11は口径6.4cm、最大径8.9cm、器高5.2cmを測るもので、口縁部はわずかに内傾して直線的に立ち上がる。底部はヘラ削りでその他内外面ともナデ調整されている。

第33図14～44、第34図１は灰釉陶器である。14は碗で口径14.3cm、器高3.7cmを測るもので、内面及び口縁部外面に釉がハケ塗りで施されている。高台はややくずれてはいるものの三日月高台である。以下15～23までほぼ同様である。

24は口径14.0cm、高さ4.5cm。体部は緩やかな張りがあり、直線的に開く。高台は幅が広く三角とまではいいがたい。釉は降灰程度で無釉である。25は口径15cm前後と推定でき若干大振りである。三日月高台で釉は漬けがけである。

大振りの碗　30・31は大振りの碗で30が口径18.7cm、31が18.5cmを測るものである。いずれも無釉であり、30は内面に自然釉が認められる。

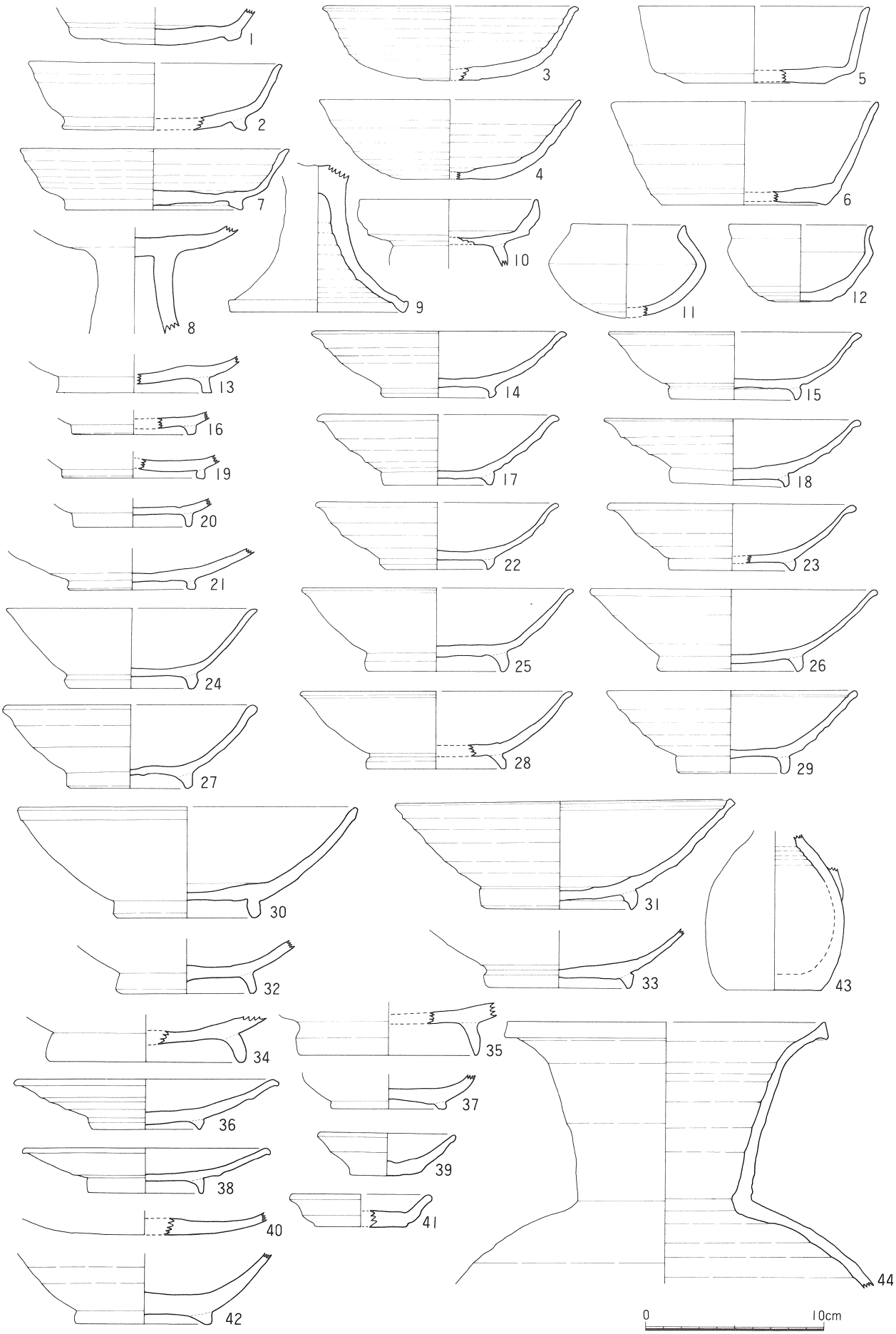
36・37は皿である。36は口径14.6cm、高さ2.8cmで直線的に外傾し、口縁端部は強く外につまみ出されている。高台は三角形の付け高台で、やや内湾している。底部に回転ヘラ削りの跡を残す。内面に重ね焼きの痕跡が認められる。

39・41は小皿である。胎土・焼成が良好であるのでここに入れた。口径7.5cm、高さ2.4cm。内面の調整は丁寧にナデているが、外面については調整が口縁部以外は荒くヘラ削りの痕がそのまま残る部分もある。

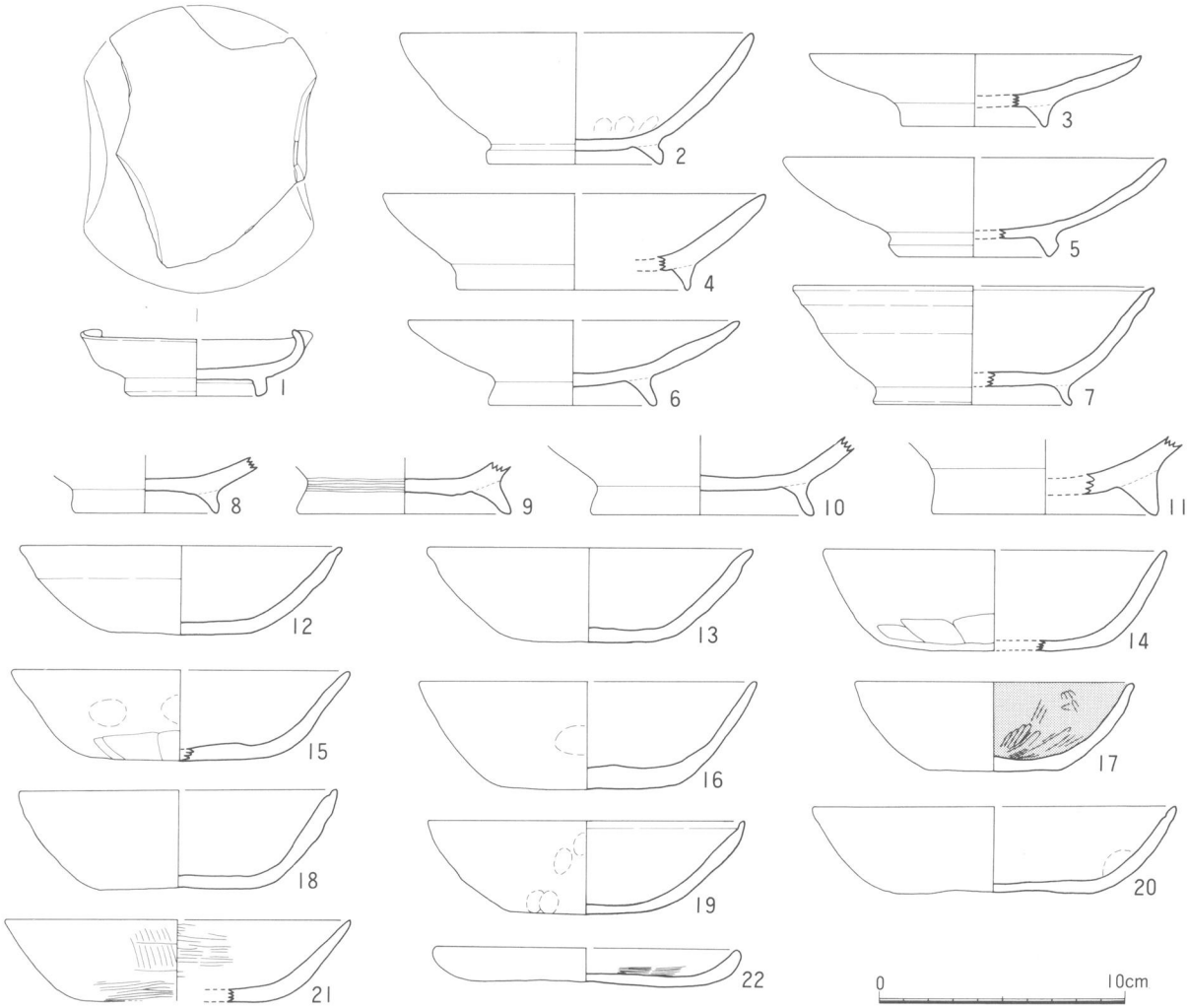
手付小瓶　43は手付小瓶で頸部より上部及び把手部分を欠く。最大径7.7cm、底径5.3cmを測る。体部中央まで漬けがけで釉が施されている。底部は平底で回転糸切り痕を残す。

耳　皿　第34図１は灰釉の耳皿で折り返し部分は欠失しているが、ほぼ推定できる。内・外面とも丁寧なナデ調整で内面に斑文状の灰釉が施されている。

模倣碗　２～11は土師質で、灰釉陶器の碗を模倣したものと思われるものである。２は口径14.3cm、高さ5.3cm。全体にナデ調整であるが、特に内面は丁寧である。全体に磨滅が著しく詳細の観察は不能であるが、全体に丁寧に灰釉を模倣している。12～22は土師質の坏または皿である。12は口径13.0cm、高さ3.6cmの平底の坏である。底部より緩やかなカーブを持って立ち上がり、口縁部は内外面ともナデ調整され口縁端部はわずかにつまみ上げられている。



第33図　その他の遺物　その１　西側地区



第34図　その他の遺物　その２　西側地区

13もほぼ同様である。22は口径12.5cm、高さ1.4cmの皿である。全体にナデ調整であるが口縁部から内面にかけてハケ目が一部残されている。全体に厚手で特に口縁部分は厚くつくられている。底部には指頭痕が残されている。

東側地区

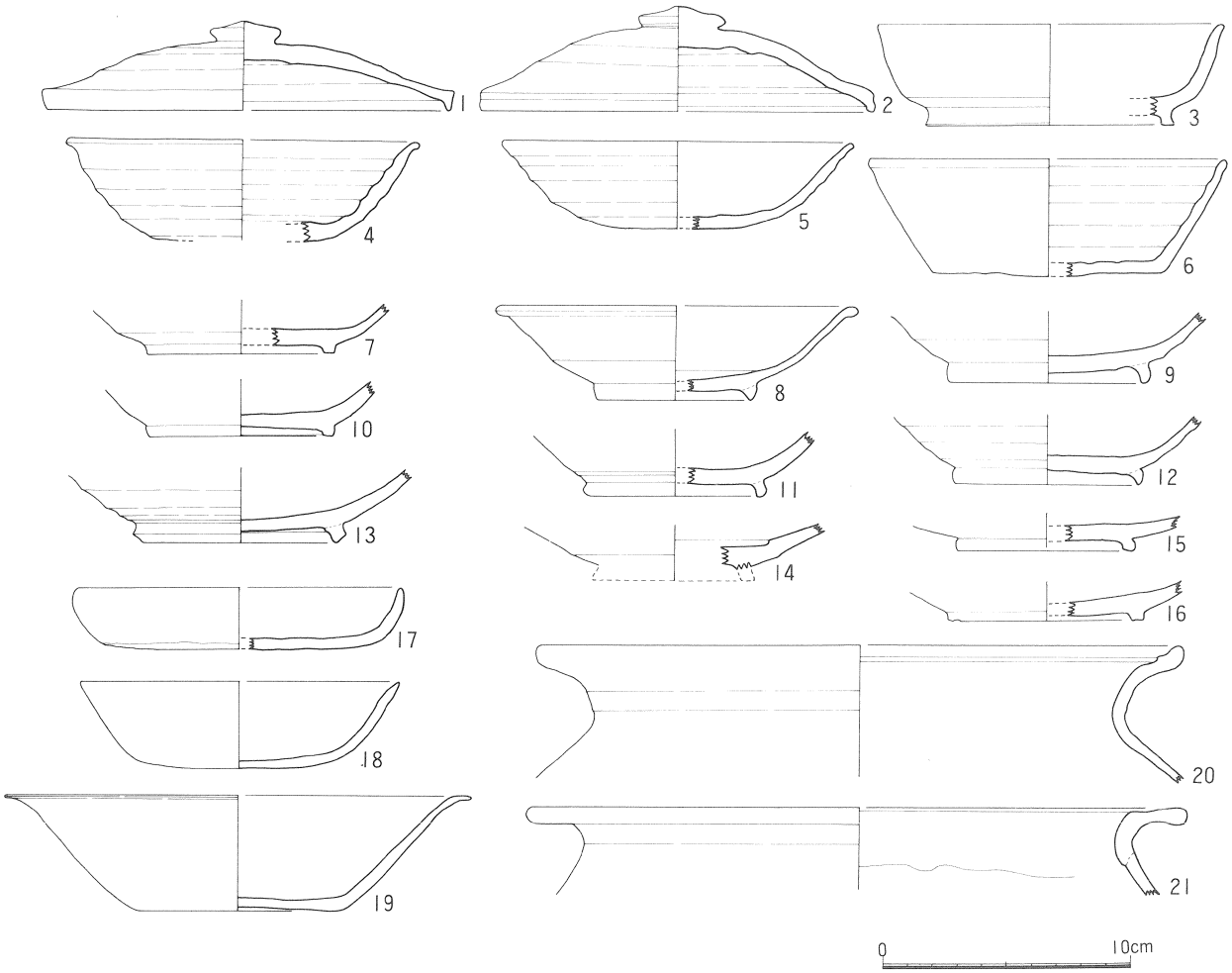
図示できる土器の量は少ない。第35図１～６は須恵器坏である。１・２は宝珠状のつまみを持った坏蓋で径は16.6cm、15.8cmを測る。口縁端部を「く」の字に折り曲げているが、その折り返しは弱い。８世紀中葉あたりに位置付けられよう。

４・５は丸底の坏でノタ目が顕著である。６は平底の坏で底部から直線的に立ち上がる箱型を呈するものである。口径14.3cm、高さ4.8cm、底径9.1cmを測る。

７～16は灰釉陶器であるがいずれも小破片で全形を知りうるものは８のみである。８は口径14.0cm、高さ3.8cm、全体に丁寧なナデ整形によって仕上げられ、特に口縁端部は大きくつまみ出されている。高台は断面三角形の付け高台である。14は段皿で、K-14段階に位置付けられようが小破片である。また７・16も角高台を持つものであるがいずれも小破片である。

17～21は土師器である。17は皿と呼んでもよいもので口径12.9cm、高さ2.5cm、平底で緩やかなカーブを持ち口縁はやや内傾する。内外面ともに磨滅著しく詳細な観察はできないが丹の痕跡をみることができる。

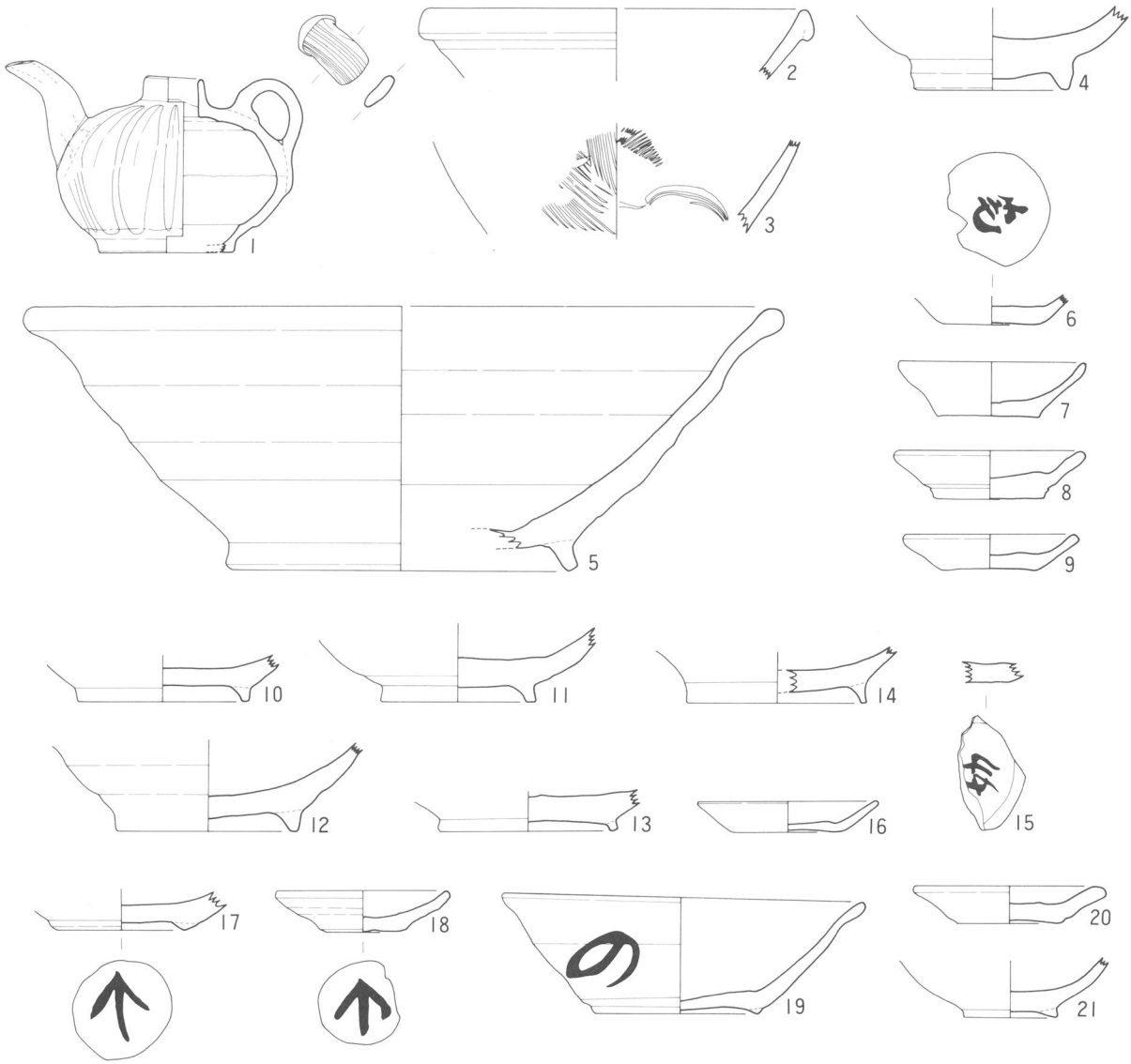
19は土師質の碗であるが、特異な形態である。平底で、直線的に外反し口縁部は外に水



第35図　その他の遺物　その3　東側地区

平にひらく。口縁端部は先細となる。口径18.7cm、高台4.6cm、底径8cmである。

20・21は甕の口縁部破片である。21は口縁を大きく外に開くもので口径26.7cmと復元できる。胎土には赤色粒子・長石・砂粒を含み、焼成は不良で淡黄褐色を呈す。



第36図　その他の遺物　その４　0　10cm

７．青磁・白磁ほか（第36図　図版32・33）

青白磁水注

12区ＳＦ1203から出土した。覆土中の遺物であって大窯期の擂鉢と共に出土した。混入品もしくは伝世品の可能性もある。器高7.5cm、口径2.23cm、底部推定径5.5cmを測る小振りの製品である。胴部は型押しの鎬蓮弁文を巡らし上向きの注口部は細く鶴首状を呈する。把手も型押しの横線を描く。下胴部の底部脇から底部内面については露胎である。胎土は白味をおび釉との境界は緋色を呈する。胴部を成形し、丸穴をくり抜き注口部をはめ込んでいる。竜泉窯系製品であろう。

伝世品か

竜泉窯系

白磁碗

第36図２は、12区第１面から出土した。口縁部を肥厚させ、玉縁を呈する。黄色味をおびた白色の釉がかかっている。胎土はベージュ色で黒色粒子を含む。森田　勉氏の分類では、Ⅳ類の範疇であろう。

青磁碗

第36図３は８区包含層から出土した。胴部に櫛描文、内面下部に割花文が描かれている同安窯系製品である。第36図４は14区包含層から出土した。底部は露胎で、内面から外面高台部まで光沢のない薄緑色の釉がかかっている。見こみに一条の圏線が巡る。14世紀代の製品であるが、14区からは当該期の資料はほとんど認められない。

大平鉢

第36図５は包含層から出土した瓷器系大平鉢である。高台部から直線的に広がる形態で高台断面は略方形を呈し、外側に開く。口端部はわずかに面取りし、丸く収め、下胴部はヘラ削り調整を施す。胎土は荒く暗灰色を呈し、常滑製品に類似するが、形態は異なっている[9]。13世紀前半代の製品であろう。

大　平　鉢

山茶碗・小碗・小皿

６区からは「宅カ」と見こみに墨書された湖西産の小皿が出土した（第36図６）13世紀中頃の製品と考えられる。この他６区からはわずかではあるが当該期の資料が出土している。１区包含層から出土した７の小皿は東遠系、８・９は渥美・湖西系の小皿である。12世紀末～13世紀中頃までの製品であろう。この１区からは当該期の資料が出土しているが、全体量としては少ない。12区ＳＤ1206の自然流路から山茶碗は10～12が渥美・湖西系、13・14が東遠系製品である。いずれも12世紀中頃から末と考えられる。

ところでＳＤ1206からは上部に古瀬戸後期の製品が含まれているが、流路の底部付近で山茶碗が出土している。他に包含層から15の底面に墨書された小皿片が出土している。10区では渥美・湖西系山茶碗と小皿底部に「↑」の墨書記号の記された破片（第36図17・18）が出土しているが、いずれも包含層から出土している。

「↑」

14区包含層からは胴部に「の」と記された渥美・湖西系山茶碗19が出土した。12世紀後半から末と判断される。他に12世紀中頃から後半の渥美・湖西系小碗（第36図21）と13世紀前半から中頃の東遠系小皿（第36図20）が出土している。

また９・12区では自然流路の下部に12～13世紀の遺物が認められている。おそらく遺構を伴っていることが少ないことから居住域から若干離れたところといえよう。

８．分銅（第37図　図版33）

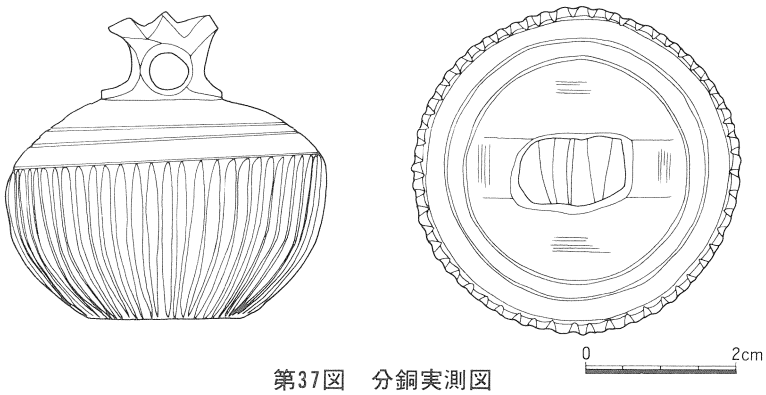
４区のＳＰ421より分銅が１点出土している。伴出遺物はなく時期は不明である。形態より中世との所見もあるが、山梨文化財研究所の鈴木　稔氏に分析をお願いし、その所見を特論として本報告書に載せさせていただいたので、ここで紹介をしておきたい。

青銅製で最大径2.1cm、高さ2.1cmを測る。上部には２条の沈線がめぐらされ、胴部の中位から下位にかけて28本の溝が切られている。底部は円形で径１cmである。頂部には鈕がとりつけられ、円形の孔があけられている。現状で重さ31.1ｇを測る。

県内の分銅の出土例は少なく袋井市坂尻遺跡（平安時代）[10]・藤枝市山廻遺跡（奈良・平安時代）[11]の例がある。袋井市坂尻遺跡の例は銅製で直径3.2cm、高さ2.9cmを測る。上部から側面にかけて稜線が縦に不規則に15本走る。底部には直径2.1cm、高さ５mmの円盤状の突出部がある。また頂部には円形の鈕がとりつけられている。82ｇを測る。また藤枝市山廻遺跡のものは、形態的には坂尻遺跡のものと良く類似する。鈕の部分が欠失しており、重量69.6ｇを測る。

本遺跡例は、これらとは形態的には若干異なるものであり、類例としては大阪城出土のもの[12]が形態的に近い。重さ28.63ｇを測り、棹秤の錘とされている。詳細な分析について

は、特論２鈴木論文を参照されたい。



第37図　分銅実測図

９．土錘

その他に土錘が大量に採集されている。50点を数えるが、その形態は細長い葉巻形のものが大半である。ほとんどが包含層出土のもので時期を限定できるものは少ない。なお溝ＳＤ406より出土した土錘については別にふれた。

第４表　土錘一覧表　（　）は破片のため現存の数値である

番号	区	グリッド	遺構	遺物番号	長さ(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	形態	備考
1	1	Ｊ－５	試掘	Ｃ－２	(3.2)	1.7	0.5		
2	1	Ｊ－５	包含層	123	(3.6)	(1.8)	0.4		
3	1	Ｋ－５	包含層	221	(1.9)	(1.5)	0.5		
4	1	Ｊ－５	包含層	228	(4.2)	1.6	0.4		
5	1	Ｋ－５	包含層	230	(3.9)	1.7	0.5		
6	1	Ｊ－６	包含層	302	(2.5)	(1.5)	0.4		
7	1	Ｉ－６	包含層	314	(3.0)	(1.9)	0.4		
8	1	Ｉ－７	包含層	316	(2.2)	(1.5)	0.5		
9	1	Ｊ－７	包含層	320	(3.6)	(1.9)	0.5		
10	1	Ｉ－７	包含層	340	3.9	2.2	0.5		
11	1		トレンチ	347	4.5	1.0	0.3		
12	1	Ｋ－８	包含層	379	(4.1)	1.8	0.4		
13	1	Ｊ－５	包含層	382	3.7	2.8	0.5		
14	1	Ｊ－７	包含層	393	(3.2)	(1.0)	0.2		
15	1	Ｊ－６	包含層	414	4.5	1.6	0.4		
16	1	Ｉ－６	包含層	417	6.0	1.6	0.4		一部欠損
17	1	Ｊ－６	包含層	433	(3.2)	1.0	0.4		
18	1	Ｈ-７・Ｉ-７	包含層	448	(5.1)	1.8	0.5		
19	1	Ｈ-７・Ｉ-７	包含層	448	(5.7)	1.9	0.4		

番号	区	グリッド	遺構	遺物番号	長さ(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	形態	備考
20	1	H-7・I-7	包含層	448	5.5	2.0	0.4		
21	1	H-7・I-7	包含層	448	5.8	1.9	0.6		
22	1	H-7・I-7	包含層	448	5.2	1.7	0.4		
23	1	J－8	包含層	466	(2.7)	(2.1)	0.4		
24	1	K－7	SX101	495	(3.0)	(1.3)	0.5		
25	3		SX302	776	(3.2)	1.6	0.5		
26	3		SX302	791	4.0	1.9	0.5		
27	3	H－9	包含層	627	(3.2)	1.4	0.3		
28	4		包含層	807	4.9	2.4	0.5		
29	4		包含層	807	(4.7)	2.5	0.4		一部欠損
30	4		包含層	807	4.0	2.0	0.7		
31	4		包含層	807	3.8	2.0	0.4		
32	4		包含層	820	4.1	2.0	0.5		
33	4	I－11	包含層	1372	(2.6)	1.5	0.3		
34	6		SD601	1649	3.5	0.9	0.3		
35	6		SD601	1649	2.6	1.0	0.2		一部欠損
36	6		SD603	1784	3.9	1.3	0.4		
37	6		包含層	1559	(3.0)	1.4	0.4		
38	6		包含層	1545	2.4	1.6	0.5		
39	9		包含層	4322	4.1	1.6	0.5～0.7		
40	9		包含層	4332	4.4	1.4	0.4		
41	9		包含層	4341	4.5	1.5	0.4		
42	9		包含層	4341	(2.7)	1.7	0.4		
43	9		包含層	4366	4.5	2.0	0.4		
44	9		SX903	4664	4.1	2.7	0.5		
45	12	F－6	包含層	5328	(3.6)	1.9	0.6		
46	12	F－5	包含層	5322	4.5	1.9	0.4		
47	12	G－6	包含層	5339	(4.5)	2.0	0.5		
48	12		包含層	5693	(3.7)	1.7	0.6		
49	12		SP12135	5823	3.4	1.8	0.5		
50	14		包含層	7044	2.9	1.2	0.3		

注

（1）松本一男ほか『梅橋北遺跡』掛川市教育委員会　1985
　　平野吾郎ほか『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988
（2）平野吾郎ほか『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988
（3）向坂鋼二ほか『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会　1975
（4）向坂鋼二ほか『城山遺跡』可美村教育委員会
（5）『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』藤枝市教育委員会　1981
（6）(2)に同じ
（7）稲垣晋也「静岡県引佐郡三ヶ日町字宇志山中発見瓦塔の復元について」『考古学雑誌』53巻1号　1966
（8）斉藤　忠・平野吾郎ほか『竹林寺廃寺跡』島田市教育委員会　1980
（9）鋤柄俊夫「中世信濃の東海系移入雑器」『考古学と移住・移動』　1985
（10）『袋井市史』通史編　袋井市史編纂委員会　1983
（11）『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』藤枝市教育委員会　1981
（12）宮本佐知子「大阪城出土の秤と錘」『大阪市文化財情報葦火』12号　1988

第3章　まとめ

今回の調査の意義は坂尻遺跡の調査[1]によって明らかになった佐野郡衙が現在の原野谷川の東側部分にどのような広がりを持っていたかを明らかにできた事にある。奈良・平安時代の遺構は前章までにも述べたように検出が必ずしも十分でない点もあるがそれを遺物の分布から補いながら大まかな概略を述べると次のようになる。

第1節　奈良時代の遺構と遺物

明確な遺構は西側地区では土坑ＳＸ101・溝ＳＤ406、東側地区ではＳＢ1404であまり多くない。西側地区のＳＸ101は牛形土製品も出土しており祭祀的な使用も考えられ井戸状の土坑である可能性が強い。西側地区については遺構として認定できたものは少ないが、１区・３区等の包含層遺物には第33図１～７図のような坏類を中心とした奈良時代の遺物も多く含まれていた。それに対し中央部分からは遺構・遺物はほとんどは検出されていないが、円面硯が２本の平行する溝の片方から出土していることはこの２本の溝が奈良時代には存在していたことを示している。東側地区についてもＳＢ1404のような竪穴住居が他にも存在した可能性が強く、掘立柱建物ＳＨ1501が奈良時代にさかのぼるものとすれば竪穴住居と掘立柱建物からなる組合せが想定できる。その掘立柱建物の棟方向は南北棟であり、２本の平行する溝とも多少のぶれは有るものの方向に類似性が見られる。東西両地区とも包含層に奈良時代の須恵器が多量に分布しており破片数では坂尻遺跡に劣らない。これらの遺物は東・西両地区に分かれながらもいずれも須恵器編年第Ｖ期前半に分類できる時期に相当するため坂尻遺跡と同様８世紀前半には原川遺跡も成立していた事になる。しかし坂尻遺跡から出土している帯金具・銅印・分銅・和銅開珎や奈良時代の多量の墨書土器のような官衙を指し示すような特殊遺物に相当するものは原川遺跡では円面硯や後述する墨書土器「寺カ」・牛形土製品などである。官衙を指し示すような遺物については共通性を持ちながらも遺構や遺物の密度は坂尻遺跡に及ばない事から奈良時代の原川遺跡は郡衙の中心とは考えにくく東西に延びる古代の東海道に沿った東側の部分に位置する郡衙の関連の周辺域を示すものと考えられる。

郡衙の周辺域

第2節　平安時代の遺構と遺物

平行する2本の溝

奈良時代には存在した南西から北東方向に平行する２本の溝ＳＤ701・ＳＤ822によって大きく西側の建物群と東側の建物群に分けられる。西側の建物群は竪穴住居ＳＢ301と掘立柱建物群の組合せからなり、ＳＢ301の東側には土器溜りが形成されていた。掘立柱建物の中にはこの溝と平行する棟方向を持つものも多い。灰釉陶器からみればK-14段階からK-90・O-53段階へと継続していることから、これらの建物群の年代を示すものである。また東側の建物群も溝と平行する方向で掘立柱建物群が検出され、図示できなかったが多くの建物の建替えが行われたと考えられる地区である。ここでも灰釉陶器からみればK-14段階からK-90・O-53段階へと継続している。東西いずれの地点も奈良時代の遺構が検出された所である。坂尻遺跡の遺構の密度の中心が奈良時代にあるのに対して原川遺跡では平安時代に遺構の密度が濃くなる。このことは出土遺物にも反映している。K-14・K-90段階の灰釉陶器・緑釉陶器・青白磁・墨書土器・獣足壺・瓦塔等は坂尻遺跡に較べはるかに内

容が豊富であり下流で調査した梅橋北遺跡[2]と共通性を持つものである。次にこうした遺物の分布を手がかりにして遺構の性格を検討したい。

第3節　緑釉陶器の分布

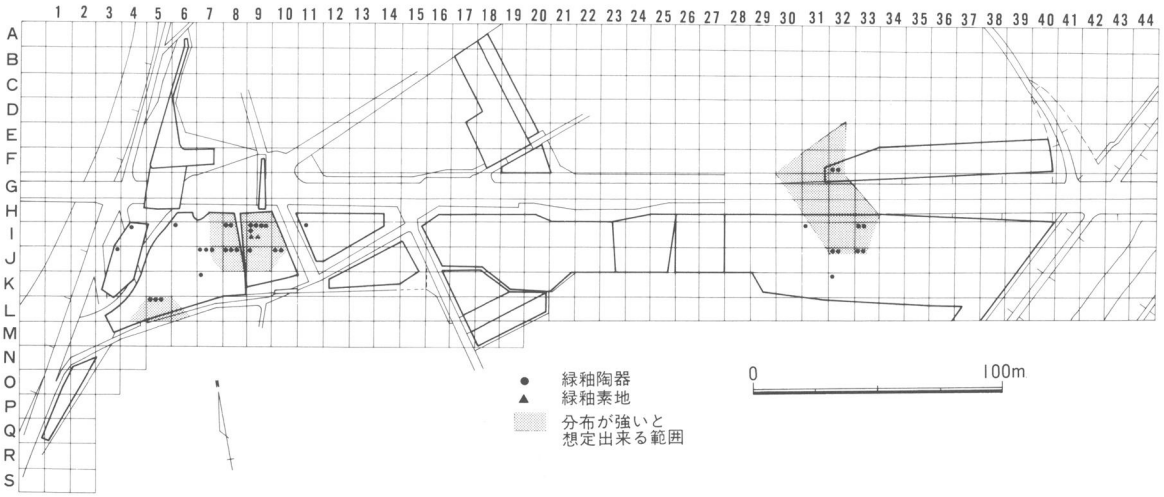
原川遺跡の緑釉陶器は前述したようにK-90段階とみなされ、その出土地点は第38図のように大きく西側地区と東側地区に分かれる。

西側地区　西側地区は1区・3区・4区・6区に分布する。その中で1区・L－5からは第30図5・7・8・12・13と稜碗や皿が出土している。これらの破片は大きく割れ口も新しいものなので、この付近に緑釉陶器を使用した人々の遺構を考える事が可能である。またI－8～9・J－7～8にかけては特に3区SB301付近を中心として最も緑釉陶器の分布が多い地点で碗・稜碗・皿が出土している。竪穴住居跡SB301からは第30図6・11のように割れ口が新しく大きな破片が出土している。またSB301の第30図11の皿は隣接のSX302の破片と接合できた事からSX302はSB301から廃棄されたものとみられる。またJ－9～10の破片は小さく磨滅している。4区で採取された1片も磨滅しており3区方面よりの混じりこみと考えられる。従って緑釉陶器の分布からみる限り1区西側南（L－5付近）とそれから約10m程離れた1区東側から3区西側（I－8～9・L－7～8）の4グリッドに集中している事がわかる。

東側地区　東側地区で緑釉陶器が分布するのは14・15区の中でもF－32・I－31,33・K－32である。出土しているのは碗・稜碗・皿の破片とみられ西側地区と同様であるが図17・24にみられる二彩陶器の可能性を持つ遺物が含まれている。しかし14区出土の破片は15区方面を上流とする溝SD1427に含まれそれ以外の破片は磨滅している事は、15区西端またはその西北を含めたF～I－30～33に緑釉陶器を使用した人々の存在を推定できそうである。

梅橋北遺跡　梅橋北遺跡では碗・稜碗・皿の他に瓶・手付瓶・段皿・香炉等が出土している。原川遺跡で出土したのは碗・稜碗・皿・香炉の破片であることから、瓶・手付瓶・段皿等を使用した人々の存在が梅橋北遺跡との間に考えられる可能性がある。

緑釉陶器の出土は現在までのところK-90段階のものはほぼ官衙関係の遺跡に限られているようである。奈良時代から引き続き発展していたとすれば当然検出されてよいはずの緑



第38図　緑釉陶器出土グリッド分布図

釉陶器が坂尻遺跡には薄く、むしろ原川遺跡やその下流にあたる梅橋北遺跡に一定の分布範囲を持ちながら多く検出されることは、今後のこの地域の調査の進展による所が大きいが奈良時代にはいると郡衙の機能が坂尻遺跡の東南側、現在の原川遺跡から梅橋北遺跡にかけての地帯に移動している可能性を強く示すものである。

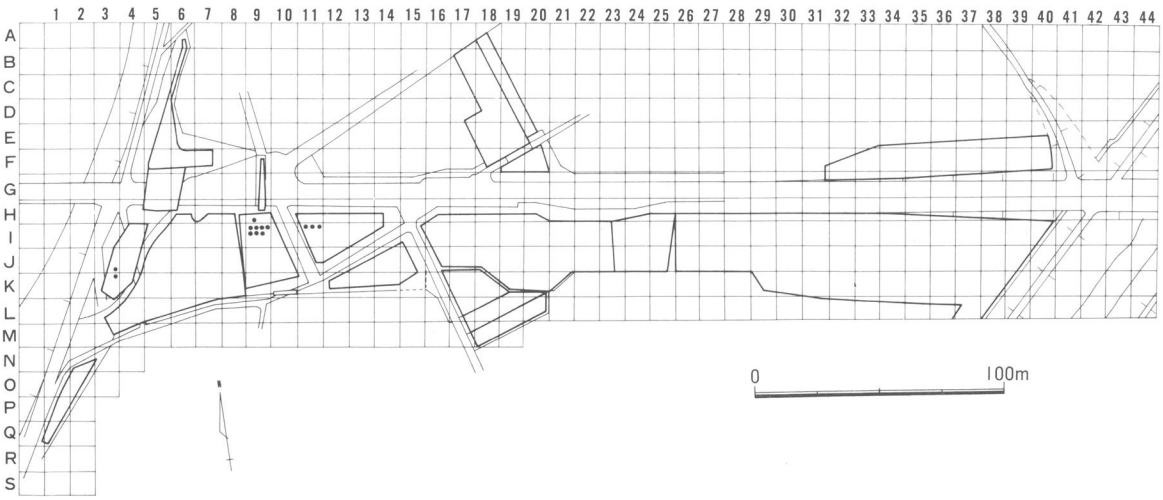
郡衙機能の移動

第4節　墨書土器の分布

原川遺跡から出土している墨書または墨痕のある土器は13点ある。第3表にみるようにそのうち須恵器は1点であり、他は灰釉陶器である。出土地区は3区が8点、4区が3点、6区が2点と3～4区に集中する。その中でも3区竪穴住居ＳＢ３０１とその周囲の遺構に7点が集中している。

以上のように原川遺跡から出土している墨書土器のうち文字が判明できるのは1の「寺カ」、4の「ろ」、9の「東カ」、10の「ル」、13の「日」または「日□カ」、である。

1の「寺カ」は底部中央内面に位置するため一文字であろう。坂尻遺跡や梅橋北遺跡では「寺」は出土していない。県内で「寺」または「寺カ」と書かれた墨書土器が出土している遺跡は『静岡県史資料編4古代』(3)の別冊土器墨書・刻書によれば、奥多米廃寺1点(湖西市／灰釉系陶質土器、平安前～中期）・伊場遺跡2点（浜松市／いずれも灰釉系陶質土器、平安中期、大溝）・梶子遺跡1点(浜松市／須恵器（高台有)、奈良後期、Ｂ5区表土）・鍬影遺跡3点（磐田市／内2点は須恵器に2字書かれたもの、1点は灰釉陶器（高台付皿、平安時代）・国府台遺跡1点（磐田市／ただし2字のもの、須恵器、奈良か）・遠江国分寺跡1点（磐田市／□「寺カ」、須恵器、奈良末、ＳＫ1）・郡遺跡1点（藤枝市／□「寺カ」、須恵器、7世紀後半～中葉）・宮ノ上遺跡1点（富士市／土師器、平安中期）・御幸町遺跡1点（沼津市／土師器、平安前期、住居跡出土）である。このように「寺」の文字の出土する遺跡は寺院または官衙関係とみなされる遺跡に限定されている。「寺カ」の書か



第39図　墨書土器出土グリッド分布図

れた須恵器は遺物の年代では奈良時代後半と考えられる。坂尻遺跡からは奈良時代の墨書土器が多く出土しているのに対して、梅橋北遺跡からは平安時代の墨書土器が多数出土している。これについては時代による郡衙の中心の変化も考えられている。両遺跡を含めた郡衙の広がりの中で原川地区の位置付けを考えるときに、奈良時代後半のこの地区に郡衙またはその周辺を構成する寺院またはその関連施設の存在が考えられる可能性がある。

4の「ろ」は一文字である。吉祥句または人名の省略のいずれの可能性を持つかについては『梅橋北遺跡』で佐藤正知氏が論じているので参照されたい[4]。「ろ」の墨書は梅橋北遺跡で2点、坂尻遺跡で1点出土しており、いずれも灰釉陶器で平安時代中期～後半に属するものであることから、三地点の共通性を示すものである。

9が「東」とすると、梅橋北遺跡から出土した文字にはない。坂尻遺跡では一字または二字の墨書の中に「東」が使われたものが4点あるが、いずれも須恵器で奈良時代のもので二文字の場合はいずれも家と結び付いている。出土地点は郡衙全体の中では東に当たることから方位またはその方位に存在する家または人を表す可能性もある。

10の「ん」はほぼ同じ文字が沼津市御幸町遺跡から出土している土師器の坏に書かれている。記号であるか文字であるか不明であるが類似した墨書が坂尻遺跡の須恵器「市」や梅橋北遺跡の灰釉陶器「ん」にみられる事から、やはり三地点の共通性を示すものである。

12の「日」または「日□」の文字は梅橋北遺跡では出土していないが、坂尻遺跡からは多くその類例が出土している。坂尻遺跡のものは大部分が奈良時代の須恵器に書かれたもので、二文字のものには「日根」、三文字のものには「日根大」等がある。また灰釉陶器に書かれたものは数は少なく一文字のものが多い。前述の『静岡県史』の土器墨書・刻書によれば、静岡県内で出土した墨書土器の内、「日」の文字を使用したものは国府台遺跡（磐田市）の「大上日」の例等でごく少なく、ほとんどは坂尻遺跡出土のもので、この一帯を示すため特に使われている文字である可能性が強い。『袋井市史』では佐野郡内の日根郷を北原川に推定し、また坂尻遺跡から出土した「日根駅家」の存在との関連性を指摘している[5]。奈良時代についてみると坂尻遺跡はこの時期の遺構・遺物も多く、また墨書土器で「日根」や「日根駅家」を出土しているのに対し、東側の原川遺跡ではこの時期の遺構・遺物を含むが墨書土器は1点である。また南下流の梅橋北遺跡からはこの時期の遺物も少なく墨書土器も出土していない。これらの事は奈良時代に坂尻遺跡周辺に日根駅家が置かれ、日根郷の中心がこの一帯を指していた事が限定できる可能性を示唆するものである。これに対し平安時代の坂尻遺跡は灰釉陶器の出土量が減少し墨書土器も少ないが、その中で「日」等の文字は残る。一方東側の原川遺跡では平安時代の遺物が多く、その中で最も西端に当たる6区で、坂尻遺跡と隣接する地区から灰釉陶器に書かれた「日」または「日□」の墨書土器を出土している。大量の灰釉陶器と多くの墨書土器を出土している南下流の梅橋北遺跡からは、約90点余りの墨書土器の中に「日」の文字は見あたらない。これらの事は平安時代になると日根郷の中心地点がより東に移動し現在の原野谷川の両岸、北原川から原川を含む地区に存在した可能性を示している。

日根駅家

第5節　平安時代後期以降の遺構・遺物

3・4区ではO-53号窯式併行期まで遺構・遺物の広がりが認められた。ところがこれらの調査区では13世紀にはいると、山茶碗や小皿の出土は著しく減少する傾向が認められるが、1・6区では戦国時代以降の陶磁器に比べ絶対量は少ないといえ、13世紀の山茶碗は

認められる。ところが遺構を伴っていないので、どのような生活が営まれたか判断することは不可能であるが、鎌倉時代まで集落の一角であったことはほぼ間違いないであろう。また遺物の分布は調査区の西側に多い傾向にあった。10区から当該期の陶器片が出土しているがその量はきわめて少ない。14区では遺構出土の当該期資料が認められ、包含層遺物は他の調査区に比べやや多い傾向にある。おそらく原川遺跡で西側１・６・９・12区で認められた集落とは別の集落と推定されよう。今回の調査範囲では14世紀代にはいると遺構・遺物はほとんど認められなくなったといっても過言でない。この地域が新たな性格を持った「原川町」として近世の舞台に登場してくるのはこれ以後であり、それは次の『原川遺跡Ⅳ』の中に報告される予定である。

注

（１）坂尻遺跡の内容については一連の概報・報告書のほか袋井市教育委員会　吉岡伸夫氏の教示による。
（２）平野吾郎・佐野五十三・佐藤正知『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988
（３）『静岡県史　資料編４　古代』静岡県　1989
（４）（２）に同じ　Ｐ46～Ｐ56
（５）『袋井市史　通史編』袋井市史編纂委員会　1983

主　要　参　考　文　献

（敬称略）

・阿部義平　『官衙』ニュー・サイエンス社　1989
・　『袋井市史　通史編』袋井市史編纂委員会　1983
・平野吾郎・佐野五十三・佐藤正知『梅橋北遺跡－昭和62年度　二級河川太田川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988
・斎藤　忠・平野吾郎他『竹林寺廃寺跡』島田市教育委員会　1980
・中島郁夫　『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』磐田市教育委員会　1981
・守屋雅史　「遠江清ヶ谷古窯跡群における灰釉陶器の展開」『大阪市立美術館紀要』4　1984
・松本一男他　『梅橋北遺跡』掛川市教育委員会　1985
・平野吾郎・山田成洋　『川合遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所　1986
・渋谷昌彦他　『居倉遺跡』島田市教育委員会　1987
・平野吾郎　「東海地方における郡衙推定遺跡とその立場について」『考古学叢考』中巻　斎藤　忠　頌寿記念論文集刊行会　1988
・　『静岡県史　資料編4　古代』静岡県　1989
・　『史跡出雲国山代郷正倉跡』島根県教育委員会　1981
・小泉袈裟勝　『秤（はかり）』ものと人間の文化史48　法政大学出版局　1982
・宮本佐知子　「日本古代のおもり」『八雲立つ風土記の丘No.99－特集「出雲国庁跡」出土分銅について』島根県立八雲立つ風土記の丘　1989.12
・宮本佐知子　「秤のおもり」企画展『発掘　大阪城』大阪府立泉北考古資料　1990.1
・文部省史料館『史料館所蔵民族資料図版目録第4巻－日本篇（商工関係用具Ⅰ）』文部省　1971

特論１

梅橋北および原川遺跡出土の緑釉陶片の化学分析

名古屋大学名誉教授　山崎　一雄

１．試料

梅橋北遺跡出土の陶片はNo.12（ＴＵＫ3-3層／125－ｂ）稜碗の破片。釉は濃灰緑色・胎土は灰色で硬質。No.26（ＴＵＫ3-3層／157－ｄ）碗 。釉および胎土の色などはNo.12と同じ。

原川遺跡出土の陶片は４片でNo.５（ＴＨＧ　１区Ｌ-5／312⑤）稜碗の破片。釉は黄橙色・胎土は黄橙色を呈する。やや軟質。No.９（ＴＨＧ　１区Ｌ-5／312⑥）稜碗の破片。釉は黄緑色、胎土は灰白色で軟質。No.15（ＴＨＧ　３区ＳＢ301／1112）碗の破片。釉は黄緑色、胎土は灰色で硬質。No.35（ＴＨＧ 14区Ｂ　Ｉ-32／7050）碗の破片。釉は淡黄緑色・胎土は灰色で硬質。

２．釉の化学分析

陶片の表面の釉のみをダイヤモンド工具で削り取り、それを化学分析の試料とした。釉は全成分の分析を行うだけの量が得られないため、主成分である鉛と着色に関係がある銅と鉄のみを分析した。

釉は弗化水素酸と王水で分解した後、塩酸溶液として、誘導結合プラズマを光源とする発光分光分析法で分析した。結果は次の表の通りである。

第５表　釉の化学分析値

遺跡地名	梅 橋 北		原　　川			
試料番号	12	26	5	9	15	35
試料分析量（mg）	12.49	11.13	11.14	11.14	10.78	11.41
分析値（%）						
酸化鉛（PbO）	33.1	57.4	33.2	44.1	30.4	13.3
酸化鉄（Fe_2O_3）	1.22	1.08	0.96	0.69	1.06	1.34
酸化銅（CuO）	0.24	0.53	0.17	0.36	0.10	0.19

（原川遺跡の試料番号は第２表の通し番号に対応している。）

以上の他に各試料とも微量の錫が不純物として含まれている。

試料12と26の釉の色は黒味を帯びているが、これは土中において釉中の鉛が硫化水素と反応して硫化鉛が生成しているためである。これは釉の上に希塩酸を１滴落とすと強い硫化水素臭が感知される事から判る。楢崎彰一氏によれば平城宮跡においても井戸中で発掘される緑釉は黒色を呈するとの事であるが、同じ原因によると思われる。硫化水素は地下水中の硫酸塩が無酸素状態の土中で還元されて生成するものである。

３．胎土の焼成温度

Ｘ線回折法により胎土粉末中に存在する鉱物を調べ、焼成温度を推定した。実験条件と結果は次の通りである。　Ｘ線管球：銅、電圧：30kV、電流：10mA。

検出された鉱物はNo.12－石英，ムライト（少量），クリストバライト（少量）。No.26－石英，ムライト（少量），クリストバライト（少量）。No.５－石英，ムライト（少量）。クリストバライトは生成していない。No.９－石英，カリ長石（微量）。ムライトは生成していない。No.15－石英，ムライト（少量）。No.35－石英，ムライト（少量）。クリストバライト（少量）。この結果から焼成温度は高い方から35＞12、26＞

5、15＞9となり、ムライトとクリストバライトが生成している試料35、12、26は約1200℃、ムライトのみが生成している5と15は約1100℃と推定される。クリストバライトとムライトの両者が生成せず、カリ長石の一部が未分解で残っている9は最も焼成温度が低く、1000℃以下と推定される。

4．考察

前項2で触れたように試料12と26とが土中において硫化水素によって釉の一部が硫化鉛に変化して黒色を呈していることは、出土した梅橋北遺跡の地形と関係があり、水没していたものと推定される。この釉の黒化は二次的なもので、使用されていた当時は緑色であったと思われる。

次に原川遺跡出土の試料5は釉、胎土ともに黄橙色を呈するが、これは焼成の際、窯内の雰囲気が酸化状態となり、含有されている鉄が酸化されたためと考えられる。また試料35の含鉛量は13％で著しく少ない。筆者[1]が現在まで分析した試料約90個の中、含鉛量40％以下のものは僅か1個（38.9％）に過ぎないから、今回の試料5、15、12および35はこの40％以下に入り、いずれも含鉛量の少ない釉である。従来もっとも多く存在しているのは含鉛量40～60％の釉で約半数に達する。今回の試料26と9がそれに相当する。

実験に当たり、X線回折の実験は奈良国立文化財研究所保存科学実験室の装置を借用した。同実験室の沢田正昭氏、肥塚隆保氏ならびに、釉の分析を援助された名古屋工業大学の飯田忠三教授研究室の小島　功助教授、内田哲男博士、広瀬くに子氏に感謝する（1988・11・12）。

註

(1)　山崎一雄　「本邦出土の緑釉陶器の化学的研究」『三上次男博士喜寿記念論文集』
陶磁編　P867　（1985）平凡社

訂正

梅橋北遺跡の報告書を作成する際、本論文の成果を先に引用しましたが、その際、当方のミスによる誤植がありました。

『梅橋北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988　を次の様に訂正願います。

P41　上から13行目（誤）地下水中の硫化鉛→（正）地下水中の硫酸塩

（静岡県埋蔵文化財調査研究所）

特論 2

原川遺跡出土分銅の材質調査について

帝京大学山梨文化財研究所　鈴木　稔

1．はじめに

静岡県掛川市原川遺跡出土分銅（後述の「試料１」）の材質調査を行ったので報告する。この調査の主目的は分銅の材質に関する情報を得て、時期決定の一材料とすることにあった。この分銅の遺存状況が極めて良好であったことから、一部分を掻き取って供試するといった分析手法には無理があると思われたので、ほぼ完全な非破壊分析法とされている蛍光X線分析法を採用した。この非破壊という条件のおかげで近隣遺跡出土の分銅等の貴重な試料も併せて測定させて頂けたことは幸いであった。以下にこれらの分析結果について述べ、若干の所見を付け加えたい。

2．分析結果

＜測定方法について＞

使用した装置は国立歴史民俗博物館設置のフィリップス社製ＰＶ9550エネルギー分散型蛍光X線分析装置である。エネルギー分散型蛍光X線分析の原理についての解説は成書に譲るが、今回の測定操作に関して言えば、①ナトリウムからウランまでの多元素が同時に測定でき、１回の所用時間が数分間程度なので短時間に大量の試料を測定可能であること　②極めて高感度の半導体検出器を用いているのでX線強度の点で利点が多く、測定値が試料の形状に左右されにくいため前もって溶解あるいは研磨する等の処理なしでも測定可能であること　③前項の利点からX線照射量が少なくて済み、試料に与えるダメージがほとんどないこと、また、照射面積を絞って任意の位置を測定することが比較的容易なこと等が大きな特色である。

近年、機器分析におけるコンピュータの利用はめざましいものがあり、この装置においても高度な自動化がはかられている。測定者は試料室に試料を置くだけで、標準試料なしでも構成元素濃度の計算まで機械がやってくれるのでまことに便利である。

ただし、蛍光X線分析は表面近くの元素情報を得るためのもので、全体が同じ元素組成を持つとは保証できない。その表面についても今回の試料には付着物や腐食部分があり、5 mmφのコリメータでX線を絞っても照射野は約 7 mmφあるため試料の置き方で付着物の影響を受け測定値にバラツキが生じた。そこで、元素の絶対的濃度をもって論ずることは見合わせ、青銅製品の主要原料とされる銅、錫、鉛の相対的比較にとどめた。第 6 表に分析条件を掲げる。

第 6 表　分析条件表

X線管	電圧	電流	測定時間	コリメータ	フィルター	雰囲気
Rh	35kV	50 μA	100秒	5 mmφ	なし	真空

＜試料について＞

第 7 表に供試した青銅製品 5 点のデータを掲げた（第37図も参照のこと）。いずれも分析のための特別な処置は施さなかった。試料 1 と試料 2 はクリーニング前だったためわずかな泥が付着していた他、白いポスターカラーで底面に注記があった。緑色の腐食部分は見られなかった。試料 3 は保存処理済みで、アクリル系と思われる合成樹脂によるコーティングがされていた。試料 4 の底面には埋蔵環境中で付着

したと見られる鉄の腐食生成物があった。試料３・４ともに緑色の腐食部分は見られなかった。両者は形態的に相当似通っている。試料５はほぼ全面が緑色の腐食生成物におおわれていた。

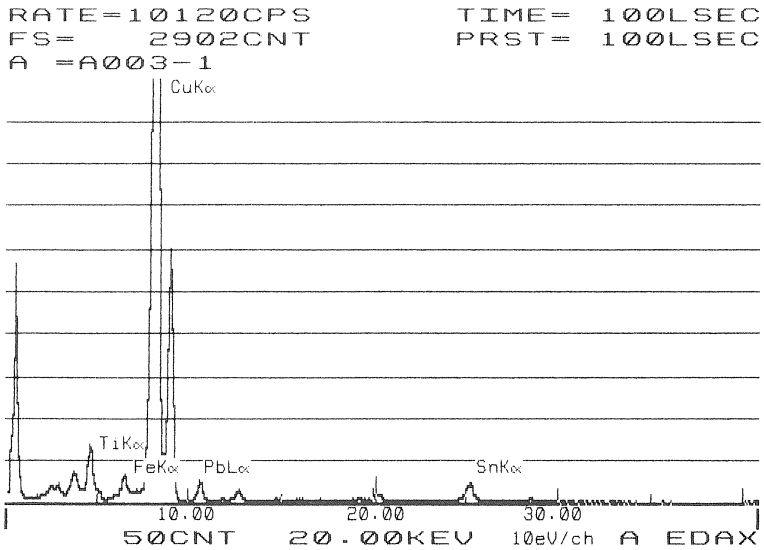
測定箇所には各試料ごとに、なるべく凹凸の少ない面を選んだ。このため付着物や腐食生成物が測定範囲に入ることもあり、この場合は別の部分で測定しなおした。しかし、測定のバラツキは少なくないものと思う。

第７表　分析試料表

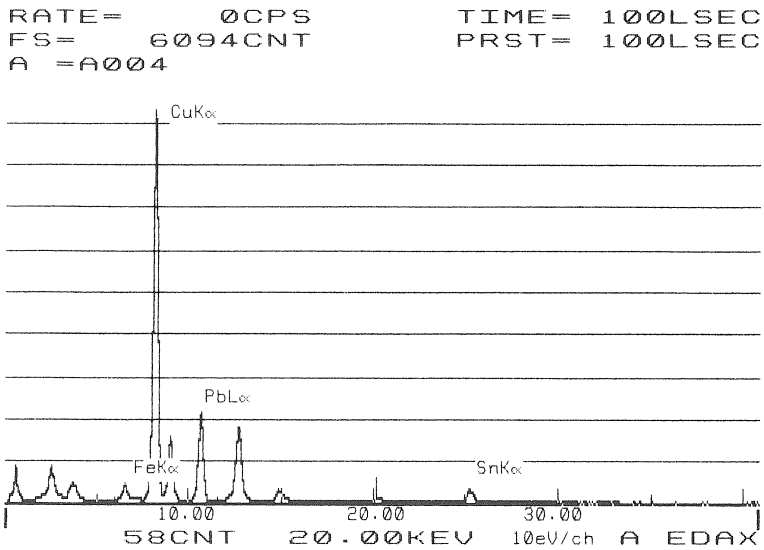
試料番号	試料名	出土遺跡名	備　　考
試料１	分銅	静岡県掛川市原川遺跡	No.1259　４区　第２面ＳＰ421(80)
試料２	銅鋺	静岡県掛川市原川遺跡	No.5671　ＳＤ1207(8)
試料３	分銅	静岡県袋井市坂尻遺跡	今回の調査のため袋井市より借用
試料４	分銅	静岡県藤枝市山廻遺跡	今回の調査のため藤枝市より借用
試料５	銅環	静岡県藤枝市下藪田遺跡	今回の調査のため藤枝市より借用

＜分析結果について＞

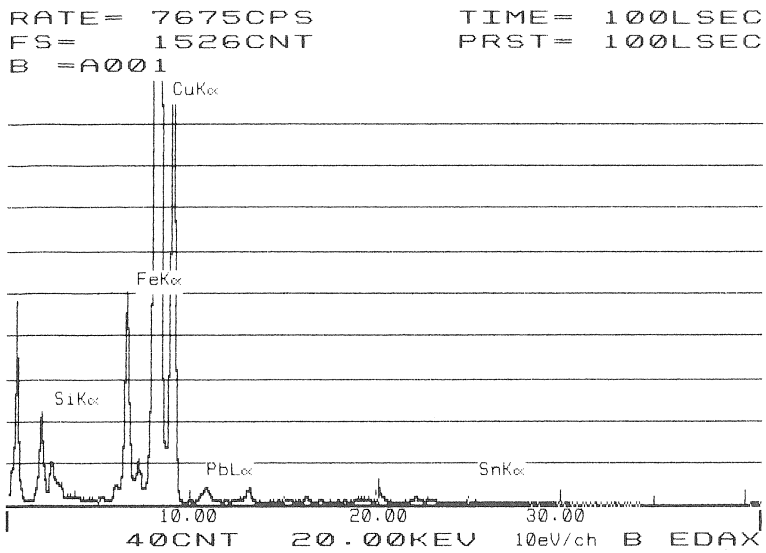
各試料の蛍光Ｘ線スペクトル図を図40～44に示す。これらのグラフは各試料ごとにどのような元素が含まれているかを見るためのもので、例えばある元素についてグラフ間で比較しても含有率の大小が求



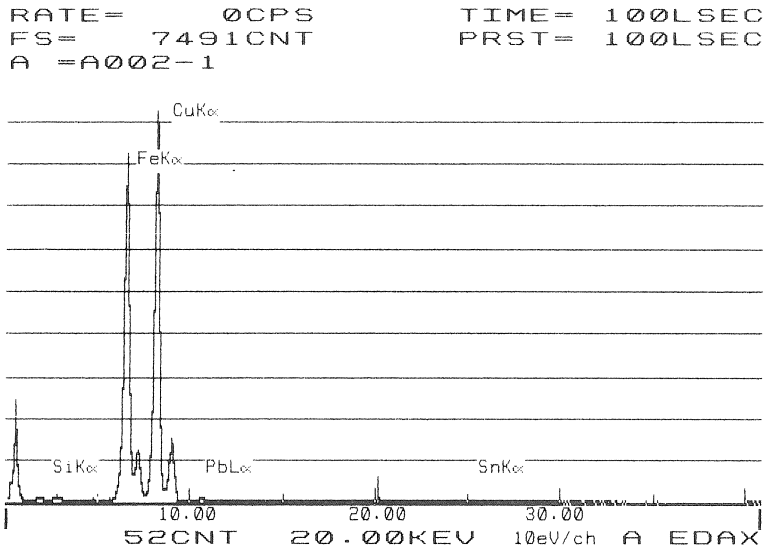
第40図
蛍光Ｘ線スペクトル図
試料１



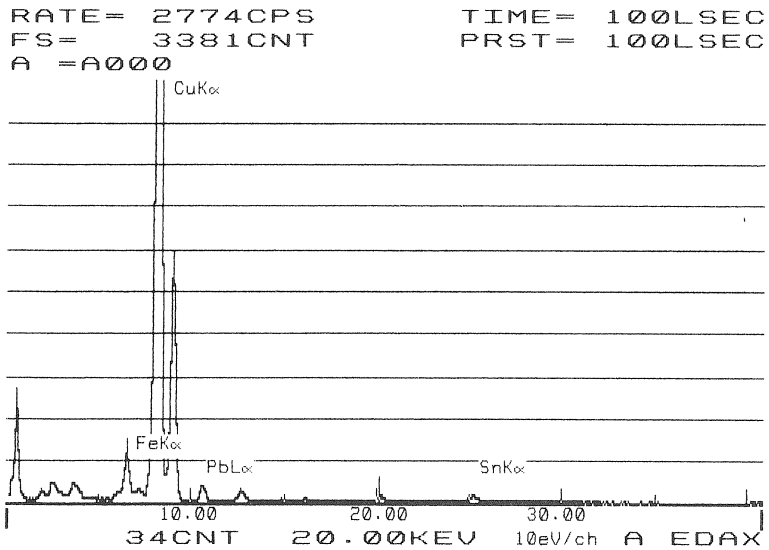
第41図
蛍光Ｘ線スペクトル図
試料２



第42図
螢光X線スペクトル図
試料 3



第43図
螢光X線スペクトル図
試料 4



第44図
螢光X線スペクトル図
試料 5

められるとは限らない。このような分析を定性分析と呼ぶ。

各試料とも、銅、錫、鉛が見られるほか、付着した土に由来すると推定されるケイ素、鉄も認められた。試料1（図40）のチタンは注記に用いたチタニウムホワイトであろう。また、試料4で鉄が目立っているのは肉眼でも認められた表面付着の鉄銹の影響だろう。試料3のケイ素もやや目立つが、金属製品の保存処理に艶消し剤として二酸化ケイ素の微粉末を用いることがあるのでその影響かも知れない。

定性分析の結果、各試料は銅、錫、鉛を主要元素とする青銅製品と考えられたので、それらの元素の蛍光X線強度の相対値を比較してみたところ（第8表）、分銅3点が銅に対して錫・鉛の相対値が極めて小さい試料3・4のグループと、それに比べて錫・鉛の値がかなり大きい試料1とに別れた。銅環はその中間に入り、銅鋺は錫も多く、鉛は特に大きい値をとった。この分析結果は各試料の各元素の絶対的含有率を示すものではないが、材質の差をある程度反映しているものと見てさしつかえないと思われる。このことから、今回調査した分銅・銅環・銅鋺の材質には互いに相当な差があること、分銅には比較的純銅に近いグループ（試料3・4）と、それとは異なるもの（試料1）が存在するらしいことが指摘できよう。

第8表　X線強度の比較表

試料番号	試料名	X線強度			銅を1000とした時の相対値		
		銅	錫	鉛	銅	錫	鉛
試料1	分銅	1854.47	29.44	37.76	1000	15.9	20.4
試料2	銅鋺	1068.78	41.16	256.95	1000	38.5	240.4
試料3	分銅	2060.78	0.85	8.09	1000	0.4	3.9
試料4	分銅	2079.28	0.31	4.44	1000	0.1	2.1
試料5	銅環	2352.21	11.67	24.56	1000	5.0	10.4

3．　問題点の指摘

今回の調査結果についていくつか気付いたことを述べる。

・定性分析に対して元素の含有率を求めるのを定量分析と呼ぶ。蛍光X線分析装置を用いて定量分析する場合、一般には標準試料の測定結果との比較で相対的に含有量を決定するという方法をとるが、近年は、未知試料等の場合標準試料なしでもかなり信頼できる定量値が得られるようになりつつある。しかし、文化財の場合は一般に測定上の制約が多く、再現性の高い定量値を求めることは現在でもなお容易でない。特に、複数の測定者がそれぞれ独自に調査したデータをあとから第三者が比較検討するといった場合、困難が多い。なんらかの標準化が実現され、各種の測定データを相互に検討できるようになることが望まれる。

・文化財のなかでも出土青銅製品の材質分析は問題が多いとされているようである。主要なのは、合金自体の偏析（銅、錫、鉛が完全に均一ではなく、いわば斑構造になっている）と腐食による銅の溶出（このため表面を測定すると、見かけ上銅濃度が低下する）の2点だろう。しかし、溶液にしたり研磨したりして試料化することが不可能な場合が多いので、データを検討するときこれらの問題点を念頭に置いて慎重に考察するというしか方法はないように思う。

・今回の結果のうち、試料5は相当腐食が進んでいるように見受けられるので、材質本来の錫・鉛の相対値はここに表れている数値より相当低い可能性がある。

・しかし、試料1と2は肉眼観察の限りでは安定した表面状態にあるように見え、表面部分の錫・鉛の相対量がある程度腐食によって増加しているとしても、本来の錫・鉛含有量が他試料より多かった可能性は大きいと思われる。但し、今回の結果からは定量的な論議はできない。

・試料3と4の測定結果を相互に似ていると評価できるかどうかやや疑問が残るが、同じ装置を用い

た他の青銅製品の測定結果との比較ではかなり近いように思える。しかし、錫と鉛の比をとるとかなり差があることになる。また、これらの錫・鉛が人為的に混ぜられたのか、あるいは不純物として混入したのかは不明である。

・青銅製品の製造技法と合金の成分比率には合理的な関係があるものとされているが、個々の遺物の測定値と一般的な比率が一致するかどうか、また、時代的変化の有無等が明らかにできれば大変興味深い。

・これは仮説であるが、分銅には純銅に近く整形しやすいタイプのものと、錫・鉛をかなり含み硬く、精巧な文様やひだを鋳出したタイプとがあるのかも知れない。これが用途によるのか、時代差を示すのか筆者には判断できないが、試料３・４が前者、試料１が後者に属するのではないかと思われる。今後、測定例が増えてくることに期待したい。

・試料１の分銅については国産か渡来品かを知りたいという希望もあったが、今回の調査では明らかにできなかった。おそらく別の分析手法が必要であろう。

・自然の付着物以外に注記や保存処理に由来する人為的な付着物が測定された。今回の測定には別に支障なかったが、遺物表面の人工物付着に関しては検討する必要がありそうである。

４．まとめ

分銅をはじめとする出土青銅製品の蛍光Ｘ線分析の結果、銅に対する錫・鉛の相対値により４群に分かつことができた。今回の調査目的であった分銅（試料１）の時期決定に関する直接的手がかりは得られなかったが、他の分銅とは異なる傾向が認められた。今後、各種分銅の材質分析の進展が期待される。

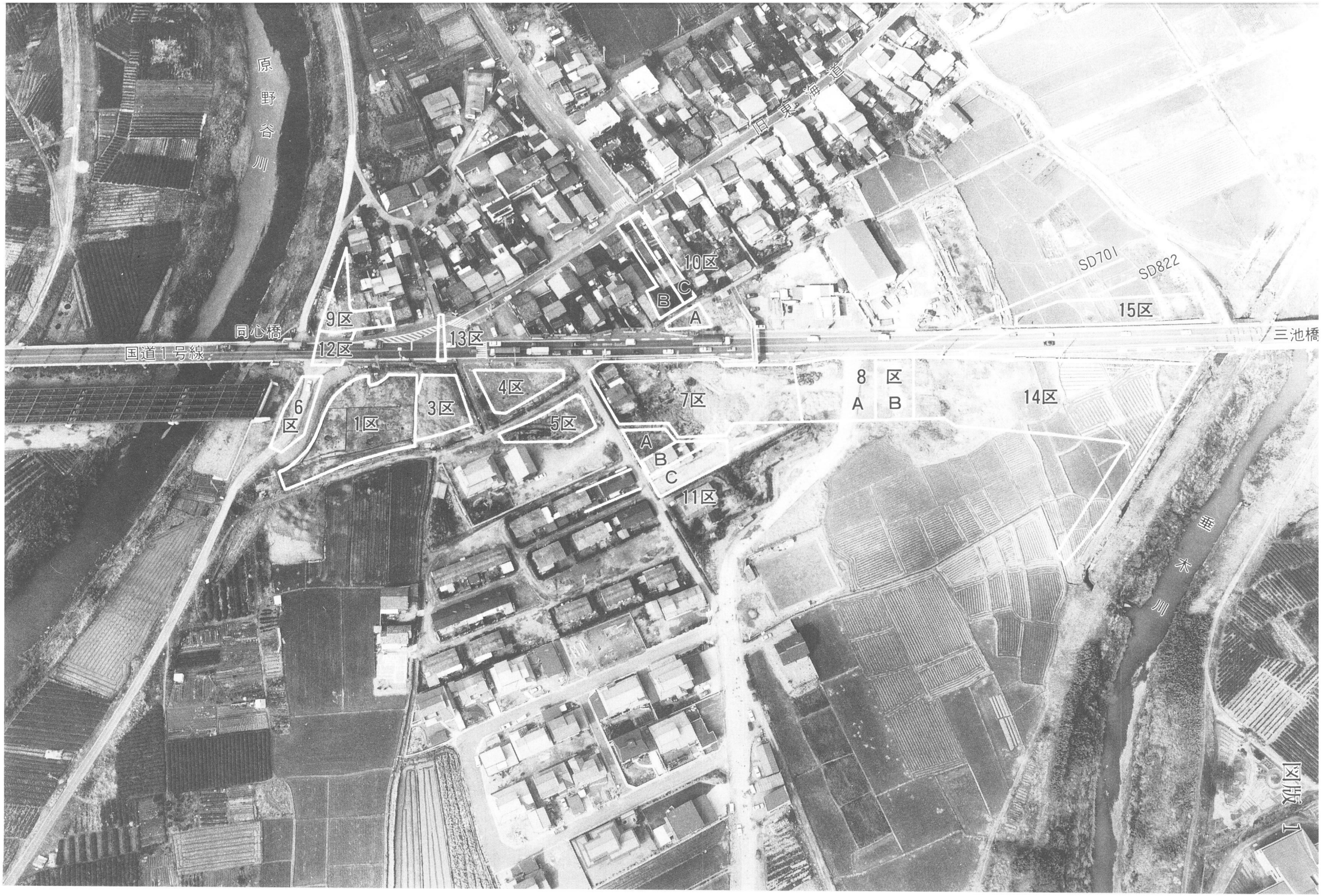
（測定に当たり国立歴史民俗博物館情報資料研究部の田口勇教授並びに斎藤努氏のご指導・ご協力を賜りました。また、袋井市、藤枝市の関係各位には貴重な試料の測定の機会を与えて頂きました。ここに記して深甚の感謝を捧げます。）

＜参考文献＞

合志陽一・佐藤公隆『エネルギー分散型Ｘ線分析　半導体検出器の使い方』学会出版センター（1989）
平尾良光・馬淵久夫「東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査」『都田地区発掘調査報告書　下巻　本文篇』㈶浜松市文化協会（1990）
鈴木　稔「本郷遺跡出土陶磁片の釉成分分析について」『海老名本郷（Ⅶ）』本郷遺跡調査団（1989）

図　　版

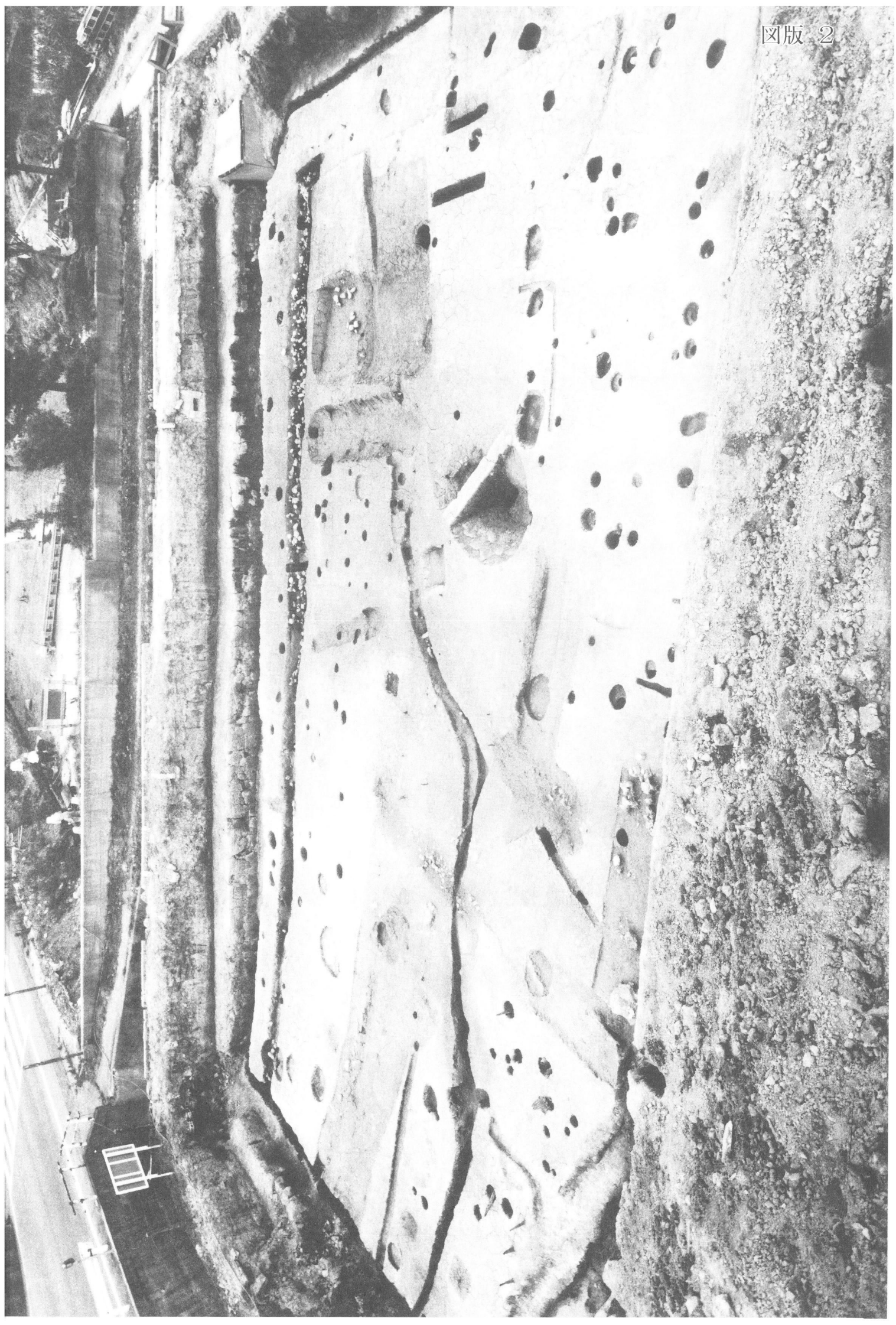
図版１　奈良・平安時代面発掘区位置図
（航空写真　昭和58年撮影）

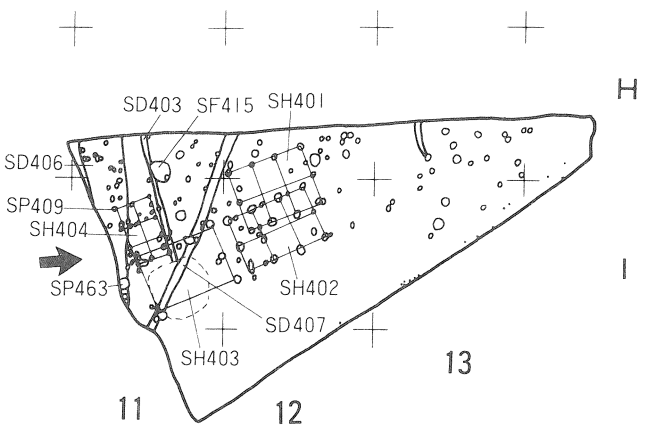

原野谷川
旧東海道
10区
C
B
A
SD701
SD822
15区
9区
同心橋
13区
三池橋
国道1号線
12区
8区
A B
4区
7区
14区
6区
1区
3区
5区
A
B
C
11区
垂木川

図版1

図版２　３区　奈良・平安時代面全景

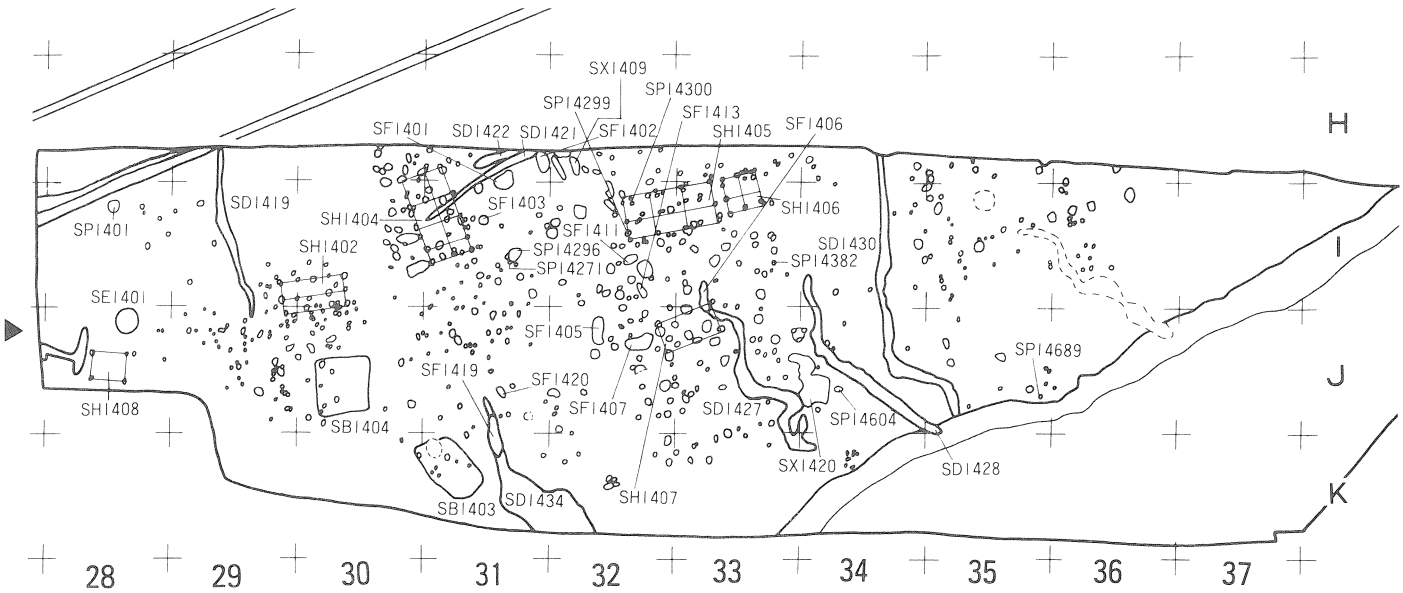
図版 2





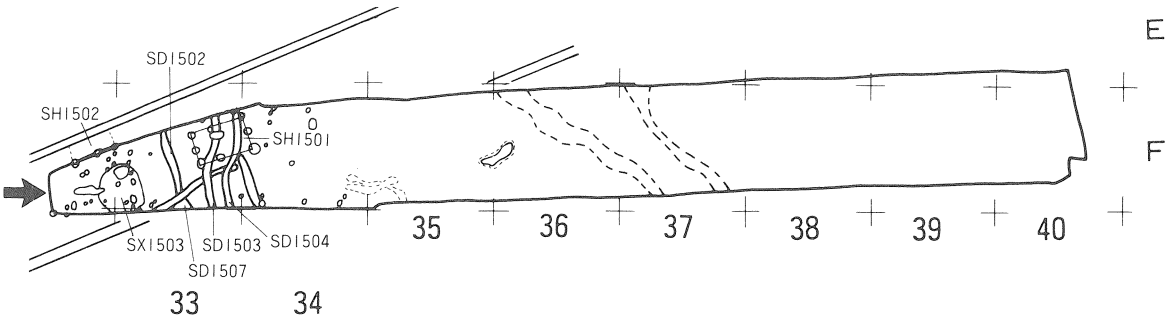
図版３　４区　奈良・平安時代面全景

図版 3

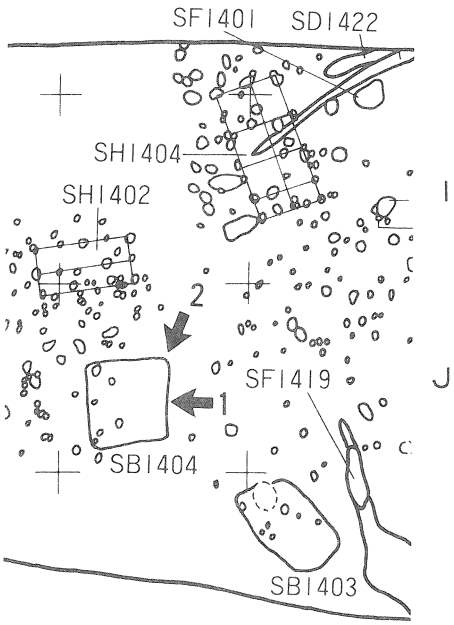


図版４　14区　奈良・平安時代面全景

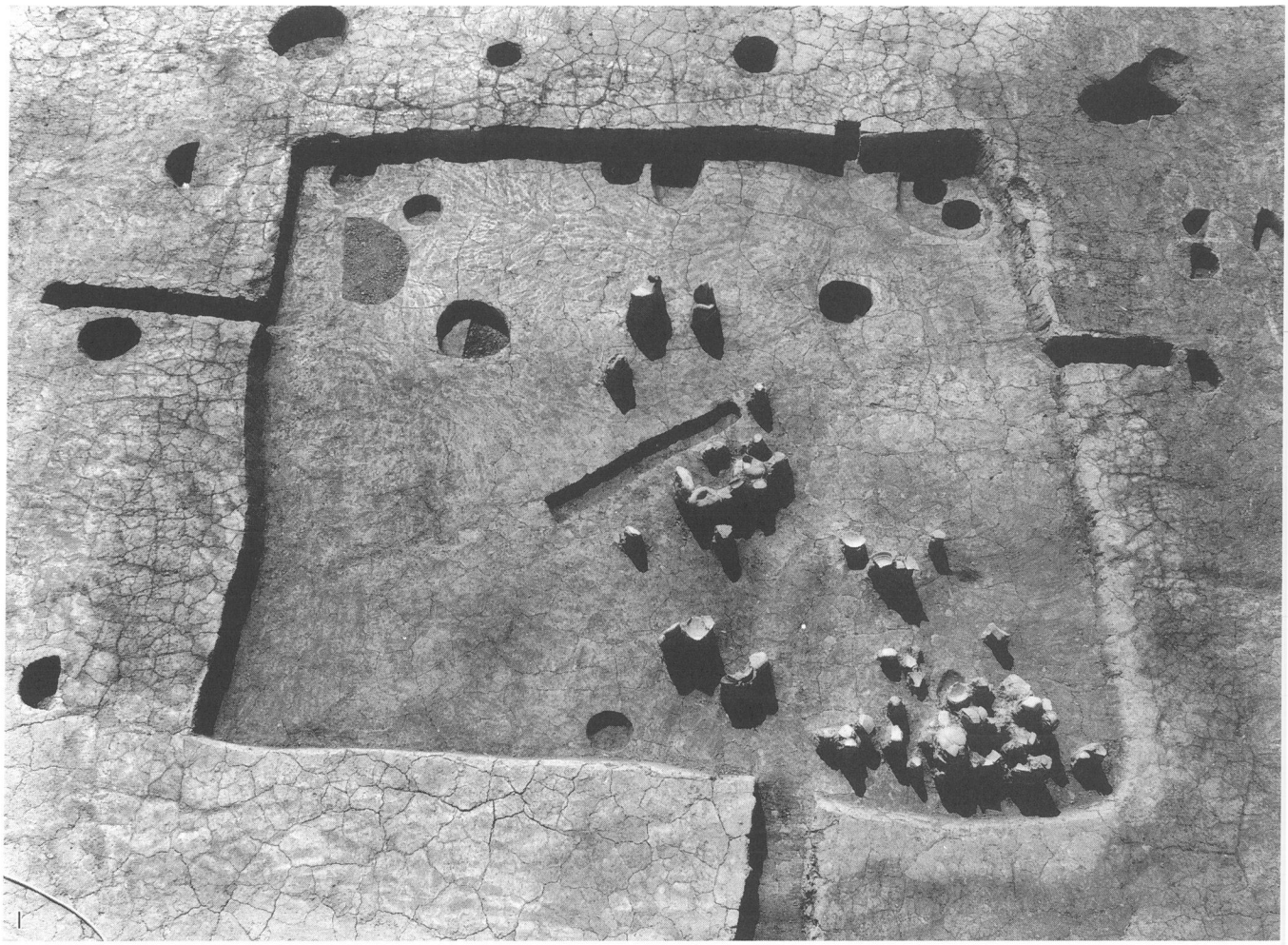
図版 4



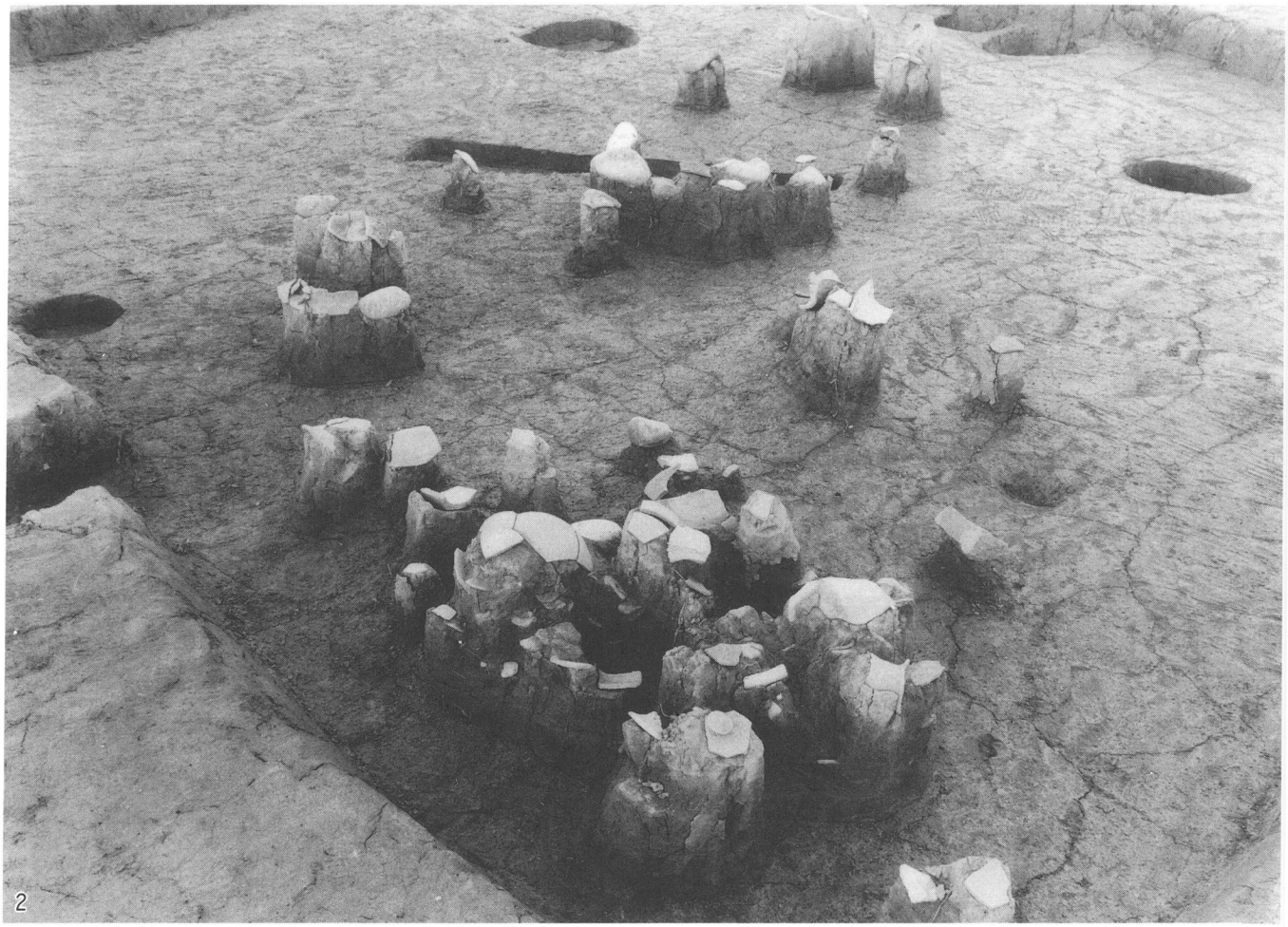
図版5　15区　奈良・平安時代面全景



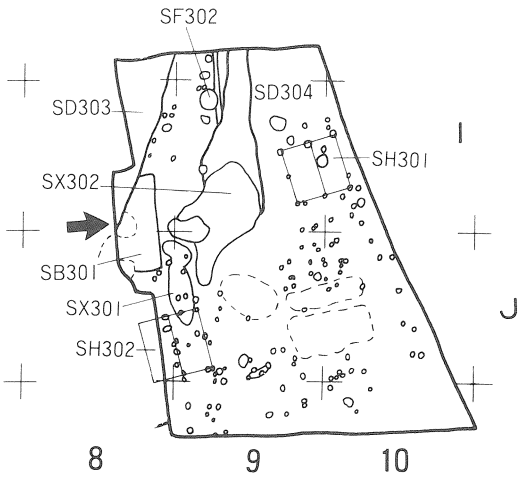
図版 6　竪穴住居
1.SB1404
2.遺物出土状況



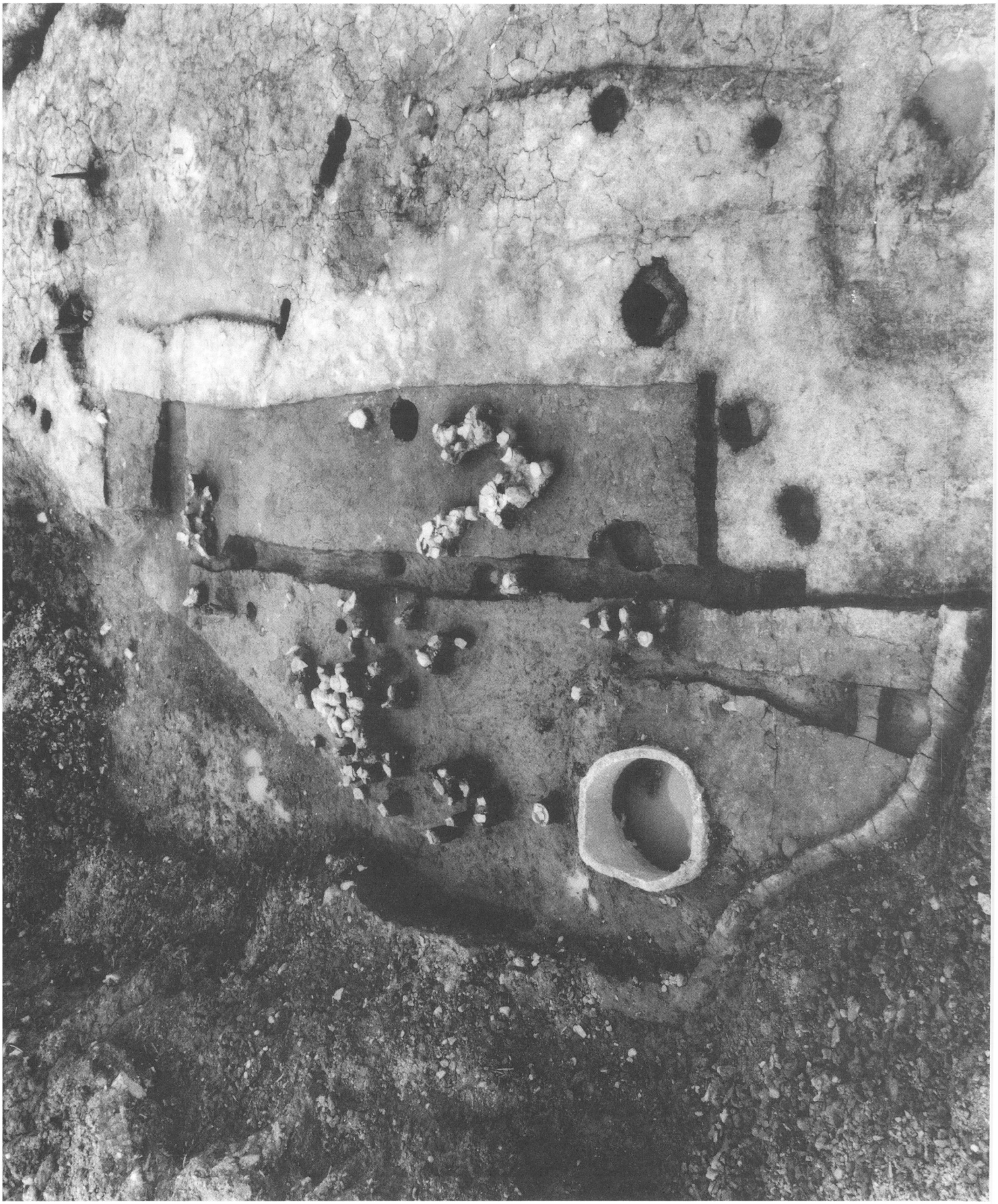
1



2



図版７　竪穴住居
SB301

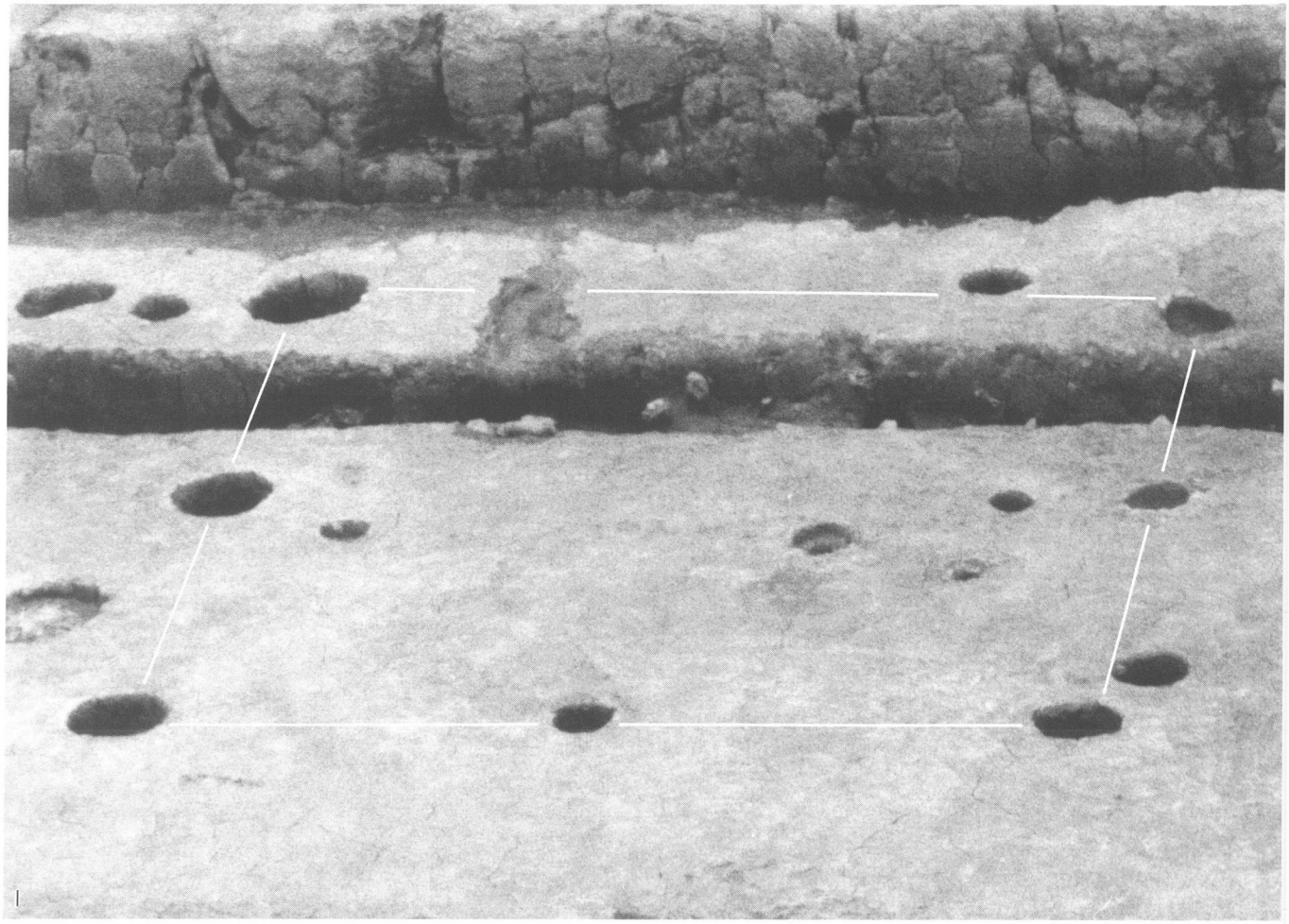


図版８　竪穴住居
SB301遺物出土状況

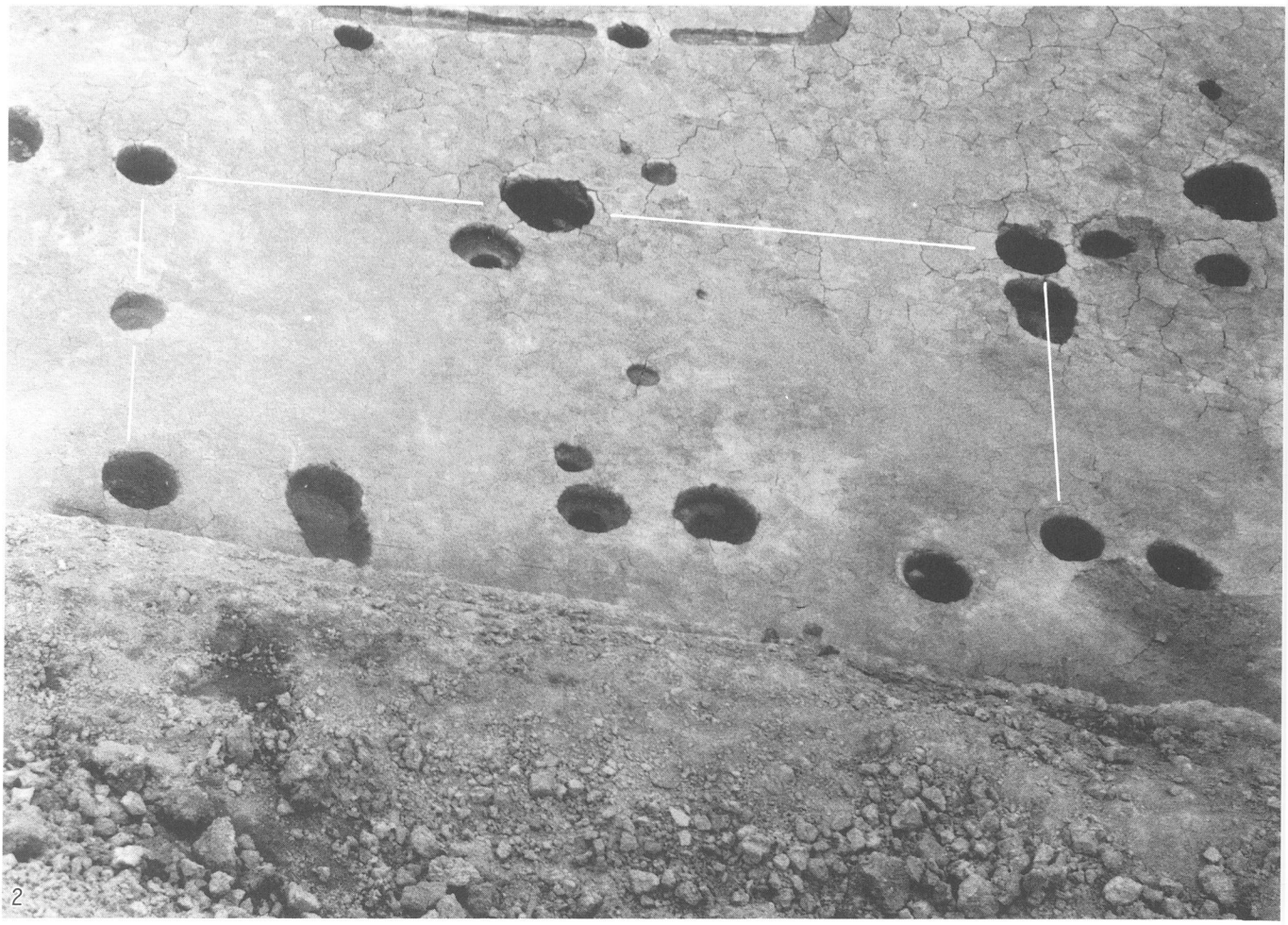
1

2

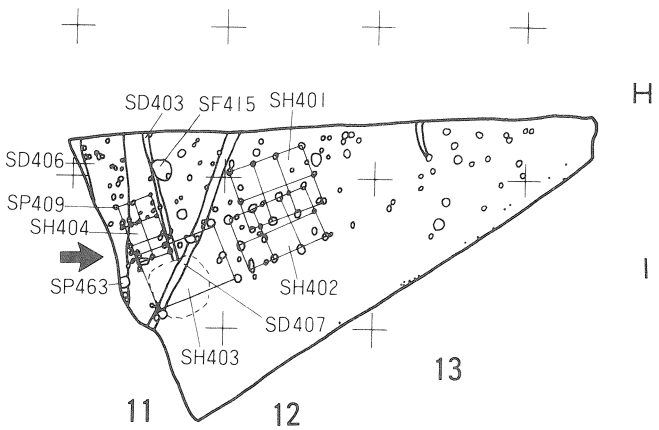
図版 9　掘立柱建物
1.SH301
2.SH302



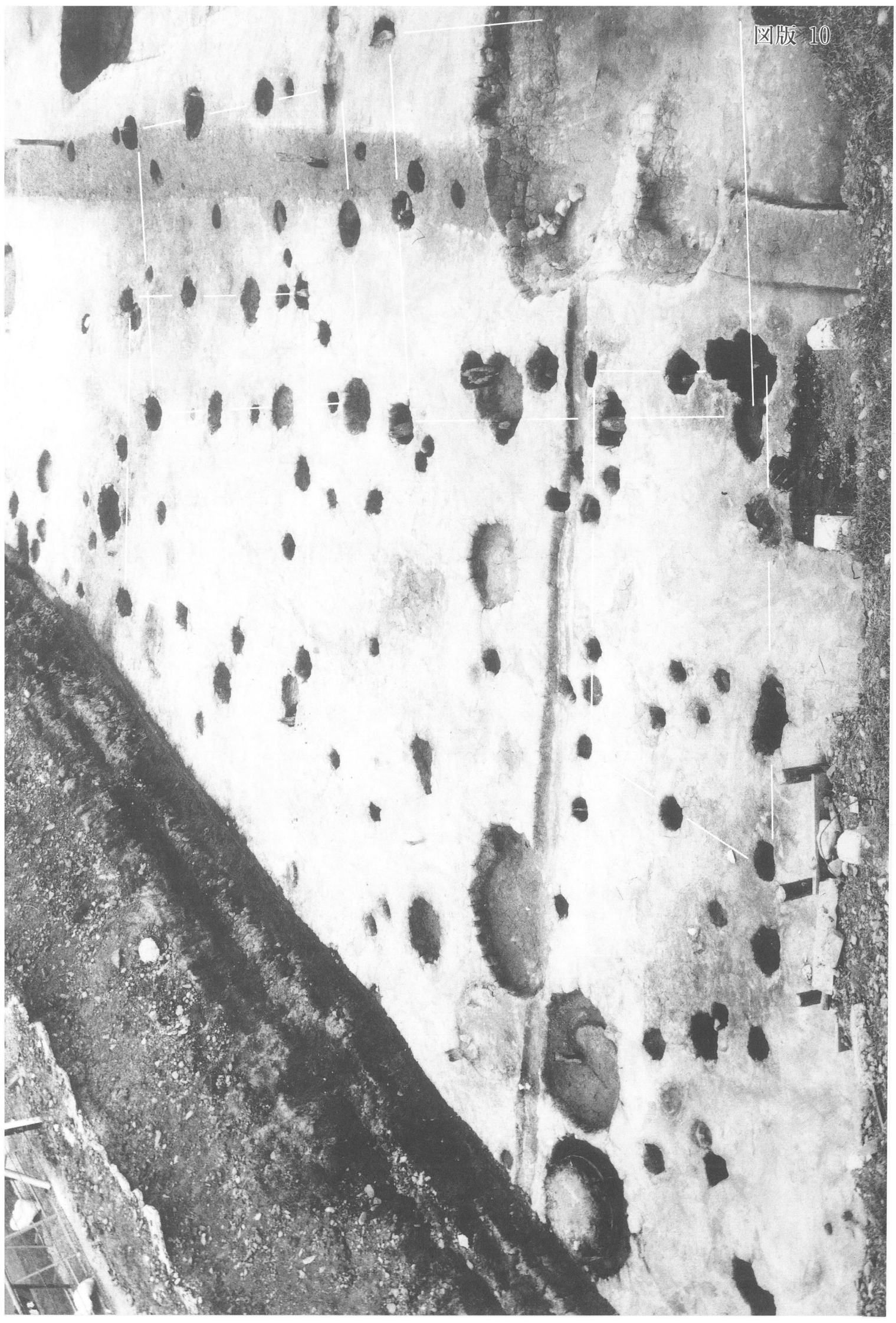
1



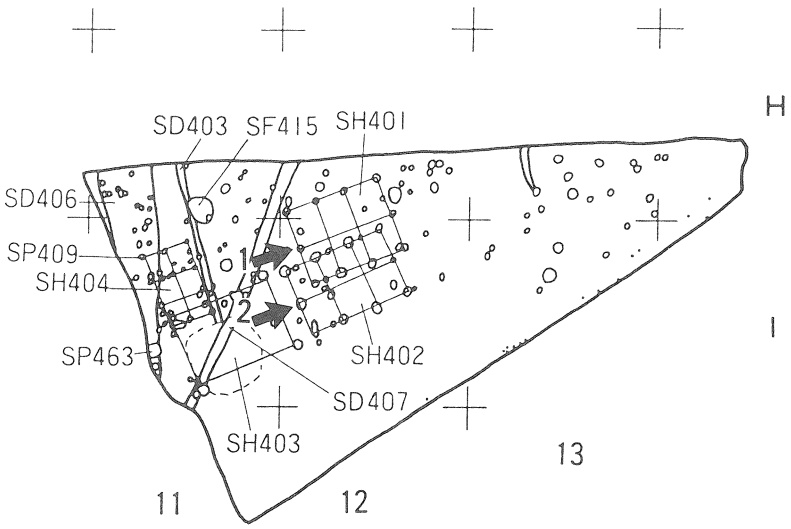
2



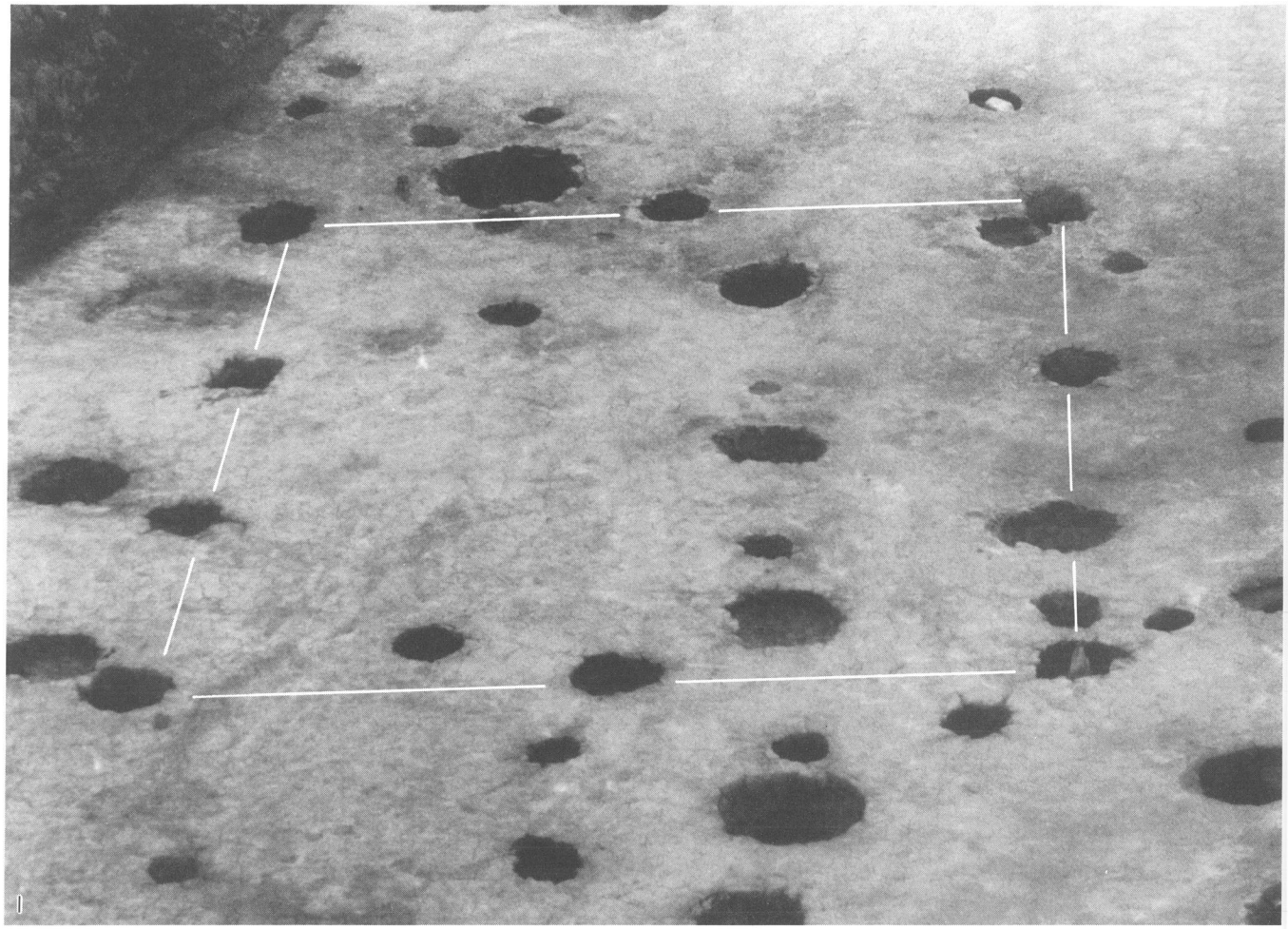
図版10　4区掘立柱建物群



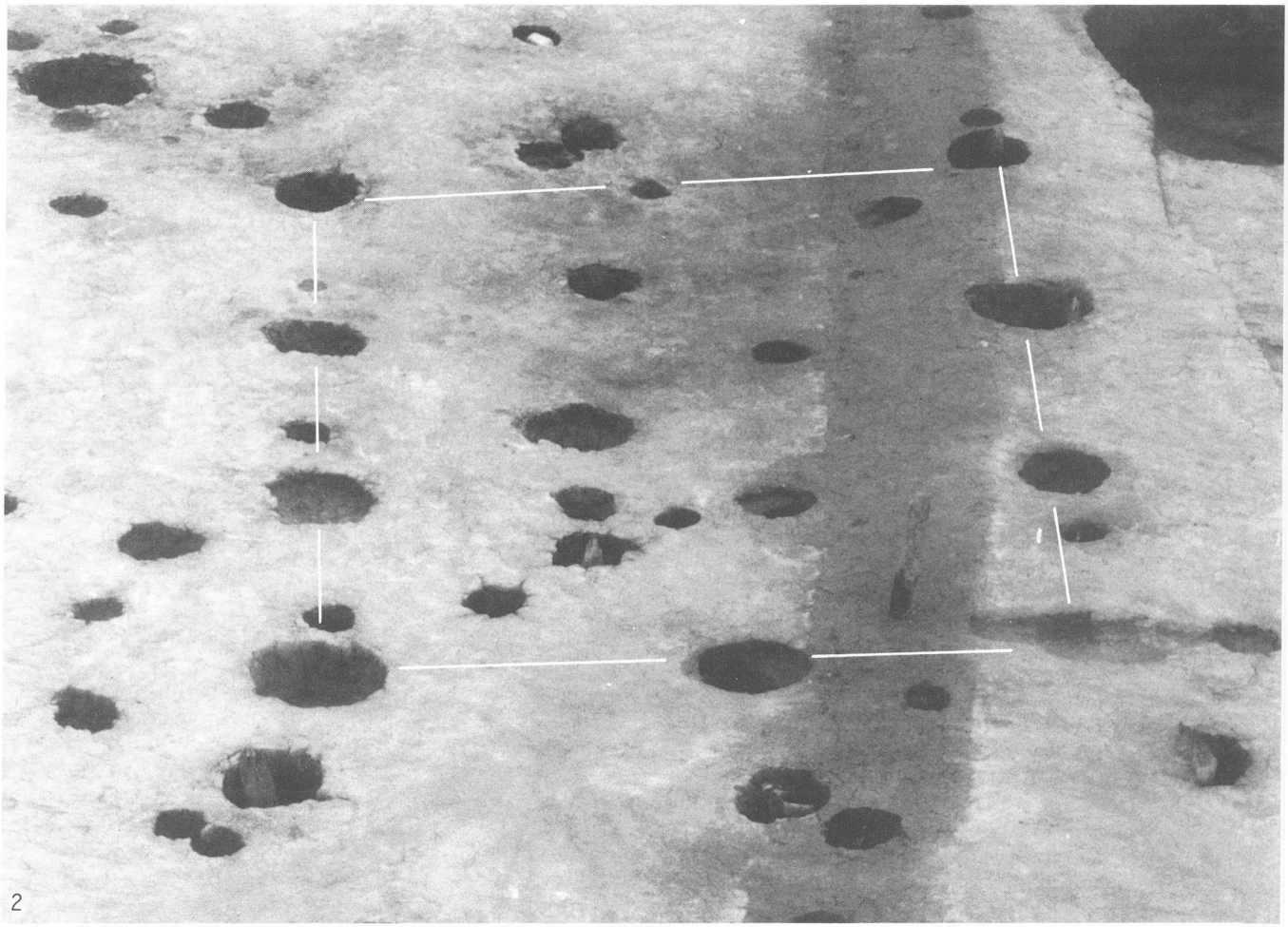
図版 10



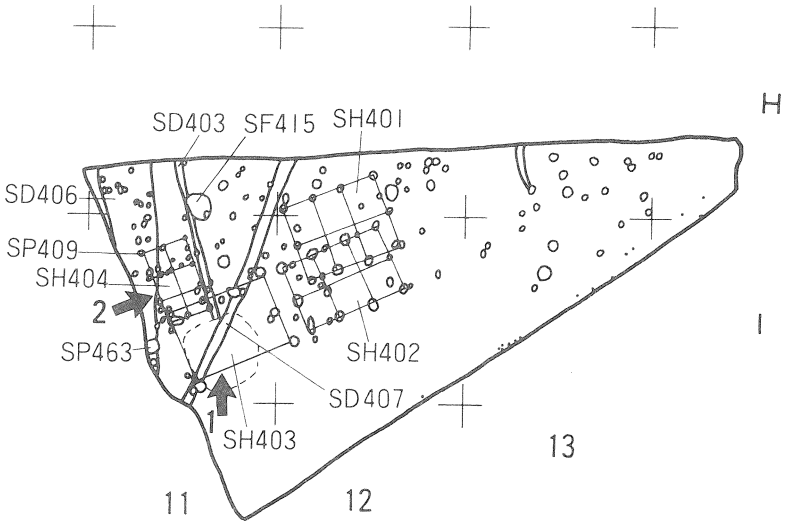
図版11　掘立柱建物
1.SH401
2.SH402



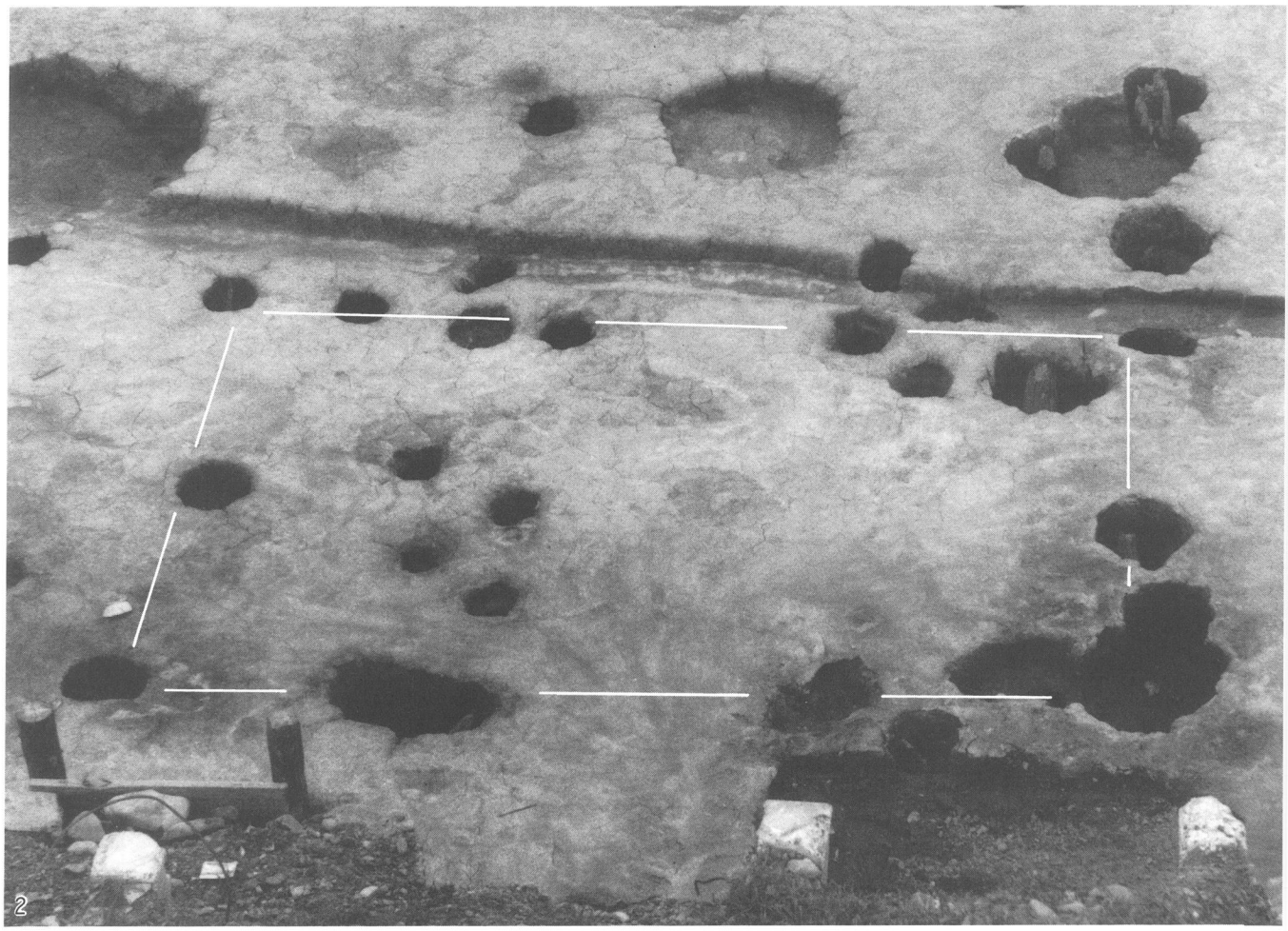
1

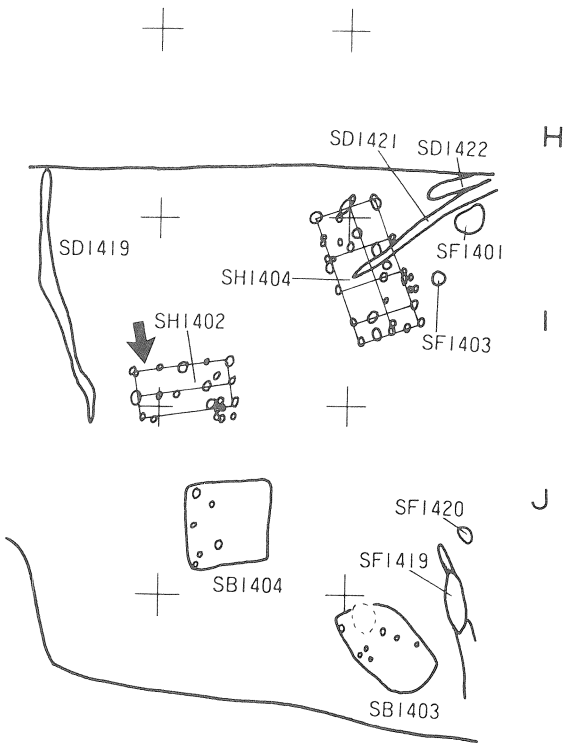


2

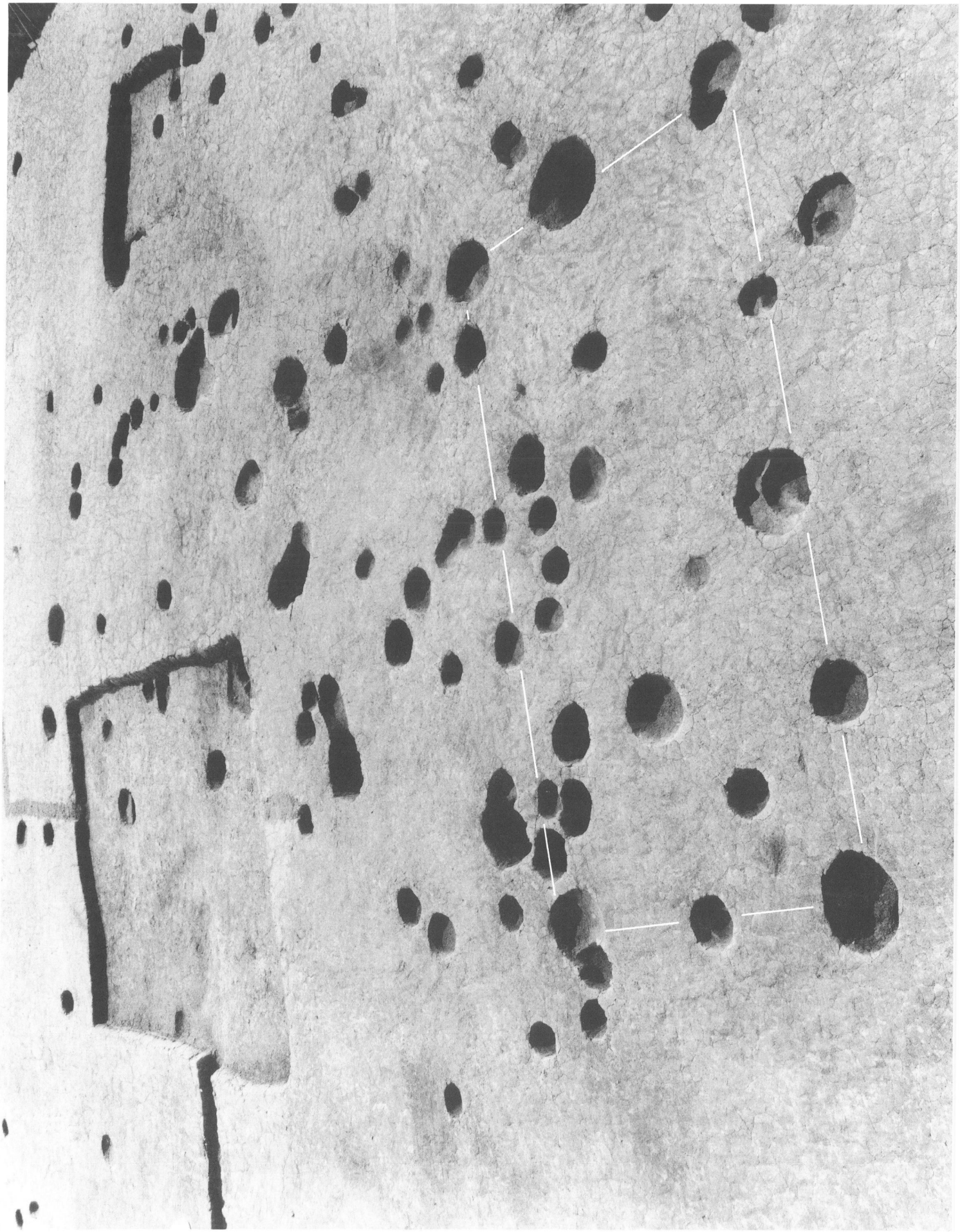


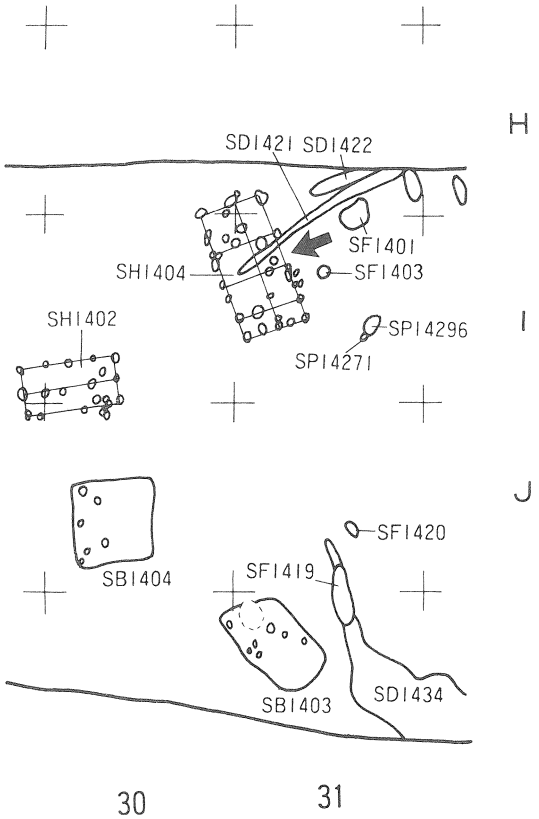
図版12　掘立柱建物
1.SH403
2.SH404



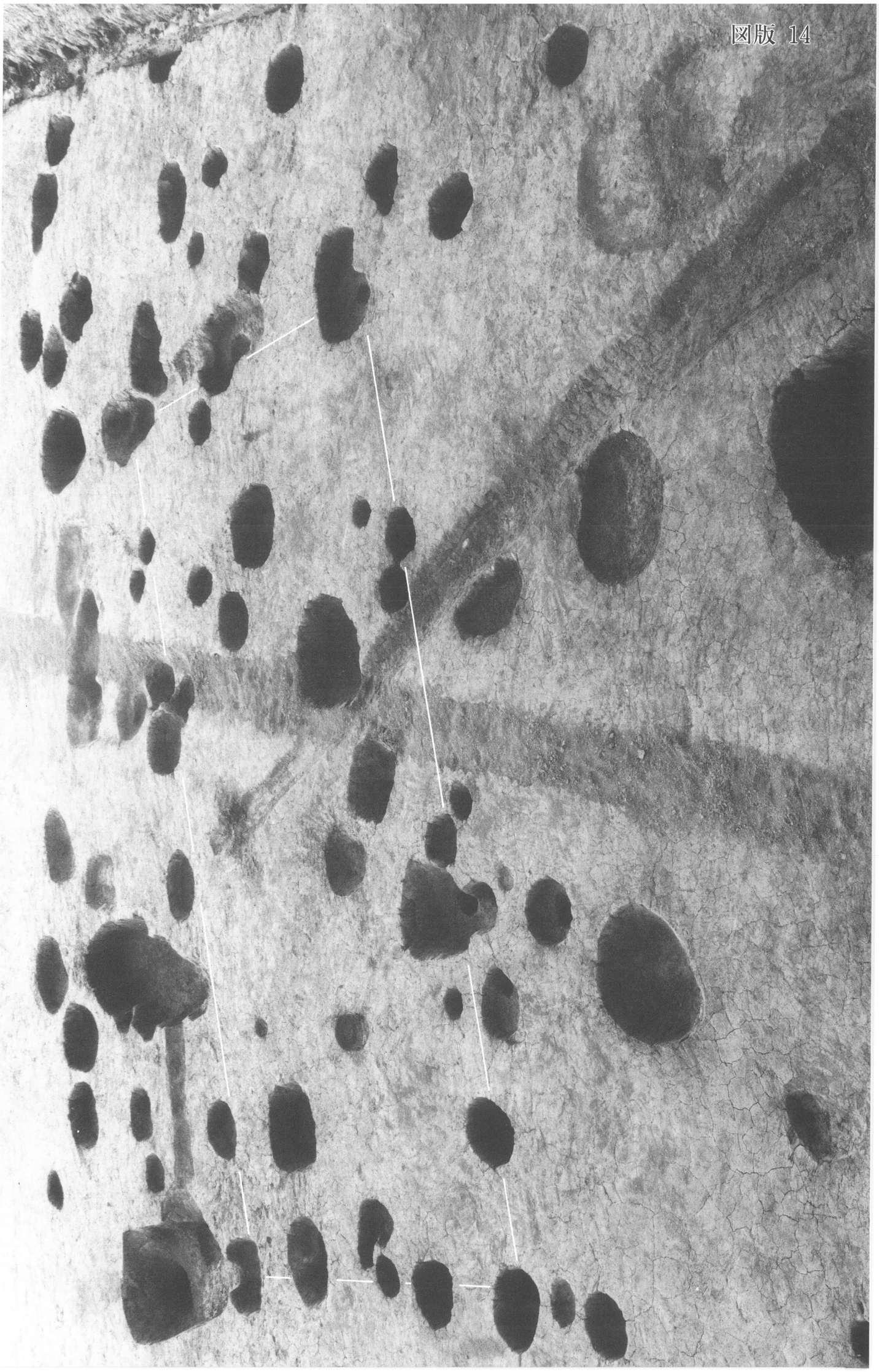


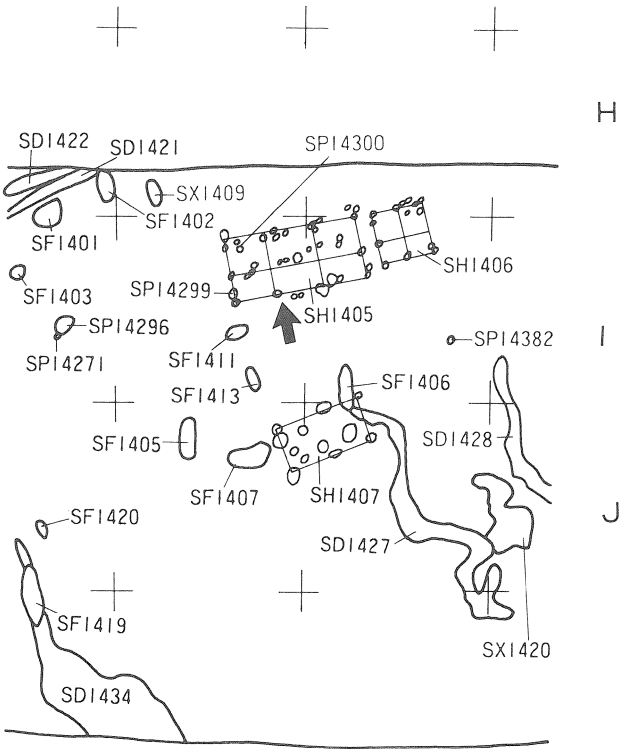
図版13　掘立柱建物
SH1402



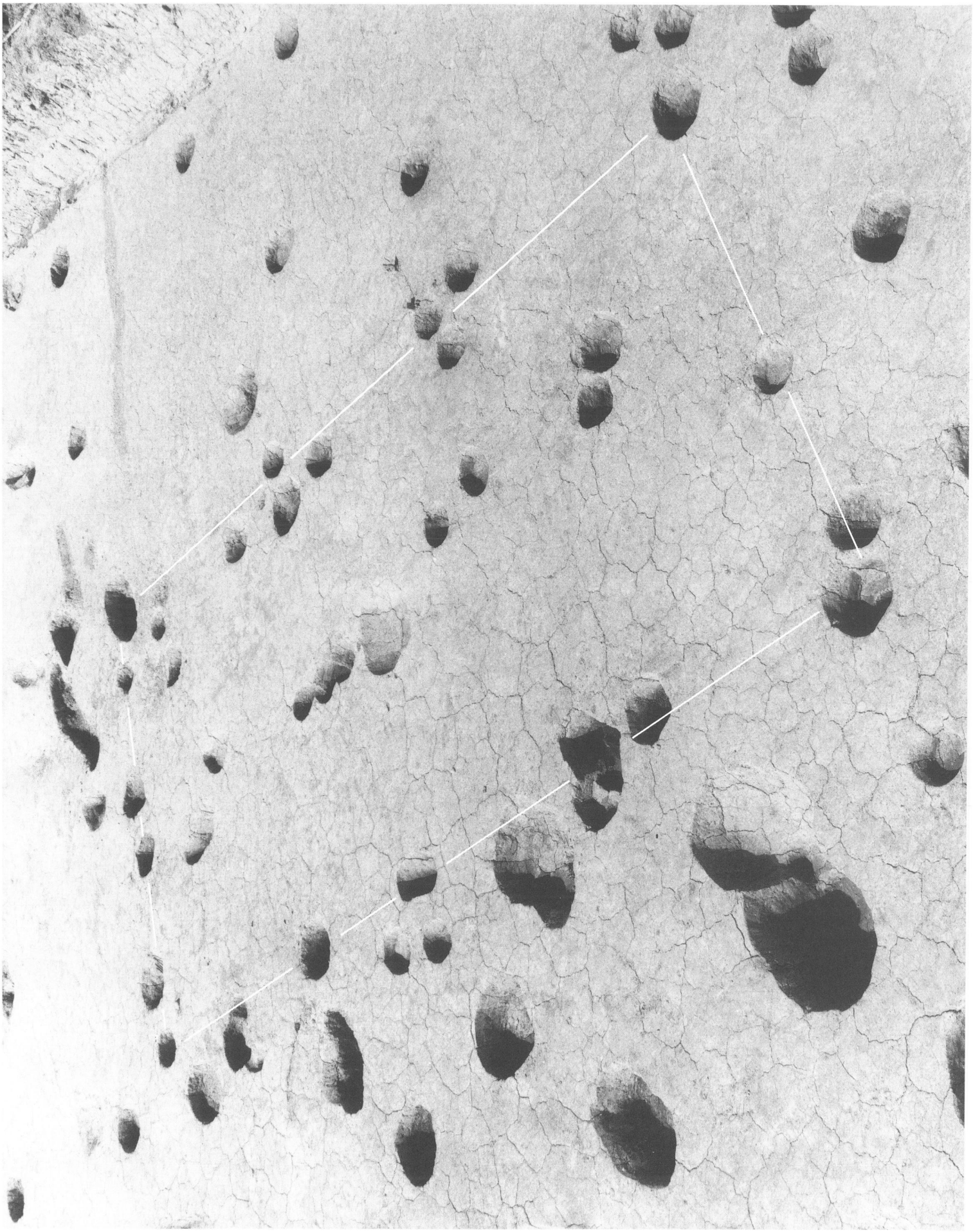


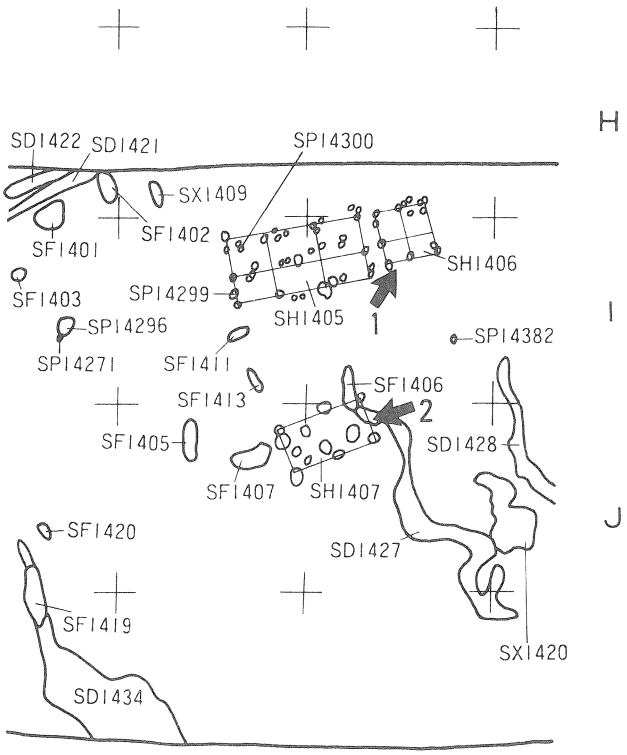
図版14　掘立柱建物
SH1404



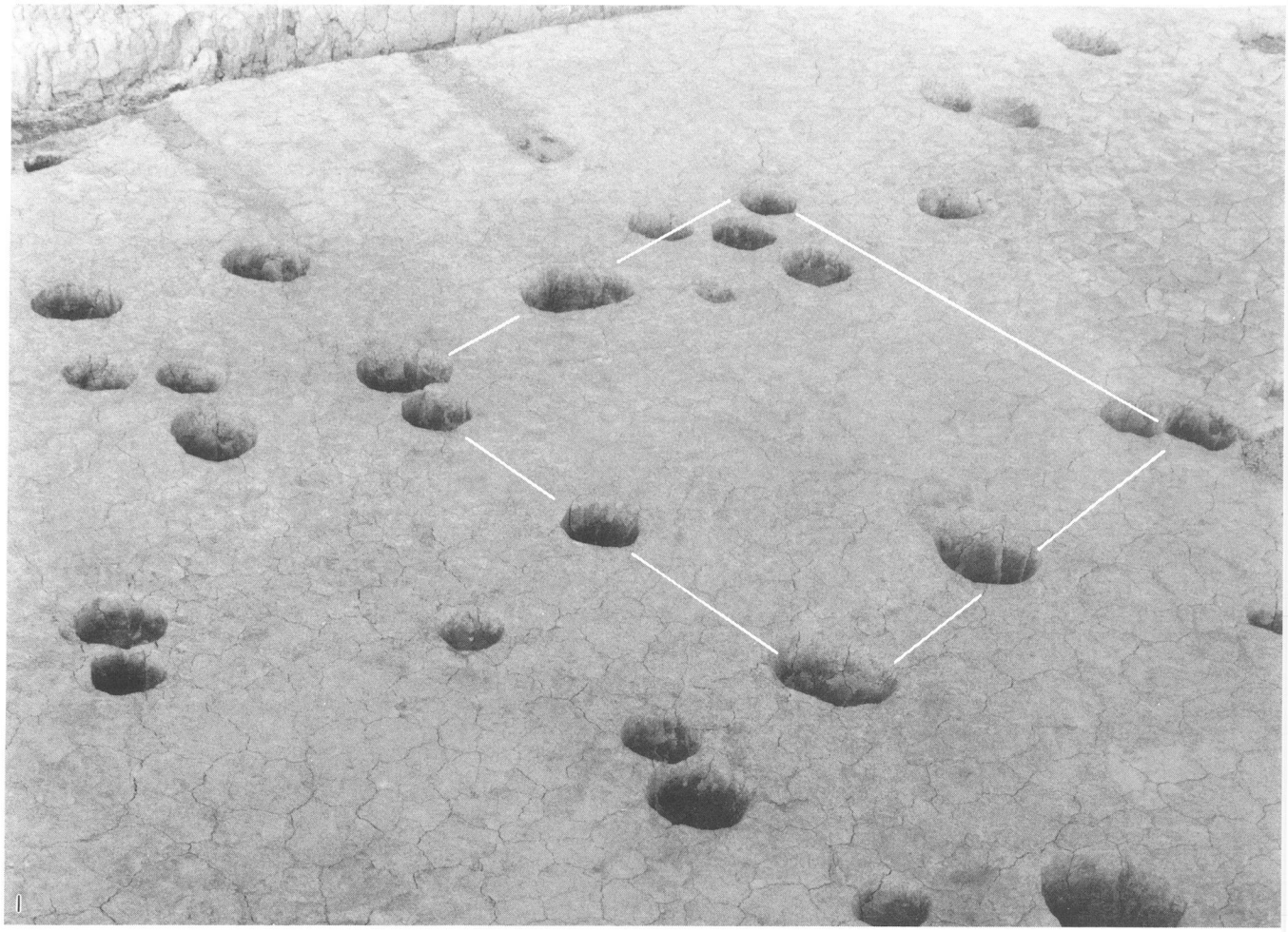


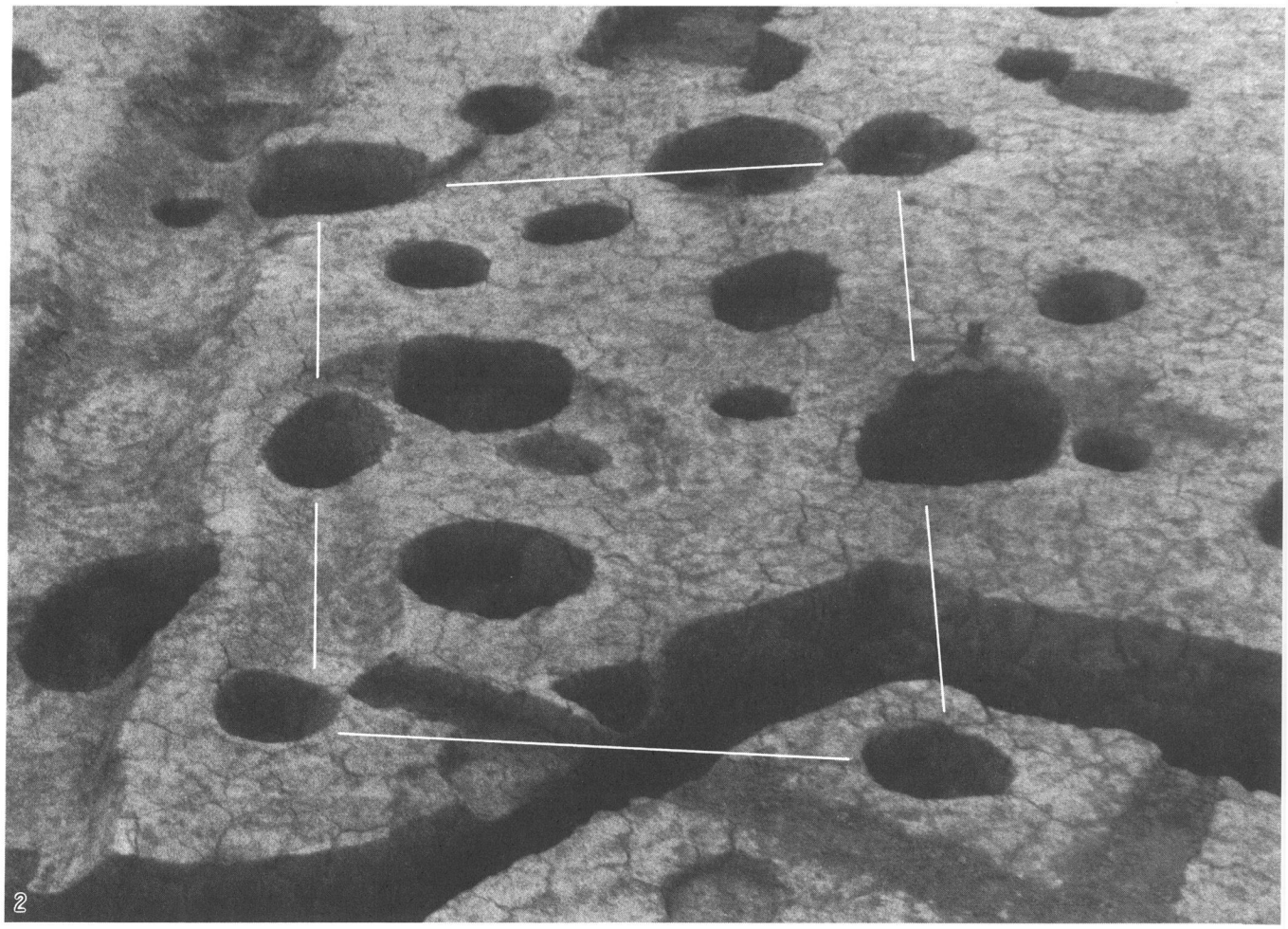
図版15　掘立柱建物
SH1405

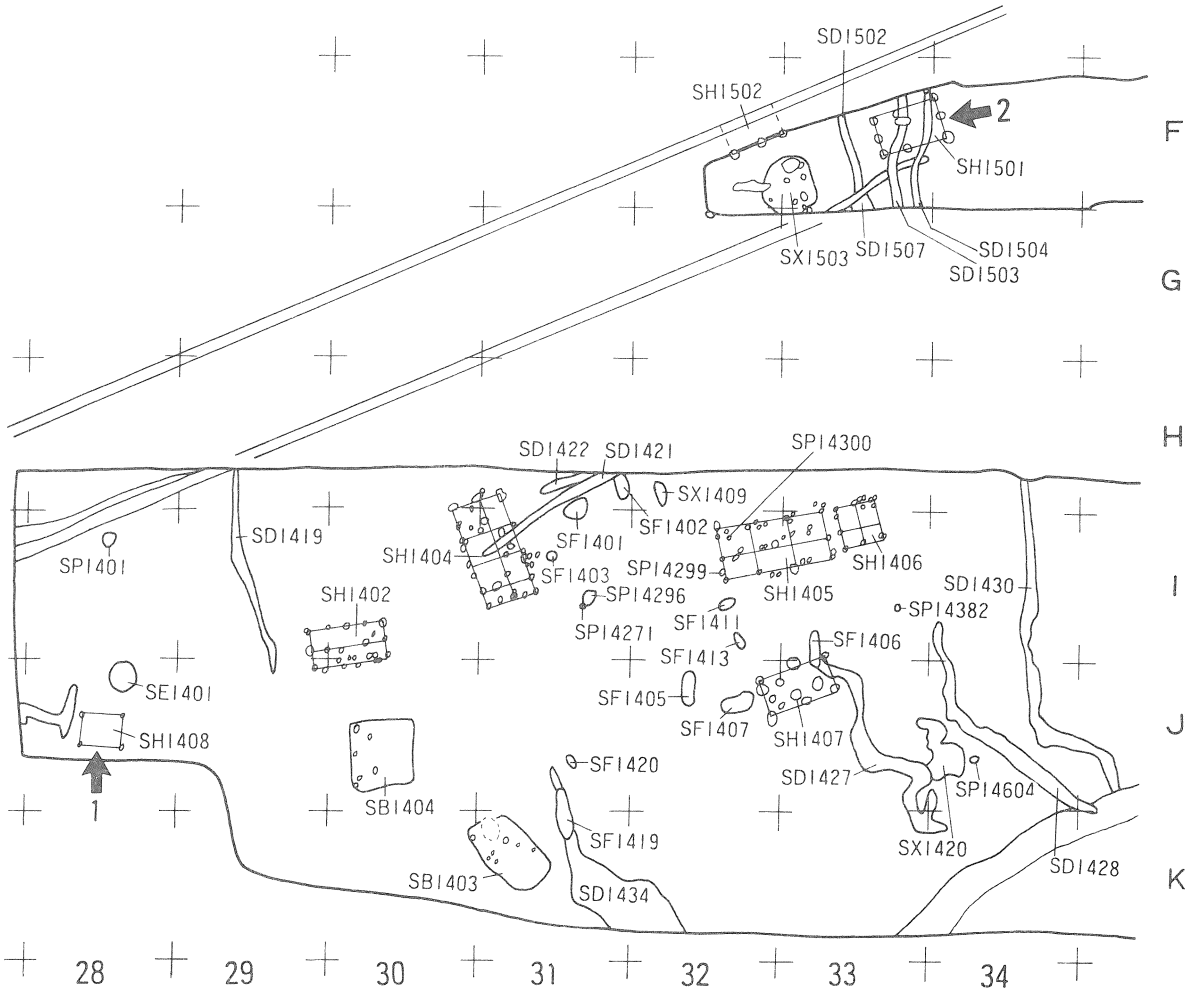




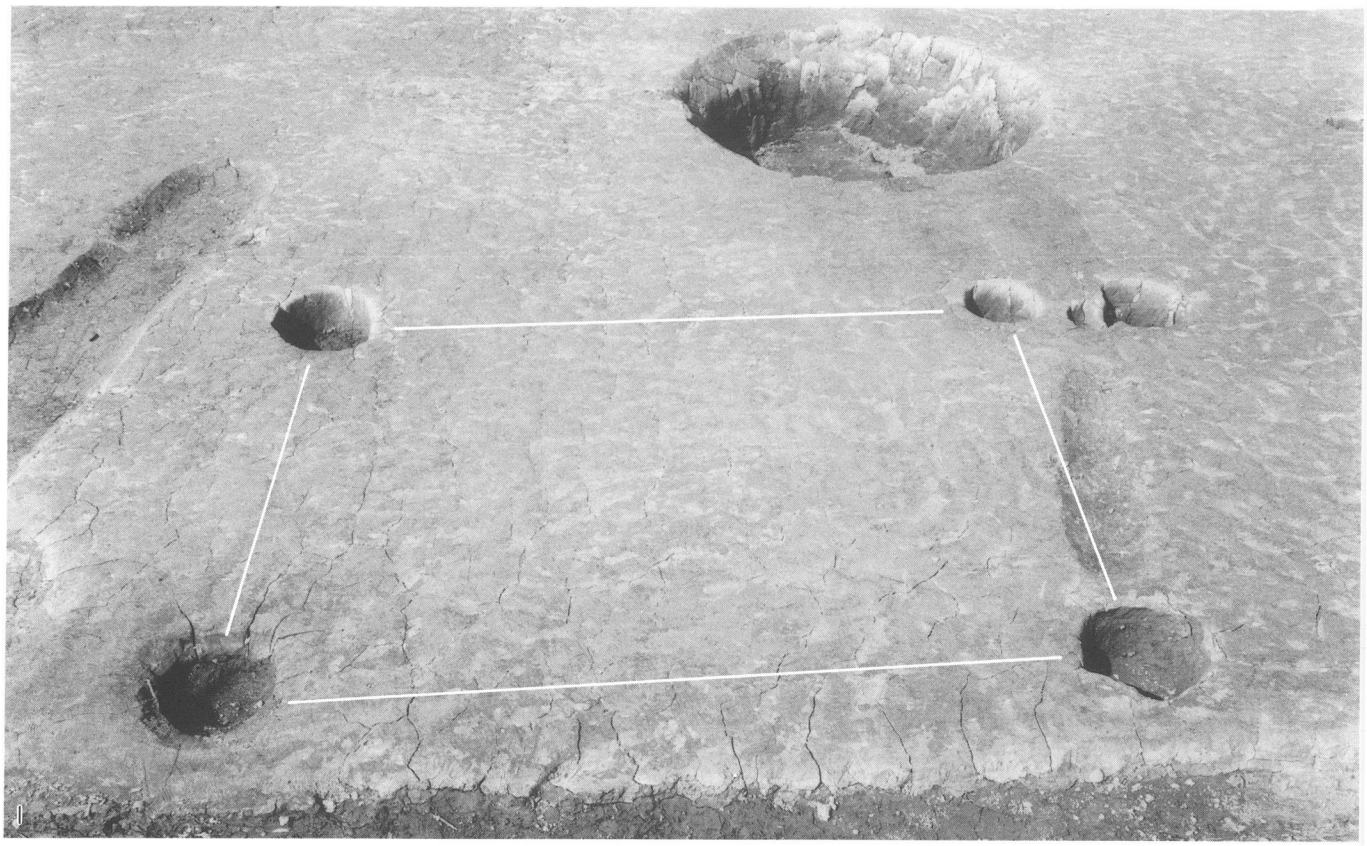
図版16　掘立柱建物
1.SH1406
2.SH1407


1

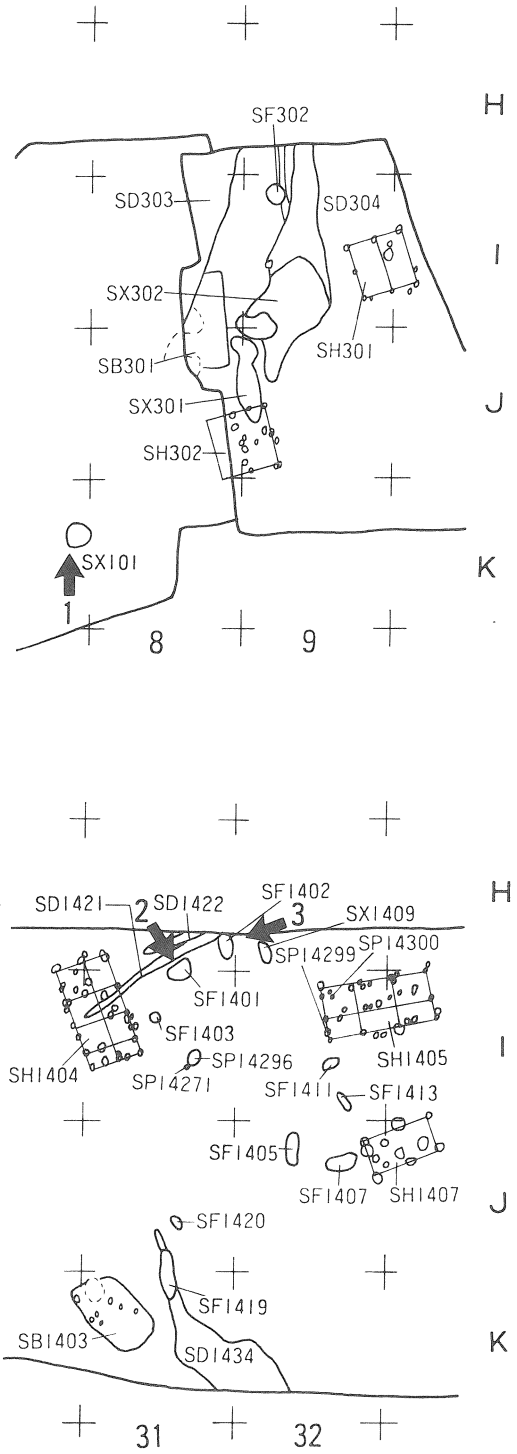

2



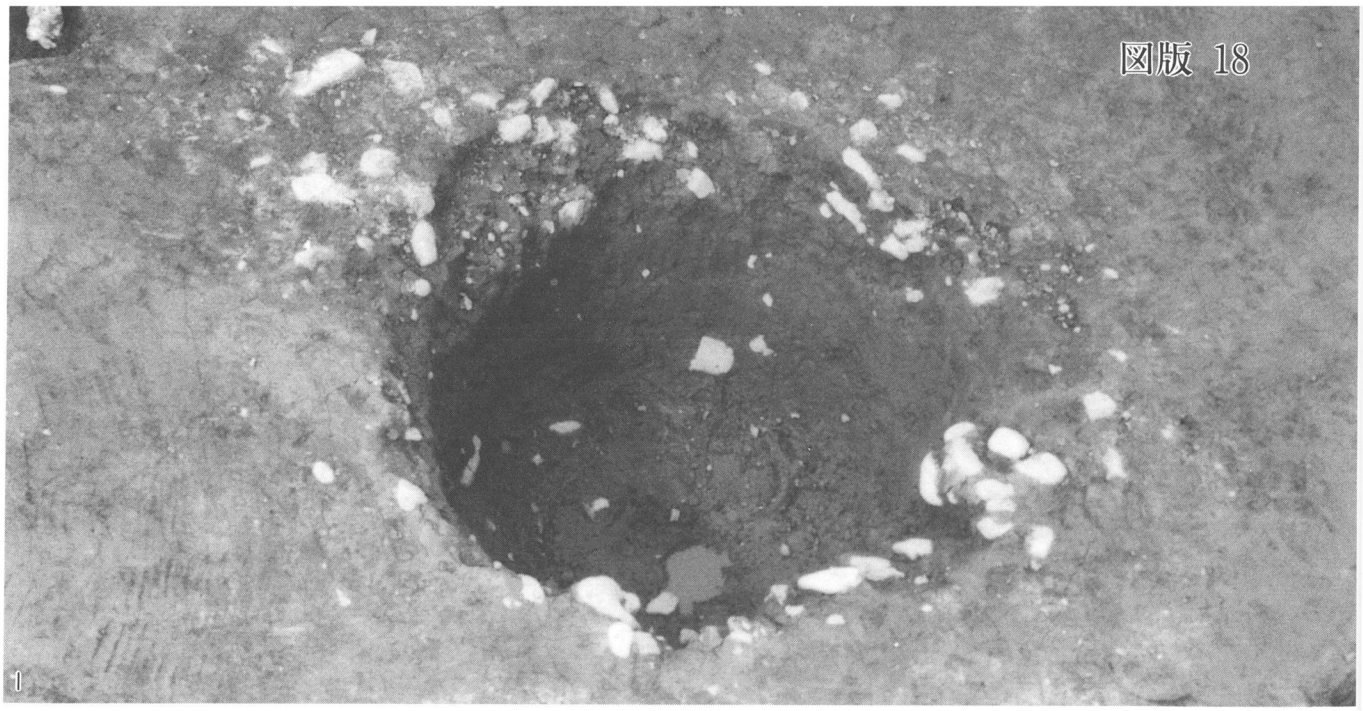
図版17　掘立柱建物
1.SH1408
2.SH1501



2



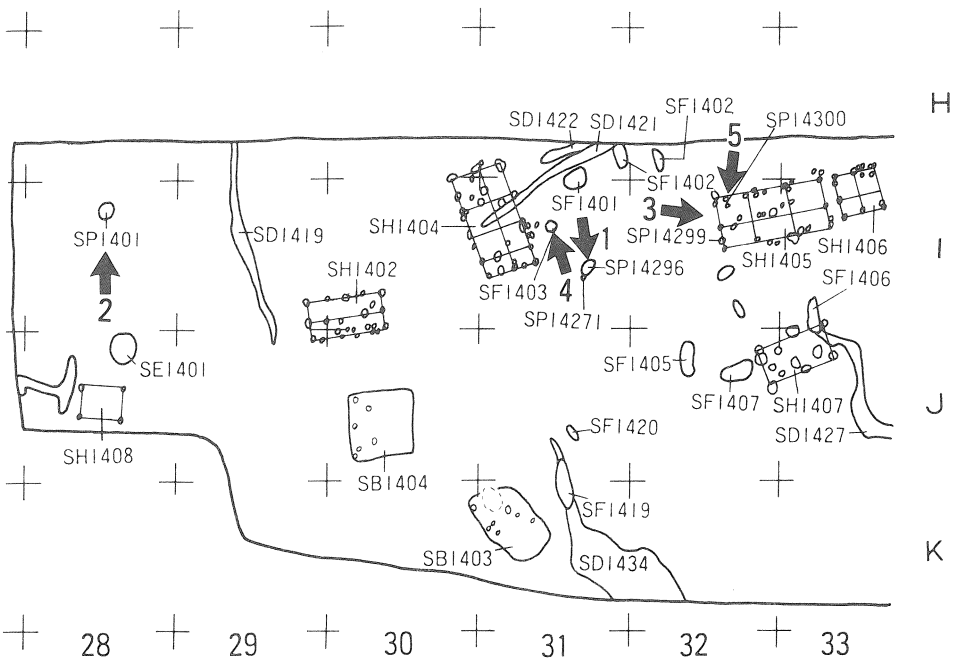
図版18　土坑
1.SX101
2.SF1401
3.SF1402



1

2

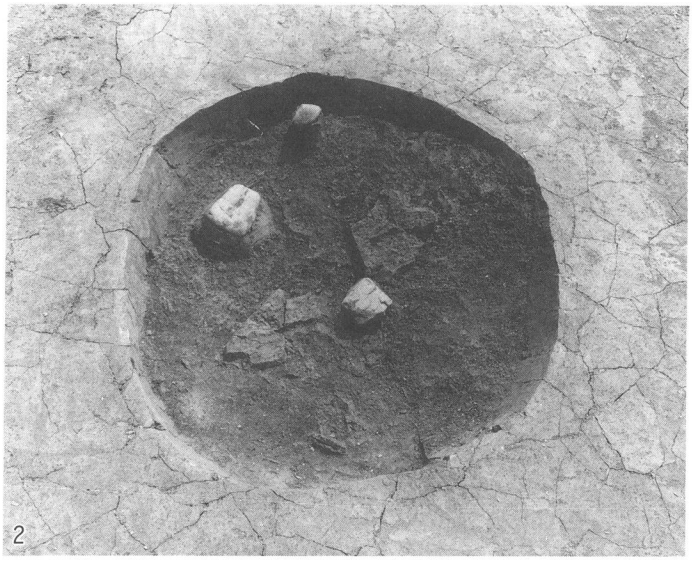
3



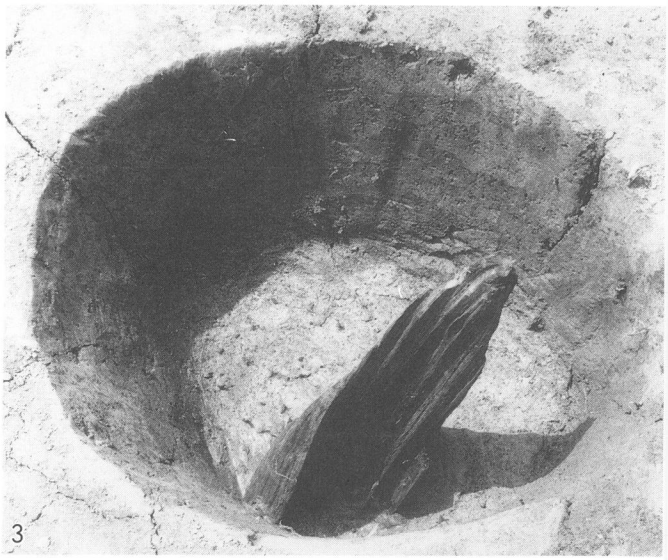
図版19　土坑

1.SP14296
2.SP1401
3.SP14299
4.SF1403
5.SP14300

1



2



3

4

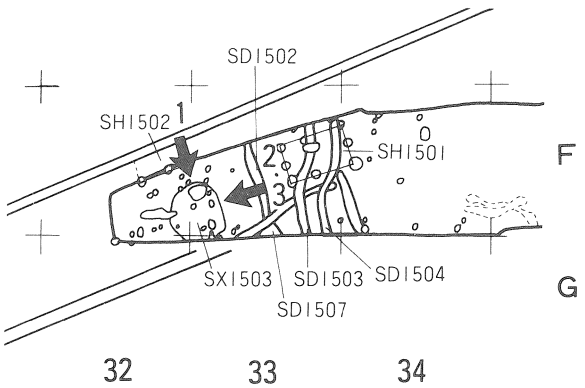
5

2
SD403
SF415
SH401
SD406
SP409
SH404
1
SP463
SH402
SD407
SH403
13
11
12

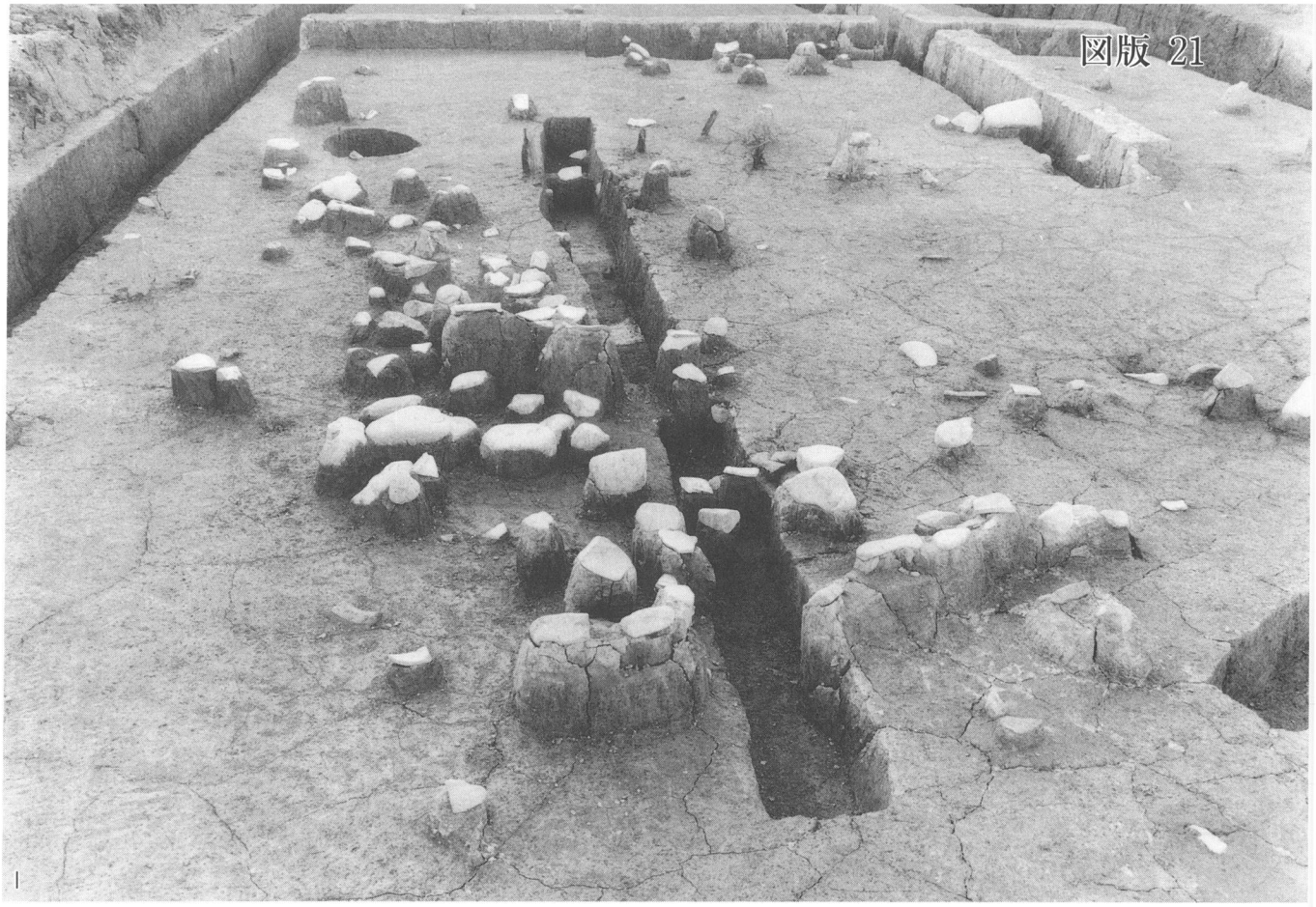
図版20　溝
SD406

1

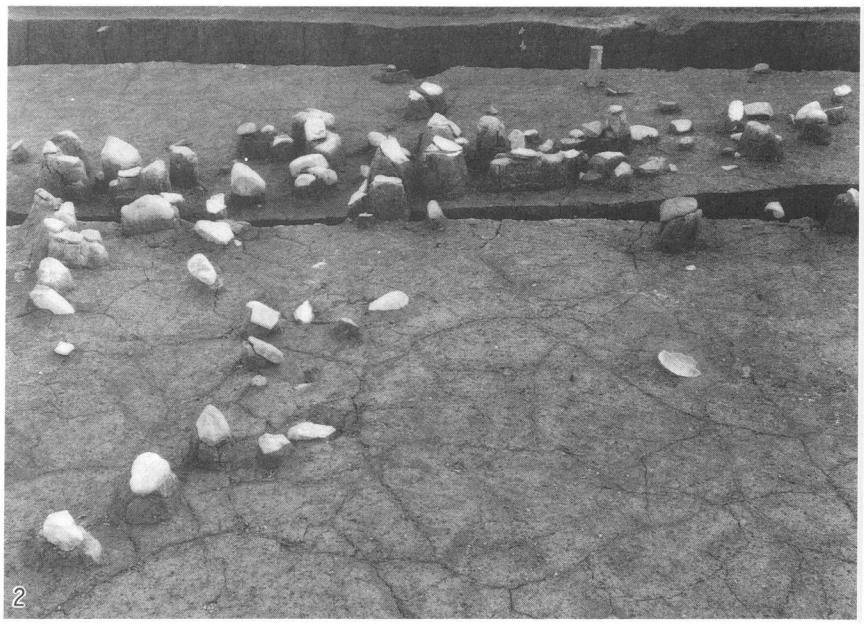
2



図版21　その他の遺構
SX1502
SX1503



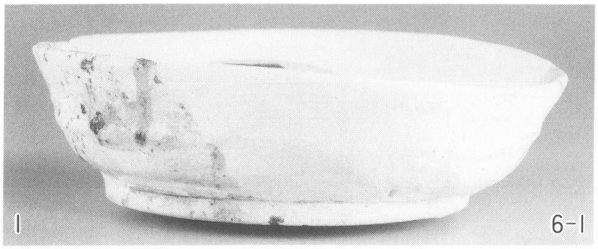
1



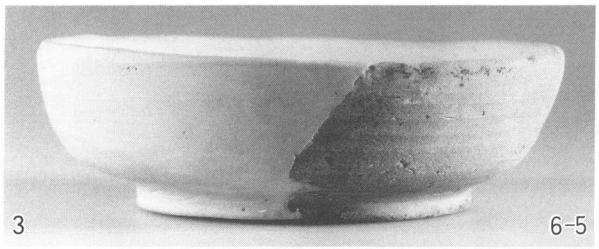
2

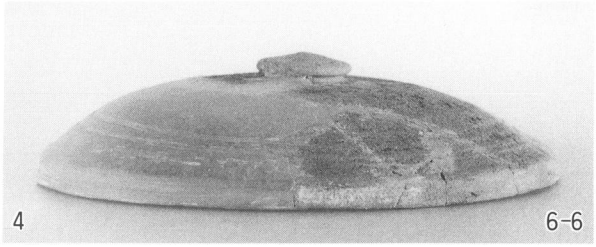
3

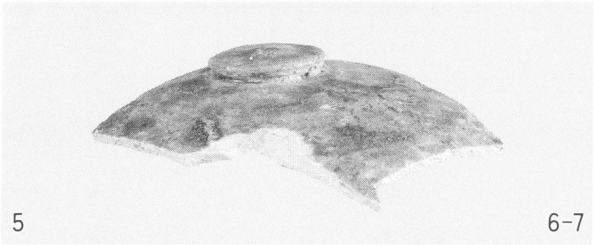
図版22　竪穴住居SB1404出土遺物


1
6-1

2
6-2

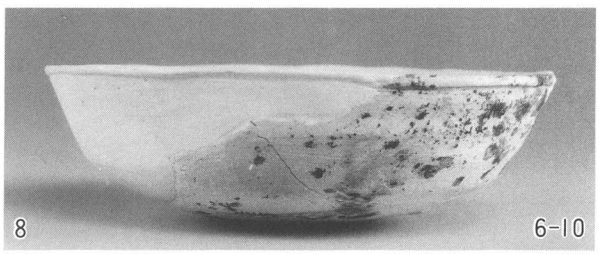

3
6-5


4
6-6

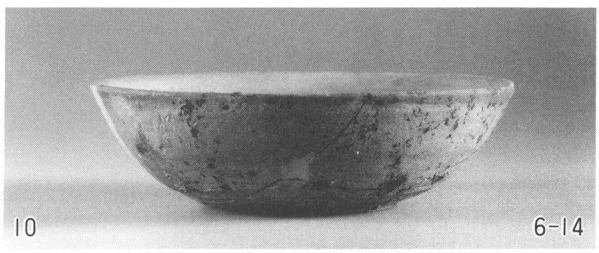

5
6-7

6
6-8

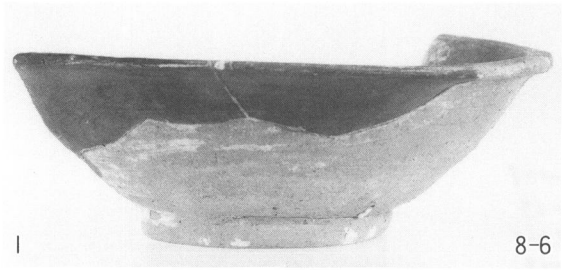
7
6-9


8
6-10

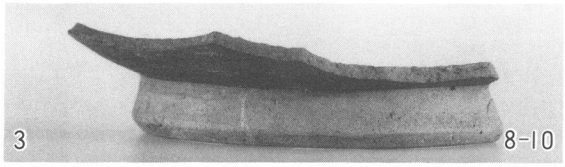
9
6-11

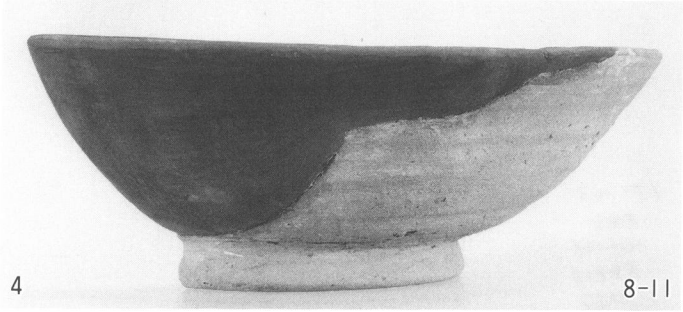

10
6-14

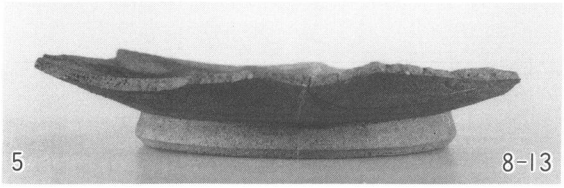
図版23　竪穴住居SB301出土遺物

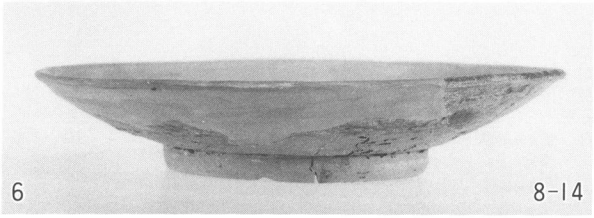

1
8-6

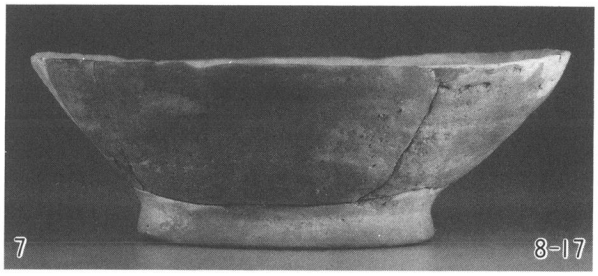
2
8-9

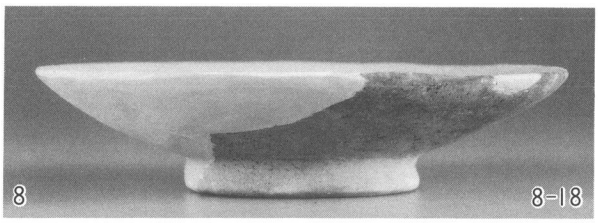

3
8-10

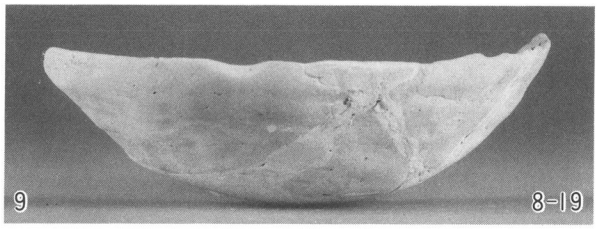

4
8-11

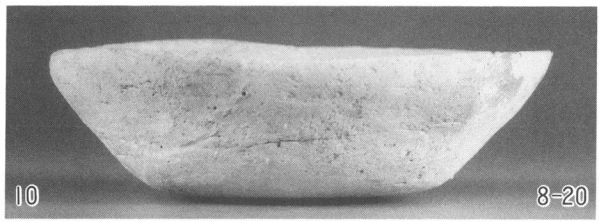

5
8-13

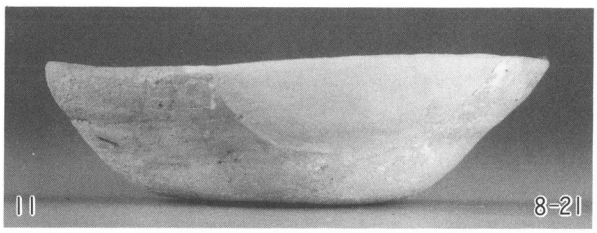

6
8-14

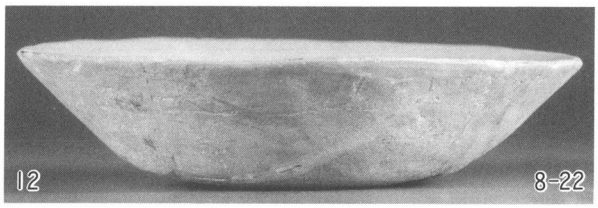

7
8-17


8
8-18


9
8-19


10
8-20

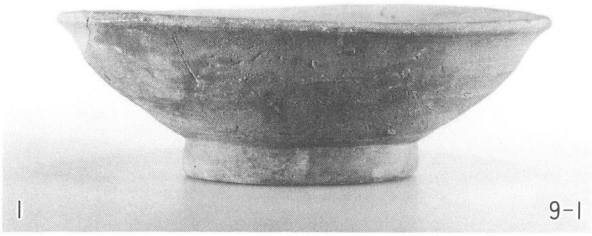

11
8-21


12
8-22

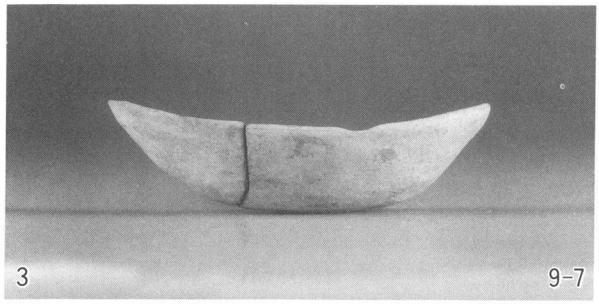
13
8-16

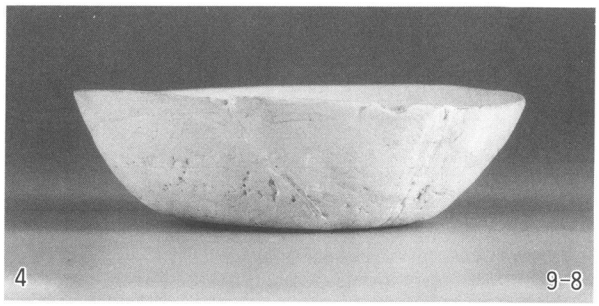
14
8-24

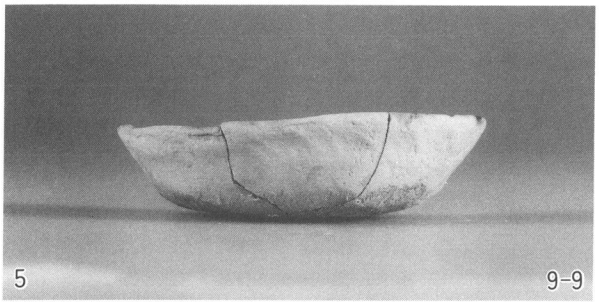
図版24　SB301関連遺物
1.SB301上層遺物
2.SX301・SX302

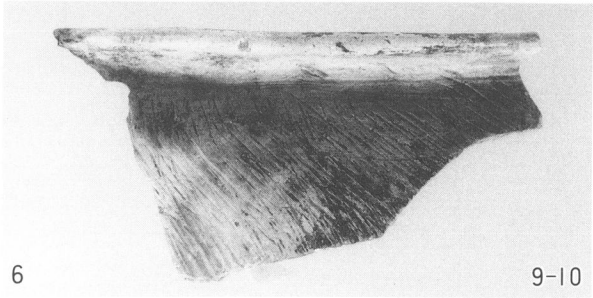

1
9-1

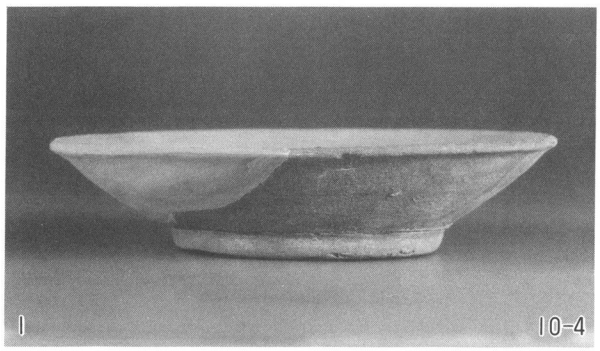
2
9-5


3
9-7

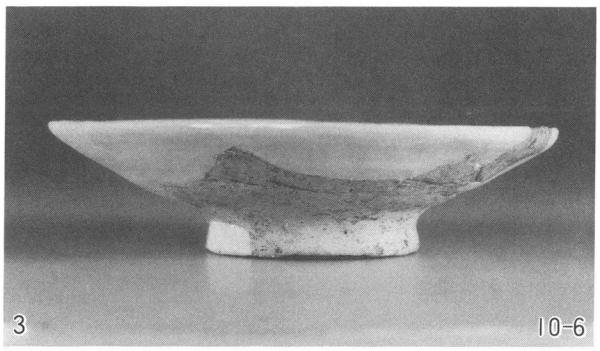

4
9-8


5
9-9

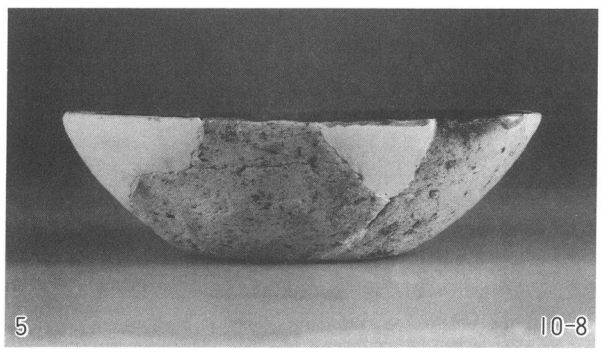

6
9-10


1
10-4

2
10-5


3
10-6

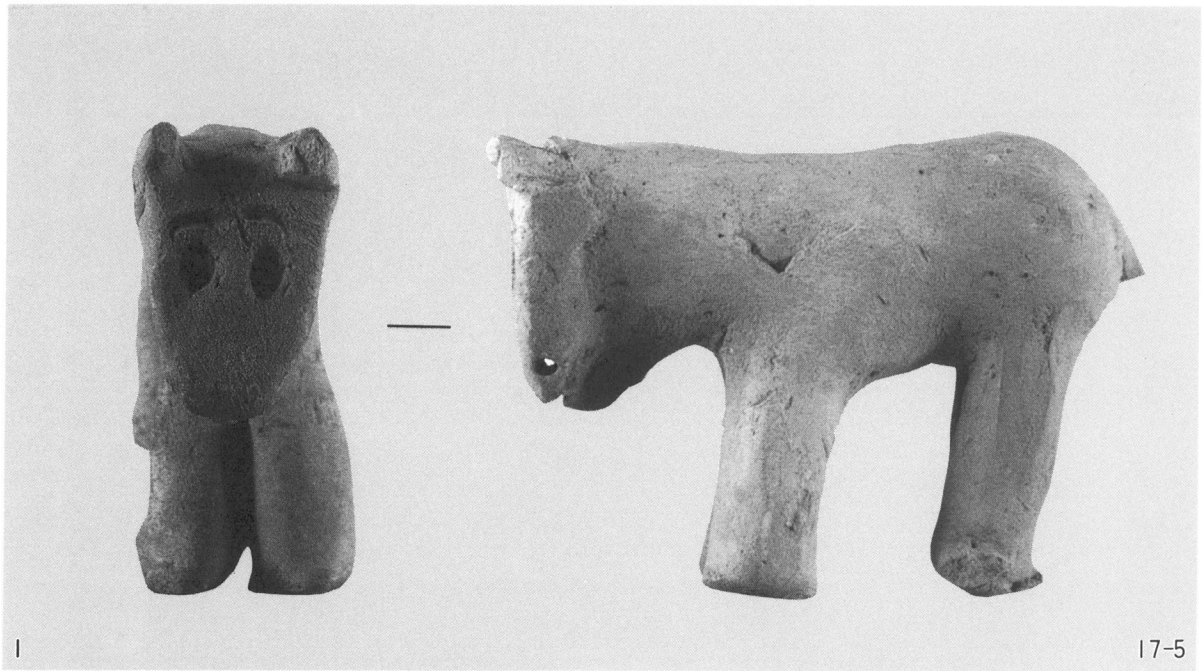
4
10-7

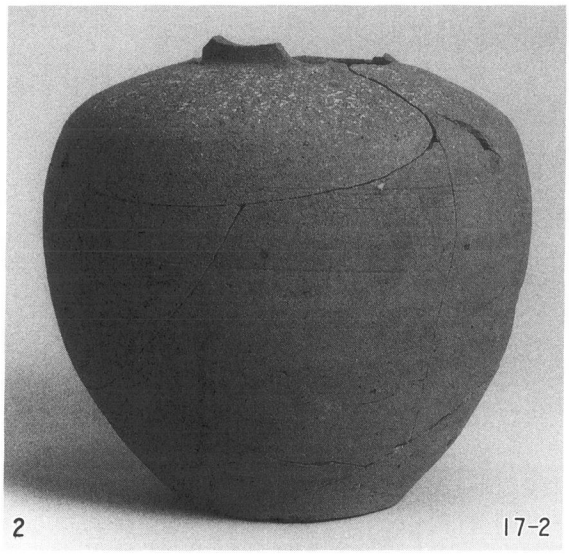

5
10-8

6
10-9

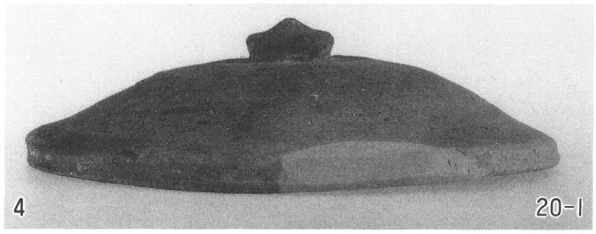
図版25　井戸・土坑出土遺物

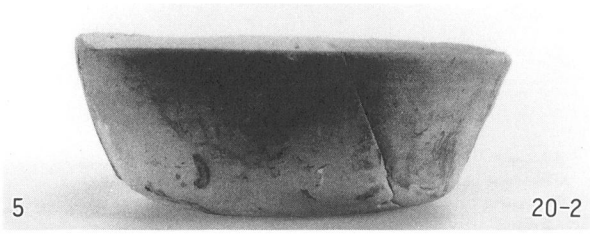
SX101　(1・2)
SF1401　(3)
SF1402　(4～6)
SP14604　(7)
SP463　(8)
SX1409　(9・10)
SX1415　(11・12)

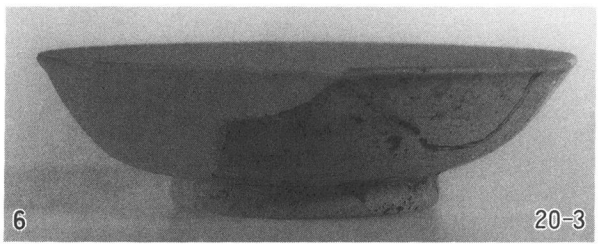

1
17-5


2
17-2

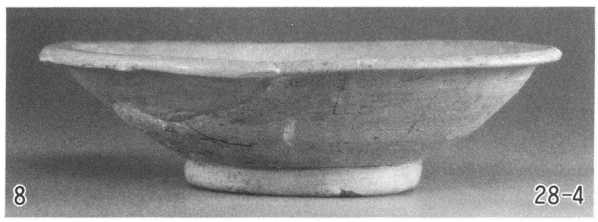
3
19-4

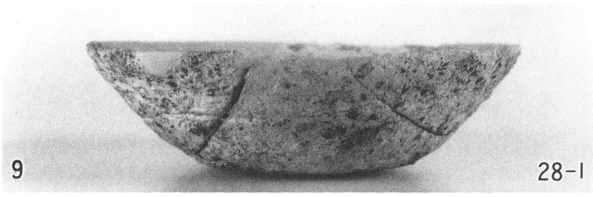

4
20-1

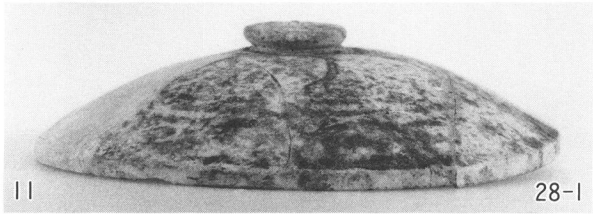

5
20-2

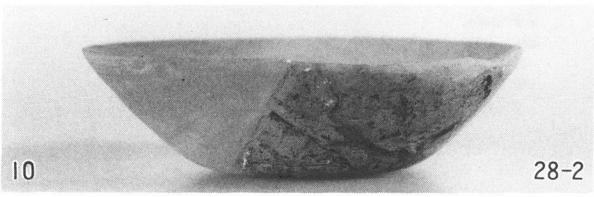

6
20-3

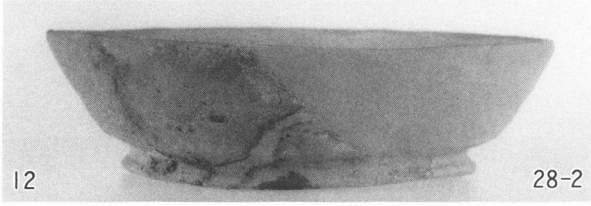
7
23


8
28-4

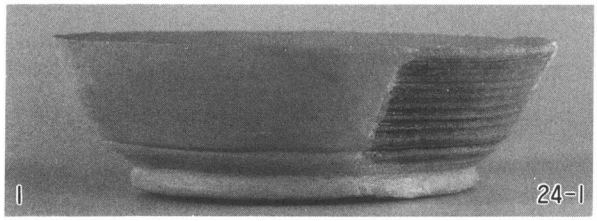

9
28-1

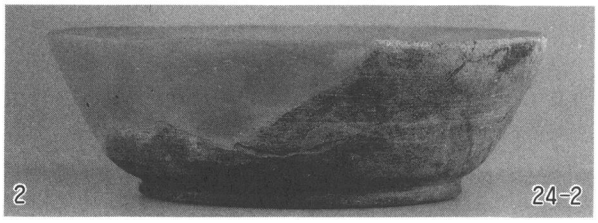

11
28-1

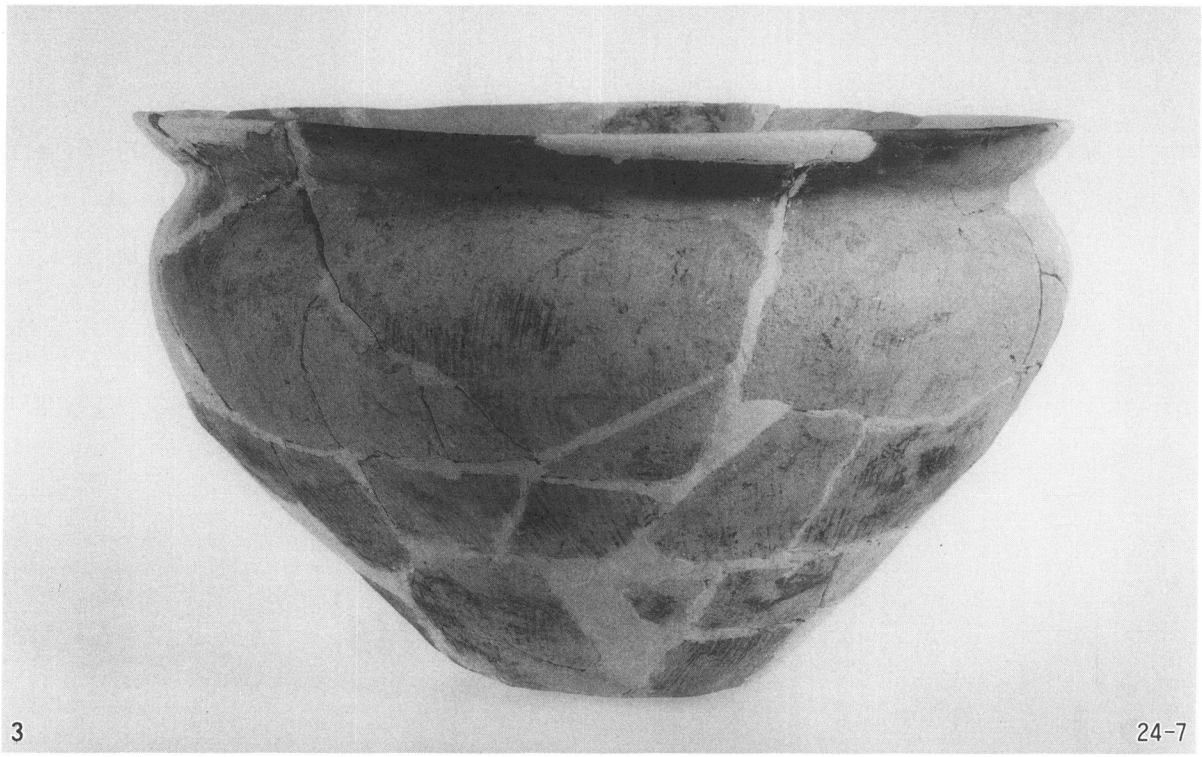

10
28-2

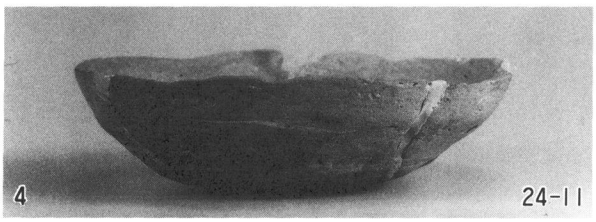

12
28-2

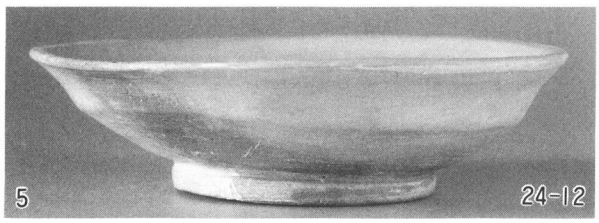
図版26　溝・その他の遺構出土遺物
1.SD406　(1～5)
2.SX1502・SX1503 (6～10)


1 24-1

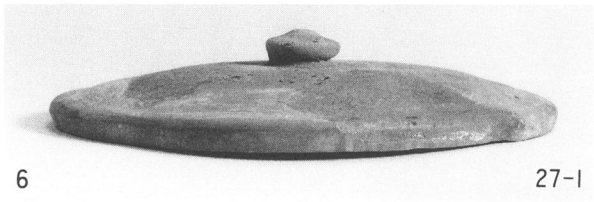

2 24-2


3 24-7

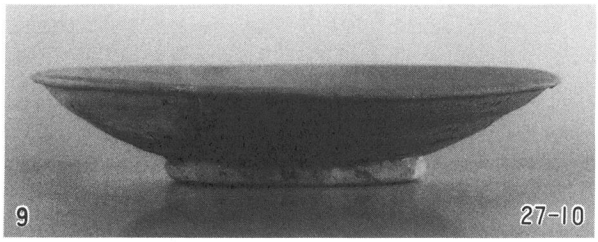

4 24-11


5 24-12

7 27-6

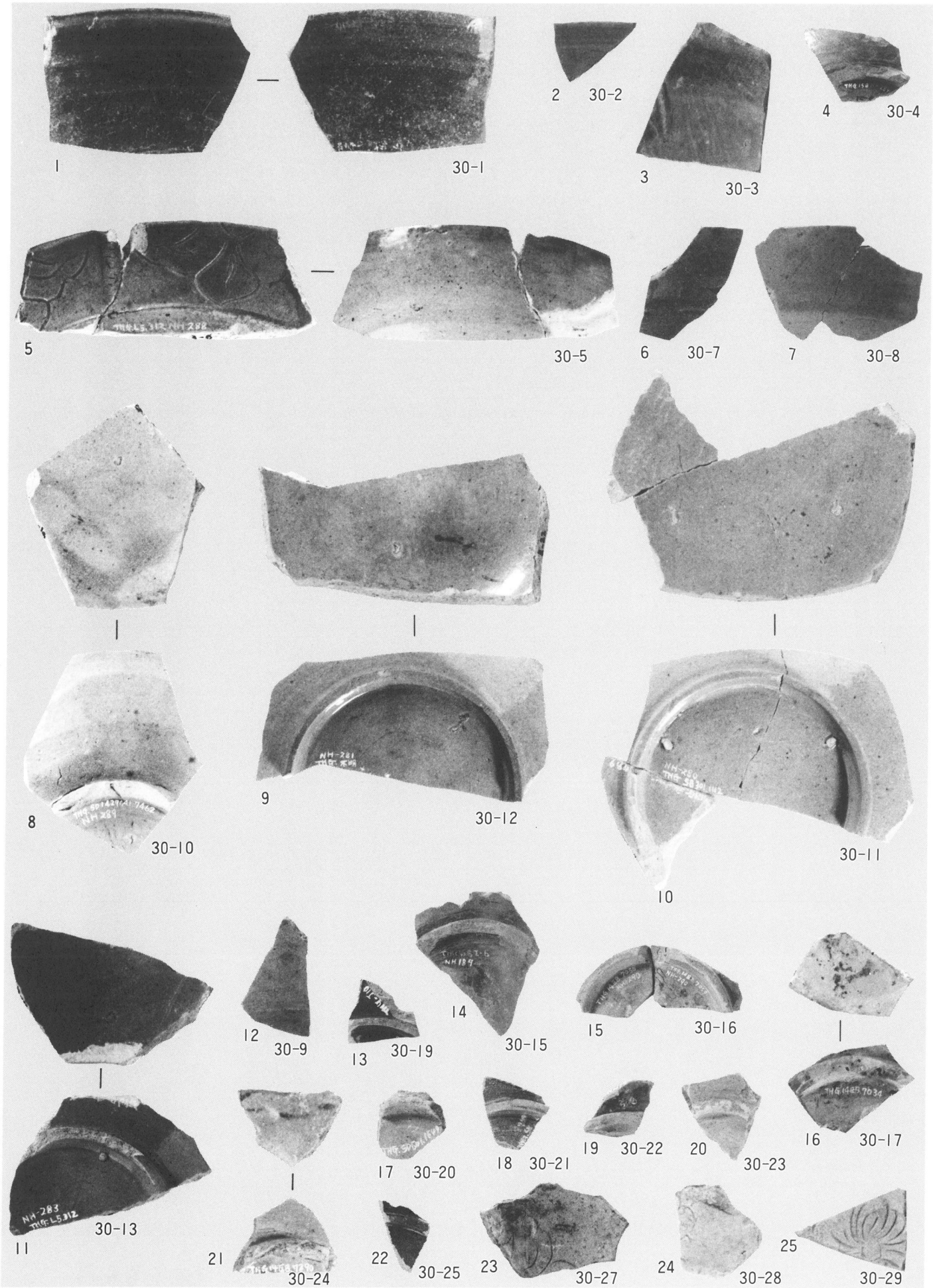

6 27-1

8 27-9

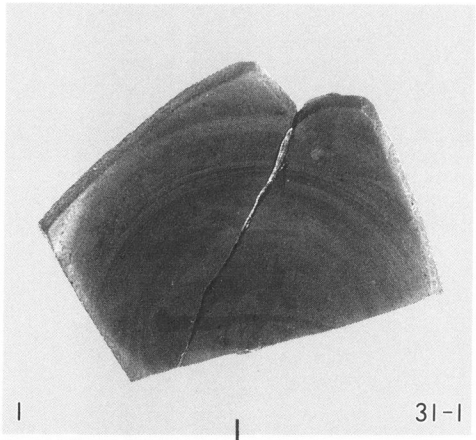

9 27-10

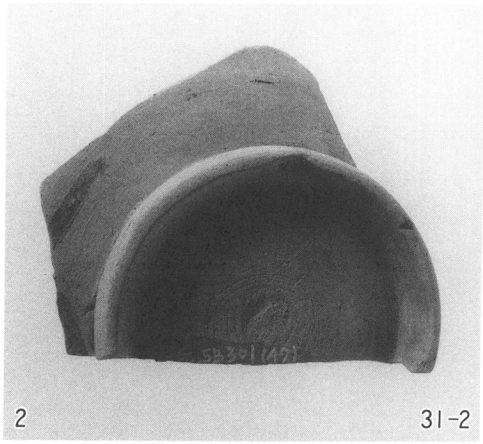
10 27-13

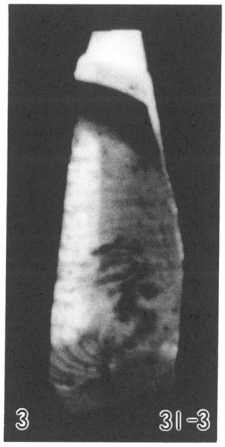
図版27　緑釉陶器


1
30-1
2
30-2
3
30-3
4
30-4
5
30-5
6
30-7
7
30-8
8
30-10
9
30-12
10
30-11
11
30-13
12
30-9
13
30-19
14
30-15
15
30-16
16
30-17
17
30-20
18
30-21
19
30-22
20
30-23
21
30-24
22
30-25
23
30-27
24
30-28
25
30-29

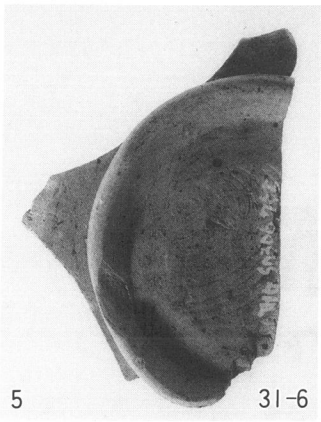
図版28　墨書土器


1
31-1

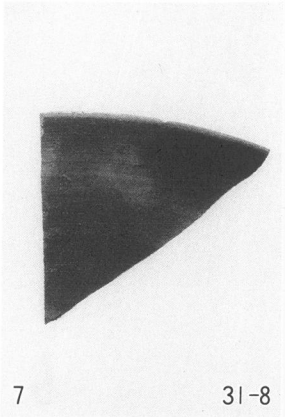

2
31-2

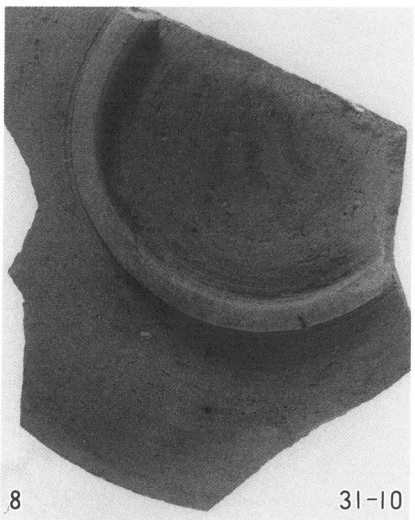

3
31-3

4
31-5

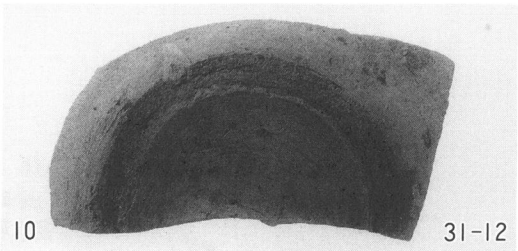

5
31-6

6
31-7

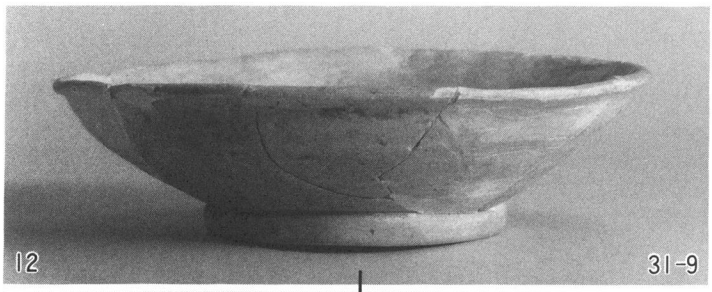

7
31-8

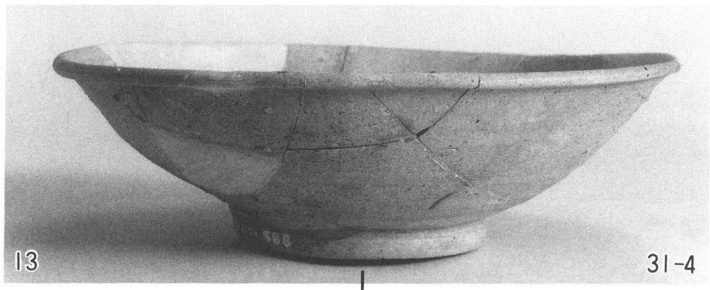

8
31-10

9
31-11

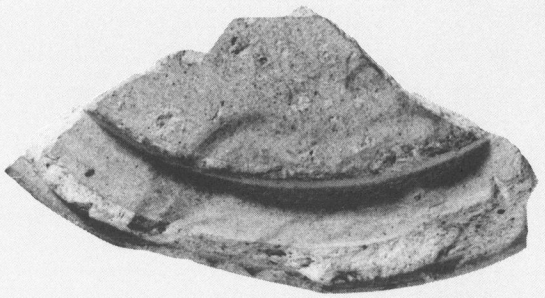

10
31-12

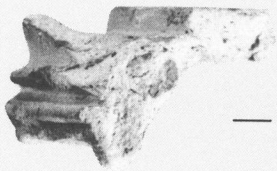
11
31-13

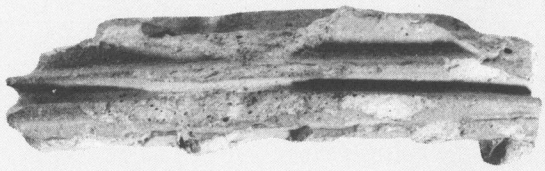

12
31-9

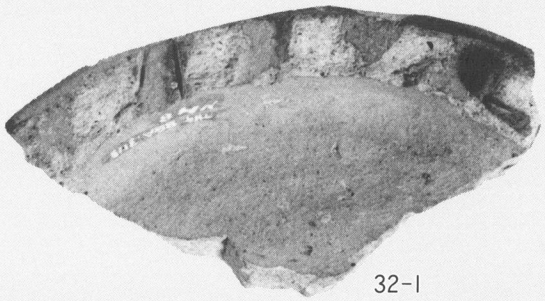

13
31-4

図版29　円面硯・馬形土製品・瓦塔









32-1

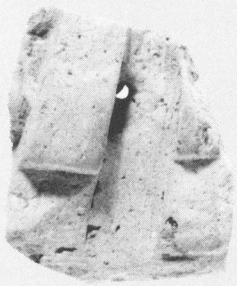
2

32-2

3

32-3

4



32-6

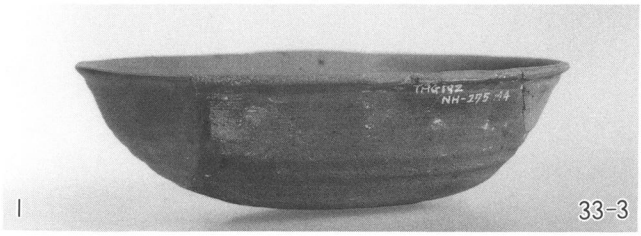
5

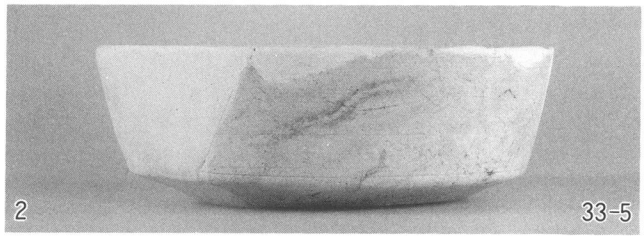
32-4

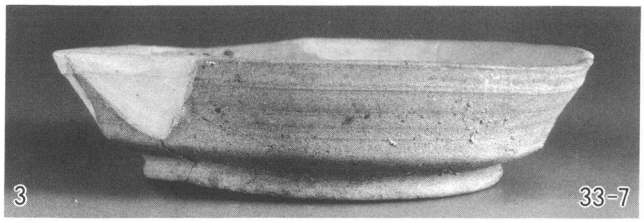
6

32-5

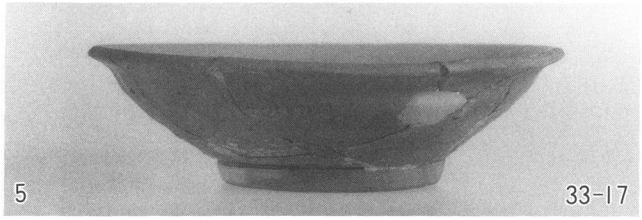
図版30　その他の遺物　その1

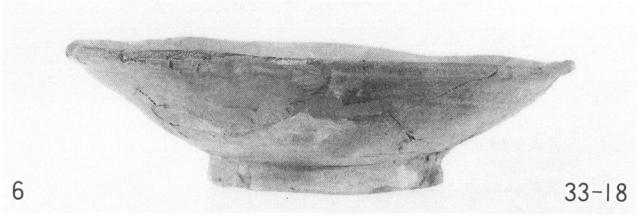

1
33-3


2
33-5

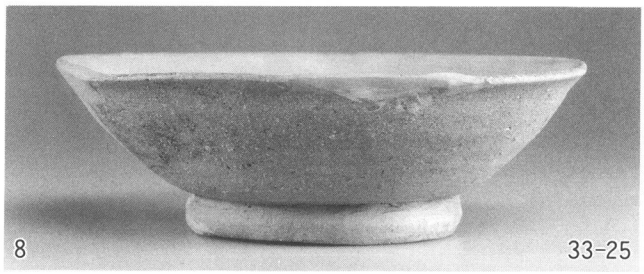

3
33-7

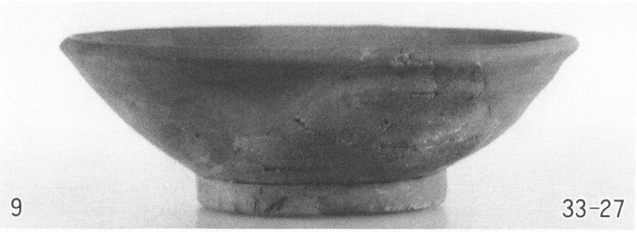
4
33-14

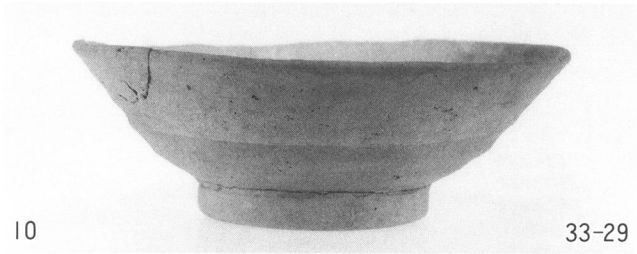

5
33-17

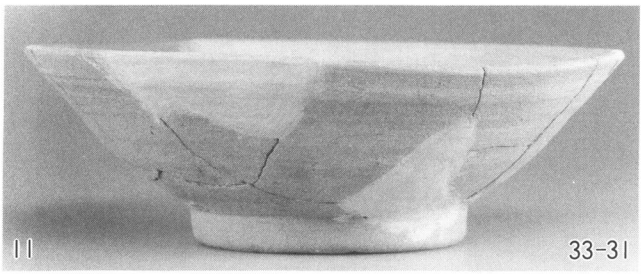

6
33-18

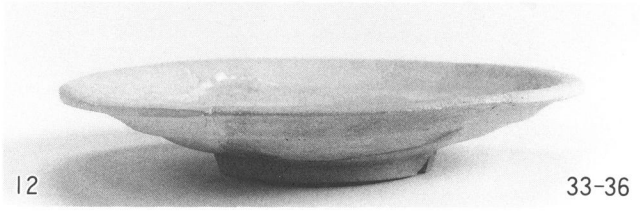
7
33-24

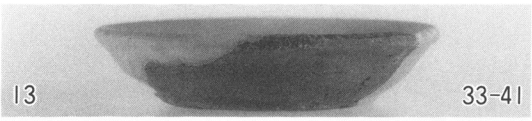

8
33-25

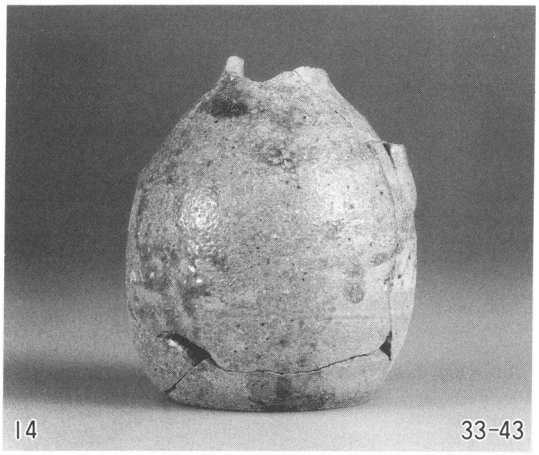

9
33-27


10
33-29


11
33-31

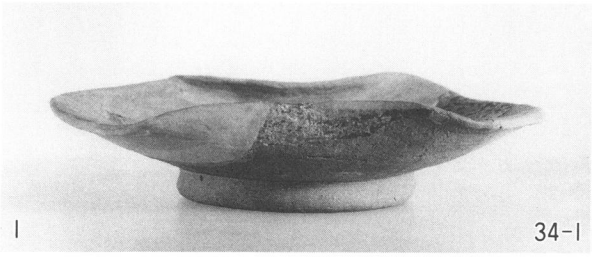

12
33-36


13
33-41

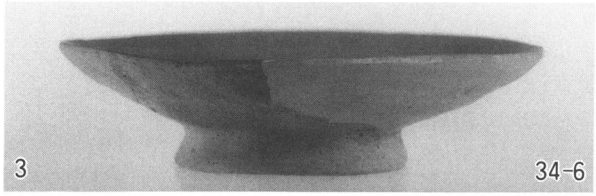

14
33-43

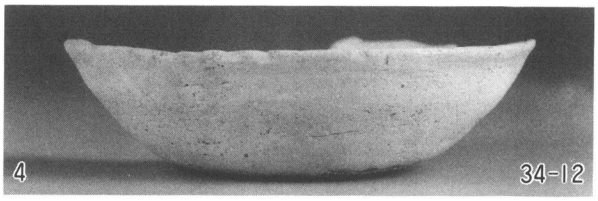
15
33-44

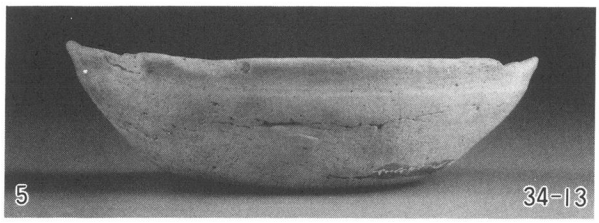
図版31　その他の遺物　その２　その３

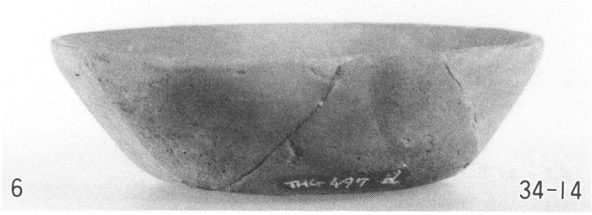

1
34-1

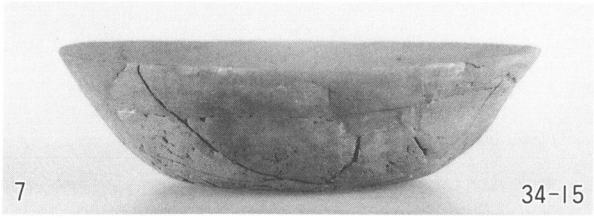
2
34-2


3
34-6

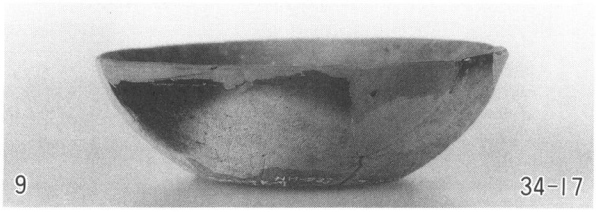

4
34-12

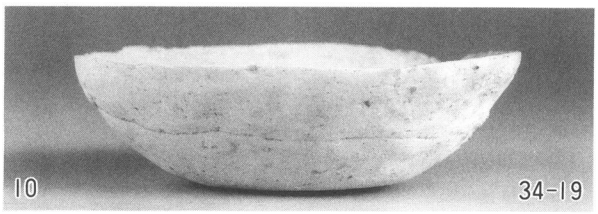

5
34-13

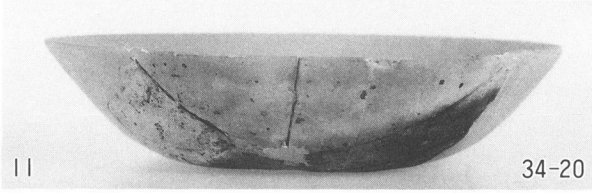

6
34-14

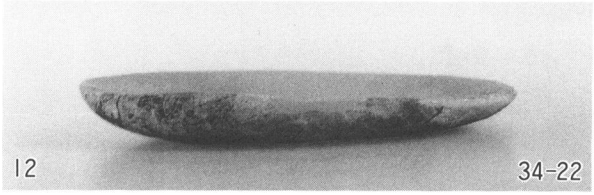

7
34-15

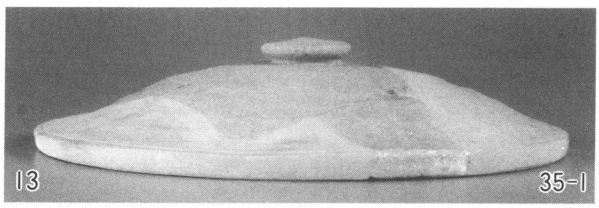
8
34-16

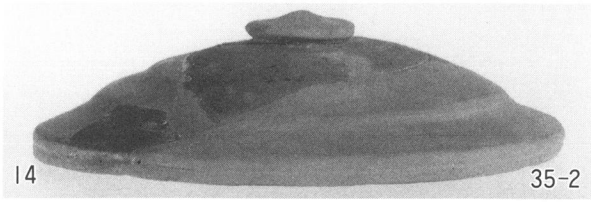

9
34-17

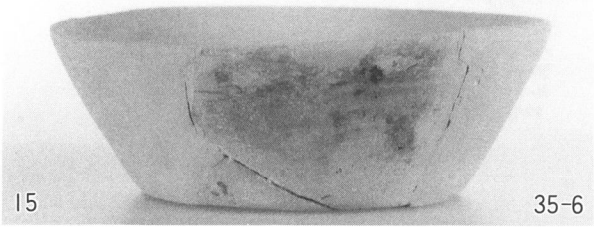

10
34-19

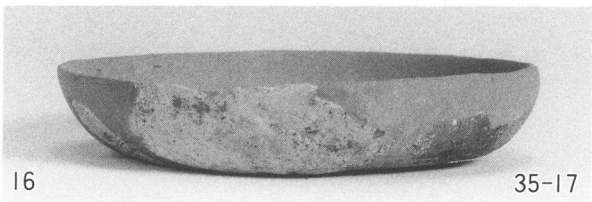

11
34-20

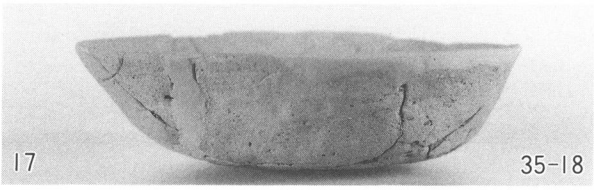

12
34-22

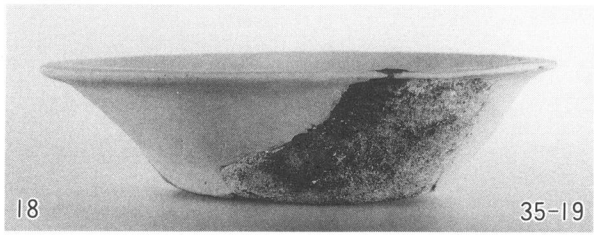

13
35-1


14
35-2

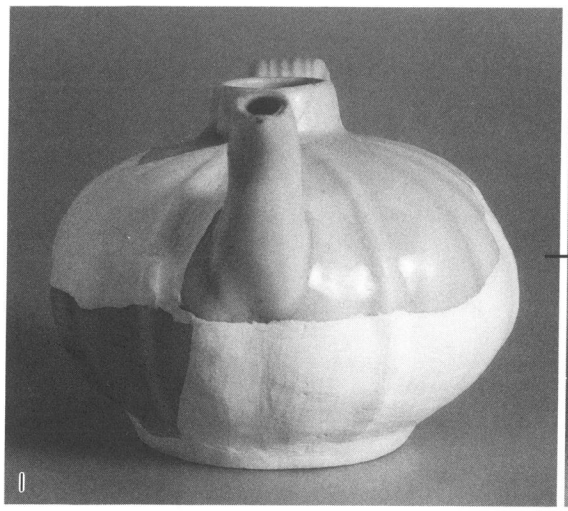

15
35-6

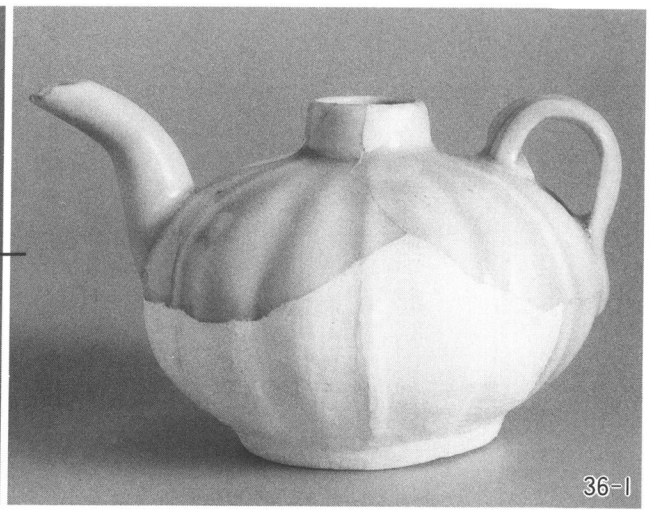

16
35-17

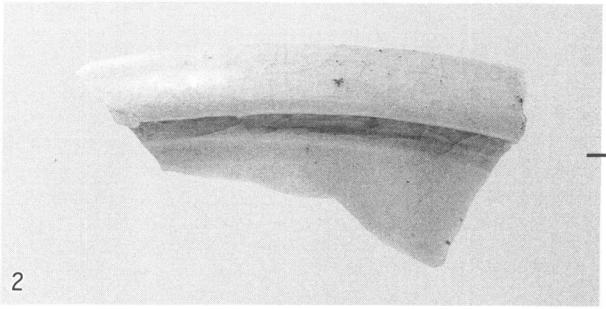

17
35-18

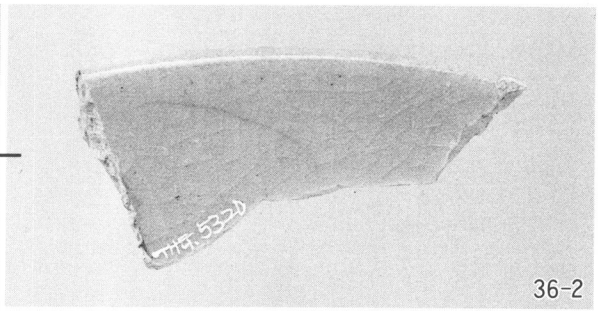

18
35-19

図版32　その他の遺物　その4
青白磁水注
白磁ほか

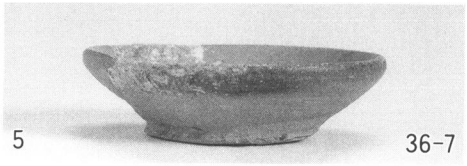

1

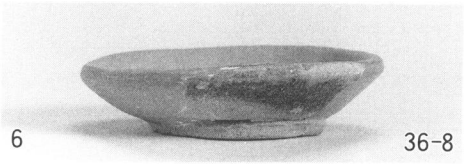

36-1


2

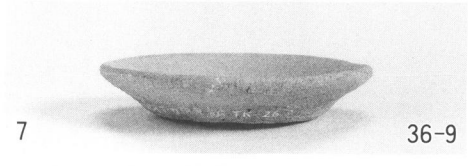

36-2

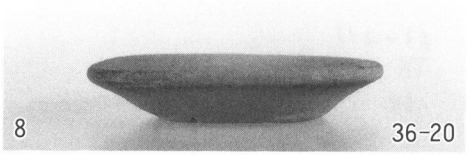
3 36-5

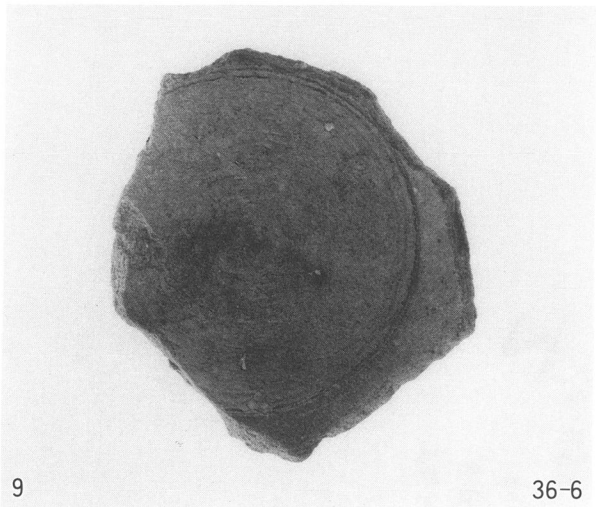

5 36-7


6 36-8

4 36-19

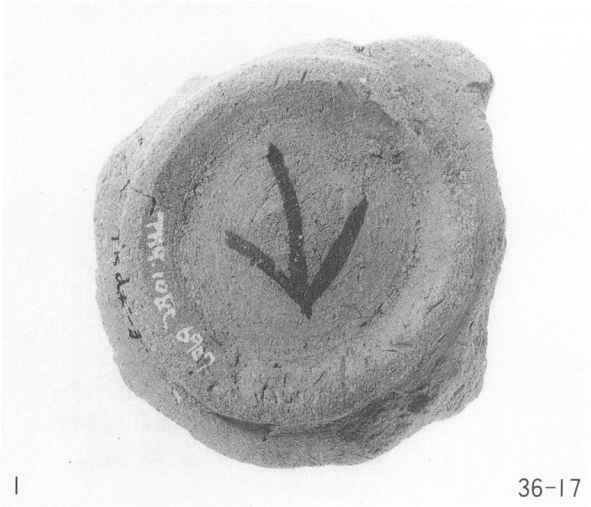

7 36-9


8 36-20


9 36-6

10 36-15

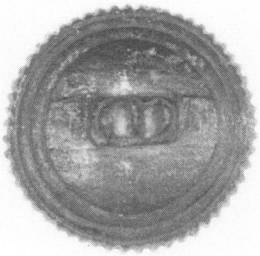
図版33　その他の遺物　その５
分銅
土錘ほか



1 36-17

2 36-12

3



37

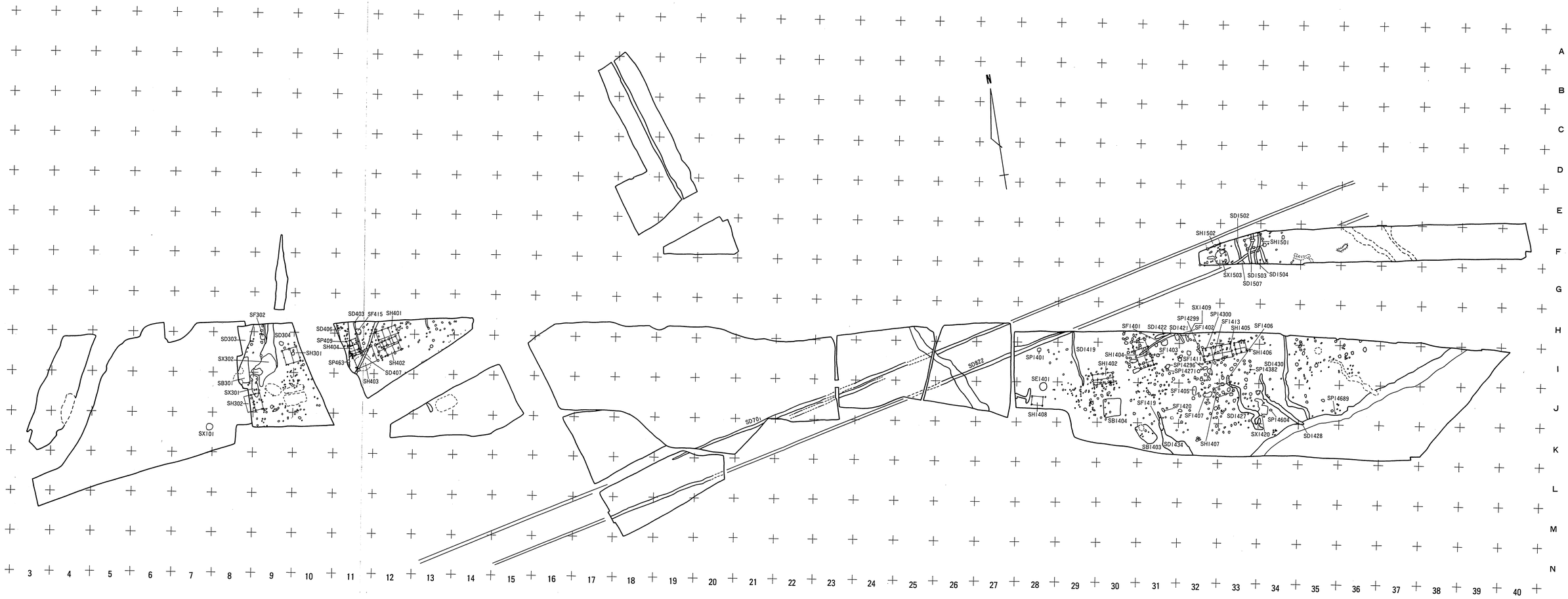
4

原　川　遺　跡
III
平成元年度袋井バイパス（掛川地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２年３月30日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　株式会社　三　創
静岡市中村町１６６番地の１
ＴＥＬ（054）２８２－４０３１



第１図　奈良・平安時代遺構全体図（1：600　別添付図）

0　40m